
オレが姫の婿候補！？

暇な青年

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オレが姫の婿候補!?

【Nコード】

N6452M

【作者名】

暇な青年

【あらすじ】

主人公、高坂 八雲は明日から夏休み。まあそれは措いといて、家に帰ると母が真剣な顔で質問してきたがその内容は・・・・・・・・・・タイトルどおり八雲くんが一国の次期姫と結婚!!!!!!。するかもしれないお話です。できれば感想欲しいです。おねがいします。二十万アクセス突破!

主人公のしょ・う・か・い（前書き）

初めての貴族と一般市民の恋愛です。

変なところがあるかもしれませんが、よろしくお願いします。

感想や評価がもらえる事を祈って書きます。

ついでに、もう一個の作品ブリーチ 二本の斬魄刀もお願いします。

主人公のしょ・う・か・い

オレの名前？高坂こうさか 八雲やくもいたって平凡な高校生男子。

頭のよさ？まークラスで丁度真ん中。学年だと真ん中よりちよつと上・・・ぐらいかな

えっ？モテますか？・・・ぶっちゃけ、都市の数・・・じやなくて、年の数Ⅱ彼女いない歴ですから。はい。トホホ・・・

えーっと次の質問は・・・理想の女性ですか・・・やっぱり、髪が長くて年上の女性ですかね。オレ、年上好きです。出来れば大和撫子みないた年上の女性です！！

最後に一言？・・・ぶっちゃけ、誰に言ってるのか分からない自己紹介でしたが、これからよろしくお願いします。・・・

・・・コレでいいっすか？

主人公のしょ・う・か・い（後書き）

今回はキャラ紹介だけです。次から本題ですのでよろしくお願いします。

久しぶりの親父からの手紙（前書き）

本編です。よろしくお願いします。

久しぶりの親父からの手紙

「ただいまー」

「あつ、丁度帰ってきたみたいですよ」

「ん？」

俺が家に帰ると母さんがリビングで誰かと話していた。玄関にいるオレは靴を見るが、見知った靴・・・家族の靴しかない。と想っているとりびングから母さんが出迎えてくれた。

「おかえり」

「ただいま。今、誰かと話してた？」

「え、えー電話よ。で・ん・わ」

オレの言葉に母さんは『今、思いついたわ』見たいな顔して言ってきた。

「まあいいけど」

そう言ってオレは二階の自分の部屋に行こうとしたら母さんがオレを呼び止めた。

「着替えなくていいからリビングに来なさい！」

「えっ？」

「あんたの将来にかかわる事なのよ」

そういう母さんはリビングに急いで戻っていった。

オレは頭を掻きながらリビングへと足を進めると、椅子に座り手を組んでテーブルにおいていた。

「あんたに聞きたいことがあるんだけど・・・」

母さんの声が真剣なのでオレは最も最悪な事を考え口に出した。

「まさか・・・」

「えっ!？」

母さんは何も言っていないのにオレが何かに気付いたと思ったのか、肩がピクツと震えた。

「まさか・・・学校から赤点通知が来たのか!？」

「なんでや!？」

そう、オレが最も恐れていた事は明日から夏休み。つまり通知表が帰って来るんだが、我が高校は少し変で通知表は本人ではなく家に送られるのだ。その通知表に赤点が一つでもあると夏休みに補習があるのだ。

最悪な考えを口に出し、言い終えるとオレの視界は一気に暗くなり、頭が後ろに傾いた。

「グハッ!!」

ついでに後から痛みも少し来た。

「いてて・・・んじゃ、なに？」

後ろに傾いた頭を戻し、顔に当たった物を取る。見るとクマのぬいぐるみだった。

・・・ぬいぐるみって部屋の隅にあるはずんだけどな・・・

母さんがいる場所はリビングの真ん中である。

「正直に答えてね」

「オレは隠し事なんかしてねえぞ」

『隠し事はない』というが、オレもお年頃。あっち系は少し・・・

と考えながらクマのぬいぐるみをテーブルに置き、椅子を引き、腰を置いた。

「あんた今、彼女いる？」

「・・・・・・は？」

さっきまで真剣に聞いていたオレだったが、いきなり『彼女いる』

と聞かれ間拔けな声を出してしまった。

「だから、彼女よ、か・の・じょ。英語で言うガールフレンドとGirly friend」

「それぐらいわーっとるわ！！じゃなくて、何が悲しくて親に彼女いませんって言わなあかんの！？」

「あら、いないのね？それは良かった」

母さんは組んでいた手を解き胸の前でポンと手を合わせた。

「何が良かった。だよ！オレの将来関係ないじゃん！！」

「いやねーお父さんから手紙が来てるのよ」

どこに仕舞っていたのか分からないが母さんが封の空いていない手紙を取り出しオレに渡してきた。ついでに言うとおレの親父は海外で働いているため、もう五年は会っていない。

「私は、こっちで内容を読んだから」

そう言っても一通の手紙を見せてきた。差出人は親父だった。

「内容はあんたの方が詳しく書いてあるって」

「あっそ」

オレは封の開いて無い手紙を開け、手紙を読み始めようとした。が・
・・・・

八雲へ

元気か？お前、一国の王になる気は無いか？あるんなら姫と仲良くしてみろ。うまくいけば国王になれるぞ。それじゃ
親父より

「・・・・・・・・」

オレは次第に手紙を持っていた手に力が入っていく。端がしわくちゃとなった手紙を机にたたきつけ一言・・・・・・・・

「いみわかんねーーーー！！！！！！」

「う・る・さ・い！！」

またも、視界が暗くなった。

久しぶりの親父からの手紙（後書き）

次回『姫様、登場』です

姫様、登場（前書き）

これから色々なネタを使っていきます。

何のネタ使っているか分かればオレと趣味が合うかも

姫様、登場

「で、なにこれ？どーゆう意味？」

オレは端がしわくちやになった手紙を指差すと、母さんはゆつくりと口を開いた。

「すこし・・・昔話になるけど？」

「どうぞどうぞ」

オレは手紙の理由が聞ければ何でもいい。そう思いオレは促した。

「アレは・・・十八年前、あんたが生まれる前の話・・・
・あんた、隣のセイクリッド王国は・・・知ってるわよね？」

「当たり前だろ！！知らない奴の方が知りたいわ！」

母さんの言うセイクリッド王国とは、けっこう昔に、ヘルニアと言う国と・・・えーっと忘れた！！まあどっかが戦争をおっぱじめたんだ。そのせい世界は一回壊れてしまった。それを治そうと動いたのが新しく作られた最初の王国。それがセイクリッド王国だ。

そのため、世界はセイクリッド王国を中心に動いている。

「だろ？」

「正解。で私と修^{しゅうじ}二さんは新婚旅行でセイクリッドに行ったのよ」

「へー。初耳」

今更ながら修二とは親父の事である。

「うん。言っただけね。で、そのとき偶然にも今の国王と王妃様の結婚式があったの。それを遠くからでもいいから見に行こうとして行ってみたら・・・・・・・・」

「行ってみたら？」

「今もそうだけど、バカなヤツ・・・・・・・・テロリストだったかな？その仲間のスナイパーが国王を狙ってたの。それに気付いた修二さんは、式の警護にいた警備員から銃を取り、こう言ってスナイパーを撃ったの」

「『目標を狙い打つ！！』って」

「それちがーう！絶対違う！！」

母さんは右手を銃の形にして演技してくれたが、オレは即座にツツコんだ。

「もう一回言うけど絶対違うから！それアレだよ？ソレス●ルビーリングでガン●ムに乗るカッコいいヤツだろ？死んじゃったけど・・・・・・・・」

ロック●ン、カッコよかったよな・・・・・・・・って違う！！

「冗談よ、冗談」

「オレの将来かかってるんだろ？」

母さんは右手の銃をやめ、話が再開された。

「でも、スナイパーを見つけたのは本当よ。で、修二さんは……
・・」

「『国王を助けなきゃ、死んでも死にきれねえ!!』って言い手作り、死ぬ気弾を飲んでハイパー化し、国王を助け……」

母さんが拳を作って演技するのを無理やり止めるオレ。

「リボー●ネタやめい!! 銃だからなのか？弾だからか？親父何者だよ？」

「ボン●レマファイアよ」

「だから、やめー!!」

オレは叫び声を上げ母さんの暴走を止めているとき、キッチンから、かすかな物音が聞こえ、母さんはヤバイって顔して話を始めた。

「まあスナイパーを見つけた修二さんは式に入り国王と王妃様の盾になるようスナイパーから守ったのよ」

「へー」

「それで感謝された修二さんはスナイパーを見つけ、なお二人を助けたって事でセイクリッドでは英雄なのよ」

「うそ!?!」

「本当よ。だから、修二さんはセイクリッド王国で国王のボディガードマンをしてるのよ」

「ソレこそ嘘であって欲しかったーーーー!!!!」

ついオレは大声を出してしまった。

「なんでよ?」

「だって、その労働が認められ親父の息子であるオレが姫様の婿候補になった。って訳だろ?」

「まあ、そう言う訳ね」

「ハアーーーーー」

オレは俯き大きくため息を付いた。

「大丈夫よ? 修二さんもいつてるでしょ? 仲良くすれば……
というより、姫様に気に入られればよ」

「?」

母さんの言葉の意味が分からないオレ。それが分かったのか補足を
入れてくれた。

「姫様の婿候補……まあ、次期国王候補はね、あんた一人じゃないの。他にも、セイクリッドの次に世界を動かしているブレイブ王

国の王子、レーベル・ブレイブ。三番目の王国の王子、サバナ・ネック」

「おいおい、めっさ王になる人物達じゃん。オレみたいな庶民はいないのかよ?」

「いないわね。もっと言うとなんたが、候補の中で一番年下で、姫より二つ下」

「二つ下? オレが?」

聞くと首を縦に振る母さん。

二つ下……って事は二つ上……十八歳!?

「マジかよ!?!」

驚いているオレを見て母さんは椅子から立ち上がりリビングへと向かった。そしてすぐに戻ってきた。見知らぬ綺麗な女性と一緒に。

「は、はじめまして。八雲……さん?」

「えっ……セレナ……?」

これが、オレとセレナ姫の初めての出会いであった。

姫様、登場（後書き）

今回の反省

八雲「どーも八雲です」

暇ねん「ども、暇な青年です。これからオレと八雲で反省をします」

暇ねん「第一回目は……どうする」

八雲「まずアレだろ？いきなり姫より先にアニメ・漫画ネタを使った事だろ？」

暇ねん「あっ、やっぱり？」

八雲「そりゃ、そうだろ？だいたい、最初のネタがガン●ムでロック●ンだし！」

暇ねん「いいじゃん、ロック●ン。カッコいいし。それに隠した文字を間違えると青いバスター持つやつになるし」

八雲「おい！！」

暇ねん「だってーロック●ンもロック●ン好きだから……」

八雲「どっちもロック●ンだっ！！」

暇ねん「はい、反省終わり」

八雲「反省してねえ！！」

次回『初めて姫と話す』です。

始めて姫と話す

目の前にセレナ姫が現れた時、反射的にオレは椅子から立ち上がった。

セイクリッド王国の次期姫となる女性の名は、セレナ・ザ・セイクリッド。

セレナ姫の特徴はとにかく長い髪。その長さはお尻に届くほどである。なおかつ髪の色はオレたち日本人には似合わない薄い紫色。

瞳の色はルビーのようで、まるで宝石のような瞳。これは、王族だからなのか、それともセイクリッドの人だからなのか？

なんて事をオレはセレナ姫を目にした時とっさに思った。

「きれい・・・・・・・・・・」

「えっ!？」

「えっ?・・・・・・・・・・ハッ!?!オレ今何言った?てか、何故にセレナ姫がここに?」

突然の事にパニックとなるオレだったが急に・・・・・・・・いや、ここはまたしても視界が暗くなった。だが、さっきと違う事が一つだけある。それは・・・・・・・・

「でっ!！」

思いつきり頭を床に叩きつけた事である。

「だ、大丈夫ですか？八雲さん！！」

そう言ってセレナ姫は倒れたオレに駆け寄ってきた。

「いでで……だ、だいじょうぶです。セレナ姫……」

セレナ姫に一言、言うとオレは母さんを睨んだ。何故睨んだかわれれば……空き缶を人に投げるなよな。……つてか空き缶でこけるオレもオレか……

「それじゃ、姫様。座ってください」

母さんはオレの横を通り、さっきオレたちが話し合っていたテーブルに向かい、椅子を引きセレナに座るよう促した。

「あ、ありがとうございます。冴子^{ハルコ}さん」

またも今更、母さんの名は冴子と言う。

だが、セレナ姫は椅子に座ろうとせずにオレを見ている……
・ああ。

「セレナ姫、オレ……じゃないな、自分は大丈夫ですのお座りください」

王族の彼女に失礼の無いようオレは至極丁寧な言葉を選び話した。

「……………ってかセレナ姫、日本語喋れるんだ。普通にうまい。」

「そう？なら八雲さんも速くお座りになってください」

「は、はい！」

上品な言葉、それに今更気付いたが、彼女の服装……………純白のドレスを着ていた。こんな一般家庭には似合わない上流貴族の格好。

オレは立ち上がるとさつき座っていた椅子に座った。前の席は母さん、その隣がセレナ姫。

「……………」

「はー、何か聞きたいんでしょう？」

オレとセレナ姫は黙りこくっていると、母さんがオレに言ってきた。さつきまでガン●ムやりボー●ネタで暴走していたのに……………

「えー……………セレナ姫がなぜここに？」

オレはセレナ姫を横目で見て聞くと母さんが口を開けたのを見て答えてくれるのかと思ったら、セレナ姫の肩を叩いた。

「それは……………私がお話します」

「あ、はい」

セレナ姫は恥ずかしそうに喋り始めた。

「自分で言うのもアレですが、我が一族では十八歳になると次の王妃になるための儀式が始まるのです」

「儀式・・・・・・・・？」

儀式と聞いてオレはちょっと血なまぐさい事を連想してしまったが、その想像はセレナ姫の次の言葉で吹き飛んだ。

「はい。・・・・・・・・その儀式の内容は・・・・・・・・次の国王つまり、私の夫となる人を世界中から決める事なんです！」

セレナ姫は最後の部分を強く強調していつてきた事でオレは、机に頭を打ってしまった。

「・・・・・・・・・・」

なんだそりや・・・・・・・・とは口には出せないで胸の中にしまっておいた。

「あ、あの・・・・・・・・」

「あつ、どうぞ、進めてください」

ぶつけた頭を持ち上げ先を進めるように言うと、セレナ姫は喋り始めた。

「それで、世界中の男性の中からお父様とお母様を選び、選ばれた男性の中で私が決めるんですけど、写真を見ただけで決めるのはアレなので、私はお父様に言ってホームステイする事になったんです」

「・・・・・・・・ホームステイ・・・・・・・・ちなみに、期間は？」

「それは私が決めています。今までの中で最高が一ヶ月です」

「その言い方だともう何件か行ったんですよね？」

「はい。八雲さんが最後です」

「そうですか。あははは・・・・・・・・」

女性一人で男性の家・・・・・・・・まあ家族がいるとしても、よく行けるな。
王族の凄さってとこかな・・・・・・・・

「はい。それより、八雲さん」

オレはセレナ姫の凄さを考えていると、セレナ姫がオレの名を口にした。

「はい？」

「八雲さんは私と結婚するのがいやですか？」

「・・・・・・・・いきなり何を？」

「さっきの冴子さんとの会話を聞いていたんですが、『嘘であって欲しかった』とか聞こえたもので・・・・・・・・」

セレナ姫の表情が暗くなったように見えたオレはすぐに否定した。

「じゃあどうして？」

「あー．．．．．もしも、もしもですよ？オレがセレナ姫と結婚してオレが国王になったら多分．．．いや絶対、国が崩壊する！大体、オレなんかが出て行く舞台じゃ無いんですよ」

「そんなこと．．．．．」

「それに、セレナ姫．．．．．」

「はい．．．．．？」

俺の声が急に低くなった事でセレナ姫は不思議そうに言ってきた。

「あなたは、美しい。オレが出会ったどの女性よりも。だからそんな人がオレなんかと肩を並べちゃいけないんですよ．．．．．？」
アイアム グッド ラッキー ザット イン ユアー フューチャー
am good luck that in your future

会えて嬉しかったですよ」

オレはセレナ姫の顔を見て微笑みながら言うと、二階の自分の部屋へと足を勧めた。

「ちょ、ちよっと、八雲！？」

「君の未来に幸あれ」

「えっ？」

セレナ姫の言葉に母さんは反応し、セレナ姫に視線を向けた。

「八雲さん、言い発音ですね。決めました」

「な、なにを？」

「冴子さん。私をここに泊めさせてくれませんか？」

「えっ？それって……」

「八雲さんがどう言う気持ちで言ったか分かりませんが、私は八雲さんが気になります」

それを聞いて母さんの表情は一気に明るくなり、セレナ姫の両手を握った。

「本当ね!？」

「はい！」

ニッコリと笑い答えるセレナ姫を思わず抱きしめる母さんだった。

始めて姫と話す（後書き）

今回の反省？

八雲「八雲ッす」

暇ねん「暇な青年です」

暇ねん「なに、いきなり英語で格好つけて？」

八雲「格好つけるつけないの前に書いたのお前だろ！」

暇ねん「知らん！！」

八雲「知らん！！・・・じゃ、ねえ！！たく、今回はネタ使わなかったのに」

暇ねん「ぐちぐち言うなよ。小さいな、八雲」

八雲「テメエ・・・・・・」

暇ねん「こら、お前はそんなこと言わない。大体、セレナ姫にべた惚れだろうが！」

八雲「うっ！」

暇ねん「何が『きれい』・・・だ！！これからのお前はセレナ姫と『わー、わー、わー』・・・・・・八雲、うっさいわ！！」

八雲「ネタバレすんな」

暇ねん「そうだったな。んじゃ、今回はここまで」

次回『始まるホームステイ』です

始まるホームステイ

オレは自分の部屋に入ると真っ先にベッドへと向かう。

「は～～～～～～～～～～」

ボスツと音を出しながらオレはベッドに倒れこんだ。

「言っちゃった・・・・・・・・・・セレナ姫、どうすんのかな・・・・・・・・・・
オレは・・・・・・・・・・」

ベッドに横たわるオレはセレナ姫のことを脳裏に浮かべ名前を口に出したオレは次第に睡魔に襲われ、重い瞼を閉じた。

「・・・・・・・・・・ん」

瞼を開けると暗くなった部屋が視界に入る。

「あ、寝てたのかオレ？・・・・・・・・・・ん、じゃあアレも夢？・・・・・・・・・・
だよな！親父の手紙を読んでセイクリッド王国の王様になるか？なんて夢だ。うん」

ベッドから起き上がり部屋の電気をつけると時計を見た。

「六時・・・・・・・・・・一時間寝たのか・・・・・・・・・・夢であろうとセレナ姫と会えるなんてな」

オレはそろそろ飯だと思い下に行こうとした時、自分の服装が制服

だと気付き着替えをしてから一階に向かった。

「あら、八雲。寝てたの？」

「うん」

ほら、母さんも何も言わないって事は夢だったんだ。

などと思っているとオレは母さんのいつもの行動と違う事をしているのに気付いた。

皿が三つずつ………親父はいないし、なぜ？

まだ寝ている脳みそを働かせて考えているとその答えはすぐに分かった。

「冴子さん。運び終わりました………八雲、起きたの？」

「セ……セ……セレナ……姫！？………夢じゃなかった！？」

「何言っているの？まだ寝ぼけているの？」

言いながらセレナ姫はオレの顔に手をあて、顔を近づけてきた。

ちょ、ちょ、ちよつと！！

だが、声に出せていないため、セレナ姫はまだまだ顔を近づけてくる。

「セ、セレナ・・・姫、近い・・・です」

「えっ？あつ、ごめんなさい」

オレの小さい声が聞こえたらしくセレナ姫も恥ずかしくなり、顔を赤めて離れた。

オレは状況が分からないまま夜ご飯を食べ始めた。

「セレナ姫、箸、上手ですね」

「そ、そう？」

「ええ。お城で教わったんですか？」

「ええ、修二さんに」

「お、親父に・・・！！」

オレは持っていた箸を落としそうになったのに気付き、手に力を入れた。

あのクソ親父、家に帰らないで何してんだ！・・・・あつ、ボディーガードだっけ？

くそ、頭の中で整理が出来てない。

「——と言うわけで、セレナちゃんは我が家にホームステイする事になったから。セレナちゃんの部屋は・・・・八雲の隣の部屋を使って」

「はい」

オレが寝ている間にセレナ姫がホームステイする事になっていた。
いや、オレ的には嬉しいんだけどあんな事言っちゃたし……………

「あの、八雲」

「はい？」

ご飯が終わり、オレがテレビを見ていると後ろからセレナ姫が顔を覗かせてきた。

「その、セレナ姫ってのをやめてもらえませんか？」

「えっ？それじゃあなんて呼べば？」

「セレナ、でお願いします。八雲」

「えーっと」

それは色々とおレが困る。そして今気付いたオレの事『八雲さん』から『八雲』に変わっている。

「ダメ、でしょうか？」

その胸の前で手を合わせてお願いされるのやめてくれます？そんなお願いされたら……………

「わ、わかりました」

って言うしか無いじゃん!!

「ありがとう、八雲」

「うわっ!」

セレナは嬉しかったのかオレに後ろから思いっきり抱き付いてきた。

・・・意外と胸あるんだな。・・・って何思っ
てんのオレッ!?

「セレナちゃん、ちょっと来てー」

「はい」

母さんは普通に娘と思って接しているけど・・・王族ですよ!
!? 次期王妃様ですよ?

「まあ、一緒に暮らしている間は、無礼講で・・・いいのかな
?」

「八雲、一緒に食べよう」

セレナの手にはプリンが乗った皿が二つあった。

「はい」

プリンを一口食べてオレはセレナを見た。見た目はめっちゃ美人で
年上、中身はちょっと大人しくいが、時に子供っぽい・・・
たぶん。なおかつ、少しの間、同居ですよ? どうなるのオレ?

「まっ、セレナが最終的に決めるんだからいいか」

オレが頭の中で整理し終わると、簡潔に述べ、また一口プリンを口に運んだ。

始まるホームステイ（後書き）

明日から夏休み。オレとセレナの同居が始まった。

後書き 今回の反省

暇ねん「今回のはんせーですが……お前！少しはドキッとしろよ！！」

八雲「してるだろ！大体、書いてるお前に言われたくない！」

暇ねん「んだとコラ！」

八雲「何やコラ！」

暇ねん「いゝだ」

八雲「べゝだ」

セレナ「子供ですかあなたたちは！」

暇ねん＆八雲「セレナ（姫）」

八雲「何でここに？」

セレナ「分からないけど、小説が終わって帰ろうとしたら、『こちらに』って書かれてたから」

暇ねん＆八雲（こちらについてなに！？）

暇ねん「まあいいや、セレナ姫。オレと付き合ってくださいませんか？」

八雲「！？」

セレナ「ごめんなさい。私、お父様とお母様を選んだ中の人じゃないと無理なの」

暇ねん「ですよね」

八雲「ふゝ」

次回『夏休みが始まった。さてどうする？』です。

夏休みが始まった。さてどうする？

「んゝ・・・・・・・・あっちー！！！」

夏休み初日の朝、オレは室内の温度に耐え切れず目が覚めてしまった。

「・・・・・・・・」

オレはまだ重い瞼を頑張って開け、部屋内に視線をうろろさせてから、枕もとの時計に視線を向けた。

六時・・・・・・・・しゃーない、起きるとしますか。

オレはベッドから静かに起き上がると、音を立てないように廊下を歩き、一階に向かった。

「さて・・・と」

雨戸を開け、日の光を部屋に入れると、オレはテレビを点け、キッチンに向かった。

「今日は暑いのか、やだなあー」

手馴れた手つきで野菜を切っていると、天気予報が聞こえてきた。

オレは暑いのは嫌いだ。だが、夏は好きだぞ。夏休みに、祭り、海などイベントがあるからな。

・・・・・・・・言っておくが彼女と行かないぞ。いないからな。友達

とだ！親友とだ！！

「三十五度って真夏じゃん！？夏休みの初日からコレかよ！？」

今日の天気予報に気をとられ、手を止めていたオレだが、ため息を大きく付き手を動かし始めた。

「おはよう、八雲」

「んっ？セレナ姫、おはようございます」

降りてきたセレナはオレの背中を見て、ニツコリと挨拶をしてきたので、当たり前のように挨拶を返したオレだったが……………

「ムッ」

「ん？」

なぜかセレナは不満げな表情をし、子供のように頬を膨らませた。

「八雲ッ！！」

「は、はいッ！？」

セレナに力のこもった声で呼ばれ、オレはビツクリしてすぐにセレナに向いた。

もちろん、包丁は、置いてるぞ……………

「昨日の約束を忘れたの？姫は要らないわ。敬語も！」

「・・・・・・・・あっ！」

無意識とは言え『姫』とつけてしまった事にセレナは不満に思っているようだ。

だけどしようがないでしょ？昨日の今日でそう簡単にいえますかって！

昨日は『セレナ』とセレナには言わなかった。独り言の時に一回言っただけだ。

「八雲！」

「えーっと・・・・・・・・」

セレナは『言ってくれないと怒りますよ』って顔をしている。

「おはよう・・・・・・・・セ・レナ・・・・・・・・」

「おはよう、八雲」

セレナは機嫌を直し、またニツコリ笑って挨拶を返してきた。

頑張ったオレ！頑張ったよ！！

何せ、オレはクラスの女子を呼ぶとき、いつも『くさん』って付けるのに、初めて呼び捨てにしたのが姫様だぞ！？良いのかオレ？・・・・・・・・あっ、でも例外もあるな・・・・・・・・

ナドと考えているオレにセレナは近づいてくるとオレの手元を覗き込んだ。

「八雲・・・料理できるの？」

「ん？まー休日は母さんが起きてくるのが遅いから自分で作るけど・・・なんで？」

「いえ、なんでもない・・・です」

そう言って顔を手元から離れた。

これはもしかして・・・

「今度、何か教えてあげようか？」

「えっ？」

「料理だよ料理。そう言っても、一般的な物しか出来ないけど」

「ほんと？」

「ああ」

笑って言うときセレナは『ありがとうー』と言いながら横からオレに抱きついてきた。

ちよ、ちよっとーッ！！

七時になると珍しく母さんが起きてきた。

「珍しい！どうした？」

「セレナちゃんがいるのに見つとも無いところ見せれないでしょ？」

「・・・・・・・・」

見栄を張るな見栄を！あんたって人はっ！！

と、意味の無い言葉を心の中で叫ぶオレだった。

「「「ごちそうさまでした！！！」」」

朝食を食べ終わるとオレは、皿洗いをしていた。隣にはお手伝いとしてセレナがいる。

「で、セレナはここにいて間何すんの？学校も休みだし・・・・・・・・ここに来る前のホームステイでは何を？」

「んー他の所では高坂家（ここ）みたいな事はやらなかったわ」

「えっ・・・・・・・・」

もしかして、手伝わしちやいけなかった！？

「私を手伝います——って言うത്『姫様は大事な客なのでそう言う事はやらないで良いですよ』って言われたのだけど・・・・・・・・」

「だけど？」

「高坂家（ここ）では私を家族同然に扱ってくれるから嬉しいわ」

「そりゃよかった。」

ホッとしてオレはつい口元を緩めて微笑んでしまった。

「まっ、家にいる間は好きな事言っても良いぞ。一応、候補だしな。ただし、オレが叶えられる範囲なら」

「ありがと。八雲」

「んで、今日は何したい？って聞いても決まってるかい」

「・・・・・・・・あ。この町を案内して欲しいわ」

「始めはそんなもんか。オーケー、それじゃ、さっさと洗い物終わらせますか」

洗い物を終わらせるとオレはセレナを連れて、外へ出た。

夏休みが始まった。さてどうする？（後書き）

今回の反省

暇ねん「なにあれ？」

八雲「なにが？」

暇ねん「なにが『あんたって人は』だよ！どんだけガン●ムネタだよ！？」

八雲「いいじゃん。……つか、それ、オレの言葉だよ！！」
暇ねん「うっ……。……しょうがないじゃん！ネタが無いんだから」

八雲「色々あるだろ！今日学校でも一個思いついただろ！」

暇ねん「ああ、探偵学園●のネタね」

八雲「隠す意味ねー」

暇ねん「いつか使うよ。それより、なぜお前が料理できる？」

八雲「お前がそうさせたんだろー！あんたって人はー！！」
ぶすりと腹を刺す演技をする八雲だった。
コックピット

次回『ちよつと、これはマズい展開です』だ

ちょっと、これはマズい展開です

「へー、色々な物があるのね。修二さんの言った通りね」

「セレナ・・・は、初めて来たのか？」

「ええ、修二さんから聞いたことがあるだけ」

街に行くとセレナは初めて来た日本の街に興味心身だった。先に言っておく、セレナの服装はドレスなどではなく普通の私服だ。母さんの・・・・・・・・・・なのに今時の服だ。

「そっか・・・・・・・・・・」

セレナはオレの周りであちこち見ているのは良いんだが・・・・・・・・・・いかんせん周りの視線が気になる。

当然っちゃあ当然だな。なんせ、セイクリッドのお姫様がこんなところにいるんだから。

セレナを知らない人はいないので街中の視線を集めている。

セイクリッドの姫って言えばテレビにも出てるしな・・・・・・・・

「セレナ・・・・・・・・・・セレナ？」

オレはセレナの名を呼んだが返事が帰ってこないで慌ててさつきセレナがいた場所に目を向けると、犬と散歩している女性と話していた。

「かわいいー。よしよし」

セレナは犬を抱いたり、頭を撫でたりしていると突然、オレを手招きしてきた。

「ん？」

「八雲も触りなよ？」

「いいよオレは。．．．．それより、すみません。セレナが．．．．」

「良いですよ別に。私もセレナ様と出会えて光栄ですから」

と、見知らぬ女性とオレはお話をしていた。

犬と遊び終わるとオレたちは再び街の中を歩き始めた。

「そういえば、家を出る前に冴子さんに何、渡されたの？」

「ん？ああ、腕時計だよ。ほら」

オレは左手首につけている安物の腕時計をセレナに見せた。

安物の時計は傷だらけでボロボロだった。

ん？なんかデジャブユってないか？．．．．まあいいか

「そろそろお昼だな、何か食べたい物あるか？」

「んゝ八雲に任せる！」

考えたセレナだったが思いつかなかったのかオレに任せてきた。

任されるオレが困るんだが……

オレはあたりの店を見渡していると、十字路からヘルメットで顔を隠したいかにも怪しい男が走ってきた。その後ろにはヘルメット男を追いかけている警察官。

「おいおい……」

手にはバッグ……ドロボウ？勘弁してくれ

「八雲、あの者はもしや、ごとうってヤツではないか？」

「そうだな……って！？何してんの！？」

「ごとうなら捕まえないと」

走ってくるヘルメット男の前に立ちふさがる形でセレナは前に出た。

「ど、どけー！」

「ヤバッ！」

ヘルメット男は胸ポケットから折りたたみ式のナイフを取り出し、セレナに向かっていく。

「・・・・・・・・っ!?!」

さすがのセレナもナイフを見て体をこわばらせた。ヘルメット男は構わず突っ込んでくる。

「な・・・・・・・・っ!」

オレはとっさにセレナとヘルメット男の間に割り込みセレナの前に出た。と、同時にナイフがオレに当たった。

「八雲っ!」

ヘルメット男がオレの前で立ち止まった。人を刺してしまったと思っただろう。セレナもオレの後ろで背中を何回もゆすりながら名を呼んでいる。オレは・・・・・・・・

「セレナ、どけ!」

「えっ!?!」

オレの声に驚いたセレナだったが、言われた通りにオレから離れた。気配がなくなったと気付くとオレは、ヘルメット男の手首と襟元を掴むと、背負い投げをしてヘルメット男を地面に叩きつけた。

数秒後にはヘルメット男を追っていた警官が来た。

「いやー助かったよ。それよりキミ、傷は?」

「大丈夫ですよ」

「本当？」

オレの言葉を信じてないのかセレナはオレの体の向きを変え上から下まで視線を動かした。

「な？ ケガなんてしてないぜ」

「でもナイフは？」

「ああ、コレを使って受け止めた」

セレナに左手首に巻いてある腕時計を見せるとセレナは『うそ？』
と言いながら驚いてオレの顔を見た。隣にいた警官もビクリして
口を開けている。

「本当だ、こうやって・・・・・・・・」

右手をナイフに見立て時計に当てた。

「すごい・・・・・・・・」

「・・・・・・・・オレたちは帰って良いですか？」

「ああ。・・・あっ！表彰とかあるかもしれないから名前と住所だ
けでも書いてくれないか？」

「はい」

渡してきた警察手帳に名前と住所を書くとオレたちはまたまた、街
の中を歩き始めた。

「「ただいまー」」

「おかえり、楽しかった？ セレナちゃん？」

「はい！それに八雲が——」

家に帰るとセレナは母さんに今日の出来事を全て話し始めた。

「ねむい……あつ、母さん！」

「なに？」

セレナの話を聞きながら母さんは視線を向けてきた。

「時計、助かったよ」

「そう」

それだけ言うとオレは部屋に戻り、夕食まで死んだように寝ていた。

ちょっと、これはマズい展開です（後書き）

今回の反省

八雲「ほんっとすぐネタ使うな！」

暇ねん「な、なにが？」

八雲「探偵学園●だよ！オレあんな芸当できないぞ！」

暇ねん「ま、まあ、出来たんだからいいじゃ・・・・・・・・・・」

八雲「オレを殺すきか！」

暇ねん「以後気をつけます。はい」

八雲「あとさー」

暇ねん「まだ何か？」

八雲「セレナって姫って感じがしないよね」

暇ねん「うっ！」

八雲「お姉さんキャラだけとお姫様って感じが・・・・・・・・・・」

暇ねん「これから何とかします！！」

次回『よし、海に行こう』です。

よし、海に行こう

夏休みとなって早くも一週間が経ち、オレはセレナのことをもう家族同然に接しているとセレナから『行きたい所があるんだけど』と言われた。その場所は・・・

「・・・・・・・・」

上は雲ひとつ無い青い空、オレの前は真っ青な海。周りには海水浴客がごまんといる。そんな中オレは一人パラソルを挿して日陰を作り、ビニールシートの上で横になっている。当然、水着で

「確かにオレの叶えられる範囲なら何でもいいとは言ったけど・・・
・・・二人つきりで、海は色々とマズイ気がする」

空を見上げながら独り言を呟いていると結構近いところで話し声が聞こえる。いや、話し声ならそこから聞こえるが、今聞こえているのは・・・・・・・・

「ねー彼女、一人？俺たちと遊ばない？」と、ナンパの声が聞こえてくる。

オレには関係ない。

そう思って、瞼を閉じようとしたオレは気がついた。

「セレナは大丈夫なのか!？」

「キャッ!？」

「え？」

横になっていたオレはバツと体を起こすと、横から女性の声が聞こえてきた。

「どうしたの突然？」

「セレナ・・・・・・・・よかった」

「だからどうしたのよ？」

「いや、セレナがナ・・・・・・・・ン・・・・・・・・パ・・・・・・・・さ・・・・・・・・れ・・・・・・・・」

オレは段々と声が消えていく。

しかたないだろ？だってセレナの水着・・・・・・・・・・ビキニですよ！？あのセイクリッドの姫が水着着ているだけでも奇跡に近いのに、それがビキニで目の前にいますよ。

「ん？あつ、もしかして似合わない？」

セレナはオレの表情を見て水着姿が似合っていないと思ったらしく、表情を暗くしてしまった。

「いや！似合ってるよセレナ・・・・・・・・・・その、ちょっと見惚れていたの・・・・・・・・」

「本当？よかった！」

セレナの表情は明るくなり嬉しそうに笑った。

「ーっ!!」

ヤバイ。可愛い・・・というより綺麗だ

「そ、それじゃ、海に入る？」

「ええ！」

セレナはオレの前を走って、海に入ってしまった。

「つめたーい。気持ちいー」

「ほんとだ！気持ちー」

オレは海に足を入れると最初は冷たくて先に進めなかったが、しだいに慣れ、深いとこまで行き、全身を水に浸けた。

「・・・・・・・・」

だが、問題が起きた。オレも男だ。目の前にいる姫を見て何も感じないわけでは無い。

「・・・・・・・・」

どうすっかなーと、浜辺に戻り、考えていると、後ろから水を掛けられた。

「うわっ！」

冷たくはなかったが驚いたオレを可笑しそうに笑っているセレナがいた。

「やったな」

お返しといわんばかりにセレナに水かけた。

そんなこんなで海で楽しんでから、途中でカキ氷やアイスなど食べ、海を満喫したオレたちだった。

そういや、『カキ氷は初めて食べるわ』とか言ってたな、セレナ。

よし、海に行こう（後書き）

今回の反省

八雲「・・・・・・」

暇ねん「ん？どうした」

八雲「いや、別に・・・・・・」

暇ねん「珍しいな。何も言わないなんて」

八雲「仕方ないじゃん。今回はネタも使わなかったし、危ない事も起きなかったんだから」

暇ねん「だろ？最初はセレナがナンパされることを考えたが止めていた」

八雲「なんで？」

暇ねん「何となく。あとネタはその・・・ガン●ムネタしか出てこなかったから、今回はあきらめた」

八雲「さいですか」

次回『みんな宿題は早めにやっておこう』です

みんな宿題は早めにやっておこう

七月二十九日、晴れ。こんな気持ちのいい天気の日は……………

「寝るに限るな」

オレは今、お昼を食べ終えてから自分の部屋でベッドに横になっている。オレは近くの窓を全開に開け、真っ青な空を見ながらボーっとしていると……………

「八雲！」

「ん！」

セレナが部屋に入ってきた。それと同時にボーっとしていた意識が現実に戻ってきた。

「どうした？」

「八雲、八雲は宿題は終わっているのか？」

「しゅく……………だい……………?」

セレナから『宿題』と聞いて、オレは始め何の事か分からなかったが、頭をフルに活用して思い出した。

「ああ!そんなものがあつたな。セレナがこっちに來たから、そんな物の存在忘れてた」

オレは素で忘れていた宿題の事を考えた。

「ってか、なぜセレナが宿題を？」

「冴子さんが言っていたの」

『八雲はいつも宿題を速めに終わらせるのだけど、今回はセレナちゃんが出来たから忘れていると思うの』

「っって言われて」

「あはは・・・・・・・・・・」

さすが我が母、オレの状態が良く分かっている。

「そうだな。ボーっとしているだけだし、宿題をやっちゃおうか」

「八雲、私は見ていて良いか？」

体をベッドから起こすとセレナが近寄って来た。

「別に良いけど・・・・つまんないぞ。母さんと買い物に行ったほうが・・・・・・・・」

「いいの！私がそうしたいの」

「セレナがそれで良いなら・・・・・・・・」

いつもはつけないけど、エアコンをつけるか。

「セレナ、ドア閉めて」

そう言いながらオレはベッドの近くの窓ともう一つの窓を閉め、エアコンをつけた。

「さてと、何からやっかなー……」

宿題は全部で三つ。

一つは現代文で『本の紹介』ってヤツで、今までに読んだ本を紹介しようって言う物だ。これは本をすでに読んでいるのがあったのでこれは最後。

二つ目は日本史のプリント。これは、ノートと教科書を読めば埋まる。

最後は英語のプリント二枚……なんだがコレが問題なんだよね。量は少ないがコレばかりはノートと教科書読んでもさっぱり。オレは英語が苦手だ。

「ってことで、日本史をやるか」

オレはテーブルの前に座り、日本史のプリント四枚を机にかけてある鞆から取り出した。

「?どうして机があるのにテーブルで？」

「ん?セレナがいるからな。オレ一人なら机でやるけど、セレナが見ているって言うから見やすいようにな」

そう言いオレは早速、宿題に取り掛かった。

オレが宿題をしている姿をセレナは本当に見ている。いや、見てく

れているのは嬉しいんだけど……

「セレナ、その……あまりジツと見られるのは恥ずかしいんだが……」

「えっ！あの、その……じゃあ、ノート見せてもらってもいい？」

「良いけどなぜにノート？オレのノート汚いから教科書の方が……」

「だって八雲、ほとんど教科書見てやっているから」

「あっ！なるほど……ノートは見ても良いけど汚いぞ？」

「いいわよ」

そう言うときセレナはノートを開いた。

まっ、いっか。

オレも日本史のプリントに再び戻った。

「おーわり！」

プリントを四つ重ねて半分に折る。

結構時間がかかったな。

現時刻、三時三十分。あれから三時間経っていた。

そういやセレナは……オレのノートを夢中で読んでる。そんなに夢中になる内容なんかあったか？

「セレナ、なんか夢中だけど、何かあったか？」

「八雲！このキャラが可愛いからつい」

そう言いながらオレのノートを見せてある場所を指差す。そこには授業の内容十ちっちゃいキャラを描いて大事な部分に吹き出しを入れ、キャラが読んでいるようにしてある。

「ああ、ラ●ナか」

「ラ●ナ？」

「ああ、ラ●ナⅡザⅡブラッドエッジ。オレが唯一やるブレ●ブルⅠって言うゲームのキャラなんだ」

『ほら』といいながらオレの携帯を見せる。携帯には『続ぶる●じ』と入っているストラップを見せた。

ストラップには、『続ぶる●じ』のほかにちっちゃ可愛い『ラ●ナⅡザⅡブラッドエッジ』や『ノ●ルⅡヴァーミリオン』、『ツ●キⅡヤヨイ』その他多数のキャラが描かれた物だった。

ノートにもラ●ナのほかにジ●やハ●マ（テ●ミ）も描かれている。全部、ちっちゃ可愛い物である。

そんなこんなで、宿題をやったオレだったが、全部終わったわけではない。

英語の前に現文の『本の紹介』をやってしまった。オレが紹介した本は『化●語（上・下）』と『傷●語』だ。

英語は明日だ。

こうしてオレの一日が終わった。・・・・・・・・終わるはずだった。

みんな宿題は早めにやっておこう（後書き）

今回の反省

暇ねん「しゃーしゃーっ!!」

八雲「なんだよいきなり」

暇ねん「ついに、ついにブレ●ブルーネタを出せたぜ!さらに!」

八雲「な、なんだよ?」

暇ねん「今回使ったストラップが昨日、届いたんだよ!かんどーだっぜ!」

八雲「はいはい」

暇ねん「そうそう、『化●語（上・下）』と『傷●語』もちゃんと読んだぞ。オレは知っているものしか書かないからな」

八雲「読んだって、学校でだろ?」

暇ねん「読めればどこでもいい!」

八雲「………ブレ●ブルーでテンション上がってるな」

暇ねん「そう、本文で言っているキャラは『ぶる●じ』で見れるキャラだぞ」

次回『苦手なものは得意な人に教えてもらおう』です。

苦手なものは得意な人に教えてもらおう

夜の七時。晩御飯を食べ終えたオレはいつもどおり、テレビを見ていた。

「ほー……メモメモ」

料理番組を見ながらオレはメモを取っていると階段からセレナが読んでいる事に気付いた。

「どうした？」

「八雲、まだ英語が残っているでしょ？二枚ぐらいなら一時間で終わるでしょ？速めに終わらせないの？」

「えっ！あー……そのー……」

「もしかして！」

「はい、そのもしかしてです。オレ、英語苦手です」

「でも、私と始めてあった時、英語で……」

「アレは、学校が終わってから、友達に聞かされたんだよ。そいつ、英語が得意だったから」

「そうなの？でも、安心して」

「なんで？」

「何でって、私をどこの国出身だと思っているの？」

「あ・・・・・・・・」

夏休みの最初は覚えていたけど、一緒にいると忘れることがあるんだよな。セレナがセイクリッド出身だってことに。つまり・・・・・・・・

「あーっとセレナ」

「なに？」

「英語、教えてくれない？」

顔の前で手を合わせてオレは頼むとセレナは喜んで引き受けてくれた。

夜となれば少しは涼しくなっている。そのため、今は扇風機が回っている。

「あーっと・・・・・・・・It will be fine tomorrow？」

「ハイ、正解。やれば出来るじゃない。八雲！」

「セレナの教え方がうまいんだよ」

「ありがと。じゃ、次」

「『一週間後にテストがあります』……………A t e s t
i s i n……………」

「『一週間』はO n e……………」

「W e e k!!」

「正解!」

「よし!」

何だかんだでセレナの教え方がうまいおかげで、一時間も掛からな
いで英語の宿題が終わった。

「終わったー!」

オレは終わったプリントを半分に折り、鞆に仕舞うと背伸びをした。

「よしよし。がんばったね」

「——っ!!」

子供を褒める時のようにオレの頭を撫でるセレナ。

ちょ、ちょ、ちよっとー!ー!

背伸びしたまま固まるオレにセレナは『どうかしたの?』と顔を近
づけてきた。

「い、いや、なんでもない」

「そう？」

「そう！」

『ならいいけど』といいながら離れるセレナ。

やべーって！何か色々やべーって。男女が二人つきり・・・

「八雲ーちよつときて！」

「うん！？」

・
下からオレを呼ぶ声。タイミングが良いような悪いような・・・

「なに？」

「修二さんから電話よ」

「親父から！？」

オレはセレナを呼んでオレたちは下に降りた。

苦手なものは得意な人に教えてもらおう（後書き）

今回の反省

暇ねん「八雲、英語が苦手ってどうよ？」

八雲「うるせー！お前はどうかんだよ作者？」

暇ねん「オレ？オレは・・・・・・・・」

八雲「オレは？」

暇ねん「まだまだだね！」

八雲「自分で言った！？」

暇ねん「だっておれ日本人ですから」

八雲「オレだってそうだ」

暇ねん「いやだってお前、下手すりゃセイクリッドの王様よ？英語話せないでそうすんの？」

八雲「セレナに教えてもらう！」

暇ねん「何気に自慢してる？」

八雲「気のせいだ！」

次回『久しぶりに話すと話す事が無い』です。

いきなり番外編 歴史を学ぼう（教えてラ●チ先生）（前書き）

始めに言わせて貰います。

自分の下手な文章のせいで色々と足りない部分があったので、ここで補足します。

ぶっちゃけ、読まなくても大丈夫です。

今回は『セイクリッド』と『日本』が出来るまでのお話。
『ブレイブ王国』や『ネック王国』は書いて無いです

いきなり番外編 歴史を学ぼう（教えてラ●チ先生）

八雲「おい、作者！新しくきた感想を読んだか？」

暇ねん「はい……………」

八雲「って事はまず言う事があるよな？」

暇ねん「すいませんでした。えーっと、これから意味不明な世界観（特に歴史）を説明したいと思います。名づけて！」

『教えてラ●チ先生』

暇ねん「だっ！！！」

八雲「ここでもパクるなよ」

暇ねん「オホンっ！ではまず、世界暦から教えてあげましょう」

八雲「あげましようって、あんたがちゃんと最初っから書いていればこんな事には『うっさいわ！』」

暇ねん「まずは今が何年か？です。この『八雲』がいるこの時代は20＊＊年（好きな年を入れなさい）。ここは大切ではないです」

暇ねん「『八雲』の住んでいるこの国、ここは『日本』。使っている言葉も『日本語』です」

八雲「しつもん。なぜ、他国は『セイクリッド』や『ブレイブ』、

『ネック』なのにオレたちの住んでいるここは『日本』なんだ？」

暇ねん「ふむ。至極当然の質問じゃな。書いている俺も思っていた事だ。」

俺も最初は『ヒーズ王国』とかにしようと思ったがやめた。『日本』が書きやすい」

八雲「おい！」

暇ねん「じゃ、その答えを話そう。八雲はどこまで知っている？」

八雲「あー『けっこう昔に、ヘルニアと言う国と……えーっと忘れた！！まあどっかが戦争をおっぱじめたんだ。そのせい世界は一回壊れてしまった。それを治そうと動いたのが新しく作られた最初の王国。それがセイクリッド王国だ』だっけ？使いまわしだ」

暇ねん「それじゃ、その使いまわしに補足を入れよう。」

まず、10**年に『ヘルニア王国』と『サルバ帝国』が世界の実権を握っていた。が、『サルバ帝国』はその力を独り占めしようと行動を起こした。それを止める為に『ヘルニア王国』は武器を持ち全面戦争へと発展した。『サルバ帝国』は確かに世界で2の権力国だったが所詮は2位。『ヘルニア王国』の武力・兵力には敵わないと思い知った『サルバ帝国』は自分達の命と引き換えに核を放つ決意をした」

八雲「おい！それだと世界中の人々は全滅だぞ！核の氷河期がっ！それより、自分達の命が！」

暇ねん「負けて地に堕ちるくらいなら『死』を選んだのだろう。だが、それをいち早く気付いた国があった。」

それは『日出国』ひでくに後に『日本』となる国だ。

『日出国』はまあ、簡単に言えば忍者の国だ。その為、隠れ国としてその国を知るものは『ヘルニア王国』の上位クラスの人のみだった。そのため『サルバ帝国』は知らなかった。

『日出国』は独自に『サルバ帝国』に潜入し、核を破壊。それを聞いた『ヘルニア王国』は一気に攻め入った。結果は聞くまでも無いだろう」

八雲「そんなことが……ならなんで世界崩壊に？」

暇ねん「考えても見ろ？核を作る国なら爆弾程度作るだろ？結果、勝ったものの被害は計り知れないものだった」

暇ねん「戦争が終結すると他国や生き残った国民は『ヘルニア王国』がたった一国で勝ったと語り継がれ『日出国』が表舞台に出る事は無かった。

だが、勘違いするな。『ヘルニア王国』の国王は『日出国』のことを表に教えようとしたが、『日出国』がそれを断ったんだ」

八雲「へー、知らなかった」

暇ねん「当然だ。これは一種の黒歴史だからな。

話を戻そう。終結後、『ヘルニア王国』の国王を中心に世界復興が始まった。もちろん、陰ながら『日出国』も物資の運びや食料などを『ヘルニア』に送っていた」

暇ねん「『ヘルニア王国』は「直す」より「創る」ほうがいいと考え、新しい国を建国した。それが今の世界の中心国『セイクリッド王国』だ。『セイクリッド王国』の初代国王は『ヘルニア王国』の国王だってことだ」

八雲「ほーほー。ん？でも、日本はどうなってんの？」

暇ねん「わーってる。『セイクリッド』が建国され、他国も復興できて来たあるとき、『日出国』の王様・・・いや、帝と言うべきかな？が『セイクリッド』を訪れてこう言ったんだ」

『すまないが、我らも新しい土地に移り住みたい。どこか言い場所はないか？』

暇ねん「ってね。当時は復興も終わりを告げていたから『日出国』の申し出を引き受け、新たな土地を探した」

八雲「そして見つかった土地が——」

暇ねん「そう、海を渡り丁度、『セイクリッド王国』の隣にあった小さな土地。そこを訪れた帝も気に入り、ゼロから新しい国を創った。それが——」

八雲「オレたちの国、『日本』！」

暇ねん「その通り。まあ、こんなもんだ。それと、『セイクリッド』の言葉は『英語』を使い『日本』は『日本語』を使うぞ」

暇ねん「以上、『教えてラ●チ先生』でした。八雲君質問はあるか？」

八雲「いや、オレは無いけど、読者がそれで納得するかどうか」

暇ねん「ですね！俺も喋っていてこんなの説明になるか？って考え

てしまった」

八雲「何か足りないようで足りていて、納得したようで納得していない」

暇ねん「いい。俺は納得した。読者からまた来たら答える。以上」

暇ねん&八雲「それじゃ、ばいばーい」

いきなり番外編 歴史を学ぼう（教えてラ●チ先生）（後書き）

今回の反省

「本当にすいませんでした」

八雲「たっく、ほんとダメ小説だな。ここでもネタだし」

「ううん」

八雲「しかも書き終わってから『ブレイブ』と『ネック』のこと思
い出して」

暇ねん
「ぐはっ！」

八雲「さらには、長ったらしい文章！誰が読むよ？」

暇ねん「う、う、うるさい、うるさい、うるさい」

暇ねん 「はあー人気が下がったな」

八雲「えっ？この小説人気あるの！？」

[illegible]

八雲「これで大丈夫なのか？」

次回『久しぶりに話すと話す事が無い』です。

久しぶりに話すと話す事が無い

電話の受話器を耳にあて一言。

「なに？」

「おお！？冷たいな、実の父に向かって」

「いや、実の子供を勝手に姫の婿候補にするのはいかな物で？」

「しょうがないだろ、王様に『セレナ姫の婿となるやつを探してる』って言われたら息子を薦めるが親ってもんだ！」

「あつそ。まあ、今更文句は言わないけど、何で五年ぶりに電話を？」

そう、親父とは五年間会っても無いし、手紙も無い。まあ、セレナについての手紙が五年ぶりだった。当然、電話も無かった。

「いやあ、息子が姫さんに無礼をしてないか心配だな」

「んー、無礼は無いと思うよ。なつ、セレナ？」

「そうね」

オレは、隣にいるセレナに聞き、微笑んでセレナは答えた。

あつ、隣ってのは受話器の反対側にセレナが耳を当てて聞いているんだ。多分、聞こえている。はず。

「おー息子よ、そんなに姬さんと仲良いのか。結構結構！」

電話の向こうにいる親父は上機嫌なのだがオレは……………

「あのさ」

「ん？なんだい、我が息子よ！」

「オレの名前言ってみてよ」

「えっ！？」

「オレの名前」

「あゝいいぞ。ちょっと待て！」

名前を呼ぶだけでちよつと待って何だよ！まあ予想できてたけど。

「名前を呼んでって何で？や——」

「ダメだよセレナ。オレの名を呼んじゃ」

「？」

セレナの言葉を遮りオレは口止めする。当然セレナは、不思議がつている。

「まだあ？親父？」

「ちょっとまって！や・・・や・・・ヤーさん！」

「おいっ！自分の息子をヤクザにしたいのか！！」

「冗談だ、じょうだん。えーっと・・・」

「ヤーさんって？」

セレナがオレに聞いてくる。

「親父はよくオレの名前を忘れるんだよ。さっきの『ヤーさん』ってのも思い付きだろ」

「思い出したぞ。お前の名は大和●だろ？」

「オレはノートルダム大附属中でアイ●ールドになってねえし、なりたくもねえよ！！」

確かにアレはアイ●ールド21でも可笑しくも無い強さだった。うん。

「わるかった。・・・八雲、だろ？」

「ったく」

親父がオレの名を覚えていた事が以外で驚いたオレ。いつもなら、オレから名前言わないと思いださないのに。

「それでさ——」

その後、親父が五年間分、とは言わないけど長い間、セイクリッドの話をしてきた。

オレは『ああ』とか『へー』としか言わなかったが、親父は満足したみたいだった。

「最後に姫さんと話させてくれるか？」

「ん？ ああ」

反対側から聞いていたセレナに説明する事は無かったので、受話器を渡し、オレは麦茶を取りに冷蔵庫に向かった。

「どうだい？ そっちの生活は？」

「はい！ とても楽しいです。修二さんが話してくれた通りでしたし、それ以上の物も見れました！」

「それはよかった。で、どうだい？ 八雲に惚れちゃったかい？」

「えっ！？ それは・・・・・・・・えっと・・・・・・・・」

「まあいいさ。そーいう事は聞くなって王様に言われたしね」

「それじゃ、冴子に代わってくれるかな？」

「はい！」

オレが麦茶を飲んでいると、セレナが母さんと呼ぶ声が聞こえ、受話器を渡すとセレナがオレのところに来た。

「ほい」

新しくコップを取り出し、麦茶を入れ、セレナに渡した。

「何話したの？」

「んー・・・秘密！」

「そっか」

久しぶりに親父と話したのが嬉しかったのか、オレはこの後、気分が良かった。

久しぶりに話す話事が無い（後書き）

今回の反省

暇ねん「お前、ファザコン？」

八雲「ぶっ!？」

暇ねん「きたね! 麦茶吐くなよ!！」

八雲「お前が変なこと言うから!」

セレナ「ねーねーファザコンって何？」

暇ねん&八雲「またかよ!！」

暇ねん「おほん! ファザコンと言うのはお父さんが大す『ガントレ
ットハーデス!！」

暇ねん「ハイそこ! ブレ●ブルーの技使わない!」

八雲「違うからな! 断じて違うから!！」

セレナ「ファザコンってなに?」

次回『はっ? ちょっと? 母さん?』です。

はっ？ちょっとっ..母さん？

親父からの電話があつてから二日経った日の朝。オレはいつもどおり音を立てずに下に行くと、いつもはいない母さんがそこにはいた。

「ん？母さん？」

「あら、八雲。どうしたの？」

「どうしたのって、朝飯作りに来たんだよ。母さんは？」

「あれ？言つてなかったっけ？私、今日からちよつと旅行に行くてくるわ」

「はあ！？」

母さんの言葉にオレは耳を疑った。よく見ると母さんの後ろには少し大きいスーツケースがあつた。

「ちよつ、旅行ってどこに？いつまで？」

「いっぺんに聞かないの！ちよつと、修二さんのいるセイクリッドに行ってくるわ。ホラ」

そう言つて母さんは両端を持ったチケットをオレに見せ付ける。

「いつ予約したの！」

「この前、修二さんから電話が来た時、頼んでおいたの」

あー、セレナから電話を変ったときか。

「そーいうわけだから、ちょっと行ってくるわ」

スーツケースを押しながら母さんは玄関に向かう。

「だから！行くのは良いけどいつまで？」

オレも母さんの後についていき玄関に足を向けた。

「八月二十一日の午後に帰ってくる予定」

「夏休みも終わりに向かってんジャン！」

「細かい事気にしない！男の子でしょ？」

「はいはい。んじゃ、事故ないように気をつけて」

「ありがと。八雲もがんばってね！」

「ん？頑張るって何を？」

「セレナちゃんと二人っきりなんだから、男見せなさいよ！それじゃ、いつてきまーす」

手をヒラヒラさせながら母さんはこれから起こるオレの生活を言っ
て、玄関を出て行った。

オレは人がいなくなった玄関を見ながら、頭ん中であることが起き

ていた。

「あーっと・・・・・・・・なに？セレナと・・・・・・・・」

二人つきり!?

「そうだな、いつもは母さんがいたけど・・・・・・・・」

いいのか？高坂 冴子!!

「だって・・・・・・・・えーーーーー!!」

落ち着けオレ、落ち着け高坂 八雲。こー言うときは・・・・・・・・ヤツを見ろ!球を見ろ!!

「じゃ・・・・・・・・なーいっ!! テニ●リはいい! 現実逃避してる場合じゃねえ!!」

オレは心の声と交互に喋っていた。

「どうかしたの八雲？」

「へえあ!？」

「へえあ？」

いきなり声を掛けられたためオレは実に間拔けな声を出してしまった。

ほら、セレナが笑ってるよ。

「えっ？あーっと実は・・・・・・・・」

「あつ、もう冴子さん行っちゃったの？」

オレがついさっきまで起きてた出来事を話すとセレナは驚くどころか旅行の事を知っていた。

「あれ？もしかしてセレナ知ってた？」

「冴子さんが昨日言ってたわよ」

「あ、そうなんだ・・・・・・・・」

なぜ、オレには言わなかった母さん！！

「少しの間だけど、これからは二人つきりだね！」

「えっ！？今なんとおっしゃいました？」

「ふふ。ほら八雲、朝ごはん作りましょ」

「セ、セレナさん！？」

セレナの言葉にオレ、めっちゃドキッとしたわ。うーん、オレ、これから大丈夫かな？

こうして、オレの短くて長い生活が始まった。

はっ？ちょっと？母さん？（後書き）

今回の反省

八雲「無責任でしょ！」

暇ねん「なにが？」

八雲「母さんだよ！何が『言ってなかったっけ』だよ！」

暇ねん「いいじゃん、セレナと二人っきりなんだから」

八雲「だからだよ！つか、ファンタをストローで飲むな」

暇ねん「いや、マッ●で買ったんだからしょうがないじゃん」

八雲「オレこれからどーしよ」

暇ねん「安心しろ。オレが余りドキッとする事はさせねえよ」

八雲「マジでか？」

暇ねん「マジだ！」

八雲「おうさすが作者」

暇ねん「オレの『ドキッ』は驚かされての意味だ。セレナには、ドキッとはするぞ！バリバリにな」

八雲「えっ!？」

次回『二人っきりだと緊張してしまう』です。

二人っきりだと緊張してしまう

母さんを見送ってからオレは朝ごはんを作り始めたのだが……

「……………」

隣では鼻歌交じりでセレナがオレの手伝いをしてくれている。

「……………」

うー、どうしてもさっきの言葉を考えてしまう！

『少しの間だけど、これからは二人っきりだね！』

そう言われて何も感じないヤローどもがこの世にいるか！？いないね！ぜったい！！

「……………いっ！」

考えていると、いきなり左手の人差し指から痛みを感じた。

「どうしたの？あっ、血が出てるじゃない！」

セレナはオレの声を聞いて視線を向けてきた。

オレの人差し指はパツクリ切れていた。多分、考え事をしながら包丁を使ってたから指を切ったんだろ。

「ちょっと包丁でやっちゃった……って、何やってんの？」

オレが手を血を洗い流そうとしたが、それよりも速くセレナがオレの手を取り口にくわえた。

温かいぬくもりが指に絡みつく。

「ふぁにつふえ、きすをなふえへるの！」

「いや、何言ってるかわかんないし！それより手、手！！」

「ふぁ、はい。傷口を舐めると良いって言うでしょ？」

「いや、その……」

ちょっと、これ何？どうすればいいの？何かのフラグですか？

頭の中でパニックを起こしているオレを置いてセレナはキッチンから出て行った。

「あわわわわ、オレどうすればいいの？」

「八雲」

「はい？」

呼ばれたのでセレナに振り向くと、手には救急箱があった。

「傷口を舐めただけじゃアレだから、絆創膏よ。指出して！」

「あ、うん」

素直に指を出すとセレナは傷口に絆創膏を綺麗に張った。

「これでよし！」

「う……ん………ありがとう」

恥ずかしくてセレナの顔を見れずに言うオレ。

思い出してしまう………セレナの口ん中気持ちよか………
………って、うおい！何考えてんだオレ！！

バカな考えをしてしまったオレを気にせず、セレナは出来上がっている料理をテーブルに運んでいく。

「つと、オレも終わらせないと」

オレは切りかけのフルーツを切ると、冷蔵庫からヨーグルトを取り出し、二皿にフルーツとヨーグルトを盛り付けた。

「「いただきます」」

出来上がった料理を食べながら、オレたちはこの後のことを話合った。

二人っきりだと緊張してしまう（後書き）

今回の反省

八雲「いきなり、コレか？いいのかオイ！」

暇ねん「ん？なにが？」

八雲「アレだ・・・その・・・セレナが・・・で・・・つてことだよ！！」

暇ねん「聞こえんわ、ボケ！」

八雲「と、とにかく、何だよこの展開？急すぎだろ！」

暇ねん「オレも思ってたんだけど・・・結果オーライってことで」

八雲「こ、この・・・バカヤロー！」

次回『アレが見たい』です。

アレが見たい

「どれが見たい？」

「えーっと・・・・・・・・」

オレたちは今、映画館にいます。なぜかと言うとさかのぼる事一時間前。

「えっ？映画が見たい？」

朝ごはんを食べ終わり、セレナは朝と同じようにオレの隣で皿の洗い物を手伝ってくれていた。

「ええ、私、映画って物を見たこと無いんです。だから・・・・・・・・」

「ふむ。セレナが見たいなら良いよ」

「ほんとう？ありがと八雲！」

「それじゃ、早めに行きますか」

ってな訳で、今、映画館こくにいます。つっても、セレナが見たそうな映画があるかな？

オレはチケット売り場のモニターを見ながら考えた。

今やっている映画で知っているのは……
一つ、マク●スF（銀河の妖精と一緒に……アニメだな。
他には、あ●るの空（実写版）や卓球の王子様とかだな。

「ねえねえ！アレ見てみたいんだけど良い？」

「ん？どれ？」

「あのポスターのやつ」

ポスターってあれか。

人が多いため近づいて見る。

何々？姫と姫を守る騎士との身分違いの恋、か。

あーうん。見てみたいけど、今の状況に似ているような気が……

「だめ？」

いや、そんな上目遣いで見なくてもいいって！

「いいよ」

チケットを買い、席に入ると中は満員だった。

「うわー、人気だな」

「そうね。楽しみだわ！」

オレたちは席を見つけると座った。座るとポケットの携帯の電源を切り、しまった。

時間になり、会場は暗くなりだした。

映画が始まり時間は二時間を過ぎて、そろそろラストシーンである。シーンは夜の舞踏会で主人公の騎士が姫にダンスの相手に選ばれて踊っているところだ。

『姫、なぜ自分と?』

『好きな人と踊ってはいけないの? ルーク?』

『メッシュティアリカ姫』

『ルーク、教えたでしょ? 『ティア』よ』

『ティア・・・・・・・・』

ダンスの途中で二人は互いの唇が近づいていく・・・・・・・・

「ご機嫌だなセレナは?」

「あれだけ素敵なお話だったのよ? ご機嫌にもなるわよ!」

「確かにな」

事実、映画を見た女性達は彼氏にベツタリだったり、電話をかけている人もいる。

「八雲は楽しくなかったの？」

「楽しかったよ。ただ、名前が誰かに似ていたような……」

「楽しかったなら良いじゃない！」

「そうだな……って！セレナ！？」

「なに？」

セレナはオレの腕にぴったり抱きついてきた。当たり前の反応を見せるオレはセレナに視線を向けるが、嬉しそうな表情でこっちを見ってくる。

「いや、なにして……いや、なんでもない」

「そう」

「まだ、お昼だし、どっか寄って行くか？」

「さんせー！」

この後、オレたちは色々と見て回った。のだが、セレナは家に帰るまで腕に抱きついたり、手を繋いだりしてきたのだった。

アレが見たい（後書き）

今回の反省

暇ねん「テ●ルズネタキターーーーーッ!!」

八雲「やっぱりか。はー」

暇ねん「書いてから思ったんだが、どっちかって言うとルークが身分が上だったな」

八雲「確かに……」

暇ねん「マク●スFも出せたぜ。題名だけだが」

八雲「あの題名の『〜銀河の妖精と一緒に〜』って何？」

暇ねん「いや、オレが勝手に作ったア●トとシェ●ルのストーリー。俺、ア●ト×シェ●ル好きなんだ」

八雲「そーゆーことかい」

暇ねん「あと、あ●るの空はバスケ漫画で一番好きな漫画だぜ!!」

八雲「この流れは卓球も何か意味があるのか？」

暇ねん「いや、ただ中学のときの部活が卓球だったってだけだ」

八雲「そーかい」

暇ねん「それより、きみ〜映画のようになれるのかい？」

八雲「し、しらん!」

暇ねん「頑張らないと取られちゃうかもよ?」

八雲「……」

暇ねん「うわっ!押し黙っちゃった」

次回『教えてあげる』です。

教えてあげる

母さんが旅行に行ってから一週間が経ち、八月七日の夜。

「さてと、いつもの如く作りますか！」

オレは気合を入れると仕舞ってある包丁を取り出し魚をさばき始めた。

「八雲！」

「ん？どう……し……た……？」

セレナの声に反応してオレは包丁を止め、視線を向けた。のだが……

「セレナ、えーっと聞きたいことがあるんだけど……」

「この格好のことでしょ？」

そう、今、セレナはエプロン姿なのである。

オレは頷くとセレナが『かわいいでしょ』と言いながらエプロンの端を持ち上げる。

「冴子さんが旅行に行く前に、コレをつてくれたの」

「あー母さんが……」

あの人は何をやってんだか。

「まあ、いいや。どうしてエプロン姿？いつもなら付けないのに」

「うん。今日は八雲に教えてもらおうかと思ったから」

「教える？・・・・・・ああ！そう言うことね。いいよ、こっちに来て」

「お願いね」

セレナに料理を教えるって前に約束したので、オレはセレナを呼んだ。

「んじゃ、オレが途中までやっちゃったけど魚をさばいてみるか？」

「ええ！」

さばき途中の魚を使ってセレナに、魚のさばき方やその後の料理も教えてあげた。

さすが、セレナだな。危なっかしいところも無い。さすが女の子。

「こんな感じで良い？」

ミソを溶かしてから、セレナは小皿に味噌汁を入れオレに差し出した。

「・・・・・・おお！うまい！」

「よかった」

今回、オレ何もしなかったな。全部セレナに教えたらやってのけるからな。

「まゝ料理はやれば出来るか」

「ん？何か言った？」

「いや、セレナは結婚したら良い母親になれるなって言ったんだよ」

「や、八雲！？何言ってるのよ！」

「事実を述べたまでだよ。オレは出来上がった物を向こう持って行くよ」

出来上がった料理を手に取り、テーブルへと持っていく。

「・・・・・・・・・・ばか」

オレがいなくなるとセレナは小さく呟いた。

「いただきます」

こうしてオレは、セレナの手料理を美味しく頂いた。

教えてあげる（後書き）

今回の反省

八雲「手抜き？」

暇ねん「おう！？いきなりどうした？」

八雲「いや、いつもと比べて内容が薄いし、短い」

暇ねん「そ、そ、そ、そんなことないぞ！」

八雲「汗だらだらだぞ？」

暇ねん「気のせいだ！これは涙だ！！」

八雲「罪悪感でか？」

暇ねん「ちがうわ！」

次回『八雲、お願いがあるんだけど・・・・・・・・・・』です。

八雲、お願いがあるんだけど……………

数日後の夜九時。

オレは珍しく自分の部屋にいた。いつもならセレナと一緒にテレビを見ている時間だが、今日はセレナが『ねむい』と言って先に寝てしまったのだ。

「……………」

耳にはイヤホンを付けウォークマンで音楽を聴きながら夏の夜空を眺める。

「まだ九時か……………暇だな。そうだ、読みかけの小説があったんだ」

思い出しオレはベッドの下にある収納スペースの引き出しを開けた。中には漫画や小説でいっぱいである。

「えーっと……………おっ、あった、あった」

一冊の本を取り出し、引き出しを仕舞う。

先に言っておくがライトノベルではないぞ。

「……………」

オレは本に集中しすぎて気付くと、今日が昨日になっていた。

「うわ、一時になってるし！早く寝よ」

イヤホンを取り、本を引き出しに仕舞い、部屋の電気を消そうとベツドから立ち上がった。

「うん？」

オレは耳に聞こえてきた音に反応した。聞こえてきた音はドアを控えめにノックする音だ。

「八雲、ちょっと・・・・・・・・いい？」

「セレナ？どうした・・・・・・・・って、どうした！」

ドアを開けるとなみだ目でセレナがドアの前に立っていた。

「うん。ちょっと・・・・・・・・ね」

「とにかく、入って落ち着け」

「うん」

さつきからセレナ、元気がないな。

「どうかしたのか？泣いてるし」

「あのね・・・・・・・・」

「うん？」

「笑わない？」

「笑わないさ。内容によるけど」

「・・・・・・・・・・」

じーっと涙目で睨んでくる。

「笑わない！」

「・・・・・・・・・・あのね、夢を見たの」

「ゆめ？」

「ええ。私と八雲が一緒に暮らしていたの」

「オレと・・・・・・・・セレナが？」

オレの言葉に頷き、セレナは話を進める。

「そこに、上位貴族の人がやってきて私達を離れ離れにするの。そして私は、その人と結婚する夢、だったの」

「うーん、なんともリアルな夢だな。でも、それで何で泣いてるの？」

苦笑するオレ。すぐに、表情を引き締め聞く。

「だって！」

「だって？」

「その……………」

「その？」

セレナにしては珍しくハッキリと言わないな。

「これも……笑わない？」

「笑わない！」

「その……………夢の中でだけど、八雲と一緒にいる未来が見れたのに、離れ離れになってしまったから悲しくて……………」

「へ？」

まさかの発言にオレは、力の抜けた声を出してしまった。

「ぶっ！…………あはははっ！！」

「八雲！」

そしてオレは大声、とは言わないが笑ってしまった。

「大丈夫だって！」

「えっ？」

「たとえば、それが本当に起きる事があってもオレが引き止める！そ

れが無理なら会いに行く。セレナと釣り合える男になってね」

「・・・・・・・・」

セレナの視線がオレの視線と交わる。

「あー、カッコつけすぎた？」

「ううん。嬉しかったのよ！それは信じて良いの？」

「信じてくれるなら」

「信じるわ」

「よし、それじゃ今日はもう寝な」

「ええ・・・・・・・・八雲」

「なに？」

オレはドアを開けセレナに向いた。

「ここで寝て良い？」

「ここってオレの部屋なんですが・・・・・・・・」

「だから、一緒に寝よ」

電気を消し、オレはベッドに入る。横にはセレナがいる。

「あついね」

「しょうがないだろ！こんな夏に一緒にベッドで寝るのが悪いの」

「そうね」

「たくっ」

夏なので今はタオルケットを腹の部分に当ててるだけで寝ている。

「八雲」

「ん？」

「約束よ」

「分かってるよ。おやすみ。セレナ」

「おやすみ。八雲」

オレは隣にいるセレナを感じながら目を閉じた。

八雲、お願いがあるんだけど・・・・・・・・（後書き）

今回の反省

八雲「・・・・・・・・」

暇ねん「ラブラブですね」

八雲「オレ、候補なのにこんな事約束して良いわけ？」

暇ねん「さあ？」

八雲「オイ作者！」

暇ねん「しょうがないでしょ！何か言ってしまうとネタバレするし」

八雲「それもそうか」

暇ねん「そうそう」

次回『あつ、おかえり』です。

あつ、おかえり」

八月二十一日の夜。

ご飯の準備をセレナと一緒にしていると玄関の方から開く音が聞こえてきた。

「ん？だれだ？」

オレは警戒心を出しつつも玄関に向かうとそこには久しぶりに見た顔があった。

「ただいま」八雲！」

「かあさん！！」

そう、母さんがスーツケースを横に玄関に立っていた。

「そっか、今日、二十一日か。忘れてた」

「あら、それほどまでにセレナちゃんとストロベリってたの？」

「ちがうし！てか、何だよその言い方」

「どうかしたの？・・・・・・冴子さん！おかえりなさい！！」

玄関から戻ってこないオレを不思議に思いセレナが玄関に来た。

「ただいまセレナちゃん」

「まー、聞きたい話でもあるし中に入りなよ。荷物はオレが運ぶから」

「ありがとう」

母さんはスーツケースをオレに渡し、セレナとリビングに向かった。

「これ、セレナちゃんが作ったの？おいしいわ」

「ありがとうございます」

久しぶりに三人で晩御飯を食べることができ、母さんはセレナの作った料理を食べて褒めている。

「んで、向こうで何してきたの？」

「うん、楽しかったわ！」

「いや、もっと具体的に話してよ……」

オレの質問に一言で返す母さん。

「んーっと、ほとんどは修二さんに甘えていたからね」

「はいはい、仲のよろしい事で」

母さんと親父は昔から仲がよく、オレがいるのもお構いなくにイチ

やつているので、オレはもう、なれてしまっている。

「冴子さんと修二さんは仲が良いのね」

「ああ、もうベツタリとね」

肉じゃがのジャガイモを箸でつまみ口に運びながらオレは答える。

「羨ましいな」

「傍から見れば良いかも知れないけど身内としては自重して欲しいわ」

「そうそう、セレナちゃんのお父さんとお母さん・・・国王様と王妃様と話してきたわよ」

「ぶっ・・・・・・・・ぶね」

危うく口に入れたジャガイモを吐き出してしまうところだった。

「あんたは何してんだほんとに！」

「いやね、修二さんに甘えていたら国王様と王妃様が来てね。それで、セレナちゃんの事や八雲^{あんた}の事を話してきたわよ」

「お父様とお母様は何と？」

セレナは食べる事も忘れ話しに夢中になっている。

「別になんとも言っていないわ。『決めるのはセレナだから』って」

「そうですか」

「そうそう、セレナちゃん。『学校が始まるからそろそろ国に帰って来い』って国王様からの伝言よ」

「そうですか……」

セレナの表情が暗くなったように見えたが、セレナは表情を明るくしてご飯を食べ始めた。

「セレナ、学校行ってるんだ」

セレナは学校に行っていないと思っていたので驚いた。

「あたりまえでしょ。八雲も行ってるじゃない」

「いや、姫様は自宅学習みたいに教えてもらう人が家にいるのかと……」

「そんなこと無いわよ。今年で卒業よ」

「へー、高校三年ってところか」

「ええ」

そんなこんなのでご飯を食べ終わるとセレナと一緒に皿洗いをしていると母さんが呼んでくる。

「なに？」

「明日、お祭りがあるから二人で行ってきなさい」

「祭るか……そうだな」

「セレナちゃんはもう少しで帰っちゃうんだからしっかりね」

「あはは」

皿洗いを終わるとオレは祭りのことをセレナに言った。

「——ってことなんだけど」

「もちろん行くわよ」

「りょーかい」

こうしてオレはセレナを祭りに誘う事が出来た。

あつ、おかえり〜（後書き）

今回の反省

暇ねん「すいませんでした」

八雲「またか。今度は何をした？」

暇ねん「いや、何となく読者に謝ってみた」

八雲「おい！」

暇ねん「だって、内容が無いんだもん！」

八雲「ネタ切れってやつか」

暇ねん「イエス！！」

八雲「はぁー」

暇ねん「あつ、でも夏休み後の話しは出来てるぞ」

八雲「夏休み後？なにそれ？」

暇ねん「ふふふふ」

八雲「おい、言え！」

暇ねん「内緒」

八雲「オイーッ！！」

次回『最後なのでしっかり楽しみましょう』です

最後なのでしっかり楽しみましょう

次の日の夕方、オレは自分の部屋で祭りに行く準備をしていた。

「そっか、夏休みが終われば学校も始まる。セレナも帰っちゃうのか……」

しみりしているとドアをノックする音が聞こえた。

「入って良いぞ」

「どう？ 八雲」

ドアを開け中に入ってきたのはセレナだった。それはオレも予想していた。だが……

「どうした！ その浴衣？」

セレナは黒の浴衣を身に纏っていた。浴衣には花火の絵が入っている。

「冴子さんが昔着ていたのを貸してくれたの。それよりどう？」

「どうって……その……綺麗です」

顔が真っ赤になるのが自分で分かるほどにオレはセレナの浴衣姿に見入ってしまった。

「ふふっ、ありがと。八雲は準備できた？」

「もうちょっと待って」

「わかったわ。下で待っているから」

セレナはそう言って部屋から出て行った。

「あれは反則だろ」

セレナがいなくなってからオレは自分の顔に手を当てた。

「お待たせ」

「準備できたの？」

「おう。んじゃ行きますか！」

「ええ」

母さんに一言ってからオレたちは家を出た。

言っておくがオレは浴衣なんか着てねえぞ！

オレたちが向かっている祭りは、オレが小学生だった時に通っていた学校でやっている。

まあ、家から十分ってところだ。それにしても……………

「人が凄いな」

「ほんとうね」

小学校が近くなっていくにつれて人が多く行きかう。

小学校に入ると中は凄い盛り上がりようだった。

「セレナは祭りって初めて？」

「こんな感じではないけどセイクリッドのお祭りには行った事があるわ」

「ふーん。何かしたいものある？」

「そう言われても何があるか分からないから見て回りましょ」

「それもそうだな」

オレたちは人ごみの中を進んでいくと、しだいにセレナが離れてしまいそうになる。

「おっと！」

オレはとっさにセレナの手を握り、引き寄せた。その時、力が強すぎたのか勢い余ってセレナはオレに抱きつく形になってしまった。

「ああ！わりい」

「何謝ってるのよ」

「いや、何となく……」

セレナはオレの胸でクスクスと笑い、離れた。

「ん」

なんか残念だったような良かったような……

「八雲！」

「なに？」

考えているとセレナがオレに手を差し出してきた。

「はぐれない様に手、つなぎましょ」

「そうだな」

差し出された手を握り、オレたちは再び周り始めた。

「八雲、アレは何？」

「ん？」

セレナが指差しながら聞いてくるものは、綿飴だった。

「ああ。あれは綿飴といって砂糖を割り箸に巻きつけるんだ。食べてみるか？」

「いいの？」

「当たり前だろ。おじさん、綿飴一つちょうだい」

「はいよ。って、兄ちゃん！その女性はセレナ姫では？」

綿飴をオレに渡す時にセレナに気付いたみたいだ。

「ええ、まあ」

セレナはオレの後ろで会釈をしている。

「ほーほー。セレナ姫が日本にいるとは聞いておったが、まさか会えるとは……兄ちゃん！これはわしの奢りだ」

「いやいや、それは悪いですよ！」

「こりゃ、こういう時はありがたく受け取っておくものじゃぞ」

「……では、お言葉に甘えて頂きます」

「姫様によろしくの」

「ほい」

「ありがとう」

オレたちは人ごみを抜け、体育館前にあるベンチに腰掛けた。

「おいしい！すぐに無くなってしまいそう」

「はは、そりゃ良かった。んっ？」

「どうかしたの？」

「たこ焼きがあるらしいから、ちょっと買ってくるわ。セレナはここにい……やっぱ一緒に来て」

「良いけど、どうかしたの？」

オレが言いかけて、言い直したのでセレナは顔を覗き込んでくる。

「いや、なんでもないよ。いこ」

そりゃあ、言えるわけ無いでしょ。ナンパされたら困るから。なんて。

このあとオレたちは、たこ焼きを食べ、射的や投げ輪などを楽しんだ。

「たのしかった。八雲、ありがとうね！」

「どういたしまして」

帰り道、オレたちは家へと向かって足を進めていた。

「なーセレナ」

「なあに？」

「いつ帰るんだ？」

オレは幸せなこの時に聞くべきじゃないと思ったが、つい口が言ってしまった。

セレナもピクツと肩が動いたような気がした。

「うん。三十日に帰るわ」

いつもどおりの声音で答えるセレナ。

「よかった。んじゃ、間に合うな」

「なにが？」

「花火大会。二十九日にあるんだよ。ちょっと遠いけど……」
「どうする？」

「もちろん行くわよ！」

「んじゃ、約束な」

「ええ。約束よ」

こうして今日の祭りは終わった。

最後なのでしっかり楽しみましょう（後書き）

今回の反省

暇ねん「サブタイなんですが『最後』じゃなかったですね」

八雲「でしたね」

暇ねん「だがダイジョーブ博士」

八雲「なにそれ!？」

暇ねん「えっ? 知らないの? パワ●ロのダイジョーブ博士」

八雲「ああ、いるねえそんなの」

暇ねん「だろ?」

八雲「で」

暇ねん「で?」

八雲「で? じゃねえよ。なにがだいじょぶなんだよ?」

暇ねん「ああ。あと二回で夏休み終わるから『最後』の連発してもダイジョーブってこと」

八雲「ダメだよ!!」

次回『花火は人に向けないように』です。

花火は人に向けないように（前書き）

すいません。昨日A O試験を受けていたため更新が遅れました。

花火は人に向けないように

祭りに行ってから時間が経つのが早く感じた。

「よし、早めに行かないとな。セレナ？」

「今行くわ」

浴衣姿のセレナがリビングから現れ、オレたちは家を出た。

歩いていると周りの人たちも駅に向かって歩いている。

「やっぱり、みんな行く場所は同じか」

「ねえ八雲、花火大会ってどこでやるの？」

「ん？言わなかったけ？隣町でやるんだよ。ここら辺じゃ一番有名な花火大会だな！」

「へー」

などと話していると早くも駅に着いた。のだが――

「うーん。早めに来たつもりだったんだがな」

切符売り場には長蛇の列が見える。

ここは、デイズ●ーランドか！

「セレナの切符だけは買わないとな。しゃーない、並ぶか」

オレはパ●モを持っているからな。

「ねえ、冴子さんがコレを渡してきたんだけど、コレって何？」

列に並ぼうとした時、セレナがある物を見せながら聞いてきた。そのある物とは――

「ん………ってパ●モじゃん!! 何で持ってるの!？」

話を聞いていなかったオレはパ●モを見て驚いた。

「だから冴子さんに渡されたの」

「あ、ああ。なるほど………」

うーん、さすが母さん。こうなる事を見越したな。

母さんに感謝をするとオレたちはタッチで改札を抜けた。

タイミング良く電車が来て乗る事が出来た。

電車の中は満員電車で窮屈である。

「くくくセレナ、こっちに！」

手を握ると無理やりにドア側に向かい、セレナを守るようにドア側に立たせた。

隣町まで時間で言うとも三十分ぐらいで着く。

「悪いな、こんな状態で」

「良いわよ別に」

ドアが開くとオレたちは降り改札に向かおうと思ったが、周りの人たちが押し寄せてくるのでコレが終わるまでベンチで座る事にした。

「よし、いくか」

「ええ」

駅を出るとすぐに商店街に入る。商店街には色々と出店があり、花火が始まるまでここを見て回る事にした。

「ここで花火を上げるの？」

「いや、商店街（まち）を抜けるとデカイ川があつてなそこから船で打ち上げるんだ」

オレは近くの駄菓子店で買ったガムを噛みながら説明をする。

セレナの手には前に食べた綿飴（わたあめ）を持っている。気に入ったのかな？

『これから花火大会を始めます』

スピーカーから聞こえてきた声を聞き、一分後には花火を打ち上げる音が聞こえてきた。

「あゝと、始まっちゃったな。どうする？急ぐか？」

「お楽しみは最後について言うでしょ？」

「言うねえ」

「まあね」

と、ふざけながらも足は進めるオレたち。

「きれー」

打ち上げが始まってから五分以上経っているが、花火の量は増すばかりだ。

「すげーな」

月だけが見える暗い空に色とりどりの花火が飾られては消えていく。

それは一瞬の出来事だが、オレたちの瞳には永遠に感じられる。

「・・・セレナ」

「なーに？」

花火からオレに視線を向けてくるセレナ。まあ、オレが呼んだんだから当然か。

「・・・」

「なによ？」

「ありがとな」

「え？どうしたのよいきなり！？」

「いや、何となく言いたかったただけだ。明日言おうと思ってたんだが、多分言えないと思うから……」

「そっか。……それじゃ、私も！」

「ん？」

急に恥ずかしくなり視線を外した。その時、左頬に何かを感じた。いや、『感じた』じゃなく『当たった』だ。唇の柔らかい感触が。

「へ？」

「えへへ。しちゃった！」

「い、いや……しっちゃったって……ぐはっ！」

すこーし、オーバリアクションが入ったがこれは致命的な攻撃だった。

「ふふっ」

セレナは微笑みながら視線を花火に戻したが、花火の明るさで表情が赤くなっていることに気付いた。

「・・・・・・・・」

なに？ いまのイベント？ オレ、脂肪フラグもとい死亡フラグに向かっているのか？

結果、明日にはセレナが帰るって言うのにオレは花火大会いまつまを楽しむ暇が無かった。

だが、次の日になるとオレが想像していたことを遥かに超える出来事が起こった。

花火は人に向けないように（後書き）

今回の反省じゃなく言い訳

暇ねん「すいません！昨日AOを受けてきたので更新が出来なくて。その前の日は予行練習みたいのをやっていて更新できませんでした」

八雲「で、受かりそうなの？」

暇ねん「ぐはっ！！」

八雲「あーこれは質問に答えられなかったってパターンか」

暇ねん「バーン！！」

八雲「暇ねん・・・・・・・・どんまい」

暇ねん「肩に手を置くな！！」

次回『貴様と姫では釣り合わない！私が姫の釣り合う者だ！！（前編）』です。

お迎えに上がりましたセレナ姫（前編）（前書き）

急遽、サブタイを変えました。

お迎えに上がりましたセレナ姫（前編）

次の日。つまり8月30日。セレナがセイクリッドに帰る日である。

「ふあゝあ」

いつもと変わらずオレは下で朝食を作っている。

「そーいや、何時に家を出るんだ？」

さっきからセレナのことを考えて料理をしている。

「しかし、ホームステイは終了ってことは、セレナの婿が決まるのか？」

よくよく考えてみれば、これからの事を何一つ知らないよな。オレ。

「おはよう」

「ん」

朝食が出来上がった頃に母さんが降りてきた。

「セレナちゃんはまだ寝ているの？」

「さあ？」

母さんは椅子に座るとテーブルにご飯を並べていく。

「見てくるよ」

「そうしなさい。あつ、でも」

「ん？」

「襲っちゃダメよ」

「何言ってんだアンタ!!」

二階に行くとセレナの部屋の前で立ち止まり、ドアをノックする。

「セレナ~~~~?」

「.....」

返事が無い。まだ寝ているのか？

「セレナ、入るぞ？」

「.....」

返事が無いのでオレはドアを開け中に入った。

「.....」

部屋の中はカーテンが閉まっているため少し暗く感じる。部屋には何も無く、あるのはベッドと部屋の真ん中に置いてあるスーツケースだけだった。

部屋を見渡してからベッドへと近づく。

「セレナ？」

「すゝ・・・・・・・・すゝ・・・・・・・・」

規則正しい寝息が聞こえる。

「・・・・・・・・起こして良いものか、どうか・・・・・・・・」

考えた末に出した結論は・・・・・・・・

バツと音を立てながらカーテンを一気に開けた。窓も開けようと思っていたが窓は開いていた。

「う・・・・・・・・ん・・・・・・・・？」

一気に日の光が部屋を明るくすると、セレナがまだ眠たそうな声を上げた。

「おはよう、セレナ」

「おは・・・・・・・・よう・・・・・・・・やくも・・・・・・・・八雲
っ!？」

「おう！」

眠たそうな表情が一気に吹き飛んでいるセレナ。

まー当然の反応だな。起きてすぐに男子を見ればこんな反応する

だろ。

「何で八雲がここに？」

「朝飯だ。セレナが起きてくるのが遅いから起こしに着たんだよ」

「あっ！ごめんね」

「いいさ。それより、服装正してから降りてきてくれ」

手を振りながら部屋を出て行くオレ。

「服装？・・・・・・っ！？」

セレナはオレがいなくなってから自分の体を見た。

ボタンを前で止めるパジャマだが、よく見てみると、上から半分ぐらいボタンが外れており、もう少しで胸が見えそうってところだ。

言っておくが、オレは何も見えて無いぞ・・・・・・見て無いぞ！！

母さんの所にもどると、母さんはまだ朝食に手を出していなかった。

「まだ食べてなかったの？」

「だって、今日がセレナちゃんと一緒に食べるの最後の日かもしれないのよ」

「それもそうか。母さん。はい、コーヒー」

「ん、ありがとう」

出されたマグカップを取り口に当てる。

「おはようございます。冴子さん！」

「おはようセレナちゃん。息子に襲われなかった？」

「おいっ！」

「襲われかけました」

「堂々と嘘をつくな！」

セレナが席に着くとオレたちは朝食を食べ始めた。

「なー、いつ家を出るの？」

「お昼食べてから・・・かな」

「そっか」

オレは向かいの席にいるセレナを見ずに聞いた。セレナもオレではなく飾ってある時計を見ながら言う。

その後はいつもどおりに楽しく話をしながら朝食を食べた。今はオレの隣で一緒に皿洗いをしている。

「これからオレどうなるの？」

「どーいう意味？」

オレの後ろで皿を仕舞っているセレナがこっちを向いている。と、オレは思う。

オレは皿を洗っているため視線は前を向いている。

「いや、セレナが帰るって事は婿が決まるんじゃないの？」

「そんな早くには決まらないわ。まあ、今までのホームステイの事や将来的なことを考えお父様たちと話し合ってから決定するから・・・早くても来年かしら」

「さすがに将来のセイクリッドが懸かっているからそう簡単に決められないか」

「ええ」

「あのさあ・・・」

皿を洗う手を止め静かに言う。

「オレかオレ以外が婿に決定したらどうやって知るんだ？」

「その時は、私と私の婿と一緒に報告しに来るわ」

「そっか・・・」

独り言のように呟くと手を動かし始める。

「ねえ、八雲」

「ん？」

「私ね・・・・・・・・・・・・・・・・やっぱりなんでもないわ」

「へんなセレナ」

「悪かったわね」

「ははっ」

こーゆう時だけは時間が経つのが早く感じる。あっという間に二時になってしまった。

「冴子さん。一ヶ月とちよっとお世話になりました」

「いいのよセレナちゃん。また来れるようならいつでも来なさい」

「はい！」

オレと母さんは玄関でセレナと話している。

「ほら、八雲もしっかり送っていきなさいよ」

「わーってるよ」

靴を履き、セレナのスーツケースに手を掛けた。

「んじゃ、いくぞ」

「ええ。冴子さん、またいつか来ます。その時は――」

「あらっ、ふふっ楽しみにしているわ」

セレナは母さんの耳元で何かを言ったらしいがオレには聞こえなかった。が、母さんは嬉しそうに微笑んでいる。

「いくぞ。そのドレスは汚さないようにな」

「分かっているわ」

セレナはオレと始めてあったときと同じ純白のドレスを着ている。

オレは玄関を開けようと手を掛けたその時だった。オレが空ける前に勝手に玄関が開いたのだ。

「つと!」

玄関が開いたのは外から開けられた所為である。ドアの向こう側には開けた張本人と思える男性が立っていた。

お迎えに上がりましたセレナ姫（前編）（後書き）

今回の反省

暇ねん「皆様、今回のサブタイですが変えさせていただきました」

八雲「なんで？」

暇ねん「以外に話が長くなってしまったから二つに分けた」

八雲「なるほど。てか、このごろネタでないな」

暇ねん「んゝ出したいんだけどネタが浮かばなくてさ」

八雲「あつそ。そーいやAO試験の結果、どうだった？」

暇ねん「お前、笑いながら聞いてくるなよ」

八雲「良いじゃん。で、どうだった？」

暇ねん「それが……」

八雲「やっぱ、落ちたか。ドンマイだな」

暇ねん「アホ！受かったわ」

八雲「うそ!？」

暇ねん「本当だ。バーカ」

八雲「うっさいわ！ボケ！」

次回『お迎えに上がりましたセレナ姫（後編）』です。

お迎えに上がりましたセレナ姫（後編）（前書き）

今回から少しシリアス＋戦闘が入ります。
嫌だっ方は申し訳ありませんが『戻る』を。

お迎えに上がりましたセレナ姫（後編）

外から玄関を開けた男性は、日本人ではない事が一目で分かった。

服装もどこかセレナたち上流貴族が着ているスーツのようなもの。

「だれ？・・・・・・・・でも、どこかで見たことがあるような・・・・」

「レーベル！・・・・・・・・なぜ、あなたがここに？」

後ろにいるセレナは驚いた表情で男性に向けて聞いている。

レーベル？まてよ、レーベルって・・・・・・・・ハッ！

「レーベル・ブレイブ！？」

「おや？私の名をご存知でしたか。これは自己紹介の手間が省けましたね」

セイクリッドの次に世界を動かしているブレイブ王国の王子で、セレナの婿候補の一人。

「セレナ姫、お向かいに上がりました」

「どーいうこと？」

「セレナ姫がこんな庶民の子供と一緒に住んでいると聞かしましてね、帰りぐらいはゆっくり出来ますように、と」

「ありがとう、レーベル王子」

「セレナ姫、『レーベル』でいいですよ」

「・・・・・・・・」

黙って聞いていたが明らかにセレナの口調がいつもと違う。オレでもはっきりと分かる。

「ありがとうレーベル。ですが、今は高坂の家でお世話になります。ですから――」

「今日でホームステイも終わりでしょう？それにこれは、私個人でやっていることです。余計なお世話でしたら下がりますが？」

ニッコリ笑いながらレーベルは道路に止まっている黒の高級車を手で示した。

いわゆる、私の車で空港までお送りしますよ？って遠まわしに言うてるわけだ。

「遠慮しておくわ。私は、八雲に空港まで送ってもらいますから」

「八雲ねえ・・・・・・・・」

突然、レーベルの視線がこっちに向けられた。

当然のことながら相手は年上です。二十一歳・・・・・・・・だったかな？テレビでやってたな。

「こんな庶民のどこが良いのですか？ セレナ姫？」

「・・・・・・・・・・」

オレは黙って無視しているが、セレナは今の言葉に反応してしまった。

「少なくとも、地位や権力だけのあなたは断然良いわ！」

「おい、セレナ！」

「セレナ・・・・・・・・八雲、貴様はセレナ姫の事を呼び捨てで呼んでいるのか？」

「ん？ あ、ああ。それが？」

「そうですか・・・・・・・・・・」

オレから視線を外すとセレナに向け、またオレに視線を戻した。

「なるほど。信頼関係は出来ているようですね、セレナ姫。ですが・・・・・・・・・・」

「しよせんは庶民の出所、品が無い。ましてや何一つとりえが無いと見た。どうだ八雲？」

「とりえねえ、確かにオレは何一つ持って無いな。だが、アンタより一っだけ勝っているものは持っているつもりだぜ」

今の台詞にレベルは眉をピクツと動かした。

「ほう、興味深いな。教えてもらおうか。庶民の貴様が貴族の私に勝っているものとは？」

「ふつ、簡単な事だ。アンタ……他人を見下しすぎだ。庶民がどうか、品が無いだの、あんた何様だ!」

[illegible]

?

突然、笑い出したレーベルに驚く。つてか、ちょっと怖いわ。

「はー……すまない。貴様がどんな事を言うかと思つて期待してみれば、そんなふざけた事だったとはな」

一息つくとレーベルはクルツと後ろを向き、車の前で立っている使用人に何か合図をした。

「レーベル!! あなた、八雲に勝負しろというのですか!」

勝負？は？なに？

「大丈夫ですよセナ姫。ただ……この者に我らレーベル家の力を見せるだけです」

「なにを………？」

すると車のトランクから、何かを取り出し使用人がオレとレーベル

に何かを渡した。これは……………

「木刀？」

「なんだ？見たこと無いのか？」

「だから、ばかにしてんのか」

「貴様がいちいちバカな事を言うからだろ」

「デメエ……………」

木刀を握った手に力が入る。

「勝負だ。貴様の好きなように私を撃つがいい。だがもし、一太刀も当てられなければその時はお前の負けだ」

「上等だ……………いくぞっ!!」

「ダメっ！八雲！！あなたじゃ——」

セレナがオレを止める前にオレはでたらめに構えレーベルに突っ込む。

「貴様は私に言ったな、『アンタ何様だ』……………」

「だったら？」

オレの振った木刀を意図も簡単に受け止めるとレーベルは顔を近づけてきた。

「教えてやるよ。極稀にだが私に齒向かう者がいる。それは、貴様のような理由でな」

「そーだろうな」

「だが、最後には私が勝つ。なぜ分かるか？」

「セレナが言ったとおり地位や権力で消したんじゃないの？・・・
・・・うっ！！」

レーベルの木刀がオレを後ろに後退させた。

「そんな面倒な事はしないさ。私にはな・・・力があるんだよ。絶対的な力がな。剣術という絶対的な力！」

「あん？」

「知らないのか？我がブレイブ王国の特徴を？知らないのなら教えてやる。わが国では例え頭の悪い奴でも上流貴族、とまでは言わないがそれに近い存在になれる。それは剣術だ！」

遠心力を使って木刀を振りぬくが、木刀の軌道を変えられレーベルには当たらない。

「だから決まって上の者になりたがる奴は剣術を学ぶのさ。その為わが国はどの国より剣術に長けている！私もその一人だ。最も、頭は良いほうだがな。故に、地位や権力に頼らなくてもこうやって落せる」

「く……っそ!!」

「だから私は、他者を見下す。私が認めるものは私より上のものだけだ!」

一瞬の出来事だった。レーベルの持っていた木刀が消えたと思った
ら自分の木刀が消えていた。

スイングが……速い!! 捉えられなかった。

いつの間にかオレは地面に背中をつけていた。目の前でレーベルが
オレを見下ろしている。

「そうそう、訂正しよう。私が認めるものは私より上のものと言
ったが、剣術では誰も認めてないよ。なぜなら……」

「私が世界最強の剣術使いだからさ」

こいつ……

「安心しろ。今回は手加減をした。木刀を握った事の無い者に本気
を出すほど大人気くないさ」

「八雲!」

体がうごかねえ……やろお、なにが手加減だ! おもくそ体
が言う事きかない。

隣でオレの名を呼んでいるセレナだが、オレの耳には何も入ってこ
ない。それどころかオレの視界は段々と暗くなっていく。

「八雲!! レーベル・・・あなた!!」

「氣を失っているだけです。セレナ姫、これでは一人で帰ることになります。せめて空港までは一緒に来てもらいますよ」

「ちょっとまち！」

「ん？あなたは？」

今まで黙っていた母さんがここに来て口を開いた。

「セレナ姫は今はまだ家が預かっているんでね。八雲こいつの代わりに私がセレナ姫を送るわ。それとも、私にも勝負を挑む？」

「・・・・・・・・」

オレの手から木刀を奪い取るとレーベルに向けて木刀の先を向けた。

「やめておきますよ。あいにく、女性には手を出さない主義ですから。ではセレナ姫、お城で」

そう言って、レーベルは車に戻り、ここから去って行った。

「冴子さん・・・・・・・・」

「ごめんねセレナちゃん」

「いいです。でも・・・・・・・・」

セレナはオレを見る。

「今は、部屋で寝かせておくわ」

母さんは倒れているオレを持ち上げると、自分の部屋まで運んでいった。

この後、母さんはセレナを空港まで送っていった。

オレが起きたのは次の日の昼ごろだった。

お迎えに上がりましたセレナ姫（後編）（後書き）

今回の反省

暇ねん「なんか、レーベルの理由が曖昧な気がする」

レーベル「良いじゃないですか、後で補足すれば」

暇ねん「レーベル!？」

レーベル「こんにちは」

暇ねん「なんでここに？」

レーベル「気を失っている八雲の代わりってことで」

暇ねん「さいですか。今回は八雲がいないと困るのだが……」

「

レーベル「私だと役不足だと？」

暇ねん「おい、木刀を取り出すな」

レーベル「どうなんです？」

暇ねん「大丈夫です。どーせ、次の話で一旦、日本編終わりだし」

レーベル「どーゆうことですか？」

暇ねん「それは、秘密だ!」

レーベル「つまらないですね」

暇ねん「そうそう。前書きでも書いたが、これから本当に少しだけ

今回みたいに戦闘が入るから」

レーベル「ふん、私に勝てるものはいないさ」

暇ねん「その驕りが足元を掬うぞ」

レーベル「させてみな」

暇ねん「頑張れ八雲!」

次回『決めた。オレ行くわ』です。

決めた。オレ行くわ

「ここは・・・・・・・・」

起き上がるとオレはベッドで寝ていた。

あれ？オレいつのに寝たんだっけ？・・・・・・・・思いだせん。

「入るわよ」

声がしてからドアをノックするなって。

「あら、起きてたの」

「ん、ああ。ってか、オレいつの間に寝たんだっけ？セレナは？」

「あんた忘れたの？セレナちゃんは帰ったんだよ」

かえった？・・・・・・・・あれ？たしかオレ。

「今日！ってか今、何時？」

「8月31日のお昼過ぎよ」

「31ってセレナは？」

「帰ったわよ。空港までは私が送ったわ。セレナちゃんはアンタが起きるまで傍にいてって言ってたけど学校があるから帰したわ。」

「あーっっっっ思い出したわ。オレ、負けて氣い失ったんだ。ハハ」
顔に手をあて視界を遮る。

「・・・・・・・・お腹がすいたら下に来なさい」

「・・・・・・・・」

返事を聞かないで母さんは部屋から出て行った。

ダセェ・・・・・・・・アレだけ粹がって結果、あのざまかよ。笑えるわ・・・・・・・・

「ハハ・・・・・・・・」

そーいや、氣を失う前にチラッと見えたんだよな。セレナの表情が。

「泣きそうな顔だったとか心配そうな顔だった・・・・・・・・かな？」

どっちにしろオレは・・・・・・・・負けた。そのうえ、セレナを心配にさせた。

「オレは・・・・・・・・なにやってんだろうな」

顔から手を話し、視界に光を入れた。

外の景色をボーッと眺めるだけ。

いったいどれくらいの時間こうしていたのだろうか。気付けば外は

おろか部屋の中も薄暗くなっている。

7時か。

「腹減ったな」

本能のままにオレは下に向かい晩御飯を食べ始めた。

「さすが母さん。オレが下りて来るときに丁度ご飯を作るなんて」

そーいや、久しぶりに母さんのメシ食べるな。前まではオレとセレナが作ってたからな。

「いつまで、そんな顔してるのよ？」

「へ？」

ご飯を食べている箸が空中で止まった。

「情け無い面してるわよ」

「マジで？ ハハ」

「笑えてないよ」

「うっ」

無理に笑ってみたが逆効果だった。

「そうそう。セレナちゃんが家（こゝろ）を出る前に手紙をアンタの部屋に置

いていたよ」

「え？」

「後でも良いから見ておき——」

良い終える前にオレは残っていたご飯を一気に平らげ、自分の部屋へと向かった。

「あった！」

部屋の電気を点け、部屋を見渡すとテーブルの上に綺麗に二つに折られている紙が置いてあった。

八雲へ

あなたが、これを読んでいるときには時には私には、セイクリッドにいるでしょう。

……ごめんなさい。こーゆう時の手紙の書き方ってどうするのかわからないの。

だから……だから、私の気持ちをここに書きます。

信じているわ、八雲。あなたが——

「あなたが約束を守ってくれるって……セレナ」

手紙を読み終えると折り目に合わせて綺麗に折りたたみ、オレは下に向かった。

「母さん!!」

「なにかしら？」

「オレっ——」

「待ちなさい。その言葉は修二さんに言いなさい」

「親父に？」

「ええ。これ、電話番号よ」

渡された紙には携帯番号が書かれていた。

はー、母さんにはお見通しか。

母さんはオレの背中を見て笑っている。

「・・・・・・・・」

番号を入れ、相手が出るのを待つ。

「もしもし？」

「親父か？」

「俺以外誰が電話に出るんだ？」

「だよな」

「で、なんだ？悪いが姫さんの事は何もいえないぞ。婿候補のことがあるからな」

「そーか。まあ、それは聞けたら良いなって思ってたただけだ。実は親父に頼みがある」

「おー、なんだ？」

「オレをそっちに行かせてくれ」

「・・・・・・」

親父が黙った。さっきまで軽い口調だったのが静かになった。

「それは、どう言う意味だい八雲？」

「いや、詳しくは言え無いんだけどオレをそっちの・・・セレナが通っている学校へ転校させてくれ！」

「それは簡単にできる事では無いぞ」

「だから、親父に頼むんだろ」

「・・・・・・ちょっと待っててくれ」

そう言って親父の声が聞こえなくなった。通信状態のままどこかへ向かっていることが受話器を通して分かった。

足音響いてるなー。

カツカツカツとテンポの良い足音が聞こえる。

「とまった」

足音が止まってから少しして親父の声が戻ってきた。

「姫さんの学校に通っても良い」

最初の言葉がそれだったけどオレは素直に喜べなかった。

「条件は？」

「おっ、鋭いな」

「さっき簡単に出来ないって言ってすぐにOK貰ったって事は国王らへんに頼んだんだろ？」

「さすが我が息子だな。条件ってのは――」

「・・・・・・分かった。こっちの学校はどうすればいい？」

「それは、冴子に頼んでおけ」

「わかった。ありがと、父さん」

「・・・・・・キモイ」

「なっ！」

感謝の気持ちを告げた息子にキモイって何だよ！

「いつもみたいに親父と呼べ！」

「あ？ああ、そっちの事か。ありがとな、親父」

「おお。冴子に代わってくれるか？」

「ちょっと待ってくれ」

受話器を話し母さんを呼ぶ。

「なに？修二さん」

「迷惑かけるな」

「いいのよ。それにあなたの妻ですからコレくらい何とも無いですよ」

「ははっ、ありがとうな……愛してるよ冴子」

「私もよ。修二さん」

電話なのだがオレの瞳には二人が寄り添っているように見える。

「母さん、わがままな事を言ってごめん」

「何よ、いきなり？」

ビククリしている母さん。オレってそんなに普段感謝して無いと思われている？

「まあいいわ。ただし八雲、自分のやることには責任を持つのよ」

「ああ」

「明日の午後の飛行機でいきなさい」

「いや、早くない？ チケットは？」

「大丈夫よ。全て修二さんがやっているもの」

「わかった。今から準備してくる」

オレがいなくなると母さんは冷蔵庫から缶ビールを取り出した。

「子供が親の所から出て行くのも早いわね。がんばりなさい。我が息子」

決めた。オレ行くわ（後書き）

今回の反省

八雲「ふっかーっ」

暇ねん「おお、もどったか主人公」

八雲「おうよ」

暇ねん「アレだけ瞬殺でやられて・・・あわれだな」

八雲「ちよつとまで、結局書いたのお前だろ！」

暇ねん「うん。ほかの作品だとシリアスって書いたこと無かったからさ」

八雲「最悪だ」

暇ねん「これがシリアスかどうかは分からないけど」

八雲「それよりこれからオレどうするの？それにあの約束」

暇ねん「おーっつと約束の事は言うな。それと、これからお前は『セイクリッド編』に突入だ」

八雲「はあー？」

次回『来たぜセイクリッド』です。

第二部 来たぜセイクリッド

次の日、本来ならば新学期を迎える日なのだがオレは今、空港にいる。

「ふぁー」

ベンチで大きな口を開けあくびをして搭乗時間を待っている。

さっきまで、母さんがいたが、パスポートとチケットを持つものが通れるゲートをくぐったので、今は自分ひとりだ。

『頑張ってきなさい』

これが、母さんの最後の言葉だ。

「ん？今、遺言みたいな感じになってしまったな」

そーいや、パスポートっていつ作ったっけ？オレ記憶に無いんだが・
・・・・・

自分のパスポートの写真を見ながら考えているとアナウンスが聞こえてきた。

『セイクリッド王国行きのお便のご搭乗の時間となりました』

「よし、いくか」

ベンチから腰を上げると、鞆を持ち搭乗口へと向かった。スーツケ

ースは先に係員に渡してあるぞ。

「さすがに新学期などが始まる日だから子供はいないな」

搭乗するために並んでいると、オレは周りに視線を向けた。

「B―33は………っと、ここだな」

チケットの座標席を確認して窓側の席だった。オレは鞆を足元に置き腰を下ろした。

「………」

幸い隣は空席であった。

「ん、ラッキーだな」

誰も来ないと分かり気が楽になった。

しばらくすると飛行機が動き始めた。

徐々に速度を上げて行き、地面から車輪が離れた。

「うおっ」

初めての飛行機のため、飛ぶ瞬間のあの重力から離れる感覚に少しだけ声を出してしまった。

外の景色は晴れているため良く見える。高層ビルの群れ。少しばかりすると今度は、視界いっぱい青い海。オレの瞳は初めての空の

旅が見せる景色に夢中だった。

「たしか、セイクリッドまでは五時間ていどだったけ？」

またも大きなあくびをしながら腕時計をみる。

「すこし寝るか」

昨日は初めての海外ってこともあって、あまり寝れなかったのである。

「・・・・・・・・さま・・・・・・・・お客・・・・・・・・お客様」

「ふえ？」

スチュワーデスの人がオレの肩を揺らしてオレを起こした。

「機内食です。どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

前に出されたのはコンビニ弁当のようなトレイにご飯などがよそわれていた。

「・・・・・・・・」

黙々と食べていると、ふと、隣から視線を感じた。

「？」

通路を挟んだ隣の席に視線を向けると、オレと同年くらいの男性の外国人がいた。

「なんだあ？」

男はオレが視線を向けると微笑み食事に戻った。

搭乗して五時間後、飛行機は無事セイクリッドの空港に到着した。

「あっちー」

ゲートを出ると周りは外国人だらけ。とーぜんのことだが。

「・・・・・・・・・・」

それとは別にオレは言葉を失った。なぜかと言うと、セレナ程ではなくとも皆、美形である。

「あはは」

笑うしかない。ってか、親父が迎えに来ているはずだが・・・・・・・・

「よう、我が息子よ」

「親父！」

・
五年ぶりの再会だった。紳士的な服装でいる親父。なんか・・・・・・・・

「にあわねえ」

「うっさい。それより」

「あん？」

「ようこそ。セイクリッド王国へ」

親父に言われて改めて認識した。ここは日本ではなくセイクリッドだっということに。

空港から出ると親父の車で町までつれてきてもらった。

「ここが、セイクリッドの中心ともいえるところだな」

「へー」

テレビで見っていたのとは別物に感じる。町の雰囲気は日本とは違って独特な感じを漂わせている。

町の中にも木々が多く、建物の造りは近未来を漂わせている。何より印象的なのは……

「お城が、こんな真ん中であって良いのかよ？」

そう、町の真ん中には王様と王妃様、それとセレナが住んでいるお城が建っている。

「いいんだよ。だからこそ――」

「あっ、シュウジだー！」

「おっ、チビすけ元気か？」

歩きながら城の話をしていると幼稚園ぐらいの男の子が親父に近寄ってきた。

「うん！」

「それは良いことだ。ママを困らせるなよ」

「うん。またね」

手を振りながら少し離れたところにいる母親の元へ駆けていった。

「なに？今の光景」

「さっきの続きだ。こんなところに城があるから城に住むものと町の住人と仲が良いんだ」

「仲が良い？」

「そう。俺たちは王様の護衛部隊だがいつもいるわけじゃない。交代制で守っている。自由時間のときは仕事仲間や今みたいに町のちびっ子たちと遊んでいるんだ。セレナ姫や王妃様もよく遊んでいるぞ」

「セレナが！？」

王族がそんなことしてるなんて想像してなかった。

「さすがに王様は、そうそう人前に出られないがな。忙しくて」

「へー」

「ここが、お前の家だ」

「家？ マンションとかアパートとかの一室じゃなくて？」

足を止めて家の前でオレは声を大きくして言った。

「ああ、前はオレが住んでいたんだが………いまじゃ、城で過ごしているんだ」

「なるほど」

「悪いが、これから仕事なんで夜にもう一回くるから、今日は家でおとなしくしている」

「わかった。そーいや、ここの人たちって日本語喋れるんだな」

城に戻ろうとする親父に聞いてみると、親父は顔だけ向けてきた。

「まー、一応小・中・高で習っているからな。だが、喋れない方が多いから、早く英語を話せるようになるんだな」

「へーい」

「んじゃな」

「おう」

そういつて親父は城に向かって足を進めた。

オレはスーツケースを引きながら家の中に入った。

こうして、オレのセイクリッドでの生活が始まった。

第二部 来たぜセイクリッド（後書き）

今回の反省

暇ねん「始まりました。セイクリッド編」

八雲「これは、もしかして終わるパターン？」

暇ねん「いや、これから長くなる予定」

八雲「そっか。ってかオレ英語話せ無いじゃん！どうすんの？」

暇ねん「さあー？」

八雲「おい！」

暇ねん「何とかなるって」

八雲「ならいいが……」

暇ねん「ってことで……」

暇ねん&八雲「これからもよろしく」

次回『いや、オレ、こんなカッコいい友達持ったの初めてだわ』です。

いや、オレ、こんなカッコいい友達持ったの初めてだわ

「よし、では聞きたいことはあるか？」

夜、家に戻ってきた親父がソファに座って聞いてきた。

「最初に思っただけど」

「なんだ？」

「親父がここに住んでいたのは前だろ？なのになんでこんなに綺麗なんだ？」

綺麗とは、家に入った時にすぐ気付いた。ホコリも無くきちんと整備されているキッチン。なにより不思議なのが家には3つ部屋があつてどれも整理整頓されている。

「ああ。それは――」

「私たちデース！」

「っ!？」

親父とは別の声が後ろから聞こえ、慌てて振り返るとそこには一人の男性と二人の女性がいた。

「へー、この子がシュウジの息子か」

「かわいいー」

「ちよっ!」

どう見たって成人を過ぎている女性がオレに抱きついてくる。オレの顔が女性の胸にあたる。

「八雲、こいつらは俺の仕事仲間だ。お前がこっち来るって言ったら部屋の掃除を手伝ってくれたんだ」

「そ、そーゆうことね・・・って、お姉さん!やめて!」

抱きついている女性はショートで赤毛である。・・・・胸もけっころ・・・・・・

「こら、メイ。ヤクモが嫌がってるわよ」

「だって、思ってた以上にかわいいんだもん。それにおねーさんだつて、うれしいな」

「ちよっと!」

頭を撫でられながら、誰かに助けを求めるべく手を振っていると・・・

「だいじょーぶか?ヤクモ」

「うわっと、ありがとうございます。えっと・・・」

オレの手を引っ張り無理やりメイから引き離された。

「ああ、オレはシュドナイークロス。シュドって呼んでくれ」

「私はルミナスアーク。ルミナって呼んで。っでこっちは妹のメイリスアーク」

「よろしくヤクモー！メイでいいからね」

「よろしくお願いします」

ルミナとメイは姉妹なのか。道理で髪の色や雰囲気似てる訳だ。

シュドは細い体のわりに腕の筋肉がすごいな。オレを引っ張っただけの事はあるか。

「そうそう。八雲の通う学校にシュドの息子がいるから、仲良くしろよ」

「へー。その人も日本語ペラペラ？」

「カイウスは三年間日本にいたから普通に話せるよ」

「よかった」

それから、数時間後にはベッドで寝ていた。

親父たちは城に戻った。その時に携帯を渡された。日本にも通じるとかどうとか。

次の日、学校の制服を着て家を出ると、家の前に誰か立っている。

「ヤクモだよね？」

「きみは？・・・・・・・・あれ？飛行機でオレを見てた・・・・・・・・」

「カイウスⅡクロス。よろしくねヤクモ」

「ああ・・・・・・・・」

飛行機に乗っている時こっちを見てきた人だった。

シュドの息子・・・・・・・・だよな。あ・・・・・・・・

「どうかした？」

キョトンとした表情でオレを見ている。

「なんでもないよ」

朝日に照らされて光る銀色の髪。その間から見えてくる瞳はサファ
イアのように輝いている。

親子そろって美形だな。セイクリッドに住む奴は美形しかないの
か！！

なんて事を考えながら学校へ足を進めるオレだった。

いや、オレ、こんなカッコいい友達持ったの初めてだわ（後書き）

今回の反省

暇ねん「セイクリッド編になってキャラが増えました」

八雲「本当だよな。日本ではオレ、友達と会わなかったぜ」

暇ねん「最初はお出そうと思ったけど、セイクリッド編に色々出せば良いやと思って」

八雲「たく」

暇ねん「んで、メイの胸はどうだった？」

八雲「いい天気だな」

暇ねん「おい！」

八雲「うるさいうるさい」

暇ねん「たく」

次回『うわ、もしかしてオレ浮いてる？』です。

うわ、もしかしてオレ浮いてる？（前書き）

注意点

- ・ 今回から『』が出てきますが、これは英語で八雲には分かりません。
- ・ 『』で日本語が書かれているのはカイウスが訳しています。

うわ、もしかしてオレ浮いてる？

今日から通う学校の前に着くとオレは足を止めた。

「どうかした？」

「ん？ いや・・・ 今日からここに通うのかって考えてた」

と、言っではみたものの実はそれだけではなかった。

学校ってこんなに大きかったっけ？

心の中では顔が引きつっている。なぜならオレの前にある学校は普通の学校三個分のでかさがある。

「そうだよ、セイクリッド学園っていうんだ。読める？」

「なんとか・・・」

校門に学校名が飾られているが読めそうで読めない。だが、見栄を張ってみた。

「無理しなくて良いよヤクモ」

「うっ、バレた！」

あっさりとバレた！

『・・・・・・・・』

『・・・・・・・・』

「ん？」

内心傷ついているとカイウスが英語で周りと挨拶していた。

オレには何言ってるか分からんが、挨拶してるって事は分かる。

「じゃ、いこ」

「ああ・・・・・・・・今気付いたんだが、生徒の数多くない？」

「ああ、こちら辺ではこの学園しか学校が無いんだ。車で五時間ぐらいした所に行くと他の学校があるけど・・・・・・・・」

「へーって事はあの小学生もこの学校？」

隣を楽しそうに走っている小学生を指差す。

「うん、小・中・高。それと大学、専門学校見たいのも入ってるよ」

「マジでか!？」

「マジで『・・・・・・・・』」

昇降口に向かっているとカイウスはよく喋りかけられる。

「カイウスって人気者？」

たしかにコレだけ美形なら女性はほおっておかないだろうな。

「ん？ そんなこと無いと思うよ。それに今日はヤクモの所為でもあるよ」

「オレ？」

そーいや、カイウスに挨拶した人たちは、最後にオレを見てたな。

「そうだよ。だって、日本人がこの学園に来たの始めてだもん」

「へー・・・・・・・・ええっ！！」

危うくスルーするところだった。

スルーをするー・・・・・・・・ごめんなさい。

「ヤクモ、今のはつまんないよ」

「うっさい！ ってか、心読むな！ プライバシーの侵害だぞ！！」

校舎に入るとカイウスに連れられて職員室に向かった。

廊下を進むたびにカイウスは挨拶され、その後オレを見る。何だこの状況！？

「学校の案内は後ですね・・・・・・・・失礼します」

高校一年の職員室に入ると一人の先生が近づいてきた。

「君が、ヤクモ君だね？」

「はい」

おお、日本語だ！

「私はブラウンだ、よろしく。この学園で唯一日本語を喋れる」

金髪で短髪の若い先生。

「よろしくお願いします。ブラウン先生」

「君は、私のクラス……と言いたいところだが残念だが違うクラスだ。『シール先生！』」

クルツと体を後ろに向け他の人の名前を呼んだ。と思う。

『はい。あら、この子が日本からの？』

『ええ。ヤクモⅡコウサカです』

「つて、言ってる」

カイウスに通訳してもらい状況を理解する。

赤髪でポニーテール。またも若い先生。

『シールよ、よろしく』

「よろしくおねがいします」

差し出された手を握る。これもカイウスが通訳。

『付いて来て、クラスに案内するわ』

「はい」

うわー緊張してきた。

「安心して。僕がちゃんと通訳するから」

「頼みます」

タメに頭を下げるオレ。

『はいはい。座りなさい』

シール先生が教室に入るとタイミングよくHRのベルが鳴った。

オレとカイウスは廊下で待機。

『先生。日本人が来たって本当ですか!?!』

『本当よ。それもうちのクラスよ』

『マジかよ!』

『どんな奴だろ』

などと、皆言いたい放題口走っている。

『それじゃ、今呼ぶわね』

『カイウスがいないですけど』

『彼は日本語喋れるから通訳のために一緒にいるわ。ヤクモ、入ってきて』

『おはよう、みんな』

『おーっす』

カイウスの挨拶に教室にいる生徒が反応した。

全員反応って・・・・・・・・

緊張しながらもオレは教室に入った。チラッと見てみると反応はバラバラだが皆こっちを見ている。

はぁー・・・・・・・・

「カイウス、頼むよ？」

「まかせて」

『えー、日本から来た高坂 八雲です。これからよろしくお願いします』

『・・・・・・・・』

あれ？反応が無い・・・・・・・・いきなりすべった！？ん？

『・・・・・・・・』

前の席の男子がカイウスに何か言ってる。

「えーっとね、あつ、ちよつと待って『・・・・・・・・』」

何か言おうとしてやめたカイウスは、クラスに何か聞いていた。

『・・・・・・・・』

カイウスの言葉にクラスが笑顔になった。

「なんだって？」

「同じクラスになったんだから。そんな縮こまるなって」

「はぁ・・・・・・・・」

「ヤクモ、避けるか受け止めた方が良いよ」

苦笑いをしてカイウスは言ってきた。

「は？なにが——つと！」

一番後ろの席からオレ目掛けて何かが飛んで来た。とっさに出した手でそれを受け取る。

『俺たちからの転校祝いだ』

カイウスが訳した言葉を聞いてから受け止めた物を見る。

木で出来た、細長い棒のような物だった。コレを見たときのオレの顔はどんな顔だったか……

「木刀……だよな？」

『おぉーおぉー』

木刀を認識するとクラス中が盛り上がった。コレばかりはすぐに理解した。

『おい、今の見たか？』

『みたみた』

『アレを避けるじゃなくて受け止めた』

何言ってるかわから無いオレに。戸惑っていると生徒達が椅子から立ち上がり駆け寄ってきた。

『……』

『……』

「いや、何言ってるかわかんねえし！カイウス！」

「んー訳すのが多いんでまとめると、凄いなって」

「凄い？なにが！」

『ヤクモ！』

「あん？」

自分の名前ぐらいは分かる。呼ばれたほうを向くと楽しそうに笑っている男子。いま、木刀を投げてきた奴だ。

『お前、オレたちの部活に入れ！』

「はぁ！？」

カイウスを通じて聞いた言葉にオレは驚いた。と、思う。

うわ、もしかしてオレ浮いてる？（後書き）

今回の反省

八雲「なあー」

暇ねん「なんねん？」

八雲「なにコレ？」

暇ねん「これから人気が落ちる物語」

八雲「テイルズかよ！」

暇ねん「いやー、他国の学校とか良く知らないから勢いで書いてしまった」

八雲「それは………人気の落ちる物語だな」

暇ねん「だろ？それに主人公英語分かってないし」

八雲「カ、カイウスがいるだろ」

暇ねん「どんだけ他人任せだよ」

次回『部活ですか』です。

いきなり番外編2本目 学校を案内して（たすけてココ●エ博士）（前書き）

暇ねん「はい、また番外編です」

八雲「またかい」

暇ねん「当然了。今回は学校を案内します。

ぶっちゃけ、本編だけ分かれれば良いです。とか、分からなくても

頑張るっつー根性値120%の方は飛ばしてオッケー」

八雲「……………」

暇ねん「よし、本編だ」

いきなり番外編2本目 学校を案内して（たすけてココ●エ博士）

学校の門前

暇ねん「さーやってきました。セイクリッド学園」

八雲「いきなりだな。もっところ研究室から始まるのかと……
・」

暇ねん「それ、まんま『たすけてココ●エ博士』じゃん……
分かる人はぶるらーだ！」

カイウス「そこまでになよ。ヤクモ、ヒマネン」

八雲「カイウス！ どうしてここに？」

暇ねん「俺が呼んだ。さすがに学園の誰かがいないとアレだろ」

八雲「なるほど」

暇ねん「それとカイウス。暇ねんをカタカナは読みにくい感じがするから漢字に変えるぞ」

カイウス「？ 意味が分からないけどいいよ」

暇ねん「よし、いくぞ」

門から昇降口までの道での会話。

八雲「ってか、なんで番外編で学校案内？本編でやれば良いじゃん」

暇ねん「うっ・・・・・・・・・・」

カイウス「ボクに助けを求めないでよ」

暇ねん「だってさー、本編で書くと・・・・・・・・」

八雲&カイウス「書くと？」

暇ねん「話がまたあっちゃこっちに行っちゃもうんだもん！それに文章力無いから解りにくくなる」

八雲「しらんわ！」

カイウス「ははっ」

八雲「笑ってる場合じゃないぞ」

カイウス「まあまあ。それより、案内の前に説明するね」

八雲「説明？」

カイウス「そっ！まずは校舎に行くまでに歩く道。今のここ」

八雲「ああ」

カイウス「この前は言わなかったけど、この広い学園の中には校舎が三つに分かれている。

一つは、小・中が一緒になっている校舎。二つ目は僕たちの教室がある高校の校舎。

最後が、大学、専門の校舎。それぞれの校舎は、渡り廊下などで繋がっているけど相当の事がないと行ってはいけないんだ」

暇ねん「相当の事とは、行事や部活の時だな。だから朝は別々の校舎に向かうんだ。」

カイウス「当然。全校生徒は1000人を軽く超えるよ」

八雲「だよな」

暇ねん「俺たちは自分の校舎だけを見に行くか」

高校校舎、下駄箱

カイウス「一学年のクラスは7〜9クラス」

八雲「そんなもんか。10クラスぐらいあると思ったけど」

暇ねん「まあ、作者の事情だ」

八雲「自分で言うな。つか、大人の事情だろ！」

カイウス「さて、学校を案内するよ」

校舎一階

カイウス「ここが、自動販売機や売店。食堂だよ」

八雲「日本とは大違いだな」

カイウス「食堂は結構人気だから速めに行かないとお勧めメニューは食べられないよ」

暇ねん「お勧めとは？」

カイウス「今は秘密」

八雲「けちー」

校舎二階

暇ねん「ここは、お前達、一学年の階だな」

カイウス「そうだね。教室のほかには職員室・図書室だけだね」

校舎三階

カイウス「ここが二年生のフロア」

暇ねん「他にはコンピュータ室や進路室」

カイウス「でも、大抵の人は隣の大学・専門に行くからめったに使わないって」

八雲&暇ねん「ふーん（へー）」

校舎四階

八雲「ここは、三年生のフロアだな」

カイウス「そう。ここには隣の校舎に行くための渡り廊下がある」

暇ねん「他には生徒会室だな」

八雲「へー。体育館は？」

カイウス「ヤクモ、ここだと体育館って言わないで屋内広場っていうんだ。

屋内広場は遠いんだけど、この渡り廊下を進むと大学・専門校舎とは別の道があってそこにあるよ」

八雲「体育が中るときつらくない？」

暇ねん「ここの体育は雨の日以外、外体育だ」

八雲「うそっ!？」

カイウス「本当だよ。ストリートバスケットやテニス。あとはサッカー・ベースボール」

暇ねん「バスケットじゃ無くてストリート……どうせだから屋内広場にいこうぜ」

カイウス「暇ねんの言うとおりだね。渡り廊下も目の前だし」

屋内広場

暇ねん&八雲「・・・・・・・・・・」

カイウス「どうしたの？二人して口開けて」

八雲「デカくない！？東京ドームの半分くらいの大きさだろ！」

カイウス「校舎は別でも中体育だここだからね・・・・・・・・・・おっと」

暇ねん「うん？」

八雲「バスケットボール？」

カイウス「落ちてたみたい。片付けて来るよ」

八雲「おお」

カイウス離脱

八雲「おい！」

暇ねん「なんさ？」

八雲「でたらめも良いところ」

暇ねん「おおっと・・・・・・・・なにが？」

八雲「大量の汗をかいて、それは無茶振りだろ」

暇ねん「カイウス、カムバック!!」

八雲「うゝおゝおい!!」

カイウス「もどつてき・・・・た・・・・・・よ?何やってんの?」

カイウスの前で逃げる暇ねんと追う八雲がいた。

いきなり番外編2本目 学校を案内して（たすけてココ●エ博士）（後書き）

今回の反省

暇ねん「二回目の番外編でした。どうだった？感想は？」

八雲「うん。どう考えてもあの敷地にこれはない！」

暇ねん「作者の都合だ」

八雲「またかい」

暇ねん「さっきは事情、今回は都合だ」

八雲「やかましいわ」

暇ねん「それより、次の本編から肉体的苦痛が……………」

八雲「なんで!？」

暇ねん「次回をお楽しみに。キラッ☆」

八雲「おい！なんでってか『キラッ☆』じゃねえよ!!」

次回『部活ですか』です。

部活ですか

夕方。って、早くね!?

と、一人驚いているオレだが今どこにいると思う?

家? 違うな。まだ学園だよ。教室だって? いやーさっきまではそうだったんだが………

「はああ!!」

「せいっ!!」

馬鹿でかい体育館……もとい屋内広場にオレはいる。なぜかと言うとアレの所為で………

『お前、オレたちの部活に入れ!』

の、一言があつたためだ。

HRの後。つまり休み時間になると、お決まりのお話を聞きにオレの席に近寄ってくる。てゆーか群がってくる。

そうそう。オレの席は一番後ろの窓側の席だ。隣がカイウス。コレもお決まりだ。

さて、話を戻そう。その群がる人の中、オレに木刀を投げてきた男子がドンツと席の前に立っている。

「えーっと、カイウス？どーゆうこと？」

「あー、ヤクモ。レグの投げた木刀受け止めちゃったじゃん？その反応速度を買われたってこと」

「いや、意味わかんないし！それに木刀に良い思い出が無いんだけど」

『・・・・・・・・・・』

「んん？」

席の前に立つ男子がオレとカイウスの会話を何か言っているが、オレにはさっぱり。

カイウスを見てみると、笑っている・・・・というより苦笑している。

「なんだって？」

「日本語じゃ、何言ってるかわかんねえ！・・・・・・だって」

「いや、オレ、英語しゃべれねえし。それはともかく何で彼が、目の前でドンっと構えてんの？」

『・・・・・・・・・・』

『・・・・・・・・・・』

カイウスは男子に聞いているようだ。

よく見てみれば、男子の容姿は結構なもんだ。金髪に赤の瞳。緋の目みたいなの……今のなし！わかる奴はハンターだな。

「ヤクモ。まず彼のことを紹介するよ。彼はレッグウォーリー。ボクたちはレッグって省略して呼んでる」

レッグに手をむけながら話すカイウスにレッグは紹介されている事に気付いたようだ。

「レッグ、ね。で、彼がオレに何の用？確かさっきオレの部活に入れたかどうか……」

「『オレの』じゃなくて『オレたちの』ね」

「かわんねえだろ。で、部活ってなんの？」

聞きながら視線はレッグに向ける。

体格から行ってアメフトみたいな肉体系ではなさそうだ。どっちかってーとサッカーやバスケみたいな技術面が高そうな感じに見える。

まとめると、身長は170センチで筋肉は普通ってとこだな。

「部活は『……………』『……………』」

「おい」

カイウスの言葉を遮りレッグが何かを言ったようだ。カイウスもなんか反論している？

「ごめんごめん。彼の所属している部活はナイト部」

「ナイト部う！？なにそれ？ナイトって騎士のナイト？」

「そのナイトだよ。隣のブレイブ王国の特徴というか風習ってしてる？」

「あー…………たしか剣術が強ければ認められるとか何とか」

レーベルの言っていた言葉を無理やり思い出そうとして顔が歪んだ。

「そう。日本じゃ危ないとかで政府が禁止しているんだけど、ここらへんの国では剣術はスポーツなんだ」

「んっ！！」

思わず視線がレグからカイウスに向いた。

「剣術が強いと王様と王妃様の警護としても就職できる。父さんたちのようにね」

「なるほど」

説明を聞いて浮かんだのが昨日の夜に来た親父達だった。

そーいや、オレとカイウスの親父って職場仲間ってやつじゃん！……あれ？前にも言ったような…………

『……………』

「なんだあ？」

レグが顔を近づけてきた。

「もーめんどくさいから重要な事だけ。レグはナイト部でもエース級の強さを持っているんだ。そのレグが投げた木刀を受け取る反応速度を見込んでオレの部活に入れ！……ってこと」

「ふーん。見学ならいいけど」

『……………』

『……………』

「今日の放課後に来いよ……………だって」

「はいよ」

そして今に至る。

部活ですか（後書き）

今回の反省

八雲「ナイト部ってダサイだろ」

暇ねん「しゃーないねん。他に思い浮かばなかったんだから」

八雲「お前、センスねーだろ？」

暇ねん「扇子？持ってるよ。ほら」

八雲「そっちのセンスじゃねー！」

暇ねん「それよりYOU大丈夫なの？」

八雲「いきなり話し逸らすなよ」

暇ねん「次の話し・・・・・・・・ガンバ」

八雲「おい！ピースして何を言っている！ガンバってなに？」

次回『ちよっ、まっ・・・・・・・・痛ってー』です。

ちよっ、まっ……痛ってー

勢いよく叫びながら木刀を振る小学生の男の子・女の子。

それを、簡単に受け止める中学生の男子・女子。

別の場所では男子高校生と女子高生が木刀を交えている。

それを見て指摘する大学生・専門学生。

「……………ハンパな」

「でしょ？ほら、あそこにレグがいるよ」

屋内広場の雰囲気飲まれているオレにカイウスが目の前を遮り指差した。

「ほんとだ……………って、あいつ別格の強さじゃん!!」

「だから、エース級だっていったじゃん。ブレイブ王国のレーベルと良い勝負したって話だし」

「レーベルと……………!」

レーベルの強さは身にしみている。アレと互角か。だがあいつは世界最強とか自分で言ってたな。

「カイウスもナイト部なのか？」

「うーん……違うけどたまに遊びに来てるから、幽霊部員？みたいなもの」

「へー。それはそうと、コレってスポーツなんだろう？ルールとかは？」

周りの鏝競り合いを眺めながら聞いてみる。

「ルール？結構簡単だよ。その分、危険もあるけど知りたい？」

「知りたいから聞いてんだろ？」

カイウスを見て軽口にする。ははっと笑うとカイウスは手近にある木刀を手にとった。

「ヤクモも構えて」

「おう……」

手近にある木刀を手に取り構えるとカイウスがスツと近づいてきた。

「ルールは簡単。相手の木刀を……」

言いながらオレの手の甲を木刀で叩いた。バシッと結構良い音が屋内に響いた。当然、痛かったため声を上げてしまった。まあ、部員は気づいて無いが……

「手から離させる。もう一つは……」

叩かれて手に力が入らなく、木刀を床に落してしまった。構わず力

イウスは続けた。

「相手に『参った』って言わせるか、立てなくする……こ
うやって!!」

後ろに回ったカイウスがテンポよく膝裏に二太刀入れた。

「うお………った!」

ガクツと膝から崩れ落ちる。

「本当はもう動けませんってここまでやるんだけどね」

「ははっ………」

わ、わらえねえ………

「あっ、安心してね。手には指だしグローブが付けられるから」

守れるのは手の甲だけですか!

表では笑っているが、内心、苦笑しています。

「これ、事件になったりしないの?」

立ち上がり木刀を拾いながら聞いてみると、カイウスはすっごい笑顔だった。

「少しだけだよ」

「・・・・・・・・・・」

おーい！ ありがそれ！？ ありのなか！？

など内面でテンパっているとレグがこちらに気付いたようだ。

『なんだ来てたんなら声掛けてくれれば良かったのに』

もちろんカイウスの通訳です。

『・・・・・・・・・・』

『・・・・・・・・・・』

またも二人での会話。オレにはさっぱり。するとレグがこちらを見て笑っている。

なーんか嫌な予感が・・・・・・・・

「ヤクモ、これ」

「指だしグローブ？ なんで？」

「レグと試合だよ」

「はああ！？」

「いいから『・・・・・・・・・・』これで観客も出来たね」

「デメエ・・・・・・・・・・」

カイウスが余計な事をしたおかげで、屋内にいる全ての生徒がこちらに視線を向けている。

「ほら、早く。そうそう、アドバイスだけど、レグから目を離さないように。じゃ！」

「じゃ！じゃねえよ！！」

真ん中を空けてまあ、レグが待っていますよ。

「しゃーない」

グローブを付けながらテクテクと中央へと進んでいく。

「ヤクモー、言い忘れたけど制限時間は5分だから」

「ながい……………」

『……………』

「いや、何言ってるかわからんよ」

「『手加減はしない』だって」

「ブラウン先生！なんでここに？」

「一応、顧問だからね」

どこから現れたのやら。

「それじゃ、始め」

『・・・・・・・・』

「うそっ、いきなり!？」

この試合の結果はとーぜんの事だがオレの1分負けだった。

ちよっ、まっ・・・・・・・・痛ってー（後書き）

今回の反省

八雲「あんなのスポーツにして良いのかよ！プロテクト無しだぞ」

暇ねん「オレやんねーもん」

八雲「テメェ・・・・・・・・」

暇ねん「こらこら、拳を震わすな」

八雲「月夜ばかりと思うなよ」

暇ねん「こわーい」

八雲「・・・・・・・・」

暇ねん「はい、八雲さんが怖いので今日はここまで」

八雲「たたきつけてやるー！ー！！」

暇ねん「いまさつき月夜とか言ってたのに!？」

次回『話を恋愛に戻そう』です。

話を恋愛に戻そう（前書き）

今回勝手に作った授業が出ますが、他国の勉強・・・英語と歴史を合わせたようなものと考えてください。

話を恋愛に戻そう

この学校に来てから早くも一週間がたった。クラスにも馴染も友達も増えた。

なにより……………

「カイウス、次の授業なんだっけ？」

「他文化だよ」

「うー、オレ、アレ嫌いなんだよな」

「文句言わない」

「俺もヤクモと同じだ」

「さすがレグ。わかってるー」

何より、死ぬ気で英語を覚え話せるようになったことが嬉しい。時々カイウスを頼るけど……………

「それよりヤクモ、明日の休み、ちゃんと部活に来いよ」

「わーってる」

ナイト部にも入部したオレ。だったが、コレがキツいのなんの。どこの野球部だ！！って感じ。

「ボクも行くからね」

カイウスも正式に入部した。

「おらー席に座れ」

外人には珍しい黒髪の先生が入ってきた。

「んじゃ、また後で」

レグは手を振り上げ席に戻っていった。

昼休み。教室の端で弁当やパンを出して昼飯中。

「そーいやしてるか？」

「「何が（を）？」」

レグが購買で買って来たパンを片手にオレたちをみた。

「三年生のセレナ先輩のことだよ」

「っ!？」

久しぶりに聞いた名前に思わず反応してしまう。

当然、セレナとの事は誰にも言って無い。カイウスも知らないはずだ。

親父達の仕事もオレとカイウスしか知らない。

「どうかした？」

「いや、何でも。話を続けて」

なんともない様に振舞ってレグに話を続けさせた。

「なんでも、夏休みの間にセレナ先輩が婿候補にあったんだって。情報ではブレイブ王国のレーベル王子。他にも何人かいたみたいで・・・日本にも一人、候補がいるらしいぜ」

「へ、へー」

知りすぎじゃない！？情報公開でもしてるの？

内心焦りを感じながらも、顔には出さない。

「ヤクモ、知らないか？」

「し、知らんわい！」

「わいって・・・」

「うっさい！」

オレとレグのやり取りをカイウスは笑っていた。

放課後、部活も休みでオレとカイウスは一緒に帰っていると・・・

・

「ヤクモって」

「なんだあ？」

「セレナ先輩に興味でもあるの？」

「んあっ!？」

カイウスは微笑みながら聞いてきた。その笑顔がオレには悪魔の笑顔に見えるよ……

「違うならいいんだ。お昼の時、先輩の話しに食いついていたから……」

「あ、あはは……」

「でも、少しでも気があるんなら早めの行動が大事だよ？ レーベル……王子が結構アピールしてるっていうし」

「いやいや、オレ候補じゃないから最初っから無理だよ」

笑って話を終わらせるがカイウスはため息を付いている。

「なんだよ？」

「なんでもないよ……あっ、噂をすれば影ってね」

「影? ……ん」

帰り道の公園で子供達とじゃれてる女子が三人。内一人はオレの良
く知る女性だった。

「わるい。オレ買い物して帰るから。じゃあな」

「えっ、ヤクモ！・・・・・・いっちゃった」

オレはセレナを見た時、足が止まったが、無理やり足を動かし公園
とは反対のスーパーに足を進めた。

カイウスはオレの後姿を見ると、まったく、と言い公園に入ってい
った。

話を恋愛に戻そう（後書き）

今回の反省

暇ねん「久しぶりにセレナを見た感想は？」

八雲「ああ」

暇ねん「なぜ会いに行かなかった？」

八雲「あー」

暇ねん「うっおーおーおーい。人の話し聞いてるかー？」

八雲「うーん」

暇ねん「ダメだコレ」

八雲「おー・・・・・・・・・・」

暇ねん「まっ、理由を知ってる俺は何も言わんよ」

八雲「んー・・・・・・・・・・」

暇ねん「完璧ダメだな」

次回『休みの部活はつらいです（前編）』です。

休みの部活はつらいです（前編）

次の日、つまり土曜日の朝。

日本にいたときと同じく、自分の朝飯を作って食べていると家のインターホンがなった。

「誰だ？」

時間はまだ7時。人が来るには早すぎる時間だ。親父だと考えたがそれはすぐに消した。

親父は朝は絶対に帰らない！とか言ってたし……んじゃ、誰だ？

疑問に思いながらも早足で玄関に向かった。

「はーい……って、カイウスかよ。それに……」

「よお！」

「おはよう。ヤクモ」

カイウスより先に挨拶してきたのはレグだった。二人とも制服姿。レグの肩には細長い布袋がかかっている。

「どうしたんだよこんな時間に」

「カイウスから、お前が一人暮らししてるって聞いたから来てみた

んだよ」

「傍迷惑だな、オイ」

「まあまあ」

「お前が連れてきたんだろ」

なだめる素振りを見せるカイウスだが、レグを連れてきたのはお前
だろ！

「ってことで、邪魔するぜ」

「おい！勝手に入るなよ」

「おじゃましまーす」

「たく・・・」

家に入ると、レグはソファに座った。

オレはため息を付きながらも食べかけの朝飯に手をつけた。

「お前達メシは？」

「食べてきたよ」

「おなじく」

「あっそ。その布袋に何入ってんの？」

「木刀」

即答してくるレグだが、普通に考えて木刀を常時装備していて良いのか？

朝飯を食べ終わり、オレたちは学園に向かった。

「休みの部活って何時まで？」

「普通なら半日だから12時まで。午後なら6時までだけど・・・」

「大会が近いから今日は9時から6時まで」

オレを挟んでカイウスが右からレグが左から答えた。

「大会？」

時間は日本の部活と同じ時間だから何とも思わなかった。それよりレグの『大会』という単語が気になった。

「おう。来月の初めに大会があるんだよ」

「学校ってここしか無いんだろ？」

「前に言ったけど、車で五時間ぐらいのところに学校があるって言ったじゃん？そこや、他の学校。つまりセイクリッド領内にある学校全部と大会やるんだよ。日本で言うところの全国大会」

「はやつ！それに人数多！！」

考えただけでも人に酔いそうだわ。

「大丈夫だよ。小学生は小学生。中学生は中学生。高校生は高校生。大学・専門は大学・専門で試合だから」

「それでも多いでしょ！」

「安心しろ。試合は団体戦しかない。1チーム五人。それが各校5チームまで」

「なるほど。それなら少なくなる・・・かな」

「そうそう・・・って話してる間についたね」

屋内広場に着くと早くも練習をしている奴らが何人もいる。

オレたちも準備をするため広場の端っこに向かった。

荷物を置くとカイウスは倉庫へと向かい、オレとレグは荷物の中から指だしグローブを取り出し、装備中。

装備中って、ゲームかよ。

「レグ、ヤクモ来るのが遅かったな」

「先輩。ちょっと、ゆっくり来すぎました？」

「なーに、時間には間に合ってるから良いけどよ」

「ならいいじゃん。ルージせんぱい」

「このヤロウ……」

ニカッと笑うレグにルージは拳を作り頭を軽く殴った。

この人はルージⅡファスト。ナイト部の部長で大学部の二年生。

ルージ先輩の特徴はなんと言っても、この話しやすさ。コレ特徴か？まあいいや。先輩なのに敬語を使わなくても言いよ。と最初に会った時に言われた。さすがに先輩だから誰もそんなことはしないけど……

「カイウスは？」

「ヤクモ」

「さーんきゅ」

倉庫から持ってきた木刀を受け取ると一丁前に構えてみる。

「先輩。おはようございます」

「おう」

部活が本格的に始まる前にオレたちは軽くアップを始めてた。遅めの速度で広場の端を走っているとルージが集合をかけた。

「——そんなわけで、今日の部活をはじめろぞ。解散」

一通り今日の指示を受けるとオレたちは三人一組で打ち合いを始めた。

最初はレグとカイウス。初心者のおれでも分かるほど二人の動きが凄まじい。練習のはずなのに二人の目は真剣そのものだった。

「さすが……レグはエース級なのは知ってるが、カイウスは親の遺伝か？」

カイウスの動きを見てると父親のシュドを連想した。

「おー、さすがは高校部のエース級たちだな。よしヤクモ、見てるだけだと暇だろ？俺と打ち合うか？」

後ろからの声にゆっくりと顔を後ろに向ける。オレの後ろで腕組して立っているルージ。

「いいんですか！おねがいします」

言うと、ルージは手招きして歩いていく。オレは急いで木刀を持ってルージの後ろに付いていく。

「俺は防御の練習をしたいから好きに打ってくれ」

「はい。いきます」

ルージに向かって突進しながら木刀を振る。が、当たらない。おかしい、と思いながらも何度も振るがルージは一步また一步と後ろ、

横に動きかわしていく。

「どうした？」

「こ．．．．．の．．．．．！」

足に力を込め、一步を力強く踏み込む。それをみたルージは一瞬だけ顔色を変えた。

「おっと．．．．．」

「やっと当てられた。はー」

ルージはオレの攻撃を受け止めながら何かを考えるようだった。

この、フリー練習だけで午前練習が終わり、昼休みとなった。

休みの部活はつらいです（前編）（後書き）

今回の反省

暇ねん「またも題名変えたし、内容が恋愛から離れた」

八雲「だめじゃん。なにしてんの」

暇ねん「だが安心しろ。次回は結構頑張るぞ。特にお前が」

八雲「でしょーね」

暇ねん「そうそう。この話しなんだけど……」

八雲「何？今更ビックリするような事でもあるの？」

暇ねん「おう。実は……最終回の内容を忘れた」

八雲「は……？」

暇ねん「いやー、今まで頭の中で考えてたんだが最終回を初め考えてたんだ。だけど話を進めると最終回の内容を忘れてしまった」

八雲「マジかよ……それじゃ、これからどうするんだよ！？」

暇ねん「なせばなるカーボーイってやつよ」

八雲「不安だー」

次回『休みの部活はつらいです（後編）』です。

休みの部活はつらいです（後編）

昼休みの時間。大抵の人は弁当を持っているため屋内広場や校庭に移動して食事を取っている。オレたちは……

「次は俺とヤクモだな」

「レグとやると怪我するんだよなー」

「文句言わない」

三人で食堂で食事をしている。オレはラーメン。カイウスとレグはチャーハンセットを口に運びながらこの後のことを話している。

「おまえらここにいたのか」

「ルージ先輩、どうしたんですか？」

食堂に入ってきたルージは食堂内を見渡してオレたちの席に駆け寄ってきた。

「来月の大会の事だが、お前達は高校部の一軍に決まったからな」

「えっ……一軍？」

「なんだヤクモ？不満なのか？」

「バツ、誰が一軍で不満かよ！そうじゃなくてレグとカイウスは分かるけど何でオレまで？」

当然の疑問を口にするオレ。部に入部してまだ一週間も経ってないのに一軍・・・・・・・・おかしいだろ？

「俺が推薦したんだ。お前はこれから強くなると感じたからな」

「強くって・・・・・・・・そんな自信を持って言わないでくださいよ」

自信満々に笑みを浮かべるルージに対してオレは苦笑する。

「そーゆうわけだから、頑張れよお前ら」

手を振りながらルージは席から離れていく。その背中をオレはボーっと見つめていると、レグの言葉がオレの意識を戻させ。

「よかったじゃんか。俺たち三人で一軍の半分は埋まったぜ。残りの枠は・・・・・・・・」

「十中八九、部長と副部長でしょ」

「だな」

前向きに考えているのか、一軍に慣れているのかレグは楽しそうにこれからの事を考えている。

カイウスは落ち着きながらも表情はかすかに口元を緩めている。

午後の練習が始まるとレグの集中力がいっそう増した。

「くっ……うわ！」

一瞬のうちにオレの手から木刀が弾き飛んだ。

「どーしたヤクモ？動きが悪くなってるぞ」

「う……せーよ！」

地面に落ちた木刀をすばやく取ると、そのままオレはレグの横に入る。

いける！

横から上半身をひねり木刀をレグに振り回す。オレでもこれは『当たる！』と思ったがレグはそれを簡単に避けて見せた。

「うそお!？」

「タメが大きすぎんだよ」

笑って言うレグは木刀を振る。

「そこまで」

カイウスの言葉がレグの動きを止めた。

「いてて……」

最後の一太刀で地面に這い蹲ることになったオレは体を起こした。

「だいじょーぶか？・・・・・・ははっ」

「笑って手を差し伸べてくるな」

言葉とは裏腹にオレは、差し出された手を握る。

「高校部の連中は集まれ」

少し離れた場所から二年生の声が聞こえる。

「「集合？」」

声が重なったオレたちは呼ばれた場所に向かう。中心に男子女子の部長・副部長がいて、それを囲むように残りの高校部の部員がいる。

「これから、大会のチームを発表する」

「あー」

「こんどこそ・・・・・・」

など、周りの連中は口走っている連中や緊張している奴もいる。

「男子からは3チームです。三軍は――」

部長がメモ用紙を手を持ちながら名前を呼んでいく。呼ばれたものは元氣よく返事を返す。

二軍も呼び終わると部長はメモ用紙をポケットに仕舞った。

「さいごに一軍だが．．．．オレとウエル。そして．．．．レグ・カイウス・ヤクモ。以上だ！」

「へっ」

「はい」

「．．．．．」

二人は返事を返すがオレは返さない。とゆうより返せない。周りの視線が．．．．

いかにも何でお前なんだ？って感じだな。

「どうしたヤクモ？」

「いえ．．．はい！」

「よし。今日の練習は終わりだが、大学・専門部の方はまだだから邪魔し無い様にな」

部活が終わり、荷物のとこまで行くと突然、室内が盛り上がった。というより、入り口に人の群れが出来ていた。

「なんだ？」

「誰か来たみたいだけど．．．．」

カイウスと視線を向けあいながら会話しているとレグが『ちょっと行

って来るわ』とか言い、人ごみに向かっていった。

「まあいいや。帰る準備はしておこうぜ」

「そうだね」

あまり興味が無いオレとカイウスは準備をしているとレグが猛スピードで駆け寄ってきた。

「どうしたよ？息を切らせて」

「セ、セセ」

「セセ？なにそれ」

「さー？」

うまく言葉に出来ないレグ。その為何を言いたいか分からないでいると、レグが次の言葉を発した。

「セレナ先輩が来たんだよ！！」

「「は（え）？」」

その言葉にオレたちは互いに違う事を考えた。

「どうしたんですか？セレナ先輩」

部長が人ごみを治めるとセレナに近寄った。

「ジン君。ちょっと聞きたいことがあって来たのよ」

「土曜の休日には？して、その聞きたいことは？」

ジンだけではなく周りの生徒も気になる様子。

「噂で聞いたんだけど、この学園に日本人が転校してきたって・・・
・・・それにその人がこの部に入ったって」

三年生にとっては一年の転校生など興味がないのでセレナは今まで
転校生の存在に気がつかなかった。

「ああ。それはヤ——」

「部長！！」

ジンの言葉をかき消すほどの大きな声。

「どーしたレグ？」

「え、えーっと・・・・・・・・・・実は」

レグはジンの耳元に手をあて小言で何かを言った。

「本人が？」

「ええ。お願いします」

「当の本人は？」

「先に帰りました」

「そうか……セレナ先輩。すみませんが転校生は事実ですが日本人では無いですよ」

「「「え？」」」

セレナはそうなの？って顔をしている。だが、それ以上に周りの部員が困惑している。

「どーゆうことだよ？」

「知らない！でも部長が嘘をつくなんて……」

ざわざわと周りはざわついている。

「そう、なの……ごめんなさい。部活の途中に」

「いいですよ。もう終わりましたから……お前らも早く帰れ！」

パンパンと手を叩き周りを解散させた。セレナも後輩相手でもきちんと会釈をして出て行った。

「ヤクモの奴、どーゆうつもりなんだ？」

「さあ？でも、結構ヤバイって感じでしたよ。オレに頭下げてまで、でしたから」

「ふーん」

さっきまでヤクモがいた場所を眺めてジンは帰る準備をしに荷物の
もとに向かった。

休みの部活はつらいです(後編) (後書き)

今回の反省

八雲「最後オレいないし」

暇ねん「仕方ないだろ。セレナが来たんだから」

八雲「しっかしいつまでこうなのかね？」

暇ねん「さあ」

八雲「顔に出てるぞ」

暇ねん「なにが？」

八雲「実は知ってますって」

暇ねん「作者ですから」

八雲「そうね。作者だからね」

暇ねん「そうそう」

次回『文化祭の説明?』です。

文化祭の説明？

日にちはちよつと過ぎて9月15日。

「はい。それじゃ二カ月後のセイクリッド祭のことを話し合おうわよ」

場所は教室。時間は午後のH R。黒板の前に立ち仕切るクラス委員の女子。

「セイクリッド祭って？」

「文化祭みたいなものだよ」

「ただし！セイクリッド祭は他の国の物とは比べ物にならないと思うぜ」

力説してくるレグを見て、わずかにだが体を後ろに逸らした。

「てーか、オレたち3週間後には大会だぞ。こんな事やってて良いのか？」

「こんなことって、授業だよ」

「あ………」

「まったく。それよりレグは席に着けば？」

「おーいカイウス、今のはどういう意味だ？」

「言ったまんまの意味」

ギロリと睨むレグの視線を軽く受け流す。

「まあまあ」

「そこ！うるさい！！」

「「うつ！」」

黒板の前に立つ女子に注意を受け押し黙るオレたちだった。

「そーいや、レグってレーベル・・・王子と試合した事あるんだろ？」

話を変えてオレはレグに視線を向けた。

「何でそれを！？」

「ボクが教えた」

微笑みながら手を上げるカイウスにレグが、またお前か、と言いたそうな表情をしている。

「お前は・・・ったく、ああ。確かにレーベル王子と試合した事あるぜ」

「結果は聞かないけど何で？」

「なにが？」

「試合の理由」

「ああ、夏休み前に大会があったんだ。その時に俺の剣術見て試合したかったんだって」

ムスツとしているレグ。

あー負けたんだな。この表情は

「当たり前だろ！！」

「だから、なんでお前達はオレの心を読むんだ！！プライバシーの侵害で訴えるぞ！！」

「う・る・さ・い！！」

「うぎゃ」

声を荒げると、前方から白くてちっちゃい細長い物が額に当たった。

「すげー」

「チョークを正確にヤクモの額に……………」

「そこを感心してんじゃねえよ…………痛って」

額を摩りながら二人に視線を向けた。

「それじゃあ、私達のクラスは何をしますか？」

「喫茶店」「お化け屋敷」「カメラ屋」「メイド喫茶」など大声で次々に案を出していく。

「カメラ屋ってなに？」

「カメラで撮るだけ」

いや、つまんねーだろそれ。第一メイド喫茶なんて知ってるのが可笑しいだろ！

「メイド喫茶だって結構有名だよ……ってどうしたの？」

「まじで訴えるぞ。コラ……」

震える声と不敵な笑みを浮かべてしまう。

「まーまー」

馬をなだめるみたいに両手でジェスチャーするカイウス。

「そのナイト兄弟は？」

「「……………」」

オレたちは確かにナイト部だが兄弟じゃねえよ

「いいじゃない。気にしない気にしない。で？案は？」

こいつも超能力者か・・・・・・・・

「委員長、悪いんだけどボクたちは当日、部の方でやることもあるからそっちで決めて。出来る手伝いなら手伝うから」

「そーゆうこと。だから俺たちが出来そうなものでよろしく」

レグが手をやる気なさそうに振る。

「そんなもんあったっけ？」

「・・・・・・・・」

「どうした？」

「まさかお前が忘れるなんて」

「うるせーよ！で？」

「今日の朝練で部長が言ってたでしょ。警護で見回りをするって」

「あー確かに」

思い出すと二人は呆れた風にため息を付いた。

「——ってことで私達のクラスは喫茶店ってことで決定！」

「いえーい」などと盛り上がる教室。いつの間に決まった！？

「詳しいことは次の時間ね」

タイミングよく女子が話を終わると終わりのチャイムが鳴り響いた。

「んじゃ、部活にいこうぜ」

後ろのロッカーに立掛けているある木刀を手取るレグ。

この後の部活でオレは部長・ルージ先輩・レグに叩きのめされました。っと。

オレ主人公だよな？

文化祭の説明？（後書き）

今回の反省

暇ねん「今回は割りとうまくいったかな」

八雲「かもな。それよりネタは無いのかよ？」

暇ねん「えっ？使ってるけど・・・」

八雲「うそ？どこ！？」

暇ねん「プライバシーの侵害だってお前叫んだじゃん」

八雲「アレか！？」

暇ねん「あひる●空の千秋だぜ」

八雲「あー、空が言ってたな」

暇ねん「そうそう。今度は分かりやすい物で行くけど」

八雲「そうしろ。オレも分からなくなる」

次回『いざ真剣に勝負！』です。

いざ真剣に勝負！（前書き）

暇ねん「戦闘が．．．．．多くなってきた。それと今回は部長と副部長がメインだ」

いざ真剣に勝負!

文化祭の話し合いをした週の日曜日。いつもどおりの一日部活……のはずだった。

「……………」

「なに、あの鬼気迫る迫力は？」

「さ、さー？」

屋内広場のど真ん中で部長のジンと副部長のウェルがにらみ合っている。

あまりの気迫に周りの連中は手が出せない。大学・専門部の生徒も触らぬ神に祟りなし、状態である。

「なんでも……………」

「？」

オレとカイウスの後ろで素振りをしているレグが口を開いた。

「噂では女性関係だって聞いたぜ」

「女性……………」

「関係……………!？」

ジンが女性と、と聞くとカイウスと目を合わせた。

ジン先輩は、二年の間でも結構な人気だ。だが、本人は部活第一で女性に興味ないと有名である。と聞いたんだけどな……………」

「でもなんで、ウエル先輩まで？まさか、三角関係？」

「違う違う。なんでもウエル先輩のクラスの女子がジン先輩に告白したらしいんだけど……………」

「ジン先輩はそれを断った。そーゆう訳でしょ。それでなんで？」

「ウエル先輩。その告白した人が好きだったらしい」

「「ええ……………！！？？」」

レグの振るう木刀が空を切り裂く。だがその音を掻き消すほどの声を上げたオレたちだった。

てか、三角関係に近いんじゃない……………」

「どーして彼女にあんな態度をとったんだ！！」

「どーしてって俺には関係なかったからな」

「ジン……………お前は」

「話は済んだろ？練習を再開するぞ」

「・・・・・・・・わかった」

ジンの態度が気に障ったのかウエルの口調は低く覇気を感じる。

「ウエル？」

「真剣勝負だ・・・・・・・・お前と俺で」

「正気か？」

ウエルの発言に周りがざわつき始めた。ある者は驚き、ある者は楽しんでいる。

「人の話を聞かないのが昔からお前の悪い癖だな」

「お前だけには言われたくない・・・・・・・・」

「ふ・・・・・・・・お前ら、少し離れていろ」

「いくぞ・・・・・・・・」

「いいぜ、きな」

その言葉を放った時には二つの木刀はぶつかっていた。

「いいのかよ!？」

「いくら俺らでもあの二人は止められねえよ」

依然として素振り続けるレグ。

「いいのかよ……………」

レグを見て考えていると中心から幾度もぶつかり合う音が聞こえてくる。

「どうなってる？」

「すごいね。部長はウェル先輩の太刀筋を見切って最小限の行動で避けてる」

カイウスの言葉どおりジンの動きには無駄が無い。

「……………」

「あっ！」

ジンの見たこと無い動きに思わず声を上げてしまった。

「い……まのは……………」

「ラピディー——部長の得意技」

「ラピディー？」

「元はRapidity——ラピディティ——神速を意味する。意味の通り、相手は何をされたか分からないうちに負ける」

「……………」

目の前の部長の強さに目を見開く。

「だけど、さすがはウエル先輩。当たったのは最初の一太刀。残りは当たってはいるものの、木刀を落さず、最低限のダメージ」

「レベルたけー……」

「当たり前だろ。皆は俺をエースだ！期待の星だ！なんとか言ってるが、部長のほうが断然強いぜ」

いつの間にか素振りを止め、レグが隣に来ていた。

「決まるよ。良く見ときなヤクモ」

「え？」

カイウスに言われ視線を向けたその時だった。

それは一瞬の出来事。下から指に上から手の甲に連続の神速を木刀を持つ手に当てた。

「っ……！！」

ウエルの手から木刀が力なく落される。いや、落ちた。

「速い……」

「……」

レグは木刀が落ちるとこまで見ると元いた場所に戻り、素振りを再開した。さっきよりスイングの速度を速めて。

「レグ、どうかしたの？」

カイウスはレグの内心を読み、それでも言葉に出して聞いてきた。

「お前は……なんでもないよ」

「そう」

ジンは方膝をついて俯いてるウエルに近寄った。

「ウエル。一つ勘違いしてるようだから訂正しとく」

「……………」

「俺は告白を受けてはいないぞ」

「……………は？」

意味が分からず顔を上げるウエル。

「ふ、俺が彼女と話した内容は……………本人に聞け。俺が言っていることではない。だが、コレだけは間違えるな。彼女は俺に好意を持ってはいないぞ」

「ジン……………」

ジンは微笑むと手を叩き視線を集めた。

「今日の部活はここまで。大学・専門の方はまだ終わって無いから邪魔するなよ」

「なんか違ったみたいだね」

「らしいな」

「お前が言ったんだろ」

「俺は噂で、って言ったぞ」

うっ、と言葉に詰まるオレの表情を見てケラケラ笑うレグ。

「帰りになんか食べていこうぜ」

「だったら、マ●クで」

「さんせー」

という事で、帰りにマ●クによったのだった。

いざ真剣に勝負！（後書き）

今回の反省

八雲「マ●クってあり？」

暇ねん「どこの時代も世界もマック共通だぞ！」

八雲「時代は違うだろ」

暇ねん「細かい事は気にするな俺は『神』だからな」

八雲「バカだろ」

暇ねん「小説でくらいいいだろ！別にデ●ノートを使って新世界の神になるって分けじゃないんだから」

八雲「やめい！本文でネタ使え！」

暇ねん「そーだな」

八雲「それより、なに？あの部長の強さ。チートだろ」

暇ねん「いや、手●部長みたいに、めっちゃ強いのをやってみました」

八雲「あー、テニ●リね。テニス●王子様ね」

暇ねん「そうそう」

八雲「つてことは、リヨ●マはオレか！」

暇ねん「いや、レグ」

八雲「どうせ・・・オレなんかどうせ・・・」

暇ねん「いじけるなよ」

次回『大会前日』です。

大会前日

明日はナイトの大会。その所為か、周りからは期待の声飛び交う。

「レグ、明日は見に行くからな」

「カイウス君。がんばってね」

席の横で二人に掛けられる言葉に二人は微笑み返す。

ふと思い出した。みたいにオレに視線を向ける男友達。

「そーいや、ヤクモは出るのか？」

「あー、まあ・・・ね」

曖昧な返事を返すとレグがオレの首に腕を回す。

「何言ってるの！お前は俺らと同じ一軍だろ」

「バツ・・・！！」

急いでレグの口を押さえたが少し遅かった。周りの連中はポカンとしてオレを見る。

オレが一軍であることはナイト部の人以外には教えてなかったのが当然の反応だと思う。

「本当・・・なの？」

「あーまー・・・・・・・・・うん」

控えめに答えると周りの連中が騒ぎ出した。

「マジで！？凄くない」

「まだ一ヶ月だろ？」

「ははっ・・・・・・・・」

笑って誤魔化すしかないな。

そんなこんなで今日の学校が終わり、部活へと向かう。

「あしたはついに試合だ。各自、やりたい練習をしてくれ。家に帰って休みを取るのも良いからな」

部活が始まるとジンは、大会に出るメンバーを集めた。

「何か言いたいことはあるか？」

最後にオレたちに聞いてきたが誰も言う事は無い。

「よし、解散」

「さて、どうするっ..」

素振りをしながらレグが聞いてくる。

「そうだね・・・・・・・・・・ヤクモの出来上がりを見てみようか」

「なんだよそれ・・・・・・・・・・」

冗談だと思ったが、レグはピクッと反応すると素振りを止め視線を向けてきた。

「そーだな。明日は大会だし、ヤクモ、俺と試合するぞ」

「マジですか！」

木刀を構えてオレはレグを睨む。

「それじゃ・・・・・・・・・・はじめ!!」

カイウスの合図でオレたちは互いに足を動かした。

「く・・・・・・・・っ！」

木刀を交えた瞬間、レグの力強さが感じられた。

マジで・・・・・・・・本気!?

「何やってんの！」

カイウスが床に座っていると肩にポンと手が掛けられた。

「ルージ先輩・・・・・・・・ヤクモの出来上がりがどれくらいのもんか調べてるんです」

「面白い事やってるジャン」

興味を持ったのかルージはカイウスの隣に座り、目を細めた。

「ぐっ・・・・・・・・この！」

「前にも言ったがタメが大きい！」

振った木刀をスルリと避けると、柄の部分で脇を殴ってきた。

「んな！？」

ありかよそれ！

「有りだ！木刀を使ったらどんな攻撃も有りだ」

「だから・・・・・・・・心を読むなーーーー！！」

苦虫を噛み潰したような顔をするオレにレグは悪戯に微笑む。

「どうですか？先輩から見ても」

「そーだな・・・・・・・・悪くは無い。初めて一ヶ月でコレなら凄方だな」

「やっぱりそうですか」

「なんだ？嫉妬か？」

「違いますよ。覚悟の違いが目に見えてるなーと」

「覚悟の違い？」

訝しげの表情を見てカイウスは笑って誤魔化した。

「どうですかルージ先輩」

「ん？ジンか。明日は期待できそうだ」

「それは良かった」

二人の後ろにジンとウェルが腕組し立っていた。

四人の視線はオレに向けられていたが、そんなもんより目の前の敵^{レグ}に精一杯だった。

「こうなったら・・・・・・・・！！！」

「どうした！次の手・・・・・・・・ツ！！！」

レグが木刀を落した。いや、落したのではなく落させた。

だれが？オレが！

「あ・・・・・・・・」

「ヒュ」

見ていたカイウスたちも口を開けて驚いている。

「・・・・・・・・・・なんだよ今の？」

「いやー、昔テレビで見た技を前々から練習してたんだ」

「ふん」

「初めの一発で出来たとは我ながら凄いな・・・・・・・・ってレグ、顔が怖いよ！」

レグの表情は笑っていた。目が笑っていないが。

「じょーとーだ！ヤクモもう一回だ！！」

「い、いや、遠慮しと・・・・・・・・」

「遠慮すんなよ。行くぜ？」

「ちよつと・・・・・・・・・・ンギャー！！！！！！！！」

一瞬で出来事だった。その数秒後には屋内広場にオレの悲鳴が響いた。

大会前日（後書き）

今回の反省

八雲「大会前日なのにコレか」

暇ねん「コレだ」

八雲「まあいいけど．．．．．オレ、凄くね？」

暇ねん「あー．．．なにが？」

八雲「分かっててそれか」

暇ねん「読者はお前が何したか分かんねえからな」

八雲「本番までのお楽しみってやつだな」

暇ねん「ヒントはパクリ物です」

八雲「オレの技はパクツたのか．．．．．」

暇ねん「うん。思いつかなかった」

八雲「どうせ．．．．．オレなんか．．．．．」

暇ねん「またいじけた。次回から大会編です。多分長く無いでしょう」

次回『久しぶりだな（前編）』です。

久しぶりだな（前編）

ぞろぞろと足音が聞こえる中、オレは椅子に座って目をつぶっている。

場所はセイクリッド市民体育館の二階。一階は広場になっており、二階は観客席みたいなものだ。

「ヤークーモ！」

「ん？ ああ、なに？」

片目を開けてカイウスを写す。

「緊張してるの？」

「まー」

「レグを見習った方がよいよ」

下の階で最終調整をしているレグを指差す。

「あいつは慣れてるからだろ。オレは初参戦だぜ」

そもそも……セレナとの約束を果たすためだったんだが、どこで道を間違えたんだろ？

「まっ、後悔はして無いけどね」

「なに独り言言ってるの！下に行ってウォームアップするよ」

「おう・・・・・・・・・・」

開会式が終り、オレたちは学校ごとに別れている部屋にいる。

「参加校は俺たちを入れて5つ。チームは18チーム。その中に・・・・・・」

「ライン高校もいるんだろ？」

「その通り。皆気を引き締めろよ！」

「「「おうっ！！」」」

ライン高校？

『セイクリッド学園Cチームは試合です。ホールに来てください』
と、会場内にアナウンスが入る。

セイクリッド学園は全部で一軍・二軍・三軍で、1軍からA・B・Cと呼ばれる。

「んじゃ、いつてきます」

「頑張れよ」

Cチームのメンバーが部屋を出て行く。

オレも試合の雰囲気を感じておこ。

「どこ行くの？」

「雰囲気を感じてくる」

椅子から立ち上がりドアに手を掛けるとカイウスの声がオレをとめた。

「ならボクも。レグは——行かないか」

「それじゃ、行って来ます」

ドアを開けながらジンに声を掛けた。

「真剣だな」

ホールに入ると、オレは当然のことを口に出して驚いてしまう。

「当たり前でしょ。見た目は小さい大会だけど、将来のことを考えてる人は皆、死に物狂いだよ」

「将来、か」

確かに親父達みたいな仕事に就きたい奴はこーゆう大会で点数を稼がないとな

「そーいや。小学部と大学・専門部は？」

「小学部はセイクリッド学園の屋内広場で。大学・専門部は隣のホールで」

「ふーん」

他校やCチーム試合を観察しながら会話する。すると……

「カイウス！ヤクモ！」

「おお！来てたのか」

二階の観客席からクラスの男子女子が手を振っている。

『セイクリッド学園Aチームは試合です。ホールに来てください』

「時間だね」

「一回戻るか？」

「いや、持ってきてくれたみたいだよ」

カイウスの言葉と共にジン・ウェル・レグが戦闘態勢といった雰囲気が入ってきた。

「ほれ」

「サンキュ」

レグが持ってきた木刀をオレとカイウスに渡すと、ジンを先頭に試合場所まで歩いていく。

「・・・・・・・・なんか周りの視線があるんですけど？」

「ボクたちの学校は優勝候補だからね」

「なるほど」

ホールの端まで行くと正方形に赤いテープが張られている。アレが競技場である。
フィールド

意外とアバウトだよな

向かい側には対戦校がスタンバイしている。

そうそう、今更だけどトーナメント形式だからな

「先に3勝した方が勝ちです。では、礼」

「「おねがいしますっ!!」」

審判が仕切りながら挨拶を交わす。

「一戦目は誰が？」

「カイウス。次にレグ・ヤクモ・ウエル、最後に俺だ」

丸くなりジンが先発を発表する。終わるとカイウスが立ち上がった。

「それじゃ、行って来ます」

「「カイウス」」

「ん？」

オレとレグの重なった声に呼び止められ、振り向く。

大丈夫そうだな。オレと違って

「「頑張れよ」」

「とーぜん」

笑って答えるとカイウスは競技場^{フィールド}に踏み込んだ。

相手は二年生だろう。

「では……始め!!」

「オラァァァ!!」

「………」

合図と同時に迫り来る相手にカイウスは何の行動も起こさない。

「ふっ!!」

「ん………なっ………!!?」

「そこまで!!」

審判がカイウスの対戦相手をとめた。

「セイクリッド学園、カイウスの勝利」

「は・・・はは・・・」

笑うしかなかった。当の本人は当然だ、とても言いたそうな顔だ。

相手が迫ってくる力を利用して僅かな力で相手の体をくの字にして勝った。

続く第二試合。レグだが、誰も心配する事はなかった。

対戦相手で出さえ、無理だ、と嘆いている。

結果は始まった瞬間に木刀を弾き飛ばしレグの快勝。

「これで2勝・・・オレか」

「負けても安心しろ!後ろには最強の二人がいるからな」

「分かってる」

ジンとウェルは何も言っていないが、表情を見れば大丈夫だ、と言っている。

「第三試合・・・始め!!」

「ダァァァ!!」

「うわっ」

どの試合もそうだが、先手必勝ってやつだな。守りから攻めに転じるのは結構辛いんだよな

「大丈夫かな？ 相手も後が無いから必死だし」

「大丈夫だろ。ちゃんと避けてるし」

カイウスとレグは冷静になって見ている。

「・・・・・・」

立て続けに攻めてるんだから、そろそろ疲れるだ・・・ろ！

「っ！」

相手の木刀を弾く。

「もらった！」

一太刀目は腹に、体が前かがみになった所を狙って二太刀目。

音を立てて崩れ落ちる対戦相手。

「セイクリッド学園、ヤクモの勝利。よって、3―0でセイクリッド学園の勝利。礼！」

試合が終わるとメンバーは中央に集まり頭を下げた。

「「ありがとうございました」」

「公式試合の初勝利、おめでとう」

「ダサい試合だったな」

「うっさい！」

学校別の部屋に戻ると二人から、賞賛と批判の声がかかる。

「よし、この調子で勝つぞ」

オレたちの会話が終わるとジンがメンバーに声を掛ける。

「おう!!」

オレたちはその言葉に大きな声で返事をした。

久しぶりだな（前編）（後書き）

今回の反省

暇ねん「ヤバイ！このままだと話しが変わってしまう」

八雲「だろうな。なんかスポ根だぞ」

暇ねん「だがここを乗り越えれば……」

八雲「乗り越えたら……なんだよ？」

暇ねん「色々とできる」

八雲「はぁ？」

暇ねん「ってことで、つまらないかも知れませんが、応援お願いします！！」

次回『久しぶりだな（中編）』です。

久しぶりだな（中編）

オレたちは順当に勝ち進み、決勝戦まで駒を進めた。

ちなみにオレの戦績は四戦して、二勝二敗。二回戦と三回戦は負けてしまったが、準決勝では何とか勝つことが出来た。

今の時間は決勝相手が決まるまでやることが無い暇な時間であるため、学校別の部屋にいる。

「ライン校とビステ校どっちが上がってくると思う？」

ペットボトルに唇を当てながら決勝戦の予想を聞くと、レグが目を閉じたまま口を開いた。

「100%、ライン……」

「部長も言ってたけどライン校って、そんなに強いのか？」

「ライン校はライバル校なんだよ」

「戻ってきたかカイウス」

部屋の扉を開けるとカイウスとウエルが入ってきた。二人は残りの準決勝を見ていたため、部屋にはいなかったのだ。

「ライバル校……」

「ウエル、決勝は？」

「予想道理、ライン」

「そうか・・・・・・・・・・」

ジンはゆっくりと目をつぶると眠ったように静かになった。

「で、どうしてライバル校なんだ？」

カイウスの耳元で小さな声で聞いてみる。

「ボクが聞いた事だと、ずっと前からナイトの大会ではボクたちのセイクリッドと向こうのラインが優勝を交互に繰り返してたんだ」

「交互について・・・・・・・・・・」

他の学校は一回も優勝した事無いのかよ・・・・・・・・・・

「そして、今回の大会で優勝した方が50勝目だ」

「まじでか？」

レグの細い視線がオレに刺さる。

『これより、決勝戦を始めます。セイクリッド学園とライン校はホールにきてください』

「いくぞ・・・・・・・・・・」

ジンの手が扉をあける。

「おう」

その後ろにウエルが続いていく。

「決勝か・・・」

「いくよ（ぞ）」

二人の掌がバシッと背中当たる。

「おう！」

「くっ・・・！」

試合が始まり一番手はカイウス。だが・・・

「これで・・・！？」

「遅いわ」

カイウスの攻撃を避けたがら空きの背中に一閃。

「そこまで。勝者、ライン校、シーフオ」

「すみません・・・」

顔を下に向け誤るカイウスにジンとウエルは手を当てる。

「まだ、負けてねえよカイウス」

「そうだぜ」

オレとレグもカイウスに手をあて慰める。かすかにだがカイウスの体は震えていた。

カイウス、この大会で初の負けか……

観客席からは「良くやったー」や「自信を持って!!」などの言葉が降ってくる。

二番手はウエルなのだが、さすが副部長といったところだ。相手に攻めさせる前に倒してしまった。

三番手はレグ。

「おらっ!」

今までの試合と比べてレグの動きは格段によくなってる。多分、カイウスのことを思ったからだろう。レグもこの大会、まだ一回も負けていないので負けた時の悔しさが分かるのだろう。

「終わりだぁ!!」

おもいっきり上から木刀を振り下ろし、相手の木刀を叩き落とした。

「勝者、セイクリッド、レグ」

「しゃーっ!!」

片腕を掲げて叫ぶレグの姿にカイウスもやっと顔を上げ一言。

「さすがだね」

「おうっ!!」

戻ってきたレグにカイウスは手を向け、その手にハイタッチした。

「これで二勝一敗か……ヤクモ勝てるよな？」

「さあね。向こうも負けられないだろうから」

意外と落ち着いてる自分に驚きつつも、カイウスとレグに笑ってみせる。

「ヤクモ、負けても良いからな」

「……………部長。それを今言いますか」

苦笑するしかない言葉がジンから飛んで来た。

「まあ確かに負けてもウチの大黒柱が後ろにいるからオレも安心っすよ。それじゃ、いつてきまーす」

勝つ気満々で競技場フィールドに入っていく。

後ろではジンがカイウスに何か聞いていた。

「カイウス、ヤクモが言ったダイコクバシラとは何だ？」

「えーっと、チームの中心人物と言う意味です」

日本語の勉強中でした。なんて事話している間に試合は始まっていた。

「貴様を倒してウチのエースに番をまわしてみせる！」

「あいにくだが、そう簡単に負けねえよ！」

木刀を交え、互いの顔があとちょっとで当たるって所まで顔を近づける。

「いけー」「ヤクモー」と、応援の声が耳に入ってくる。後ろのメンバーの声も。

弾き、弾かれの応酬である。どちらも引かない。引けない意地がある。

勝ってエースに回すと言う相手の意地と、勝って優勝をしたいと言う、俺の意地。

「し……まった……………」

一瞬の油断。相手に背後を捕られた。

「落ちろ……………」

「……………」

こんなところで・・・・・・・・こんな奴に・・・・・・・・オレは――――
――ッ！！

縦に落ちてくる木刀に対して、オレは体を縦に動かし紙一重で避ける。

避けたときにチラッと見えた相手の表情は、驚いている様子だった。実際オレは驚いてる。

だがまだオレの不利である。避けた動作で相手は左斜め後ろ。相手の視界にオレはいる。

「まだだ――ッ！！」

降り終えた閃を切り上げるように木刀がオレを襲う。

「負けられねえんだ・・・・・・・・」

小声で呟きながらオレは多少無茶しながら体を180度回転させる。

「ぐっ！！」

迫ってくる木刀を受け止める。力では敵わないため少し後ろに後退してしまったが受け止めた。踏みとどまった。

「――ッ！？」

体を少しかがめて右手で木刀を振るう。

「まだ……！」

向かってくる木刀を弾こうと身構える相手。

大丈夫。しっかり見えてる。あの時も出来たんだ……い
けっ！

右腕を振りぬいた。

何も握っていない右腕を振りぬいた。

相手は何が起こった？といわんばかりの表情。

後ろでオレを応援しているカイウスたちも目を離せないでいる。特
にジンとウエルは啞然としている。

木刀は……空中を制止している。

「五月雨」

左手で制止している木刀を掴み、振り抜く。力の限り――振り
ぬいた。

左手は利き腕ではないため、力を入れないと威力が出ない。

「が……はっ！！」

振りぬき終わると、相手は前にゆっくりと崩れ落ちる。

「しょ、勝者、セイクリッド、ヤクモ！……これにより3

対1でセイクリッド学園の勝利です!!」

審判の音がホールに響き渡る。

数秒後には段々と声が聞こえてくる。それはヤクモに。それはセイクリッド学園に対しての声である。

「かった…………マジで？ははっ……………」

「「この……………」」

後ろから誰かが駆け寄ってくる。足音からして二人分。すぐに分かった。

「やりやがったな!!」

「やったね!!」

背中突っ込んでくる二人。カイウスとレグ。

「お前ら…………ぶはっ」

二人に笑いかけていると頭に押さえつけられるように髪をくしゃくしゃにするウエル。

「よくやったなヤクモ!さいこーだぜ!!」

「ああ。最後の剣術はあの時のだな」

「はいっ!!」

あの時とは、レグとの試合のときに出した剣術である。

「まさか、アレを本番でやるとはな」

「オレも無意識・・・じゃないけど良くてきたと思った」

オレの言葉にカイウスたちは一瞬間があったが口元を緩めて笑みを浮かべた。

「帰る準備を早くしろ！」

「「はい！」」

表彰式も終わり、学校別の部屋で帰る準備をしている中、ジンは早くするように促す。

準備が終わり、市民体育館の前の広場で解散した為、カイウス・レグと一緒にこの後のことを話し合っているとテンポの良い足音が聞こえてきた。

久しぶりだな（中編）（後書き）

今回の反省

暇ねん「——の前に誤っておくことが」

八雲「どうした？」

暇ねん「第35話のレグとの試合の時、『ジン』と書いたつもりが『サジ』となっていた」

八雲「サジって誰だよ！」

暇ねん「俺が書いてるブリーチの敵キャラ。間違っちゃってしまっ
た！！」

八雲「バカヤローー！！」

暇ねん「もう直しました。今後は無いようにします！！」

暇ねん「気を取り直して、反省」

八雲「顧問の先生出てこなかったな」

暇ねん「忘れてた」

八雲「忘れるなよ。それに最後の足音誰だよ？」

暇ねん「あいつだ。あ・い・つ・」

八雲「あいつ？」

暇ねん「ふふっ」

八雲「ふふっ、じゃ、ねえよ！！」

暇ねん「良いじゃん。今回はかっこよく勝ったんだから」

八雲「ああ、オレの必殺・五月雨だな」

暇ねん「正確に言うとりボ●●ンの山●●だけどな。『完全無欠 最強
無敵』のな」

次回『久しぶりだな（後編）』

久しぶりだな（後編）

「ん？」

テンポの良い足音が近づいてくるのが分かり、オレたちは音のする方に視線を向けてみた。

「久しぶりだな……」

「——ッ!？」

声にならない驚きがつい、表情に出てしまった。

「そうですね。レーベルさん」

ムスツとした表情でレグはレーベルに返した。

「で、どうしてここに？」

「なに、大学・専門部の大会があるってことで、ゲストとして呼ばれたんだよ」

「あっそ」

レーベルの言い方はレグの機嫌をそこねる一方で、オレは未だに驚きつつも、どう行動するべきかを考えている。

「どうかしたのヤクモ？」

「あ、いや、なんでもないさ……」

言葉では簡単に言えるが、カイウスは表情を読み取り心配そうにオレに瞳を向ける。

「ヤクモ……と言ったか？君の噂は聞いたよ。初めて一ヶ月の君がチームの優勝を決めたってね」

「ッ！　どうも……」

そっけなく返すとクスツと笑うレーベル。それを聞いてつい視線を向けてしまった。

「その力を見てみたいな。どうだい？一戦、やってみないか？」

「……」

このやろう……オレに合わせて知らない振りかましてやがる。まー好都合だがな

「逃げるのかい？あのかいのように負けるのが怖くて？」

「あの時？負ける？」

レグの困惑した声が聞こえてくる。

人を見下したような視線。それを実行する瞳。その言葉。

「上等だ！レグ、木刀とって」

「マジでやるのか!？」

「・・・・・・・・」

返事はしない。レグは驚きつつも、ため息を付き木刀を投げ渡してくれた。

「勝負の方法は？」

「あの時と同じ。貴様が私に一太刀でも当てられれば貴様の勝ちだ」

「上等！」

先手必勝!!

レーベルが木刀を構えるとすぐさま木刀を振りに行った。

「見え透いた手だな」

「なら・・・・・・・・」

360度回転して遠心力を使い、逆側から木刀を放つ。横から迫り来る木刀を横目で見ると、縦に木刀を構え受け止める。

「貴様はあの時と何一つ変わらないな」

「アンタもだろ？」

「ふんっ！」

「うっ!？」

強引に腕を弾かれ頭の上に右腕が移動した。

「な・・・ろっ!」

上に持ってかれた右腕を行ける所まで頭の後ろに回した。その時さりげなく左腕も背中後ろに。その為、レーベルからは木刀の半分が背中で隠れて見えなくなった。

「また力押しか!」

「五月雨」

頭の後ろから思いっきり振り下ろす。その行動に反応してレーベルも木刀を前に出すが、それはオレが振り下ろした右腕が作った風を斬るだけだった。

「木刀が・・・無い!？」

「・・・」

つい、攻撃が決まったと思って口元を弧月にしてしまった。

後ろにいるカイウスたちも目を疑った。

背中後ろから振り抜く左手には木刀を握っている。

「——ッ!」

「オレの勝ちだな？」

レーベルの右横腹から木刀を引く。

「ふっ、そうだな。今回は貴様の勝ちだ」

「やけにあっさりと受け入れるんだな」

「私は騎士だ。^{ナイト}潔く受け入れるさ。次は………本番で会おう」

武士が鞘に刀を入れるように布袋に木刀を仕舞う。

「楽しみにしているぞ」

一言言い残しレーベルは来た道に戻っていく。聞こえる足音は来た時とは違って足早だった。

「やつ………たな！」

「うわっ!？」

レーベルがいなくなった瞬間に後ろから腕を回された。レグの表情は今まで見たことの無い、とびっきりの笑顔だった。

そーとー嫌いだったんだな。と、内心思いながら苦笑する。

「それにしても最後のどうやったの？」

横に来てたカイウスが顔を覗き込むように聞いていた。

「ん？後ろにいたんだから見てただろ？こーやって背中後ろで左手に渡すんだよ」

オレが再現していると、二人は呆れた表情をした。

「それを本番にやるとは・・・・・・・・」

「なんだよ？」

「別に〜〜」

「オイ！何だ今の言葉は！！——あっ、まて！！」

二人は逃げるように前を走っていくので、慌ててその後を追っかける羽目になった。

久しぶりだな（後編）（後書き）

今回の反省

八雲「かったー」

暇ねん「よかったよかった」

八雲「なにその投げやり感」

暇ねん「どうせなら試合で勝てよ」

八雲「つぎはそうなるさ」

暇ねん「その自信はどこから……」

八雲「オレから」

暇ねん「ウザっ！」

次回『文化祭まであと一週間です』です。

文化祭まであと一週間です

夏の暑さも少しずつ消えてきた、とゆうか無いに等しい11月。そんなすごしやすい月にオレは何をしているかというところ……

「ヤクモーーーーー（くーーーーん）！！」

「またかよっ！！」

数十人の生徒に追いかけて学園内を爆走中。

なぜかと言うと、あの大会の後、一ヶ月前に始めた初心者が優勝を決めたということで学校内ではちょっとした有名人となってしまう、挙句の果てにはファンクラブなど……

「でも、何か大変なことを忘れているような気がするんだよね……」

物陰に隠れて息を整えているなか、ふと、思った。

「大変だね」

オレが隠れた物陰には先客がいた。

「本当だよ。カイウスは大丈夫なのか？」

「僕も大変だよ」

オレと同様に、大会の時に見せたあの涙に心を奪われた女性がファ

ンクラブをつくり、拡大しているらしい。（本人談）

「で、どうする？早くいかねえと委員長の頭に角が出るぞ」

「そーだね」

「「いたぞ（よ）！！」」

「「！！」」

右からカイウスファンクラブ。左からはオレファンクラブ・・・
・・・自分で言うのは恥ずかしいわ！！ともかく、バレた。

「カイウス君・・・・・・・・」

「ヤクモ君・・・・・・・・」

「「教室で！！」」
てんごく

お互いの健闘を祈るとカイウスは左の団体に。オレは右の団体に紛れ込んで教室に向かった。

「ちよっ！どけっ」

「そっちがどきなさいよ！！カイウス様うまってー！」

二つの団体がぶつかり合い押し競饅頭状態。その中を掻い潜りながらオレは抜け出し、教室への道を走っていると・・・・・・・・

「キャッ！」

「うわっ!!」

廊下を曲ろうとした時に進行方向から来た女性にぶつかり、互いに尻餅をついてしまった。

「いたた……って、大丈夫ですか!？」

痛みから目を開けると、同じように尻餅をついている女性に慌てて声を掛ける。

やべー!! やべーってコレ!

内心焦りながらも顔には出さないようにして、女性の返事を待っている……

「「ヤクモー!」」

「うわっ! きた!!」

来た道から声が聞こえてきた。オレにとっては焦りをいっそうを速める。

「あー……ごめんなさい。何かあったら、高等部1年B組来て下さい。あっ、名前はヤクモークウサカです。すいません!!」

最終的に取った行動がコレだ。

名前とクラスを言っとけば何かあったとき来てくれるだろう

再び教室への道を走り始める。

「これは・・・・・・・・彼の？」

ぶつかった女性はすぐ横に落ちてる携帯を拾い、オレが走り去った廊下を見た。

「遅れましたー！ー！ー！！！！」

「遅いわボケナス！！」

「痛い！」

勢いよく教室のドアを開けると委員長の怒号と共にチョークがおデコにヒット！！

周りの連中は笑っているが、結構痛いんだぞ！コレ！！

「おそかったね」

「カイウス。そっちはあの後すぐに戻ってきたのか？」

「うん。3分ぐらいに前戻ってきたよ。途中で文化祭の買出しに行こうとしてたレグに助けてもらってね」

「ずりーな」

教室では一週間後のセイクリッド祭に向けて準備中である。この学園ではセイクリッド祭の一週間前から授業をやらずに準備期間となる。

チヨークの当たった部分を摩りながら散らばってるイスを手に取り背もたれを前に座る。

「ほら、そのサボり。あなたも手伝いなさい」

「オレだけ!？」

「カイウスはすでに仕事をやってくれたわ」

「お前、少し前に戻ってきたんだよね？」

「うん」

その笑顔がなんかうそ臭いなー

「ヤクモ、友達を疑わない」

「悪かったよ。ただ、お前も心読むのはやめい！」

「ごめん、ごめん。つい癖で」

癖で、じゃねえーよ! そんな癖あったまるか!

「んで? 何をすればいいんだ」

教室の中心で的確に指示している委員長に聞いてみた。

ちなみに、委員長はこの前、『文化祭の説明？』で進行役をしてたあの人だぞ。

委員長もとい本名、ミレイ＝ミール。オレから見れば暴力女……・っと、鬼のような目がこちらに

「なんかとても失礼なことを考えてなかった？」

「いや全然」

「……まあいいわ。あなたはカイウスと一緒に生徒会室にコレを取りに行ってきた」

はい、とスカートのポケットからメモ帳の1ページを渡してきた。

「なにに。えー、ガムテープ・マジック・文化祭資料（去年の喫茶店資料）・執事・メイド服」

カイウスがオレが持つメモを丁寧に一つ一つ読み上げていく。

「おい、委員長。一つ聞きたいが……」

「なによ？」

「メモの最後に書いてあるものはふざけて書いたのか？」

瞼をパチパチしながら確認のため委員長に聞いてみた。

「ふざけて無いわよ！ちゃんと用意されてるはずだから持ってきて」

「・・・・・・・・」

どこの学校に執事・メイド服を文化祭で使う学校があるよ！？普通に制服かクラスTシャツだろ！！

「それが、現実^{リアル}との差だよクモ

「何からツツコむべきなのか・・・・・・・・」

現実との差にか？それともオレの心を読んだことにか？

「どちらにもツツコまない。はい、いくよ」

「ちよっ！」

オレの手からメモを取ると教室から頭だけ出し、左右を見る。

「何してんだ？」

「あの人たちがいないかの確認」

「なるほど」

左右を見て、大丈夫だと確認すると教室から出て、四階にある生徒会室へと向かい始めた。

文化祭まであと一週間です（後書き）

今回の反省

暇ねん「八雲にもファンクラブか」

八雲「なんで？部長や副部長。それにレグもいるのに！！」

暇ねん「ん？あの三人はすでにファンクラブできてるさ」

八雲「へ？」

暇ねん「だ・か・ら・すでに存在してるの」

八雲「なんとーーーー！！」

暇ねん「それよりアンタ、大変な事忘れてるよね」

八雲「そう！そうなんだが・・・思いだせん。教えて」

暇ねん「やだよ。けど、マジで思い出さないと色々とやばいからな」

八雲「なにその脅迫みたいな言葉！」

暇ねん「秘密だ」

八雲「マジで教えて！！」

次回『生徒会長ってどんな人？』です。

生徒会長ってどんな人？（前書き）

暇ねん「今回、めっさ短いです。初めてだわこんな短いの」

生徒会長ってどんな人？

生徒会室に向かいながらもオレたちは周りに気をつけた。

「なー」

「どうかした？」

互いの視線は別のところに向いている。

「生徒会長ってどんな人？男？女？」

「女だよ。どんな人って聞かれたら・・・美人だけど他人とは線を引いてるって言うか、あまり興味がなさそうな人、ってところかな」

「おいおい、そんな人が生徒会長で良いのか！？」

「一応、慕われてるからね。着いたね」

危なげなくオレたちは四階の生徒会室の前に着いた。カイウスはこちらに視線を向けるとドアをノックした。中からどうぞ、と聞こえオレたちは中に入った。

「失礼します。1年B組のカイウスですが、セイクリッド祭の荷物を取りに来ました」

「B組・・・あった。あなたたちのは1―Bと書かれているダンボールよ」

イスに座っている生徒会長は資料をめくり、部屋の隅に山積みされているダンボールを指差した。

「てーか、生徒会室でかく無いですか？校長室みたいに立派なテーブルと机。ソファまで置いてあるし」

室内を見回しながら積んであるダンボールどかし、自分達のダンボールを手にとった。

「意外と軽いな。コレならオレ一人で大丈夫だ」

「じゃ、ヤクモに任せるよ。僕はこのダンボールを元に戻すから」

「・・・・・・・・・・」

「どうかした？」

「この量だと一人で大変だろ？オレも手伝うよ」

「ありがとう」

荷物を降ろし、カイウスの横にしゃがみダンボールを戻し始めた。
のだが・・・・・・・・

「なー、すごい視線を感じるんだが」

「うん。僕も」

小声で会話。なぜかと言うと、イスに座りながら机に肘を着き手を

組んでいる生徒会長の視線が作業をしていても分かる。

「ねえ、その日本人」

「はい？」

凜とした声が耳に届く。『日本人』と言われて反応するしかないの
で視線を向けながらも作業は続ける。

「あなた、名前は？」

「高坂・・・じゃなくて、ヤクモⅡコウサカです」

「ヤクモ・・・あなたね。ナイト部の大会で優勝を決めたの」

「ええ、まあ」

年齢と違い、彼女の態度は異様なまでに落ち着いているな

「終わった。戻ろうか？」

「え？ああ、それじゃ会長、失礼します」

カイウスが最後のダンボールを乗つけると手を叩いている。

いつの間に終わったのか。話をしている間に終わっていたからな

ドアの前で頭を下げて、出て行こうとした時、生徒会長の声がオレ
の足を止めた。

「ヤクモ。これからはマリナと呼んでいいぞ」

「え……じゃあ、マリナ先輩って呼びますよ。失礼しました」

オレは、また頭を下げて部屋から出た。

ダンボールを持っているオレにカイウスは、凄いな、と言ってきた。

「なにが？」

「だって、生徒会長が名前で呼んでいい。なんて始めて聞いたもん。同学年でも『会長』って呼ばれてるし、仲の良い友達ぐらいしか名前で呼ばないよ」

「へ、へ」

そんな情報を持ってるお前が凄いな。いや、マジで

苦笑しながら、また、周りを気にして教室へと戻るオレたちだった。

生徒会長ってどんな人？（後書き）

今回の反省

暇ねん「キャラが増えてきました」

八雲「増えてきたね」

暇ねん「ここらへんで『キャラ紹介』みたいのやっておくか」

八雲「ここで!？」

暇ねん「違うわ!」

八雲「だよね」

暇ねん「って事で、キャラ紹介を書かせてもらう」

八雲「でも、まだそんなに出てないよね。指で数えられるぐらい」
暇ねん「いや、もっといるから」

次回『キャラ紹介』です。

キャラ紹介（前書き）

暇ねん「キャラ紹介ですが、順番がメチャクチャですので悪しからず。ついでに読まなくても全然オッケーです！」

キャラ紹介

暇ねん「今回はこの『オレが姫の婿候補!?!』に出てくるキャラを紹介していくコーナーです!?!」

八雲「ちなみにこれから出てくるキャラも随時紹介していくので、ネタバレが少し含みます。それでも良い!と言う人はどうぞ」

暇ねん「それとこの紹介コーナーではサブキャラは名前と八雲との関係だけです。なお、年齢はこの物語が始まった時のものです」

暇ねん「それでは紹介していきましょう!日本出身の我らが主人公からどうぞ!」

主人公・高坂^{こうさか} 八雲^{やくも}

年——16歳

高等部1年B組

部活——ナイト部

趣味・特技——読書・料理・剣術

主人公の母・高坂^{こうさか} 冴子^{さえこ}

年——28歳

職業——主婦

趣味・特技——修二と一緒にいること

主人公の父・高坂^{こうさか} 修二^{しゅうじ}

年——30歳

職業——国王の護衛

趣味・特技——剣術・子供と遊ぶ事（八雲はダメ）・冴子を愛する事

暇ねん「以上が日本メンバーでした」

八雲「母さん若いだろ！」

暇ねん「今更だな。さて、次はセイクリッド・ブレイブ王国にいる
主要キャラ紹介だ。Let's Party!」

セイクリッド王国次期姫・セレナⅡザⅡセイクリッド
年——18歳

高等部3年A組

特技・趣味——料理（八雲に教えてもらったため）・ピアノ・ショ
ッピング

八雲の友達・カイウスⅡクロス
年——16歳

高等部1年B組

部活——ナイト部

趣味・特技——剣術・スケッチ

八雲の友達・レグⅡウォーリー（通称・レグ）
年——17歳

高等部1年B組

部活——ナイト部

趣味・特技——剣術・昼寝

八雲のクラスメート・ミレイ＝ミール（通称・委員長）
年——16歳

高等部1年B組——クラス委員

趣味・特技——チヨーク投げ・勉強

生徒会長・マリナ＝メイデン

年——17歳

高等部2年D組

学校での職——生徒会長

趣味・特技——他人と距離をとること・読書

部活の先輩・ジン＝マーキッド

年——17歳

高等部2年A組

部活——ナイト部（部長）

趣味・特技——剣術

部活の先輩・ウェル＝オールダ
年——16歳

高等部2年A組

部活——ナイト部（副部長）

趣味・特技——剣術・バスケ（遊びで）

部活の先輩・ルージⅡファスト
年——21歳

大学部二年F組

部活——ナイト部

趣味・特技——剣術・ダーツ・シューズ集め

先輩・レインⅡオルファ

年——17歳

高等部二年E組

趣味・特技——裁縫・ぬいぐるみ集め

セレナの友達・ユウナⅡアーリー

年——18歳

高等部3年A組

趣味・特技——セレナをからかうこと

ブレイブ王国の王子・レーベルⅡブレイブ

年——21歳

大学二年

部活——ナイト部

趣味・特技——剣術（世界最強）・人を見下すこと・八雲への敵対心

暇ねん「以上が、外国の主要キャラです」

八雲「ちよつとまで！レベルの趣味・特技の最後は何だ！！」

暇ねん「お前への敵対心。どーせセレナがらみだろ？」

八雲「おいおい・・・・・・」

暇ねん「それじゃ、次はサブキャラ紹介だ・・・・COOLにこ
うぜ、真●幸村」

八雲「いやオレ、真●の大将じゃないから」

サブキャラ

学校の先生

ブラウン先生（ナイト部の顧問）

シール先生（八雲の担任）

修二の仕事仲間

シュドナイⅡクロス（カイウスの父親 通称・シュド）

ルミナスⅡアーク（通称・ルミナ）

メイリスⅡアーク（通称・メイ）

（ルミとメイは姉妹である）

他国の婿候補

ネック王国・サバナⅡネック

暇ねん「以上かな？」

八雲「じゃね？しっかし結構いるんだな」

暇ねん「これからもっと増えるぜ！星の数ほどナ！」

八雲「いや、それはやめろよ。読者がいなくなるぞ」

暇ねん「うそうそ。俺がめんどいもん」

八雲「……………それより、趣味・特技って書いてあるが、どう考えたって違うのもあるよね？」

暇ねん「はあああああ」

八雲「何してんの？」

暇ねん「卍・解！！」

八雲「うわっ！？スモッグが……………！！」

暇ねん「天鎖斬月……………あばよ！」

八雲「ああっ！？逃げた！」

暇ねん「ははははっ」

八雲「……………えー、次回からまた本編に戻りますので「よろしくな！」てめえ！」

キャラ紹介（後書き）

今回の反省

暇ねんが天鎖斬月の超高速移動によって逃げたため無しといたし「ません！」

八雲「作者の癖に逃げやがって」

カイウス「まあまあ」

八雲「それにしても初めてだな。暇ねんがいない『反省』という名のフリータイム」

カイウス「そうだね。僕も初めて来たし」

八雲「そうだったけ？」

カイウス「番外編には出たけど『反省』には出られなかったから……」

八雲「あーっと！ここでお便りコーナー」

カイウス「そんなコーナーあったっけ？」

八雲「いや、ないけど暗い雰囲気だったため……」

カイウス「ごめんごめん」

八雲「ともかく、今回は教室に戻ってからのお話だ！」

カイウス「楽しみにしててね。これからまた、バトルは無いから」

八雲「感想や質問も受付中だ。なんだったらメールでもいいぞ」

八雲&カイウス「またね」

次回「で？誰がこの服着るんだい？」です。

で？誰がこの服着るんだい？

教室に入ると未だ教室の装飾を頑張っている。その中にさっきまでいなかった奴がイスに座って休憩している。

「レグ。戻ってきてたんだ」

「おう。委員長に無理やり買いに行かされて……………無いけど」

「ははっ」

レグは委員長が睨んでいる事に気付き、無理やり言ったことを否定した。

「ほい、もってきたぜ」

委員長の前にダンボールを置くと、委員長はしゃがんでダンボールを開け、中身を確認した。

「ええ。全部入ってるわね。それじゃ……………」

立ち上がり委員長は教室を見渡した。

「本当に執事服とメイド服が入ってるよ……………」

中身を見て苦笑していると、委員長がビシッと人差し指を向けてきた。

「な、なに？」

あまりのことに少し身を引いてしまった。

「ためしにあなた達、コレを着てみなさい。こっちは私達が着るから」

「・・・・・・・・コレって・・・・・・・・コレ？」

ダンボールに折りたたんで入っている執事服を指差すと、そうよ、と軽く返された。

「似合うと思うぜ」

「確かに」

「お前ら人事のように言ってるが、あなた達って事はお前らもだぞ」

「・・・・・・・・・・」

あつ、黙り込んだ。カイウスはポーカークフェイスで頑張っているがレグは・・・・・・・・ダメだな

「い、い、い、委員長！こ、こ、こ、コレって俺たちも？」

「当然よ！早く着替えなさい」

委員長は数人の女子とメイド服を持って廊下に出て行った。

「~~~~っ！！」

「「あきらめろ（な）」」

「カイウスだって嫌だろ!？」

「どうせ本番で着るんだよ? だったら今更何もいえないよ」

「うっ! だ、だが、俺たちは部活で警護を……」

「警護って言ったって、この服で出ろって言われるのがオチだろ。警護に服装は関係ないから」

オレとカイウスの正論に、ぐっと押し黙るレグ。

カイウスと視線が合うと互いに頷きレグの肩を掴んだ。

「「いくぞ（よ）」」

「ちょっとー!ー!ー!」

嫌がるレグを半場引きずりながらも更衣室に向かった。

「お待たせ」

着替え終え教室のドアを開けるとオレの声に、なのかドアの開く音に、なのか分からないが教室にいる生徒の視線が一気に集まる。

「「「おゝ! ! ! ! !」」」

「な、なんだよ？」

「いや、似合ってるな〜と思って」

「確かに……………」

クラスの男子女子は好き勝手いい放題である。

ちなみにオレたちの服装は、どっかの漫画にありそうな黒で統一されてるジャケットとズボン。ジャケットの下には真っ白なYシャツに手袋。ちよつと窮屈であるが……………」

「どう？着替えてき……………」

後ろのドアから委員長の声が聞こえ振り抜くと、委員長は顔を真っ赤にさせてた。

「委員長達も似合ってるよ」

「かawaiiー」

など、またも男女の好き勝手な発言。だが、言われるほうは満更でも無いようだ。

確かに……………」

委員長達の服装は、これまたどっかの漫画に出てきそうな、はたまた、現実のメイド喫茶で着ているようなメイド服だった。

「な〜そろそろ脱いで良いか？」

「レグ、本番大丈夫なの？」

「しらねえよ」

首もとの襟をいじりながら文句垂れてるレグにカイウスが苦笑している。

「あの・・・・・・・・」

「「「「ん!？」」」」」

服装の事で盛り上がってる中、前のドアから控えめな女性の声が聞こえ、クラスの視線が一斉にそちらに向いた。オレたちも例外では無い。

ドアに立っている女性は頭を下げている為、顔が見えない。のだが・・・・・・・・

ん? どっかで会ったことあるような、無いような・・・・・・・・

「どうかしたヤクモ？」

カイウスの問いに、なんでもない、と答え女性に視線を向ける。

女性は今、委員長と話している。メイド姿の委員長と。

で？誰がこの服着るんだい？（後書き）

今回の反省

暇ねん「あつーい！ヒートアイランドだ！！」

八雲「第一声がそれかよ！」

暇ねん「ヒートアイランドって言うけど俺、都会に住んで無いわ」

八雲「知ってるよ！」

暇ねん「元気がいいな。何かいいことでもあったのかい？高坂君？」

八雲「その忍野みたいに『元気がいいなあ、何かいいことでもあったのかい？阿良々木君』みたいな言い方やめろ」

暇ねん「ハッハー！」

八雲「もういいわ！」

次回『新しいキャラに一目ぼれですか！？——違います！！』です。

新しいキャラに一目ぼれですか!?!——違います!!

なんか頭の中がもやっとする……絶対どこかで会った気がするんだよねー。ピンクの髪、ピンクの髪……

委員長と話している女性は、どう見ても自分達より一つ上の2年生である。特徴的なのは彼女の短いピンク色の髪の毛。

「ヤクモ君!あなたに用があつて来たらしいわよ」

「オレ!？」

つてことは、やっぱどこかで会ったんだよね……

呼ばれたので近づいていくと女性はスカートのポケットからあるものを取り出した。

「これ……あなたのですね？」

取り出したあるものを差し出す。差し出された物を手に取った。

「携帯……あれ?オレどこかに落したのか!？」

慌ててポケットに手をつっ込んだが、ズボンは制服ではなく執事服のものであるため確認する事はできない。その為、携帯を開いてみた。

「…………オレのだな。えーっとどこで？」

「覚えていませんか？私とぶつかったの？」

「ぶつかった・・・・・・・・あぁっ！！」

思い出した。ファンクラブに追われている時にぶつかった女性だ！

「ええっと、その、あの時はすいませんでした！」

とりあえず頭を下げる。周りのから見れば何を誤っているのか分からない。

「いいですよ。ヤクモ君って聞いたらすぐに分かりましたから」

「・・・・・・・・何を？」

「追われてた理由、です」

ただでさえ、一つ上の先輩なのにぶつかった相手。体が強張らないわけが無い。だが、彼女は気にして無いようにニツコリと笑っている。

「ですから、あのときのことはしょうがないですよ」

「・・・・・・・・」

天使だ！天使がここにいる！！チョーク女と違って優しい

「いま、非情に失礼な事を考えたわね？」

「まさかー」

さすが超能力者

「えーっと、先輩の名前を覚えてもらって良いですか？」

「ええ。私は2年E組のレインⅡオルファです。よろしくね」

「こちらこそ」

互いの自己紹介をしていると、それを見ているカイウスとレグはなにやら小声で会話している。

「それじゃ私もクラスの手伝いに戻るわね」

「あ、はい。携帯、ありがとうございました！」

「ヤクモ君。その格好よく似合っているわよ」

そう言うレインは階段を上っていった。

「ヤクモ」

「な、なんだよ。気持ち悪い声で呼んで……」

レグは窮屈だと文句を言っていた執事服をビシッとして近寄ってくる。

「今のイベントは何だ？何のフラグを起こした？」

「イベント？フラグ？いきなりキャラが壊れる言葉を使うな！」

「でも、良い雰囲気だったよね」

「カイウスまで・・・・・・・・」

「って、ことで・・・・・・・・何が合ったか教えてもらおうぞ！」

ガツチリと両肩をつかまれ強制連行される羽目になった。

結果、開放されたのが1時間後だった。その後に委員長から、準備をサボった罰、と1時間の居残り準備をさせられた。

新しいキャラに一目ぼれですか!?!——違います!!!(後書き)

今回の反省

暇ねん「新キャラのレインさん。名前の元ネタはGガ●のレイン」

八雲「またガン●ムか」

暇ねん「いいじゃん!他に思いつかなかった」

八雲「あっそ」

暇ねん「話し変わって明後日には学校が始まってしまう……」

八雲「オレはもう始まってるよ!」

暇ねん「憂鬱だ」

八雲「だめだこりゃ」

次回『準備は終わり!明日は頑張ろう』です。

準備は終わり！明日は頑張ろう

レインと出会ってから数日経ち、ついに明日はセイクリッド祭が開催される。

「いいか？当日は俺たち2年生が午前の警護。1年は午後の警護だ！」

オレたちは今、屋内広場で明日の打ち合わせをしている。

「部長。質問なんですが、もし当日になんかあったら自分で対処していいんですか？」

「できる範囲ならな。相当やっかいな出来事だと俺たちや先生方を呼べ！」

部長の答えに満足して首を振る。

「それじゃ、明日は仕事と遊びの減り張りをしっかりしろ」

「「はい！！！」」

話が終わり、カイウスとレグと一緒に教室に戻っていると毎度おなじみの騒がしい足音が背後から聞こえてきた。

「またかよ……………」

ため息を付き、大きく息をし、ダッシュしようとした時だった。

「レッグⅡウォーリー!!」

「レッグ？」

呼ばれた名前は自分でもカイウスでもなく、二人の隣にいるレッグだった。

「今回はオレかよ……」

苦笑いをしたレッグは先に行くぜ、と残し、目の前から消えた。

「大変だね。レッグも」

「だな」

二人してレッグを哀れむと足を再び動かし始める。

「そー言えば……」

「どうした？」

隣で何かを思い出したように呟く言葉に反応する。

「どうしてヤクモはセイクリッド^{こし}に来たの？」

「……いきなりだな」

「ちょっと気になってたんで。だって、別に日本の高校では取れない資格があるわけじゃないし……」

「なんでって言われても……」

セレナの手紙を読んでセイクリッドに来た！とは言えないしな……

「理由が無いわけ無いでしょ？ 遥々海を越えてきたんだから」

「あー」

返答に詰まる。考えると考えるだけ自分でも思ってしまう。

あん時は、よく考えなかったけど……今になって考えてみると何でだろうな。セレナとの約束を守るためだったら高校を卒業してからでも遅くは……ない。いや、遅いか

「もしかして……何となく、とか言わないよね？」

カイウスの顔が徐々に変化していく。

「理由はあるにはあるんだが……今は言えないんだ」

「今は？」

「そう。今は言えない。もう少ししたら話すから、その時まで待ってくれ」

「うーん……ヤクモがそう言うなら」

納得していない顔だが、友達を信じてカイウスはここで話を切ったんだろう。

「もどったぞ」

「おまたせ」

「あら？二人とも速かったわね」

前と同じく委員長が最後の指示を出している中、こちらに顔を向けてきた。

「まーな」

「レグは……追いかけているのね」

「さすが委員長」

思わず感心してしまった。

「で？僕たちも何か手伝おうか？」

手近にあった紙を取りながらカイウスが委員長に聞いてみると、委員長は考え込む素振りを見せた。

「ん————」

「もしかして、やること無い系？」

「あっ！ヤクモ君。あなたは生徒会長に呼ばれているわよ」

「マリナ先輩が？」

意外な事に呆気に取られた。

なんだろう・・・・・・・・

「んじゃ、行って来るわ。生徒会室？」

「ええ」

場所を確認して教室から出て行こうとしたら、階段を勢いよく上ってくるレグが見えた。

「どっか・・・・いくのか？」

「ちょっとな」

短く返して階段を上がる。

生徒会室のドアをノックすると返事が聞こえ中に入ってくるよう促される。

「失礼します・・・・・・・・えーっと、何のようでオレは呼ばれたんですか？」

中に入ると前と同じように、椅子に座り机に肘を突いて手を組んでいる。

「ヤクモ、あなたに明日のセレナ先輩の警護を頼みたいんだけど」

「っ!？」

これまた予想外。だが、これは……困る!!

「で? どう?」

「なんでオレなんですか? 部長や副部長は?」

「彼らは警護をまとめるので手一杯になるでしょうからね」

たしかに、あの二人はオレたち部員をまとめるので大変そうだな

「じゃ、じゃあレグ……レッグ||ウォーリーは?」

あの二人の他に力があるレグを出してみた。が、マリナの返事はN
Oだった。

「彼は確かに力があるでしょうが……無礼があつたら困るでしょう?」

「……………」

あいつの性格ならありそうな気が…………

「嫌なら嫌でも良いわよ」

「嫌とは言いませんが……何故セレナ先輩の警護が必要なんですか? たかが文化祭で……………」

「文化祭と言っても一般の人でも入場するからね。何か合ってからじゃ遅いのよ」

気圧されそう。これが、高校部の生徒会長の気迫というか仕事に対する考えか……しかたない

「——は、わかりました。そのお話をお請けいたします」

マリナの熱心なお願いに了承する。

「よかった！さすがはヤクモだな」

オレから『請ける』と聞くと安心したのか笑顔を浮かべるマリナ。

「うっ!？」

かわいい……。先輩の笑顔は反則だろ！っと、大事な事を忘れるとこだった!!

「マリナ先輩。そのお話はお請けしますが、こちらにも少々問題があるのでセレナ先輩には誰が警護するか言わないでください。それと当日は少々変装させてもらいます！」

「ん、分かったわ。こちらの話を聞いてくれたのだからそれぐらいなら良いわ」

「どうもです」

「それじゃ、この話は私からジン君に言うておくわ」

「ありがとうございます。それじゃ、オレはこれで」

「そうね。ありがとう」

お札に対して頭を下げ、部屋から出ると教室に向かいカイウスとレグにだけは、さっきの会話を伝えた。

あの二人は相当驚いていたな。でも……カイウスはそんな驚いてるような感じじゃなかったような……

こうして、前日の準備が終わった。

準備は終わり！明日は頑張ろう（後書き）

今回の反省

暇ねん「おゝい、仕事請けちゃって？」

八雲「だ、だって、マリナ先輩があんな顔するし、威圧みたいなものが……」

暇ねん「おいおい。か弱き(?) 女性に対して威圧とか言うなよ」

八雲「と、とにかく！変装すれば大丈夫だ！」

暇ねん「失敗しない事を祈るよ」

八雲「どーも」

暇ねん「それにしてもお前……ここに來た理由を考えてなかったって……」

八雲「あつ、それは……よく考えれば何でこんな急いだんだろうって思っちゃって」

暇ねん「(それは……お前が——だからだろ)」

八雲「ん？なにかいったか？」

暇ねん「ふっ、なんでもないさ。その答えが出たときがゴールかな」

八雲「?？」

暇ねん「次回は、ちょっと変わって八雲ではなくセレナのお話です」
次回『転校生は……だれ?』です。

転校生は・・・だれ？（前書き）

暇ねん「次回予告でも書きましたが、今回はセレナが中心です。時間軸は二学期が始まってから、本編の時間までです」

転校生は・・・・・・・・だれ？

「せーれーな！！」

「ユウナ！どうかしたの？」

二学期が始まり、数日たったある日。私は友達ユウナに声を掛けられた。

「ねーねーきいた？一年生に転校生が来たらしいわよ」

「よく一年生の転校生を耳にしたわね」

セレナは三年生。高校部の上級生であるため、相当のことが無いと下級生の噂など耳に入ってこない。

「当然よ！なんたって転校生は本校ができて初めての日本人なんだから学園中、噂だってるわよ！！」

「日本・・・・・・・・人・・・・・・・・！！」

脳裏に浮かんだのは夏休みの終盤でちゃんとお別れができなかったある男。

まさか・・・・・・・・ね

「どうかしたの？心当たりがあるの？」

「そんなこと無いわよ。それより、その話を詳しく聞かせてもら

える？」

「おお！さすがのセレナ姫も本校初は気になるのね」

「そーゆうことじゃ……………」

「いいわよ！それじゃ、私が知っている事だけ教えるわ」

ユウナは私の話を無視して話を進める。

ユウナの情報では、分かったのはナイト部である、と、一年生である、だけだった。噂交じりの内容なら他にも合ったが……………

その週の土曜日にナイト部を訪れたのだけど……………

「セレナ先輩。スミマセンが転校生は事実ですが日本人では無いですよ」と、ナイト部部長のジン君は私に言った。

ユウナは日本人と言ったのに……………話が噛み合わない

それから数日後には日本人の転校生の噂は聞かなくなった。

「あちゃー、みんなセイクリッド祭やナイト部の大会の事で忘れてるなー」

「……………」

ユウナの話を聞いてる振りをしていてと・・・・・・・・

「セレナ聞ってる？」

「えっ！？あーうん」

「ほんと？」

疑いの目が私に刺さる。こーゆうところは鋭いのよね

「で、なんだっけ？」

「ホラ聞いてない！！だから！セイクリッド祭の時、一緒に周ろうって言ってるのよ」

「ええ。もちろん・・・・・・・・でも、マリナちゃんが私に護衛を付けて思うけど・・・・・・・・いいわよね？」

「もちろん！セレナの身が一番だからね」

笑顔で言ってくるユウナに微笑み返す。

八雲に・・・・・・・・

「・・・・・・・・逢いたいな」

「ん！？何か言った？」

「う、ううん！なんでもない！！」

そう、とユウナは席に戻っていった。

つい言葉に出しちゃった。八雲・・・・・・・・今、何してるかしら？

教室の窓から見る空。この空の下にいる八雲を思っ・・・・・・・・

そんな風に、学校を行き来しているある日。私は耳を疑った。

「いま・・・・・・・・なんて？」

「だから！日本人の名前よ！！ナイト部の大会で優勝を決めたから、簡単に分かったのよ。一年B組のヤクモⅡコウサカ」

八雲が・・・・・・・・ここにいる！？でも、なんで！？あの手紙の約束のため？だったら、なんで逢いに来てくれないの？それにお父様も修二さんも何も言わなかった・・・・・・・・

「って・・・・・・・・おい！セレナ？」

「あっ、ごめん」

「いいけど・・・・・・・・どうかした？なんか元気が無いように見えるけど・・・・・・・・」

「大丈夫よ」

ユウナに気を使わせないように笑って見せる。が、内面ではどうし

て?と困惑している。

お城に戻ってもお父様や修二さんに聞くに聞けない。

「どうしましたか? セレナ?」

「お母様……」

城の前の道でボーっとして立っていると、お母様と護衛のメイとルミナが歩いてきた。どうやら、買い物に行っていたようだ。

「どうかしたんですか? セレナちゃん?」

セレナとルミナたちは女性同士仲が良いので、『姫』ではなく『ちゃん』でよんでいる。

「う……ん。ちょっと、ね」

「無理に話したくないなら別に良いけど、誰かに相談すると気が楽になるわよ。特に……」

「「恋の悩みではね!!」」

「~~~~~っ!」

さっきまで暗い表情が姉妹の言葉で一気に真っ赤に染まった。それを見たお母様もクスクスと笑っている。

「さすがメイね！」

「お姉ちゃんこそ！」

「私達は城に戻りますけど……セレナはどうします？」

「私も帰ります」

真っ赤な顔で三人に付いて行く形で城に戻った。

そして、セイクリッド祭本番。私の学校生活ががらりと変わる事となった。

転校生は……だれ？（後書き）

今回の反省

暇ねん「学校始まると、更新が遅れる……」

セレナ「それでも頑張るのが作者でしょ！」

暇ねん「うー言ってくれるぜ」

セレナ「それより、なんで城の前の道なの？」

暇ねん「……最初は城の内部で、って事を考えていたんだが……」

セレナ「だが？」

暇ねん「城の内部の構造が分からないため書けなくなった」

セレナ「それ、この話を作るときから決まっていた宿命よね？」

暇ねん「うっ！そ、それは、その……」

セレナ「まったく、いつになったら八雲に会えるのかしら……」

暇ねん「姫、八雲にぞっこんですか？」

セレナ「——っ！！」

暇ねん「あー、見てるこっちが恥ずいわ」

次回『セイクリッド祭の始まりと護衛』です。

セイクリッド祭の始まりと護衛

セイクリッド祭当日の朝。教室で最後の準備をしている中、オレはそわそわしていた。

「・・・・・・・・・・」

「セレナ先輩の警護だから緊張してるの？」

「いいよなー！お前が護衛とは・・・・・・・・・・」

「おいおい。オレはそう簡単に考えてねえんだよ！」

そう、下手すれば自分の正体がバレてしまうからである。もっともセレナ本人はとうの昔に知ったんだが・・・・・・・・・・

「ヤクモ君達はこれから学校の見回りに行くのよね？いつごろ戻ってこれる？」

メイド姿の委員長が近寄ってきた。

「うーん・・・・・・・・・・」

腕組して悩むオレを横目にカイウスが変わりに答える。

「いや、僕とレグは午後からだから1時までは、出られるよ。ヤクモは・・・・・・・・・・」

「わりい、オレは多分無理だ」

「何でよっ!？」

手を合わせて言うと、委員長の驚いた声が聞こえる。

「いや、その、オレ、セレナ先輩の護衛を頼まれたからクラスは手伝えなくなった」

「な……そうゆうことは早く言いなさいよ!!なに!?!あなた、セレナ先輩の護衛をするの!?!」

「いや、あまり大声で言わないで欲しいんだが………そうゆうわけだから、この格好だし宣伝はできるだろうからさ」

着ている執事服を前に出すように見せる。

「はくわかったわ。ただし………」

「失礼の無いように、だろ？」

「よろしい」

心配性なんだから、委員長は………

『連絡です。10分後にセイクリッド祭が始まります。皆さん、存分に楽しんでください』

校内アナウンスを聞くと、カイウスに視線を投げた。

「んじゃ、行ってくるわ。それと………コレ、サンキューな」

ポケットからサングラスを取り出す。

変装って言えば、やっぱサングラスだろ！

と言うわけで、貸してもらったサングラスを掛け、手を振って教室を出て行く。その姿を見た三人の感想は……

「「「なんか……ホスト（マフィア・執事）みたい」」」

いや、執事といった人、一応、執事の服装なのだから当然だと思うが……

「あの」

「ん？　なんだ後輩？　今は準備中だぞ！」

3年A組に行くと皆さん熱心に準備中。というより話し合い？　中だった。そんな中、恐る恐る声を出すと一人の男子が目の前に来た。

「いや、ナイト部のものですが、セレナⅡザⅡセイクリッド先輩の護衛のために来たんですが……本人はいますか？」

若干、声が裏返ったかもしれないがお構い無しに言葉を出すと、教室の奥から、ここにいます、と懐かしい声が聞こえてきた。

「……」

懐かしいな。あれから一回も話せなかったからな……
つい口元を緩めてしまったが、仕事の事を思い出し、表情を引き締めた。

「あなたが、今日の護衛をしてくれる方ですね？名前は……」

「高校部1年B組のルークⅡフォンⅡファブレです。よろしく願います。セレナ先輩」

「……こちらこそ、よろしくね」

ニツコリと笑顔で返してくるセレナ。そうそう名前は当然……

偽名だ！ストレートに八雲です。なんて言えるかって！

挨拶を済ませるとタイミングよくアナウンスが鳴り響く。

『これより待ちに待ったセイクリッド祭を開催します！皆さん！一般の人にも来場しますので気品を持って接してくださいね。では……開催ですっ！……』

開催を告げる声と共に学園中から活気溢れる声が地震のように聞こえてきた。

いまさらだが、セイクリッド祭は小学部・大学・専門部もやっているぞ。

「それじゃあ皆、頑張らしましょうね」

「「おう（はい）！！」」

セレナがクラスの中心にいるのか、仕切るように声を掛けた。それに対して、男女共にやる気満々の声が返ってきた。

「それじゃ、ユウナ、ルークさん。セイクリッド祭を見て周りましょうか」

「そうね。あっ！私はユウナ。セレナの友達よ！よろしくね」

「どうも」

こうして、セイクリッド祭が始まった。

セイクリッド祭の始まりと護衛（後書き）

今回の反省

暇ねん「ついに八雲とセレナが接触したか」

八雲「しちまったな。まあ、オレの変装は完璧だから大丈夫だな」

暇ねん「（いやいや、どう見てもルークって外国人の名前だし。お前日本人だし）」

八雲「どうかしたか？」

暇ねん「い、いや……」

八雲「そーいや、ルークって二回目だよな？」

暇ねん「だな」

八雲「オレは短髪が好きだからな」

暇ねん「あっ！オレも！！」

八雲「だよな」

……間

暇ねん「反省しろ！！」

次回『どこに行きますか？セレナ先輩？』です。

どこに行きますか？セレナ先輩？（前書き）

暇ねん「最初に言い訳を。

夏休みの所為で学校がつかなくて更新できませんでした。体育祭の大縄や明日の文化祭の所為でお疲れ中です。いい年して大縄はつらいっす・・・・・・と言う訳で更新が遅れていました」

どこに行きますか？セレナ先輩？

セレナとユウナ先輩の後をテクテク付いていつているのだが・・・
・・・周りの反応が！！

「セレナ先輩！うちの焼きそば食べて行きませんか？」

「先輩！こっちのアイス、どうですか？」

と、歩いているだけで呼ばれる始末である。まー、二人は楽しんでるから良いんだが

「ルークさんは何が良いですか？」

「え・・・・・・？」

「飲み物よ飲み物！私達がおごってあげるわよ」

「ユウナじゃなくて私が、ね」

付いて行くだけだったので、いつの間にか喫茶店風の教室にいた。
机を並べて作ったレジで二人の視線がこっちに向いている。

「いえ。自分の分は自分で払いますよ」

「あら？先輩の優しさを受け取れないのかしら？」

「いやっ、そーゆうわけじゃ・・・・・・」

「ならいいじゃない！で？何飲む」

「・・・・・・・・ファ●タ（グレープ味）で」

セレナの押しに負けてしまい、おごってもらう事になった。

どーも、この人には勝てない

「はいっ」

「どうも」

頭を下げながら缶のファ●タを受け取ると、教室から出てた。ちなみにセレナはミルクティー、ユウナがコ●ラを手を持っている。

「あっ！」

缶を口に当てながら二人の後ろを歩いていると見回り中のジンが前から歩いてくる。

「ジン君。頑張ってるわね」

「セレナ先輩、ええ、まあ、それなりの祭りですし。そちらは楽しんでますか？」

「ええ。とつても！」

笑顔で答えたセレナをみたジンは口元を緩めたが、すぐに引き締め、オレを見た。

「ルーク。しっかり、先輩を護衛しろ」

「わかってます」

ジンには前もって偽名を教えてある。

「では、俺はこれで」

少しだけ頭を下げ去っていく。その後はセレナが行きたがっていたお化け屋敷や的当てを楽しむと、タイミングが良いのか悪いのか自分のクラスの前に来た。

「そーいや、ルークのクラスってここよね？」

中にいる執事服を見てなのか、オレに聞いてくる。

「ええ。入りますか？セレナ先輩？」

「そうさて貰おうかしら」

考える素振りも見せず答えたセレナを見て、オレは、廊下で待つように言くと、教室に入る。

「どうぞ」

二人を教室から呼ぶ。

「「いらっしやませ。お姫様」」

執事服を着た男子が並んでお辞儀をする。

先に教室に入り、皆に教えたからだ。まー、教えなくても客にはや
ってるんだよな・・・・・・・・

「どうぞこちらに」

二人の前に立ち席に誘導する。他の客たちもセレナとユウナに視線
が向く。

「ご注文はどうしますか？」

本格的なメニューを見せると、二人はメニューの多さに驚きつつ、
迷っている。

「お勧めは何なの？」

「そうですね・・・・ショートケーキとコーヒーですね」

「なら、私はそれで！セレナは？」

メニューを決めるとユウナが向かいの席に座っているセレナに問い
かけた。

「わたしは・・・・・・・・ルークさん、これはなんですか？」

メニューを指差す。指差してある場所には「買ってからの楽しみ」
と書いてある。

「ああ、それはクラスの皆で決めた物で・・・・市販の物ではなく
自分達で作ったものです。味はクラス皆が保障します！少々時間は

掛かりますが・・・・・・・・」

「そうなの・・・・・・・・それじゃ、コレにするわ」

少し悩んだのか分からないがセレナは、コレを頼んできた。

「かしこまりました。少々お待ちを」

会釈しながら下がると、裏方にいる委員長の場所に向かった。

教室の三分の二はお客様のイスにテーブル。残りは机で仕切られたレジなどである。

だが、問題が起きた。

「セレナ先輩に出す物をあなたが作りなさい！」

委員長にビシッと指を向けられた。

「あなたって・・・・・・・・オレえ!？」

「あなたが一番上手なのだから、当然でしょ！セレナ先輩に一番の物を出さなくてどうするのよ!!」

「・・・・・・・・」

絶句・・・・・・・・

なまじ料理が上手なのも考えもんだな・・・ははは

こうして、執事服のサングラス男が急いで教室から一階にある調理室に向うのであった。

どこに行きますか？セレナ先輩？（後書き）

今回の反省

暇ねん「更新遅れてすいませんでした」

八雲「まったくだな」

暇ねん「しゃーないやろ！休みボケでいつも以上に疲れるんだよ」

八雲「あっそ。それより、調理室なんて設定あったか？」

暇ねん「今作った。気にすんな」

八雲「・・・・・・・・・・」

次回『あれ？なんでオレだけ「さん」付け？』です。

あれ？なんでオレだけ「さん」付け？

「何でオレが・・・・・・・・・・」

文句を垂れながらケーキをトッピングしていく。その姿は実にかかしなものである。執事服を着て、サングラス。その上にエプロンを付けている自分は・・・・・・・・実に異様だ。

「こんなものかな・・・・・・・・」

誰に聞くわけでもなくオレは目の前にある小皿に乗っているものを見た。小皿に乗っているのは、市販で売ってそうなほどのケーキである。作ったのはオレだ。

時間にして5〜8分。えっ？なに？時間がおかしい？そんな早くにケーキは焼けないだって？たりめーだろ！これは小説だぞ！大人の事情だ！

ちなみにケーキはチョコレートケーキである。それを手に取り、急いで教室に戻った。

「おまたせしました」

教室に戻るとセレナの前にチョコレートケーキを置き、マグカップに紅茶を注いだ。紅茶は教室に合ったものを使わせてもらった。

「ありがとうございます」

「どうぞ・・・・・・・・って、ユウナ先輩は？」

「ん……ユウナなら、教室にお財布を取りに要ったわ。ポケットに入れたお金だと足りなくなったとか……」

小さくケーキをフォークで切っては口に運んでいく。食べている表情を見ると、味には問題ないようだ。

「ヤ……ルーク！ちよっときて」

「なんだあ？」

委員長がレジの後ろから手招きと一緒に呼んでいるのを見てセレナに断りを入れてから足を向けた。

「予定より早くカイウスとレグが見回りに行ってしまったの。そのため、人が足りないのよ。ヤクモはいつまでここにいられる？」

「いつまでって……ユウナ先輩が戻ってくるまで、かな？」

時計を見ながら口を開く。時刻は12時を過ぎており、後15分で1時である。

「できるだけ良いから手伝って！」

「……できる限りでな」

そこまで言われてできません。なんて言えるかって！

表情を緩めると、委員長の頭に手を当てる。

「へ？」

突然頭に手を当てられ困っている委員長を見て笑うオレ。

「んじゃ、いつてくるわ」

手を離すとレジから出て、まずはセレナに向かった。

「先輩。すいませんがユウナ先輩が来るまで教室の手伝いをしたいのですが……」

「いいわよ。ルークさんのクラスなのだから」

笑顔で返してくるセレナに頭を下げ、接客を始めた。

「あらー、ルークって意外と真面目なのね」

「ユウナ……いつの間に？」

後ろからの声に驚きはしたが、すぐになれた。

「いまさっき」

「まったく……それより真面目って、どーゆうこと？」

ユウナが席に着くとセレナは今聞いた事を聞き返した。ユウナは接客しているヤクモを見ながら声を出した。

「だって、今までの護衛役の人ってセレナのことだけだったじゃない？自分のクラスの出し物は知らない振りってやつで」

「ルークさんはそーゆう人じゃないわよ」

最後の一口を口に運ぶ。

「んーセレナって、ルークと知り合いなの？何か知ったような口ぶりだけど？」

「ん？まー知り合いといえば・・・知り合いなのかしらね？」

「なに？その疑問系？」

フォークを小皿に置くと、セレナはヤクモに視線を向ける。

「ふふっ、秘密よ」

「あっ！ずるーい！親友には教えなさいよ」

「んん？」

ひと段落してため息を吐くと二人の楽しそうな声が聞こえてきた。
オレは二人の方に足を向けた。

「先輩達、満足できましたか？」

「「ええ、とっても」」

「ありがとうございます！これからどうしますか？」

時間は1時5分前

「私はどこでも良いわ。ユウナは？」

「そうね……屋内広場に行ってみない？あそこで面白いものがあるって先生言ってたし！」

「そうね……それじゃ、行きましょ！ユウナ、ルークさん」

教室を出て、オレたちは屋内広場に向かっていくと、またも周りの生徒が客寄せならぬ姫寄せをしに近づいてくる。

なれたようにセレナは生徒を誘いを断る。だが、それを見ていて、ふと、不思議に思う事があった。

なんでオレはルーク『さん』で、ほかの奴の名前を呼ぶときは『君』なんだ？ジン部長も『君』だったし……？

疑問に思ったが口にはせず、オレたちは屋内広場に着いた。

あれ？なんでオレだけ「さん」付け？（後書き）

今回の反省

暇ねん「久しぶりに書いたから、文章がいつも以上に雑だ」

八雲「サボり癖がついたな」

暇ねん「うぐっ！」

八雲「これからもこんな感じだったら読者がいなくなるぞ？」

暇ねん「う・・・うう・・・」

八雲「まー頑張るこったな」

暇ねん「が、頑張るさ！！やれって言うならやってやるさ！！」

次回『いやいや、屋内でこれはないだろう！？』です。

いやいや、屋内でこれはありえないだろ!?

屋内広場のドアの前に着くと二人の生徒に呼び止められた。どうやら大学・専門部の生徒らしい。

「おや? セレナさんじゃないですか?」

「ええ。中には入れないんですか?」

「いや、中の出し物のためドアを締め切っているのさ。中に入るのならコレを」

先輩が三枚のチケットを箱から取り出し渡してきた。受け取り、チケットを見てみると『プラネタリウム』とでかでかと書かれていた。

「これは……まさか屋内広場でコレをやってるんですか!」
「?」

チケットを見て驚き先輩を見ると、満面の笑みで肯定してきた。

「オレたち、大学部の三年なんだが、ちょっと学年で力をあわせて作ろうって事になってプラネタリウムを作る事になったんだ」

「おもしろそー!」

「ユウナはしやぎすぎよ」

横で目を輝かせるユウナにセレナは母親のように言う。

「それじゃ、少し始まっているが、宇宙の神秘をどうぞ堪能あれ」

二人は屋内広場のドアを開けるとオレたちを招き入れた。

中に入るといつも使っていた屋内広場が、別の空間のように感じる。当たりは真っ暗とまでは行かない暗さで、広場の真ん中には天井に天体を映し出す機械が設置されており、その周りを囲むようにパイプイスが丸く並べられている。

中にいる人のほとんどはカップルや親子である。

「二人とも座ろうよー」

あいている席を見つけ、ユウナが手を振っている。

「は、はい・・・・・・・・・・」

「こーゆうおもしろい物には行動が早いよね」

「はは」

ユウナの横にセレナ、そしてオレと座ると天井に視線を向け映し出される天体に目を奪われていく。

そーいや、オレってプラネタリウムを見るのは初めてだよな・・・・・・

ふと、天体を見ながら思っていると横から本当に小さく声が聞こえてくる。セレナの声だ。

「・・・・・・・・・・も」

「？」

一言目は聞き取れなかったが、次の言葉ははっきりと耳に届いた。

「八雲・・・・・・・・・・でしょ？」

「っ!？」

ドクンと心臓の音が大きく聞こえた。当然だ。名前を・・・・・・・・八雲の名を数ヶ月ぶりに呼ばれたから。だが、それだけじゃない。一番の原因は・・・・・・・・

バレた!？なんで？いつ？

「八雲・・・・・・・・・・答えてくれないの？」

隣を横目で見るとセレナは天井を向いたままだった。それでも言葉はオレに向けられている。

「それとも、答えられないの？」

「オ、オレは・・・・・・・・・・」

どうする？言うべきなのか？それと・・・・・・・・

脳裏に浮かぶのは三ヶ月前の親父との電話での話し。

『さすが我が息子だな。条件つてのは……姫さんとは絶対に合わない事。それが条件だ』

『なんで?』

『考えても見ろ! いち庶民のお前が姫さんの婿候補だと知れたらどうする』

『黙っていれば……』

『それもノーだ。まーようするに婿選びのルールって物があるんよ』

『そっか』

「……」

答えが来るのを待っているのかセレナは黙っている。オレは電話で話を思い出し、口を開けようとして閉じる。そして……また口を開けた。

「あゝセレナ……先輩。オレはルークですよ。ルークⅡフォンⅡファブレ」

「……そう、よね」

セレナの声が震えている。その声にズキッとオレに突き刺さる。だけどオレはまだ口を閉じない。

「そうですよ。今はルークですけど、近いうちに先輩の言う人に逢えますよ」

「えっ!？」

「八雲、でしたっけ？大丈夫。いつか会えますよ……………」

天井の天体を見ながら言う。

「そうね…………待つしかないさそうね」

「そうですよ」

セレナの声も普段道理でつい、笑みを浮かべてしまった。

こうして、セイクリッド祭は幕を閉じた。

いやいや、屋内でこれはありえないだろ!?(後書き)

今回の反省

暇ねん「お久しぶりです。皆さん」

八雲「来たかサボリ魔」

暇ねん「ひどッ!!」

八雲「事実だろ」

暇ねん「.....」

八雲「それにネタ切れだったろ？」

暇ねん「.....」

八雲「それに新作も考えてるし」

暇ねん「.....」

八雲「ダメダメだな」

暇ねん「うるせーっ!この小説とブリーチはやり遂げてみせる!それがオレの忍道だ!!」

八雲「忍道だ!じゃねーよ!」

次回、新章突入『君と同じ候補の一人だ』です。

第三部 君と同じ候補の一人だ

セイクリッド祭が無事に終わり季節はいつの間にか12月。日本と同じようにセイクリッドは寒い。

「は〜」

いつもと同じようにナイト部が終わり帰り途中です。冬のせいで外は暗く、ため息が白く見える。

ここで少し、今のオレとセレナの状況を報告しよう。

まず1つ、セイクリッド祭が終わってから極たまーにセレナやユウナ先輩とすれ違うが、「ルーク」として接している。カイウスやレグも合わせてくれている。

2つ目は、すれ違う以外は何の発展もしていないので期待するなよ……以上！報告終わり。

「ん？なんか……脳内で説明が入ったような………？」

そーいや、ネタも出てこないな………

などと、作者のダメさを一瞬考えて忘れる八雲だったとき。

「ヤークーモーーーーー！！」

「んん？」

聞いた事がある声。だが、思い出せない………女性の声。だ

れだっけ？

立ち止まり思い出そうとしていると、思い出すより早く声の主が背中をポンと叩いた。

「あっ、メイさん！おひさしぶりです」

声の主はメイだった。よく考えてみれば、初めてセイクリッドに来た日以来だな……

「久しぶりっ！どうしたの？何してるの？こんな時間に」

「学校……部活帰りですよ。メイさんこそどうしたんですか？」

「ん？わたし？私は……」

「ボクのためにメイリスさんはこんなところにいるんですよ。八雲君」

メイの言葉が男性の声に変わった。と思ったが、メイの言葉を男性が遮ったようだ。

「!？」

メイの後ろから同年代の男子が出てきた。パツとみ、よい家柄だと思ってしまう。何故そう思うか？だって、髪の毛がライオンをイメージさせる金色のロン毛だぞ！

「君は？てーか、どうしてオレの名前を？」

「失礼。ネック王国第一王子のサバナⅡネックだ。分かっているだ

ろうが、君と同じく候補の一人だ」

「サバナ・・・・・・・・ネック・・・・・・・・」

はっ・・・・・・・・ははは・・・・・・・・話しが急展開になってきたぞオイ！？

驚き、放心状態のオレに対してサバナは口元を緩ませている。

「それじゃクモ、私はサバナをお城に連れて行くから。またね」

「失礼。八雲・・・・・・・・あつ、そうそう」

「な、なんだ？」

オレの横を通り過ぎたサバナが、足を止めこちらに振り返る。

何となくだがオレも今、カイウスたちと同じように心が読めるかも・・・・・・・・

「明日から、同じ学校。それもボクは2年生だ、よろしくな」

「マジか？」

「ふっ、マジだ」

笑って言い返すサバナは手を振って城のほうにメイと一緒に歩いていった。

のこったオレは・・・・・・・・

「ハーーーーー」

ため息しか出てこなかった。

第三部 君と同じ候補の一人だ（後書き）

今回の反省

レグ「よう、久しぶりだな」

暇ねん「おろ？なぜにレグが？」

レグ「なぜに？じゃ、ねーだろ！出番が無いんだよ！！」

暇ねん「あーっと」

レグ「暇で暇でつまんねーんだ」

暇ねん「大丈夫だ！次からカイウスと一緒に出るから」

レグ「出さなかったら下ろすぞ！」

暇ねん「まっかせなさい！」

次回「サバナや新しい行事でややこしくなってきた」です。

サバナや新しい行事でややこしくなってきた

次の日の学校。いつもどおり変わらない・・・訳が無い！！そりゃ、そーだよな。二年生にネック王国の第一王子が転校してきたわけだから。

「はーはー」

「またため息。どうしたの？」

机に体を乗せ、ダラーんとしながらため息をするオレにカイウスが心配そうに声を掛けてきた。

「ん、いや・・・別になんでもないんだが」

「そう？それなら良いんだけど」

カイウスにサバナの事を言ってもどーしよーもねえしな

「おい！カイウス、ヤクモ」

「レグ？久しぶりの登場だな」

「うっせーよっ！」

机から体を起こしレグの方に体を向けた。

「で、どうかしたの？」

「どうかしたの？じゃ、ねーぞ！来週の部活で隣国のブレイブ大学が練習試合で来るらしいぞ！」

「ブレイブ大学……どっかで聞いたような……」

名前を聞いてもピンと来ないオレに、隣からカイウスが言葉を出してきた。

「ブレイブ王国の大学。レーベル、先輩がいる所だよ」

「んな！？」

事の重要さに気付いたオレの口は開いたままだった。それに追い討ちを掛けるかのように委員長がツカツカと近づいてきた。

「三人とも！！」

いつもと違った声の大きさにオレたちは肩をビクツとしてから、そちらに視線を向けた。

「委員長？どうしたの？」

最初に口を開いたのはカイウスだった。聞かれた委員長は丸めて持っていた紙を広げてオレたちに見せてきた。

「なにになに？」

——クリスマスパーティー開催決定！！——

紙の真ん中にでかでかと書かれていた。

「「クリスマスパーティー!?」」

「そう、クリスマスパーティーよ」

「それがどうかしたの?」

「コレ、当然だけど学園行事よ……その意味が分かるかしら?」

三人で考えていると頭の中に一つの答えが出てきた。

「ああ! 25日は「冬休みじゃん!!」………レグ、言葉を遮るなよ」

「わりいわりい、だが、これは冬休み返上してパーティーをやるって事だよな?」

「その通りよ」

がっくりと膝を床につけるレグ。

オーバーだなあ

「オーバーなんかじゃねえよ!!」

「だから心読むなって」

おなじみの受け答えをしてレグが、続きを口に始めた。

「お前なあ、唯でさえ休みが少ないのに、それがもっと少なくなるぞ！だいたい、なんでやるんだよ？去年までやらなかったことを？」

「今年は、セレナ先輩、最後でしょ？来年になるとすぐに卒業だからって、三年生と先生方が考えたらしいわよ。生徒会長も認めたらしいわよ」

「んー、セレナ先輩のためならしょうがないか」

「いいんだ!？」

アレだけ文句言ってたのが一瞬でOKになったよ!？

「レグの言うとおりだね。先輩は卒業したら国のことを考えて、婿を決めないといけないから当然自由にできないからね」

「あ・・・・・・・・」

そっか、セレナも時間が無いのか・・・・・・・・

「んじゃ、いっちょ頑張りますか」

「やる気だね、ヤクモ」

「先輩には良い思い出を作って卒業してもらいたいからな」

「さすがは、ルークだな」

「い、いつの話だよ!」

レグにちやかされながらもオレたちは精一杯やることを決めたのだ
った。

サバナや新しい行事でややこしくなってきた（後書き）

今回の反省

暇ねん「サボってました」

八雲「しってたよ」

暇ねん「ちよっとネタ切れだったからさー」

八雲「しってたよ」

暇ねん「他の作品の設定を考えてたからさー」

八雲「しってたよっ！！たくっ、いつになったら完結するのやら・・・」

暇ねん「さー？」

八雲「う”お”お”お”お”い”！！！」

次回「レーベル率いる、ブレイブ大学ナイト部、来る！」です。

レーベル率いる、ブレイブ大学ナイト部 来る！

クリスマスパーティーの話しを聞いてから一週間。今日は、隣国のブレイブ大学との練習試合と合って、屋内広場にはいつものメンツ以外の人が10人ちよつといる。

「はー、大学生だけあってガタイが良いな」

ストレッチをしながらブレイブ大学の選手を見ている。

あの金髪ツンツンヘアーなんかゴツツイわ

初めて見た選手に対してこの感想。あかんなく

「それはそうと、ヤクモは彼が気になるんじゃないの？」

「彼？」

後ろで同じようにストレッチしているカイウスに振り向く。カイウスはオレを見て“あっ、違った”と呟き、言い直す。

「彼“ら”だったね」

「彼……ら？」

「レーベルとサバナ先輩の事だよ！」

依然として分からないオレに痺れを切らしたのかレグが口調を荒げと言う。言われて広場の隅で話し合っているサバナとレーベルに視

線を向ける。

「ああ！てーか、何でそんな機嫌悪いんだ？」

今の口調でも分かるが、レグの顔には“不機嫌です”と大きく書かれているようだ。

「たりめーだ！！レーベルの野郎を今日こそぶっ飛ばす！！」

バシッと手に拳をぶつけるレグに言葉が無い。

「説明になってねーし」

「さつき、廊下ですれ違った時……」

カイウスがそっと近づき小声で教えてくれる。

「レーベル先輩がね、本人にはその気が無かったんだろうけど、言い方が気に障ったらしいよ」

「言い方って……何言われたん？」

『今日も頑張ってくれよ』

「あーーーーー」

簡単に想像ができるな。レーベルは人を馬鹿にしすぎるからな

またも、レーベルとサバナに視線を向けると今度は向こうもこちらに気が付いたらしい。サバナが手を振っている。簡単に言えば“こ

「うちに来い」だろうな。

「言っておくがサバナは見学でただけだ。ナイト部では無いぞ。
つか、レーベルがメチャクチャ嫌な顔してるよ。ハハハ……」

「久しぶりだな、八雲」

「どーもッス。今日はオレたちの相手もしてくれるんですか？」

「時間が合ったらな」

皮肉も少し入れた言葉をレーベルは簡単に受け流す。

「そーいや、二人は知り合いだったんだ」

さっきのを見てみるとレーベルとサバナは仲がよさそうに見えた。
が、レーベルの表情は何ともいえない顔だ。

「うーん、仲は良いが……」

「いいが……なに？」

言いにくそうにサバナは頬を掻いた。

「レーベル王子は負けず嫌いだからな、この前のことを根に持っているんだ」

「この前のこと？」

ますます分からない

「貴様はいらん事を口にするな」

「はいはい」

面白そうに口を緩ませて話を終わらせるサバナ。だが、レーベルの話は終わらなかった。

「君にも借りがあるからね。今日はその借りを返させてもらうさ」

「望むところです」

お互い相手の目を見て言い切る。その姿を横からサバナが面白そうに見ている。

「レーベル、試合をやるぞ」

「ああ」

チームメイトに呼ばれ、レーベルはサバナには挨拶をして行ってしまった。残ったオレたちは少し話をして練習に戻った。

練習試合は主に大学部の先輩だけである。特例として高等部のジン先輩とウェル先輩が試合をしている。

「見ものだな」

「そうだね」

レグとカイウスが見ている試合はルージ先輩とレーベルの試合だった。

一見、ルージ先輩が攻めているように見える展開だが明らかにレーベルは狙っている。攻撃が止む一瞬を。

「かー、相変わらず堅いな」

「貴様もなかなかの太刀筋だが……甘いな」

ルージの太刀筋を呼んだレーベルは避けると同時にルージの真横を取り、手首に木刀を振り下ろした。

「そこまで!!」

審判が声を上げた。今のでルージが木刀を落してしまったからだ。

「さすがは世界最強と言われるだけのことはあるな」

「褒め言葉として受け取っておこう」

「俺は皮肉は言わないよ」

結果を見るとレーベルの圧勝だった。

「無駄が無い動き……お前、良くアレから一本取れたな」

「うっ」

確かに。あの時は『五月雨』が合ったから良いが、今回はバレてるし……勝てないかもな

考えているといつの間にか俯いて落ち込んでいた。そしたらいつの間にか周りがざわついている事に気がついた。

ん？ どうした？

そう思って顔を上げるとレーベルの木刀の先が自分に向けられている事に気付いた。つまりこれは……

「もしかしくなくても……勝負しろってことか!？」

どーりで周りがざわつくわけだ。レーベル王子に逆指名されるんだからな

どーしようか悩んでいると頭天边から痛みが落ちてきた。

「痛った！何だよっ!？」

振り向くとレグが木刀で脳天を叩いていたのであった。叩いた本人は依然として機嫌が悪いのかと思ったが、意外とそうでもなかった。逆に楽しそうに見える。

「もう一度勝ってこいよ」

「は?」

「だーかーら、今度は観客がいる中でアイツに勝って来いって言うてるの」

脳天を叩いた木刀の刃先を握って、柄の部分をオレに向ける。それを口を開けて受け取る。

「おう！ちよっくら勝って来るわ」

その言葉にまたも周りがざわつく。当たり前だ。世界最強と言われる相手に『勝って来る』と言い放つのだから。

周りを気にせずオレはレーベルの前まで進み、足を止めた。

「勝っちゃってもいいっすよね？レーベル先輩」

「できるものならな」

そしてオレは――構えた。

レベル率いる、ブレイブ大学ナイト部 来る！（後書き）

今回の反省

八雲「変なところで切るな」

暇ねん「だよな」

八雲「しかも何この負けフラグ。フラグ立ちすぎだろ！」

暇ねん「なぜ負けると？」

八雲「勝っちゃってもいいっすよね」って、おもくそ負けキャラの台詞だし」

暇ねん「そーだったらどんまい」

八雲「マジかよ……………」

次回『だから話がややこしくなるって！』です。

だから話がややこしくなるって！

合図と同時に先手を取ったのはオレだった。

大方、先手は譲ってやろうつつう人情・・・違うな。余裕だな。だ
ったら――

「お言葉に甘えるぜ！！」

初撃、木刀を横に振るうが、これは簡単にとめられる。レーベルは
オレの力の勢いを殺すと攻めに転じてきた。

「攻めさせてもらうぞ」

その言葉どおりレーベルは休むことなく撃ち続けてくる。オレは木
刀を受け止めているが明らかに手加減を感じさせる力だった。

「もうちょい力入れないと・・・弾かれますぜっ！！」

手加減されていると分かると、ムカツと来て木刀を弾き、攻守を逆
転させた。

「それはすまない。では、もう少し力を入れようか」

「負けたときの言い訳なんか作らないでくださいよ？」

「減らず口が」

「どっちが？」

互いの木刀を中央でぶつかり合い、音が屋内広場内に響き渡る。周囲の目は間近で見るレーベルの剣技に釘付けである。

数発打ち合い距離を取り、また距離を詰めて打ち合いの繰り返しが数回起こる。

「一つ、貴様に聞きたいことがある」

広場に又も音がこだまする。

「いったい・・・なんですかつ!？」

口を動かしながら、体を動かすオレたち。その時、レーベルの口元が少し笑っているように見えた。

「セレナ姫とはどうなんだ？」

「はあっ!？」

思わず大振りしてしまった。

「なんだそれ? 動揺させるつもりか」

「馬鹿を言うな。貴様など一瞬で倒せる・・・だが、此処はセレナ姫が通っている学校だろ? 興味も出てくるさ」

「・・・・・・・・やっぱ、アンタもセレナのことを――」

「そんなことはいい! で、どうなんだ?」

「どうって言われても……」

レーベルの木刀を体を回転させて避け、避け終わると同時に木刀を振るう。だが、コレも止められる。

「どんな事でも良いさ。学校での評判とかでもな」

「……」

やっぱ、こいつの方がセレナにぞっこんだろ？それにしても……
・・・レーベルの方からオレに聞いてくるとわな。少しはオレの事も

つい口元を緩めてしまう。が、背中に激痛が走る。木刀が直撃したのだ。

思って無いわな！

口元を引き締めると、答えを返す。

「そーだな、オレも学校ではあまり話さないが、全生徒の憧れであり、この学校の誇り……かな」

「誇り？憧れは分かるがなぜ誇られている？」

「あの人はな、オレが転校してくる前に生徒会長をやってたんだ。で、その話だとあの人は今までの人では、とても思い付かない事を考え、やって見せたらしいぜ」

「それで・・・誇り？　なのか」

分からないといった表情をレーベルは向けてくる。

「それだけじゃないぜ。他にも困っている人には手を差し出し、助ける。当たり前前のことを当たり前前のようにやっている。だが、オレたちにとっては難しい事だよな」

二人の間ではぶつかり合う音が幾度と無く聞こえてくるが、オレには・・・いや、レーベルも聞こえてないと思う。

「オレだったら助けたくても体が“いやだ”つつって動いてくれな。多分、オレだけでなく他の奴らもな。まあ、数名ぐらいできる奴がいるかもしれないが・・・」

「それは・・・」

「アンタも前者の分類だろ？　いや、悪いわけじゃねーよ。

だって人は、助けたくても“助けられるかな？”“他の人がやってくれるさ”と自分勝手に思うからな。

だが、セレナはセレナ姫にはそれが無い。セレナ姫にあるのは“助けないと！”“自分がやらないと”つつう気持ちだけだ。まっ、正義感が強いのだ。

だからこそ、オレたちを・・・いや、この国を正しく導ける人物だと知っているから、誇りなんだよ」

「確かに・・・私も幾度かそんな場面に出くわし・・・その度に目を背けた」

そして——打ち合いが止まった。勝敗がついたわけではない。

互いに距離を取って構えている。

「貴様は……姫のことを良く知っているのだな」

「ああ？んなことねーよ。ただ……アンタより少しだけ彼女と過ごした時間が多かったっつう話しだ」

「そうか……」

「そうだ」

「では話は一旦終わりだ……此処からは私の……いや、俺の全力を持ってお相手しよう」

レーベルの構えが……変わった！？木刀の先を上から下へ向けるように構え、先の部分に左手を添える構え。

「しかも、微妙に口調が変わってるし。でも……」

構えを取る。

「嫌いじゃないぜ……こーゆう展開！」

「いくぞ（ぜ）っ！！！」

互いの刃が再びぶつかり合っている中、屋内広場のドアが開き、数人の人が入って来ているのにオレもレーベルも気付かなかった。

だから話がややこしくなるって！（後書き）

今回の反省

暇ねん「来たよ来た！来ました」

八雲「なにが？」

暇ねん「サボってた分、ネタができた」

八雲「おー！いいことだが、サボってたとかストレートに言ったな、おい」

暇ねん「明日も更新できると思うぜ！ただ・・・」

八雲「あー旅行の件な」

暇ねん「そゆこと。詳しくは『活動報告』を確認してください」

次回『決着だ！！！！レーベル 刻んでやるぜオレの道を』

決着だ!!! レーベル 刻んでやるぜオレの道を(前書き)

八雲「題名は分かる人には分かる、マンガ“エ●ギア”のアギトVSアキラの台詞を使ったぞ。それと、今回は少し・・・いや、かなり、ぶっ飛んでいます」

決着だ!!!! レーベル 刻んでやるぜオレの道を

レーベルは構えを変えずに下に向けてた刃先を目線の高さまであげる。

オレの思い過ぎだと良いんだが……

オレの脳内では“あの構え”を見て連想できるものが一つある。

考えていると、今度はレーベルの方から攻め始めた。まだ、どちらも射程内に入らない場所のはずだがレーベルは動いた。

木刀を持つ右腕を目一杯伸ばし、射程を延ばしてきた。

コレを間一髪で避けるが、その攻撃スタイルは“片手一本突き”もつと言え——

「牙突……かよ」

どこの漫画ですか!と、叫びたくなるぐらいの驚きを押し殺した。

「しかも……射程が長い。リーチの差で負けてるな」

「続けていくぞ」

言うより先にレーベルは動き始めた。一旦距離を取り、再び“牙突”を繰り出してくるがオレだって馬鹿じゃない。

「同じ技でオレを仕留められると思うなよ」

速度はあっても、直線なら避けるのは簡単だ!!

サイドステップで避け、反撃しようとしたが、その前に横腹に痛みが走った。

「があ!？」

何が起こった!? 一旦距離を……しまった!

距離を取ろうと後ろに下がったは良いが、レーベルは構えを完成させていた。

「これで………終わりだ」

神速の突きを真正面から受けたオレは、意識を無視して体が崩れた。当然、防御も間に合わず木刀の刃先が胸を打ち抜いたんだ。息がうまくできない。

「はっ………はっ………」

「おわりか？」

いつもの表情だな………オイ!

「だ………れがっ!」

木刀を杖にして何とか立ち上がるが、足が震えている。

「レーベルの奴があそこまで本気出すとはな」

「予想外だったよね」

試合を見ているカイウスとレグが思わず息を呑む。

息を呑んだのは二人だけではなく、観客全員もそうである。めったに見れないレーベルの本気。その上、初めて目にするレーベルの構え。お金を払ってでも見たい試合である。

「それにしても八雲の奴、レーベルに何されたか分からないだろうな」

「だな。おそらく八雲の奴はサイドステップのところから分からなくたったな」

ジンとウエルは冷静に今の試合を分析している。

「ウエルはちゃんと分かっているのか？」

「当たり前だろ！って、言いたいところだが、やられる側だったら分からないだろうな」

「ああ。八雲はレーベルの牙突をサイドステップで避けた。だが、レーベルにとってはそれも計算内だった」

「ああ、どんな人間でも自分の行動には少しでも意識が向いてしまう。その瞬間を狙って、レーベルは体を回転させ、遠心力で力が乗った木刀を横っ腹にヒット！」

「そして、パニックになった八雲は冷静になるため距離を取ろうとしたが……牙突の餌食となった。
ふっ、さすが世界最強と謳われるものだ」

「だな」

ジンは腕組しながら冷静にだが、世界のレベルに冷や汗を掻いている。ウエルも頭の後ろで手を組んでいるが、こちらも世界のレベルに脅威を感じた。

「はぁ……はぁ……」

何されたかわからねえ……もう一回仕掛けてみるか？無理だ！！
体が耐えられない

足の振るえが体のダメージの大きさを物語っている。

いや、まてよ。牙突を避けてからの攻撃は多分、普通の“斬り”だ。
それを何とかすれば……

「考えている暇は無いぞ！」

「ちいっ！イチバチだ」

差し迫ってくる木刀に対して横ではなく縦に体を動かし射程圏内に無理やり入り込んだ。

「バ、バカな！」

レーベルの真正面。レーベルの木刀は前に突き出されており、身を守る事ができない。

「これで・・・・・・・・どうだあっ！」

両手で柄を持ち、相手の腹目掛けて木刀を振る抜いた！つもりだった。

「き・・・・・・・・え・・・・・・・・」

だが、オレの目の前には離れたところで試合を見ている観客しか見えない。

レーベルがいない・・・・・・・・！

あまりの出来事に又もオレの頭ん中はパニック状態である。

「“横”ではなく“縦”で避けて見せるとはな。さすがだ」

声は後ろから・・・・・・・・相手を称えるように聞こえてくる。もちろんレーベルの声だという事も分かっている。

「爪竜連牙・・・・・・・・とっさに判断だったが、間に合ったな」

「くそっ！」

一目散にその場から離れる。が、足が思うように動けず木刀一本分の長さで立ち止まる。

「どーやってよけたんすか？」

「ふっ、貴様が懷に潜り込んで振る瞬間にオレは木刀を離し、回転・
・・・バスケで言うロールの動作をして貴様を抜く形で後ろを取り、木刀を手にした。もちろん、木刀は地面に落ちていないぞ」

そりゃ、落ちたらあんたの負けだからな。じゃなくて！問題はそこ
じゃなく、あのコンマ何秒かの間にそんな動作ができてたまるかよ
！それこそ、神速の電気信号インパルスだぞ！？

「ここはアイ●ールドの世界かよ」

と、冗談を口にしてみるが体はボロボロ。 はー、明日は筋肉痛確定だな

「だけど・・・ここで勝てるのなら安い代償だぜ」

「独り言を言っている場合か？」

牙突の構え・・・それに対する技といえば“コレ”しかないで
しょ！

「「・・・・・」」

無言のままジリジリと距離を詰めるオレたち。だがここで気付くべきだった。この“距離”に問題があることに。

「うおおおおお！！」

「はあああああ!!!!」

気付いてなかったのか距離が近い! コレなら牙突の威力は半減する・
・
・
・

「牙突の射程範囲が長距離だけだと思うなよ」

「牙突・・・・零式っ!!」

近距離からの一本突き! ? 上半身の力だけでやって見せるのかよ!!

「この・・・・チートやろおが!!」

五月雨を打ったら負ける! それを超える技を・

「突きには突きだ! 車軸の雨!」

レーベルの片手一本突きに対してオレは両手で木刀を突き出すように構え・・・・ぶつかり合った。

そして——オレは・・・・オレたちは互いに弾き跳んだ。

・
床に落ちる音が二つ聞こえる。一つはオレ。もう一つは・・・・

「そこまで!!」

試合を終わらせる合図が屋内広場に響き渡る。声の主は久しぶりに登場するブラウン先生だ。

えっ？ブラウン先生って誰？って言う人は26話の『うわ、もしかしてオレ浮いてる？』を読み直し

あれ？オレ、負けたのか？

いつの間にか目の前が真っ暗になっているので驚いたが、それもそのはず。目をつぶっているんだから。

「…………お…………おい……………起きろ……………」
八雲「!!」

「ハッ!!」

良く知った声がオレの名前を呼ぶのに気付き目を開けると、カイウスとレグだけでなくジン・ウェル・ルージが心配しているのか喜んでいるのか分からない顔してオレの顔を覗き込んでいる。

「な、なに？」

後頭部に痛みを感じ手で押さえながら体を起こすと、反対側でレールも同じような格好をしている。

「どうやらこの勝負は引き分けのようだ」

「引き……………分け」

「どうした！打たれすぎて頭がいかれたか？」

勝負の結果をレーベルから聞きポカンしているとレグが非常に失礼な事を言ってきたがしょうがない。だって・・・あのレーベルが笑っているのだぞ！？今世紀最大のアンビリーバブルやで！！

「どうした？オレの顔に何か付いているか？」

「い、いや。なんでもないんだが・・・・・・・・」

あんたの態度が180度変わったことと、笑った事にビクリして
るんです！とは言えず・・・・・・・・

こうして、今回のブレイブ大学との練習試合は無事終わった。

レーベルとも仲良く？なれたのかな・・・・・・・・
ついでに、オレに新たな噂じゃなく、伝説ができた。

——レーベル王子と引き分けた男子——と

決着だ!!!! レーベル 刻んでやるぜオレの道を（後書き）

今回の反省

八雲「あの途中で入ってきた人は？」

暇ねん「今度分かる」

八雲「こんどね・・・それより、今回の話しはまたぶっ飛んでるな」

暇ねん「だろお？ “テイ●ズ”に“る●剣” “アイ●ールド”。またまた“リボ●ン”そして“ス●ダン”」

八雲「分かる人には分かる・・・たぶん」

次回『クリスマスパーティーの事を忘れてた！ なーんてことは無いぞ』

クリスマスパーティーの事を忘れてた！ なーんてことは無いぞ

「これにて、終業式を終わりにする。各クラスごとに教室に戻るよ
うに」

いきなりだが、二学期が今終わった。

日にちだが、今は12月15日だ。え？普通は22日？いいの！こ
こでは作者が神だから

場所が変わって教室。またまた、委員長が黒板の前に出て説明して
いる。

「来週はクリスマスパーティーよ！ そーゆうわけでこれから出し
物を考えてもらいます！」

さすが委員長。てきぱきと話を進めていく。

「で？今回も護衛役かい？」

「レグ。いいや、今回はオレじゃなくサバナ先輩がやる事になっ
たって、マリナ先輩が言ってた」

「確かに、サバナ先輩はレーベル先輩と同じくセレナ先輩の婿候補
だもんね」

「ああ………ん？それ、知られてる情報？」

「うん。　そーゆうことになってるね」

「・・・・・・・・そっか」

なーんか、納得いかないんだが

「ハイそこっ！　ちゃんと考えなさい」

「わっ！」

前方から飛んできたチヨークを咄嗟に避ける。

「だからチヨークをとばすなよ」

「で？　良い案浮かんだ？」

「・・・・・・・・」

人の意見は無視ですか！

「つつてもなー・・・・・・・・喫茶店でよくね？」

「それは文化祭でやりました！」

「・・・・・・・・」

ネタ切れだ

「それじゃ・・・・・・・・・・娯楽なんてどう？」

横から提案したのはカイウスだった。その案に委員長が食いついた。

「娯楽って、例えばどーゆうの？」

「例えばねえ。射的とか」

「いやいや、クリスマスには合わないだろ」

クリスマスに射的って、レグも頷いているよ

「ヤクモの言うとおり、ちょっと合わないわね。でも、おかげで良い案が浮かんだわ」

「「「良い案?」」」

委員長の笑みを見てオレたちは顔を見合わせた。

結局“良い案”が何なのか分からず冬休みとなってしまった。

委員長いわく、“明後日の朝、学校に着なさい”だそうだ

家の前に着くと、付いてないはずの電気が付いている。

「だれか来てるのかって、来てるとすれば一人しかいないか」

「おっ！帰ってきたか。息子よ」

「やっぱり親父か」

部屋の中でくつろいでいた親父がオレに声を掛けてきた。

まっ、この家に入れるのはオレか親父だけだからな

「で、
どうしたんだ？」

鞆を適当に置くと親父の前に座った。

「なに、こいつを渡しておこうと思ってな」

そう言つてひよいと投げ渡された。渡された物を見ると、これまた見たことある物だった。

「えーつと何コレ？」

渡されたものはガチャガチャのカプセルであつた。

「カプセルだけど……まさか知らない」「知ってるわ!」「だよな」

しかもカプセルの中に鍵見たいな物が入っている。カプセルを開け、取り出してみるとやっぱり鍵だった。

「鍵？　なんで？　てーか、どこの何の鍵だよ？」

「おう、城の裏口のだ」

「ああ。お城の裏口の鍵か——　　——　　——
つてうおい！！！！！」

危うくスルーするとこだったぜ

と、まあ、掻いてもいない汗を拭く仕草をした。

「なんで！　ここに？　城の鍵があるんだよ！！？？」

「落ち着け落ち着け。　ある事情でな。候補者に裏口の鍵を渡しておけて王様に言われたんだよ」

「国王に・・・・・・・・」

そう言われて鍵をまじまじと見つめる。どこにでもありそうな鍵。

普通、城なんかの鍵って、ごっつい気がするんだが

「まあいいや。　持ってれば良いんだろ？」

「そーゆうことだ。　それと、携帯使っているか？」

「えっ？」

突然話が変わった事に驚いたのではなく、“携帯”と言う単語に驚いたのである。それもそのはず。何せ、今の今まで使わなかった（覚えてなかった）ためである。

「携帯の料金見たら、基本料金の二千円だしよ」

「あゝそんなものあったな」

笑ってみるが、すっかり忘れていた。

あー確かに、セイクリッドに来た時に貰ったな

「明日からちゃんと使うよ」

「そうか。まっ、携帯なんて必要最低限のことができれば良いからな」

その後は久しぶりに親父と夕飯を食べ、親父は城に戻っていった。

そうか。ケータイなんて物があつたんだよな

ベッドで横になりながら思い出し、電源を入れ、いじっているとアドレス帳が出てきた。

そこには、親父はもちろんの事、カイウスとレグのアドレスまで入っていた。

クリスマスパーティーの事を忘れてた！ なーんてことは無いぞ（後書き）

今回の反省

暇ねん「帰って来たぞーーー」

八雲「はいはい。お帰り」

暇ねん「そして忘れてた」

八雲「ケータイのことか？」

暇ねん「YES！」

八雲「だろうな。今の今まで出てこなかったし」

暇ねん「ってことで、これから有効活用していくぜ！」

次回『コレが良い案？ てーか、パーティーの趣旨が変わってるし！』

コレが良い案？ てーか、パーティの趣旨が変わってるし！

冬休み二日目の朝。 いきなりだが寒い！

「さっび！」

冬休みにもかかわらずオレたちは学園へと足を進めている。

「そうだね。 何でも近々雪が降るらしいよ」

「雪か……懐かしいな」

レグは何かを思い出すように呟く。その姿が以上に様になっている。

「なんだレグ、雪になんか思い出があるのか？」

「ん？まあ、な」

意味深な言葉だがオレはすぐに気付いた。

こいつがこーゆう言い方する時は触れちゃいけない事ってやつか。
失敗したかな

「あー……委員長のやつ一体何するつもりなんだろうな？」

「そうだね。 なんか準備してるようだったし」

「準備？」

話を変えたのは良いが、逆にオレが気になることになってしまった。そんなことを考えている間に学園に着き、校舎に入ろうとしたのだが横から声が聞こえてそちらに視線を向けた。

「こっち!こっち!」

「委員長。　なんで外にいるんだ?」

「クリスマスパーティの準備よ!言ったでしょ」

「いや、言ってたけど・・・なぜに外のグラウンド?」

てーか、久しぶりにグラウンドに来たな。作中では一回も来なかったけど

「ふふふ、コレを見なさい!!!」

又も以前と同じように紙をバツと見せてきた。

「なになに」

——雪合戦——

雪だるまと雪合戦している絵が入ったポスターだった。

「ゆきがっせんー!ー!?!」

「そうよ!　カイウスの娯楽で皆で遊ぶといえ外!　ついでに雪が降ると言えば雪合戦よ」

「ちょっとまって！オレたちのクラスだけでやるつもりかよ？」

「ふふっ！そこは抜かりなくてよ」

「えっ？」

その声は委員長ではなく委員長の後ろから聞こえてくるものだった。それも聞いた事ある声。

「マリナ先輩！？ どうしてここに？」

後ろから現れたのは生徒会長のマリナだった。

突然の事で驚いているが、約二名はそうでもなかった。特にレグなんてポスターをずーっと眺めている。

「ミレイさんにいい案を貰ったからね」

「いい案ってコレの事ですか？」

レグが眺めているポスターを指差して見ると委員長と一緒に頷いている。

「今年の事は急遽決まったことだったからね。各クラス、出し物に困っていたのよ」

「だから、私の案を生徒会長に出してみたのよ。これだったら、皆でできていいじゃない」

「たしかにね。でも、必ず雪が降るって保障が無いけど大丈夫なの？」

「確かにな。本番で雪が降ってなかった。なーんてことも在るだろ？」

「そこんところは大丈夫」

親指を立てて委員長が言い切る。

なぜそこまで言いきれるんだ？

「だって、この小説ってご都合主義でしょ！」

「「うわー」」

言い切っちゃったよこの人！

さすがのカイウスも“それは無理でしょ”って顔してるよ。

「何の事か分からないけど、その時用の出し物も考えてあるから大丈夫よ」

「さすがマリナ先輩！誰かさんとは大違いですね」

「誰かって誰よ！？」

「さあ？」

ん？委員長に気をとられていたいたけど、なんか……先輩の顔が赤く見えるんだが……気のせいだな！

「てーか、それなら準備なんて無いんじゃないの？」

「ないわ！」

「だったら呼ぶなよ！」

きっぱり言い切った委員長についてツッコんでしまった。

「だって、アンタのケータイ知らないもの」

「あーっと・・・・・・・・はい」

ポッケから携帯をだす。向こうもケータイを手に取り――赤・外・線！

「これでよしっと」

携帯を仕舞うと委員長とマリナが話し合っている。 どうやらこれからの事を話しているようだ。

「あなた達、帰っていいわよ」

「オチがこれですか」

「これです」

ハハッと笑ってオレたちの今日が終わった。

コレが良い案？ てーか、パーティーの趣旨が変わってるし！（後書き）

今回の反省

暇ねん「やーっとクリスマスだよ！」

八雲「現実では終わったけどな。一人でごくろーさん」

暇ねん「うっさい！」

八雲「今気付いたんだが、クリスマスパーティーの日ってクリスマスなんだな」

暇ねん「そうなんだよ！ でたらめにした日がクリスマスだった。

オレすげー」

八雲「どこがだよ！」

暇ねん「まあ、いいや。 クリスマスが終わればあと数個大きい物

語しておしまいだ」

八雲「おっ！終わるのか」

暇ねん「そーゆうこと。 残りの日数は少ないぞ。 頑張らないと

レーベルやサバナに取られるぞ？」

八雲「うっせ」

次回『クリスマスパーティー始まる。 でも、終わらない』

クリスマスパーティー始まる。でも、終わらない

12月25日

セイクリッド学園のグラウンドは白一面の物となっていた。

「ぎょーさん降ったな」

「本当だね。これなら雪合戦も余裕でできるね」

「・・・・・・・・」

上からオレ・カイウス・レグ。

グラウンドには全校生徒（もちろん、小学・中学・大学・専門部も）が集まっており、それをと眺めながら会話しているのだが、如何せんレグは真っ白なグラウンドを見ると遠い目をしているように見える。

「お、おい、レグのやつマジでどうした？この前から変だったけかったけど」

「コレばかりは僕も分からないよ。本人に聞いてみれば？」

「バカヤロウ！それができれば苦労しないって」

「・・・・・・・・んっ？何してんだお前ら」

こちらの会話が聞こえたのかレグが顔を向けてくる。

「い、いやなんでもないぜ。なっ、カイウス」

「う、うん。なんでもないよ」

「そうか・・・・・・・・・・」

変に返事をしたためか怪訝そうな顔をしたが、すぐに雪に視線を戻した。

オレたちはふーっと息を吐き互いに顔を見合わせる。

「やっぱ・・・・・・・・」

「変だね・・・・・・・・」

そしてまたレグに視線を向けた。

「それでは生徒会によるクリスマスパーティーを始めたいと思います。」

パーティーの内容は皆知つての通り、雪合戦。試合形式はトーナメント戦です。」

九時になるとマリナ先輩が校舎の前に立ちルール説明を始めた。なんと、このパーティーはさっきも言ったとおりトーナメント戦

まず予選として、小学部・中学部・高校部・専門大学部に別れクラスごとにトーナメントして各部ごとに優勝クラスを決める。

勝った優勝クラスだけが決勝トーナメントにいけるのである。

ちなみに決勝トーナメントの一回戦は小学部VS高校部

二回戦は中学部VS専門大学部で、勝ったクラスで決勝である。ちなみに優勝クラスにはご褒美がもらえるそうだ。

いいのか、たかがクリスマスパーティーをこんな大事にして？
そうそう、六時から屋内広場でバンドや色々な出し物を見ながらメシが食べられるって話した

「それじゃ皆！気合入れていくわよ——ぶっ……殺す！！」

「「「Yaaaaaah————！！！！！！！！」」」

委員長の掛け声にクラスの皆はやる気満々って言うか、委員長！“ぶっ殺す”とか言わない！！
皆も乗らない。それをやっているのは泥門デビル●ツツだけだって。しかもヒ●マじゃないと合わんって

そんなこんなで雪合戦が始まったのであった。

クリスマスパーティー始まる。でも、終わらない(後書き)

今回の反省

暇ねん「新年」

八雲「あけまして」

暇ねん&八雲「おめでとうございまーす!!」

暇ねん「いやゝついに2011年になってしまいましたね」

八雲「だなく。この小説も本当だったら終わってるはずだったのに」

暇ねん「・・・・・・さて、今年の抱負ですが・・・・・・」

八雲「オイコラ！」

暇ねん「まずは4月までには終わらせるつもりです」

八雲「言い切ったな！」

暇ねん「男に二言はない」

八雲「よし、よく言った」

暇ねん「てな訳で」

八雲「今年も」

暇ねん&八雲「「よろしくおねがいしまーーす!!」」

次回『雪合戦ってこんなに燃える展開だっけ?』です

雪合戦ってこんなに燃える展開だっけ？

「それでは第一回戦、1－B対1－Gです。クラスの生徒はAコートに入ってください」

校舎からのアナウンスが聞こえてくる。

「んじゃ、いきますか」

「そうだね」

「さいしよは同じ学年だから気兼ね無く投げられるぜ」

レグは朝の態度から一転、いつものレグに戻っていた。
オレたちにとってはありがたい。

ここで、ルール説明だ。

制限時間は10分。

一人二回あたると退場である。

制限時間内に相手クラスの全員を退場させるか、生き残っている生徒が多いクラスの勝ちである。

コートはドッジボールでよく使うコートね。外野はいないから。

もちろん真ん中に線があって線から向こう側にはいけないぞ

脳内説明終了！

さて、グラウンドについたのは良いんだが、オレ・・・というより
オレたちは目を疑った。

グラウンドはAコートからKコートに別けられて、それぞれ小・中・

高・専大が試合しているが、どのコートも軽い雪山が在ったり、雪壁があったり、拳句の果てには軽い芸術品と思えるほどの塔が建っていたり……。なんだか、戦場みたいだな。

「うりやあああああああ！！」

おおー！？あっちのクラスなんて雄叫び上げて雪球投げてるよ。何かもう、真剣です！って顔に書いてあるし……………

「凄い熱気だね。これってパーティーだね、たしか？」

「たしか、な」

オレとカイウスは微妙に気迫負けている。だが、レグは違ったみたいだ。

「おっしやー！早く行くぞ！ヤクモ、カイウス」

どりやあああ、と叫びながらコートに向かう後姿を見て、アホらしく思ったが、レグがいつもどおりに戻って安心を感じた。

「おそいっ！」

「うぎゃっ！冷たい！？」

コートにつくなり顔面に冷たい物がぶつかった。ぶつかったものは粉々に崩れていく。

「おいコラ……雪玉を顔面にあてんじゃねーよ」

「あんたが遅いからでしょ！」

「んだと!？」

「なによ!？」

「まあまあ、二人とも抑えて」

委員長との言い合いを見ていらなくなったのかカイウスが間に入ってきた。

「それでは……始め！」

審判の合図で互いのクラスは一旦、雪壁の後ろに隠れたり雪玉の準備をしている。

委員長はここでもあの力を発揮して皆に作戦を指示していく。

……委員長だったら、色々な戦場に出ても司令官としていけるんじゃない？

例えば、星一号作戦（ア・バ●ア・クー攻略戦）とか、第二次ヤ●ン・ドゥーエ攻防戦とか

「ガ●ダムだな」

「なに独り言言ってるのよ？」

「えっ！口に出した？」

「出したわね。ガ●ダムって。ねっ、皆？」

うんうん、と一斉に頷くお友達。

一気に恥ずかしく思えた。

「ってことで、ヤクモにカイウス・・・それとレグは線ぎりぎりのところで敵を攻撃！残りの私達は後方から援護射撃！以上！」

「ちょっとまていっ！　なんだその“君達が頑張れば勝てる！”みたいな作戦は！もっとマシな作戦があるだろ！」

「ないわね・・・それとも何？私の作戦は不満と？皆この作戦は不満？」

委員長の殺気＋αの睨みに皆、首を横に振る。それはもう、一生懸命に。

「まー、カイウスとレグが嫌だって言うなら変えるわ」

よし！嫌と言え！言うんだ！！

だが、オレの思いむなく二人は“いえ、問題ありません！司令官殿”と敬礼する有様。

おーい、お前らもつとがんばれよ！

「ホラ、良いって言ってくれてるわよ」

「殺気出して聞けば誰でも“うん”と言うだろうよ・・・」

「仕方ないわねー・・・・・・・・・・もし嫌だって言うなら・・・・・・・・・・皆で一週間断食よ」

えっ！？なに、今の最後の方に殺気を通り越した感覚が・・・・・・・・この異様なプレッシャーは・・・・・・・・ニ●ータイプか！？

当然、ニ●ータイプのプレッシャーではなく、委員長以外のお友達からの鋭い視線だった。視線を読み解くところである

『ヤクモ！オレたちの食生活を奪う事は許さないぞ！いいから“やる”と言え』

である。

でも良く考えてみる。ここは死んだ後の世界じゃないし、学食でもないんだぞ。家に帰れば食いたい放題だぞ。

とまあ、言える雰囲気ではないので・・・・・・・・

「わかったよ、やればいいんだろ。やれば」

その言葉にみんなの顔がホッと緩んだ。委員長も笑みを浮かべた。

「よし！では、オペレーション・スノーボールファイト、決行よ」

「なにもゆ●っぺみたいに言わなくても・・・・・・・・」

「こーゆうのはノリが必要でしょ！」

「……………さいですかっ！」

言い終わると同時にオレたちは雪壁から出て、最前線に向かった。

やっぱ、委員長じゃ星一号作戦（ア・バ●ア・クー攻略戦）とか、第二次ヤ●ン・ドゥーエ攻防戦は生き残れないな

ふと、そう思いながらも、いつの間にか両手に握られていた雪球を雪壁から出てきたGクラスの生徒にぶつける。

今のだけで一人倒した。

ちなみにこのゲームは相手の投げた雪玉をキャッチして投げ返すのも有りだ。

そーゆうわけで……………

「おりゃあ！」

ナイト部で鍛えた反射神経・動体視力その他もろもろを活用して……………勝った。

開始、三分で全滅。

G組は30人おり、その内、オレ6人、カイウス5人、レグ10人倒し、残りの9人は援護射撃

こちらの損傷……………なし！

快勝！

この調子でB組は勝ち続けて言った。

雪合戦ってこんなに燃える展開だっけ？（後書き）

今回の反省

八雲「なあ」

暇ねん「言うな」

八雲「なんで」

暇ねん「言う出ない」

八雲「“ガ●ダム”と“An●el Beats!”？」

暇ねん「ちよっと・・・ね」

八雲「どうせ、ネタを書きたかったんだろ」

暇ねん「イエス！」

八雲「こんなので勝ち続けられるのか？オレたち」

次回『激突！1BVS2A』です。

次回もこの小説にプラグイン！

八雲「ロツ●マン風に次回予告するな！」

激突！1BVS2A

初戦を快勝したオレたちはそのまま残りの試合を全て勝ち、決勝まで来た。

決勝戦の相手クラスはオレたちが良く知る人がいるクラスだった。

「よく勝ち残ってこれたな。ヤクモ・カイウス・レグ」

「どーもッス、ウエル先輩」

コートの中で五人が集まっている。
オレたちとジン・レグである。

「準決勝でセレナ先輩たちのクラスに勝って此処まで来たんですね？」

「ああ、セレナ先輩には悪かったが、俺たちも負けたくなかったからな」

フツと笑ってみせるジンにオレたちは引きつるように笑ってみせる。

ジン先輩って何気に負けず嫌いだな。ウエル先輩との試合でもそうだったし

今更になってジンの性格が分かってきたように感じた。

「でも、先輩達は此処までですよ。何てったって……」

「俺たちが勝ちますからね！」

横から割ってくるようにレグが決める。

「やってみな………」

言い残し、ジン達はクラスに戻っていき、オレたちも戻る事にした。戻った早々、委員長に集められ作戦会議が始まった。

「いい？ 決勝戦はあのジン・ウエル先輩率いる2Aよ。下手な小細工なんて無いようなものよ」

ここに来て委員長の真顔に皆、真剣に話しに集中している。

今回のコートは自分達のコートに雪壁が丁度真ん中に3つ。

対して、2Aのコートには最後列に2つだけ。

その為、壁の数では勝っているが、向こうの方が遠く、前に出ないと雪が届かないのである。

「向こうの戦い方は私達と似ていて、ジン先輩とウエル先輩がツートップで最前列で投げてくる。

だから、こっちも三人で対抗。残りは援護射撃とリベロになってもらうわ」

「ってーことは、俺たちが要ってわけだ！ 腕が鳴るぜ」

バシッと拳をもう片方の手で受け止めるようにレグがやってみせる。カイウスも頷くだけだが、その表情は楽しそうに見える。

「んじゃ、いきますかぁ！」

試合が始まる前に最前列に向かうと既に二人の先輩が両手に雪球を持って待っていた。

ウエル顔はいかにも“ぶっ倒す!”と言いたそうである。

ジンの方はどこかの部長みたいに“油断せずに行こう”と言う感じだ。

「負けても文句なしですよ、先輩」

「ほう、カイウスにしては言うじゃないか」

「僕にもプライドはありますから」

ニコツと微笑みながらの言い方にジンも不敵な笑みを浮かべた。

そして……試合を始める合図がなった。

「先手……」

「必勝っ!!」

野球のピッチャーのようにウエル目掛けて連続で両手に持つ雪玉を投げつけるがかすりもせず、逆に反撃が返ってくる。

「おらおらおらあ!どーした?ヤクモ」

一つ二つと避けても雪球は止むどころかどんどん襲い掛かってくる。

「なんでそんなに投げてんの!？」

良く見るとウエルは投げ終えた瞬間にダイレクトで地面の雪に手を突っ込み、鷲掴んで投げているのだ。

コレが又、雪球となっているのである。

「うそお！？先輩の手って改造してんのお！？」

「ほほー、お前は先輩に対してそーゆう事言うか・・・・・・・・散れえ！ショットガン！！」

叫びどおり、地面の雪を弾くように手を動かし、ショットガンのように何個もの雪球となってオレに迫る！

「なるお・・・・まとめて打ち落とす！」

ボクシングのファイティングポーズを取り、迫り来る雪玉をジャブで当たる前に打ち壊す。

＊腕・足などは当たってもセーフ＊

「ほお、やるじゃねえか！それでこそ俺の下僕！」

「いや、オレは先輩の下僕じゃねえーし！、てーか、何か性格変わってない？」

「気のせいだあ！」

「うわっ！ジャブジャブ・・・・ジャブっ！！」

これじゃ防戦一方だぜ！これは援護射撃を・・・・・・・・

援護射撃を頼もうと後ろを見てビックリ。

なんせ雪球が雨の如く降り注いで壁の内側にいないと当たってしま

う状態である。

「なんでー！ー！？……………って、ジン先輩……………」

横を見てまたもビックリ。

久々に見せる得意技——ラピディ。

神速の如くの腕のスイングを使って休む事の無い雪球の嵐。

しかも、カイウスとレグが一回当たってるし……………っておい！あいつら退場したらオレが頑張るしかないジャン！？

「よそ見してんじゃ……………ねえ！」

渾身のストレートが顔面にヒット！

思わず仰け反ってしまう。

おい！今の球、ぜってー160出てるって！

援護なし・味方ライフ1・自分ライフ1

最悪の三拍子。

残り時間5分ってところでレグが二回当たり退場。

すぐにカイウスも当たり退場。

残ったオレ、集中砲火で十秒持たずに退場。

残った委員長たちの捨て身の特攻……………三十秒で全滅。

試合を終わらすホイッスルが鳴り響いた。

「試合、終・了ー！ー！ー！ー！。高校部の優勝は2年A組です！」

・ こうして、オレたちの冬（雪合戦）が——終わった・・・・・・

「まっ、頑張った方だろ。なっジン」

「そうだな。だが、もう少し楽しめると思ったんだがな」

「「うぐっ！」」

グサツと胸に来る言葉にオレたちはダメージを受ける。
横ではウェルが大爆笑。

「あははははっ！！敗者にヒドイ言いようだな」

アンタもな・・・・・・

オレたちの心が一つになった瞬間だった。

午後から始まった決勝リーグで2Aは小学部で優勝した6Bと激突し、ジンとウェルを無視して残りの連中を狙った作戦だったが、それより先に二人の鬼が相手を全滅させた。

今思えば、大人気なえな・・・・・・相手は小学生だぞ？

決勝戦は大学・専門部で勝ちあがって来た大学の2年F組で、ルージがいるクラスだった。

序盤はジンとウェルが片っ端から相手を退場させていく中、ルージの作戦と力で二人を抑えながら、後方援護の生徒を倒し、時間切れ

で多く生き残ったルージたち2Fの優勝で雪合戦は幕を閉じた。

「いやー楽しかったな」

「そうだね。約一名不満ですけどね」

「俺の事かぁ？カイウス」

「誰も“ウエル先輩”とは言っていないですよ」

午後6時、今回のメインパーティーのため、屋内広場で話しているところだ。

「ルージ先輩、優勝おめでとうございます」

「ははっ、ありがとう、ヤクモ」

オレはウエルをちらちら見ながらルージにお祝いの言葉をかける。

「てめえ、ちらちらこっちを見ながら言ってるじゃねえー！！」

ウエルが態度を悪くなる……悪くしてる中、屋内広場の電気がパツと消えた。

「始まるな……ウエルもそのあたりで止めておけ」

「しょーがねえな」

映画のブザーのような音が聞こえ、ライトが広場の中央に当たり、生徒会長のマリナがマイクを持って会釈をしていた。

「皆さん、雪合戦は楽しんでくれましたか？」

その質問に広場全域から“楽しかったです！”と返ってきた。

「これから本来のパーティーとなります。食べ物や部活の出し物などありますので楽しんでクリスマスを過ごしてください」

また会釈をしてマリナはその場を後にした。

次の瞬間、ミュージックが掛かり、皆騒ぎ始めた。

当然、オレたちも楽しむためにまずは豪華料理が並ぶ場所に足を進めた。

激突！1BVS2A（後書き）

今回の反省

暇ねん「雪合戦しゅくりよ」

八雲「まけた・・・」

暇ねん「当たり前だろ！そう簡単に勝てるかって」

八雲「ご都合主義だろ！」

暇ねん「それ、委員長が勝手に言ってるだけだから」

八雲「確かに・・・」

暇ねん「それにお前は出番は次だって」

八雲「次？今回じゃなくて？」

暇ねん「次。大体、セレナのためのパーティーだろ？」

八雲「そーいや・・・セレナ出てこなかったし・・・あっ！」

暇ねん「フラグだろ？」

八雲「いや、違うでしょ！」

次回『最高のクリスマスだな、こりや』

最高のクリスマスだな、こりゃ

パーティーが始まって早くも一時間経とうとしているが屋内広場の盛り上がりは下がるところかどんどん上がっていく。

ついさっきまでは卒業していく三年生（特にセレナ先輩）のためにバンドが演奏していたところだ。

ちなみに我が学園のバンドはメジャーデビューしている為、盛り上がりまくった。

「しかし今思ったんだが、大抵の三年生は大学・専門部に上がるだろ。何でこんな盛り上がるんだ？」

「ヤクモ、それは言っちゃダメだって。作者も書いていて思い出したんだから」

「そうだぜ。知らぬが仏ってな」

いや、『知らぬが仏』って使い方違うだろ！？

＊知らぬが仏＊

知れば腹も立つが、知らないから仏のように平静でいられる。

また、本人だけが知らないで平然としているのを、あざけっている語。

以上。Yahoo! 辞書から抜き出し

「それはそれとして、だ」

レグはジュースが少し残っているグラスを近くのテーブルに置くと二階の窓に視線を向け、また何かを思い出している表情をする。

「わりい、ちょっと外に出てるわ」

「え？ あ、ああ」

「体が冷えたら戻ってきなよ」

「おう・・・・・・・・」

そう言ってレグは階段をに向かって外に出て行った。その後姿をしばらく見ていたが、後ろから柔らかい物(?)が背中をプニユッと当たった。

「んなあ!？」

驚いて振り返って見るとグラス片手にユウナがそこにいた。頬が少し・・・いや、かなり赤くなっている。おたふくですか!？と言えるぐらいに。

酒は大学・専門部がいるから置いてあるが高・中・小は飲めない筈なんだが・・・・・・・・先生方がバーテンダーの格好して二十歳以上の生徒に出しているのだ。

いいのか？学園内だぞ、教師！

「ふふーん、ヤクモはっけーん!!」

「ユウナ先輩！はっけ〜ん、とか言いながら胸を当てないでください！」

「あら〜お姉さんの胸をしっかりと感じたのね〜……………えっち」

「な——っ！」

自分の顔が真っ赤になっている事が良く分かる。

恥ずかしくなって視線をユウナから視線を外し、あたりに視線を彷徨わせる。

はっと気付き、後ろにいるカイウスに助けを求めようとしたが、いたはずのカイウスはいなかった。

あいつ……………オレを見捨てやがった！

瞬間、カイウスを呪った。が、オレはすぐに一つの疑問が浮かんできた。

「……………オレ、ヤクモって事教えましたっけ？」

そうである。

前の文化祭では《ルークⅡフォンⅡファブレ》と名乗っていたのだが。

「そんなの知ってるわよ。だって、大会で名を上げた人物くらい皆知っているもの〜」

「大会……………あっ！ナイト部の大会か」

たしかにあれ以降からファンができたからな……………ん？まて

よ、ってことはセレナも分かってたんじゃ・・・・・・・・

次から次に頭の中に色々な疑問が浮かんでくるが、そんなオレをユウナの声が現実に取り戻した。

「難しい顔してる。私が楽にさせてあげる――」

「い、いいですよ！ しかもやっぱり酔っ払ってるし！」

予想はしていたが、やっぱりそうだった。
微妙にだが、酒のにおいが鼻をくすぐる。

「どうやって酒飲んだんですか？」

「んー？先輩に貰ったの。へへ」

「そーですか・・・・・・・・はい！水でも飲んで休憩しててください
い」

なぜか近くのテーブルに置いてあったグラスには水が注がれていた。
深く考えず、オレはそれをユウナに無理やりと言って良いほどの手渡しをした。

「むっ！まあいいや。私も眠くなってきたし」

一人呟き、ユウナは水の入ったグラスを持ってふらふらとどっかに行ってしまった。

「やれやれ・・・・・・・・大丈夫だよなあ」

突如不安を感じユウナの方を見たが姿が見えなくなっていた。
無理やり大丈夫だろう、と思い込み視線を彷徨わせた。

そのとき、二階エリアから外を眺めている女性の薄紫色の髪が見えた。

「・・・・・・・・」

少し考えてからオレは二階に向かった。

「・・・・・・・・」

来たは良いがどうする？向こうはオレが八雲だってこと分かってるだろうし・・・・・・・・

物陰に隠れてこれからどうするかを考えるために目を瞑ると視界が暗くなった。

いや、目を閉じれば暗くなるのは当たり前だが、明かりは分かるだろう？でも、それが無くなった

変だなあ、と思い目を開けるとオレの思考は一瞬で途切れた。

「何してるの、ルーク？」

「え、いや・・・・・・・・えーっと・・・・・・・・あは、あはは」

目の前にセレナがいて、オレに話しかけていた。

急なことにオレはまともな返事ができず、言葉にならない声を出す。そんな反応を見てセレナは笑った。

「もう一回聞くわよ。何してたの、ルーク？」

セレナの言葉がオレに突き刺さる。《ルーク》そんな偽名で呼ばれるからか？

「え……あー、ちょっと外の景色が見たくて」

嘘をついた。

何でだろう？今までなら簡単にセレナが見えたから、って言えたのに

「そうなんだ。てっきり私は、逢いに來てくれたのかと思ったんだけどなあ」

残念そうに言う。わざとらしくではなく本心から思っていたんだらう。

『条件ってのは……姫さんとは絶対に合わない事。それが条件だ』

あの時と同じく、親父の言葉が頭の中で反響する。

「？　　どうかしたの、ルーク？」

下を向いて黙っているオレを心配してかセレナは両手をオレの頬に当てる。

そして、無理やり顔を上げさせる。

視線がぶつかる。だが、オレはすぐに視線をセレナから外す。

「私の目が見れないの？ どうして？」

「どうしてって……そりゃ、恥ずかしいでしょ」

やっと口から声が出た。

「うそ。何か隠してるでしょルーク……いえ、高坂 八雲」

優しい声でオレの名を呼ぶ。

無意識にオレは反応する。その優しい声に。強い意志を持つ瞳に。

「セ……レナ」

「なに？」

「ごめん」

「——え？」

いきなり謝られた本人はビックリするだろう。その証拠にセレナはポカンとしている。

構わずオレは頬に当てられている両手を外し、窓に近づいた。

「いや、謝る必要は無いんだけど……いや、あったか。まあ、いいや。今のはあの時、嘘をついた事。それと……今ついた嘘に対して」

「うそ？ 一つは私が文化祭の時に聞いた事でしょ？ それなら良いけど、今ついた嘘って？」

「あー」

外の白いグラウンドを見下ろしながら言葉に詰まる。
セレナが見えたから、なんて今更恥ずかしくて言えないからな

「ふふ、いいわ。言いにくいんでしょ？」

「まあ、言い難いって言うより恥ずかしいんだが……」

「？　なんか言った？」

どうやら聞こえていなかったらしい。
だが、オレは心の重荷が無くなったようで少し……いや、結構
楽になった。

それからオレたちは久しぶりに楽しい話をした。
親父に言われた条件もセレナに話した。だが、その話を聞いてセレ
ナは腑に落ちない顔をした。

「なんで、私と八雲が会っちゃいけなかったのかしら？」

「なんでって、婿候補だってバレたら大変だし、他の候補者に対し
ても不公平だろ？」

「それが変だっていうの！　だって、八雲以外の家にもホームステ
イしたし、レーベルは国は違うけどたまに会いに来るし、サバナだ
って学園にいるじゃない。それなのに何で八雲だけ会っちゃいけな
いの？」

「……………」

何も言い返せなかった。と言うより、どれも筋が通っていて否定する部分が無い。

サバナもレーベルも普通にセレナと話している。サバナに関しては学園にいる。

それなのにオレだけ会っちゃいけないってどーゆうことだよ!?

「てーことは、オレは今までどおりセレナに会って言いわけ?」

「ええ!」

嬉しそうに肯定する。

その返事にオレもつい、笑みを浮かべてしまう。それを見てセレナが何かを思いついたような子供の笑みを浮かべる。

「……な、なに?」

「そんなに私と会えることが嬉しい?」

「——っ!」

どうなの?と顔を近づけ聞いてくるセレナから視線を外して口を開く。

「そりゃ……まあ、嬉しいさ。その為にセイクリッドに来たんだからな」

「——っ」

あれ?返事が返って来ない。もしかして外した?

恐る恐る視線を向けると嬉しいのか恥ずかしいのか分からない表情をしているセレナが視界に入る。

こうして、三年生（セレナ主演）のクリスマスパーティーは無事終わり、残りの冬休みの日常に戻る事となった。

最高のクリスマスだな、こりゃ（後書き）

今回の反省

暇ねん「すいません！高校最後のテストが近くて（来週）更新が遅れました」

八雲「つつても勉強して無いだろ？」

暇ねん「んーまあ、いつもどおり？」

八雲「しってるよ。こんなんで4月までに終わるのか？」

暇ねん「ムリかもな」

八雲「男に二言はないんだろ？」

暇ねん「ふっ、オレは過去を振り返らない男」

八雲「流石はミスターうそつき」

暇ねん「はっは」

八雲「褒めてねえよ！」

次回『はやっ！ 新年開始 え？修学旅行？しかも全学年で？
いや、それはムリだろ』 い

はやつ！ 新年開始 え？修学旅行？しかも全学年で？ いや、それはムリだぞ

えゝ誰だかわからぬ皆様へ。

冬休みも一瞬で終わり、正月も終わった。

いつ終わったか思い出せないが・・・・・・

そんでもって今は二月十五日。

私、高坂 八雲は今、とーーーーーっても、ありえない状況に立っております。

ただし、この状況に困っているのはオレだけでカイウス・レグ・セレナ・その他もろもろの人々は楽しんでおります。

それはもう、とーっても。ほら、今まさに前後左右から楽しそうな声が・・・・・・

「――雲――八――八雲――」

「んあ？」

ありえない状況に慣れないためか返事は生返事である。
そんな返事を気にしないのがカイウスとレグであった。

「さつきから何一人でパラソルの日陰でねっころがってるんだよ」

「せっかくの修学旅行なんだから楽しみなよ」

そうなのである。

今、オレたちはセイクリッド王国ではなく、海に囲まれた島国に修学旅行にきている。

ちなみに飛行機で五時間。

そしてオレの今の状況は海パンに上着を羽織、レグの言ったとおり海の砂浜にパラソルを差し、日陰にねっころがっている状況である。なんでこんな事に・・・・・・・・

さかのぼる事一週間前。

セイクリッド学園のいつもの教室。しかし、いつもと違う事が一つあった。

「と、言うわけで来週は五泊六日の修学旅行です。皆、各自で準備して置くように」

委員長の・・・・いつもの演説。
それを聞くクラスメイト。

なに？修学旅行？オレたちが？

「はっ！？修学旅行って普通二年生が行くもんだろ？何でオレたちが行くのお！？」

「あれ？ヤクモしらねーの？この学園は3年に一回、学園全体で修学旅行に行くんだよ。つっても行くのは高校部の一〜三年だけだな」

「はぁ！？」

以上、30秒の回想シーン。
しかも場所はハワイアン島とか言う島で、名前だけでなぜか温かい・

・暑いイメージの島である。

実際、暑い。現在の温度は25℃。今、二月ですよ……

「パラソルで休んでなきゃ暑くてしぬって」

「軟弱だな！」

「何とでも！」

「まーいいや。カイウス、ちょっと泳ごうぜ」

「良いけど、あまり奥に行き過ぎないでね。いわの堤防で区切られているけど出ようと思えば海に出られるんだから」

「わーってるって。んじやな」

二人は手を振って海に走っていった。

此処の海は少し奥に行くと安全のため岩でできた堤防で区切られているのだ。

無論、それを越えて向こう側の海に行く事ができるが波が荒く、サーファー向きの海である。

「しかし、セイクリッドに來ただけでもスゲーのにまさか修学旅行で島國に來れるとわな」

ハワイアン島はセイクリッドだけでなく全世界で最も有名な旅行先の一つである。そのため色々な人があちこちを観光している。

周りは透き通るスカイブルーの海。

一年中暖かい氣候。

そして何より、お土産の多さにゆったりとできる場所が多く存在す

る。

「しかも、修学旅行とか言っておきながら先生達は勝手に遊んでるし……」

視線だけを横に向けると水着姿の先生方が日焼け最中。先生の顔なんて最高だわ、って言いたそうだもん

「八雲っ！」

「ん？」

ぼーっとしていると後ろから声が聞こえてくる。砂浜を走ってくる音が近づき、後ろで止まる。

「セレナ？どーしたん？」

「八雲が一人でいるのが見えたから遊びに来たの」

「あ、ああ……そゆこと」

そう答えたは良いが目やり場に困る。最初はセレナの顔を見てたから何とも無かったが、少し視線を下にずらすと豊満な胸が近くで見える。

セレナの格好は当然、水着でしかも日本で着た物であった。

「ええっと、その水着って日本の海でも着たやつでしょ」

「覚えてたんだあ！」

「そりゃ、セレナのことだからな・・・・・・・・っハ！」

言い終えてからオレは無意識に口にした言葉を思い出し、顔を真っ赤にして視線をあらぬ方向に向ける。

言われた本人も「ありがとう」と恥ずかしそうに答えるだけで黙ってしまった。

結果、修学旅行一日目はまともにセレナの顔を見れずに終わる事になった。

はやつ！ 新年開始 え？修学旅行？しかも全学年で？ いや、それはムリだぞ

今回の反省

八雲「手抜き感バリバリだな」

暇ねん「テスト勉強の合間に書いたんだからしょうがないだろ！・
・ネタも無いし」

八雲「聞こえてるぞ。 そんなんだから情報、赤点取るんだよ！」
暇ねん「いや！まだ返ってきてないし！それに取ってないかもしれないじゃん」

八雲「いや、赤点MAXだな」

暇ねん「ぐっ」

八雲「で、修学旅行は全部書くのか？」

暇ねん「いや、所々とぼす。三話ぐらいで終わりかな」

八雲「そうか」

次回『修学旅行ってフリーダムだな』

暇ねん「それでも・・・守りたい世界があるからっ！」

八雲「それはキ●・ヤマトだろ！」

修学旅行ってフリーダムだな

一日飛ばして修学旅行三日目。

ちなみに二日目は一日目同様に海でのんびりバカンスを満喫していたぜ。

そんなわけで今は三日目。

場所はホテルの自室。想像できているとは思うがルームメイトは、レグとカイウスである。

今更ながらホテルの部屋は広く、ベランダ・キッチン・ユニットバス・ソファなどがあり（当然だな）なかなかゴージャスな部屋である。

「で、三日目はどうするよ？三日連続で海で日焼けですか？」

「いや、それはもういいわ。それより今日からは島を観光していこうぜ」

ソファに座って、冷たいアイスコーヒーをストローでちびちび飲みながらオレたちは今日の予定を話し合っている。
そんな中、部屋のドアをノックしてくる者がいた。

「ん、誰か呼んだのか？」

「いいや」

「誰も呼んでないけど……ヤクモが呼んだんじゃないの？」

「いやいや、オレが誰を呼ぶんだよ」

ないないと、顔の前で手を横に振って見せてから立ち上がりドア歩み寄る。

その間、カイウスとレグは話を戻して予定を話し合っている。

あいつら、オレを無視して話を進めてるな……

「まっ、いいけどな」

ドアを開ける前に二人のことを気にしていると、またもドアをノックする音が聞こえ慌ててドアを開ける。

「はいはい……はっ!？」

「んん？」

「どうしたよヤクモ？」

驚いたような声が聞こえたのか二人はその場から顔を覗かせてドアを見ると、二人も同じ反応を見せる。

「やつほーヤクモ!遊びに来たよ」

「おはよう、八雲」

私服姿のセレナとユウナが遊びに来たのだ。

当然のことながらセレナが後輩と仲良くしている遊んでいる姿は見たことが無い。

その為か、レグはなんでえ!?!とオレに今にも突っかかってきそうな勢いでオレの背中をじーっと見てくる。

一応、文化祭やクリスマスパーティーでの出来事を理由に仲良くなつた、と言う事になっている。

「遊びに来たって・・・・・・・・なんで？」

「お前は・・・・・・・・バカか！」

鈍い音がオレの後頭部から音を上げる。

「レグ、てめえ・・・・・・・・何しやがる！」

「罰当たりな事言ってるからだボケ！」

「あんだとっ」

「まあまあ」

間に入ってカイウスがオレたちを止める。
後頭部に当たったのはオレの携帯であると知ったのは出かける瞬間である。

結果、オレたち三人はセレナ・ユウナと一緒に観光する事となった。

「まずは・・・・・・・・ぶらっと歩いていこうぜ」

レグの意見に賛成してあちこちを歩いて周り、その度に少し食べ歩きなんかを少し。

「しかし、フリーダムだよな。修学旅行って、もう少し規則があるだろ」

三時を過ぎ、歩きつかれたオレたちは海が見えるベンチに座り休憩をしている。目の前は砂浜と海だけである。

オレの横に座ってるのはカイウスで、残りの連中は砂浜に行き、素足になり足を水に入れて遊んでいる。

「こんなもんだよ。それに、これの方が楽しいでしょ」

「確かにな。そー言えば、カイウスってセレナ先輩と知り合いだったのか？」

「あれ？そんな風に見える？隠してたんだけど」

驚いた様にオレの顔を見ってくる。

そして次の表情は嬉しそうに笑みを浮かべて海で遊んでるセレナを見つめる。

「僕はね・・・・・・・・ヤクモと同じセレナ先輩の婿候補の一人だったんだよ」

「・・・・・・・・・・は？」

えーっと、なに？カイウスが候補の一人？

「はは、ヤクモがそんなに驚いてるの始めてみるよ」

「いやいや、笑い事じゃねーよ！なに？マジで！？」

ベンチから立ち上がり座ってオレを見上げるカイウスを見て唾然となる。

そんなカイウスは未だ微笑みながら腕を掴みオレをベンチに無理やり座らせる。

「人の話をちゃんと聞いていた？だった、過去形だよ」

「ええ！？ そっちの方がビックリですわ」

「だから僕はヤクモに聞いたんだよ、覚えてる？」

「覚えてる………って、ずっと前のアレか？」

『どうしてヤクモはセイクリッド（こゝ）に来たの？』

それはセイクリッド祭が前日に廊下でカイウスが聞いてきたことだ。その時は答えられず、答えを先延ばしにした。

「そう、その答えを今、教えてくれるかな？ 今なら聞けると思うから」

「……………」

確かにあの時はセレナのこととも言えなかったし、第一、セレナとの約束を守るために来たのに会わなかったなんて、今思えば意味わかんねえよな。約束だったとはいえ…………いや、違うな。オレは・

・・・

「オレはな、セレナに会いたかった。カイウスが候補の一人だったなら知ってるだろ、オレがレーベルに負けたこと」

「うん」

短く答えた。

それだけで十分だ。オレは話を再び再開する。

「ぶっちゃけ、カイウスに聞かれたときは本当に理由なんて無かった、無かったはずだった。でも違った。負けたオレを泣きそう
な顔で心配するセレナを見て思ったんだ。ああ、カッコわりいつて」

無意識のうちにオレの視線はセレナに向いている。カイウスも視線を追って向けるが多分、カイウスが見ている場所はセレナではなく海であると思えた。

「考えても見ろよ、好きな人の前で無様に負けるなんて笑えねえよな」

「確かにね」

苦笑混じれの笑い声が小さく聞こえる。

「そこで思ったんだ、惨めなオレはレー^{あいつ}ベルの言うとおりにセレナには釣り合わないって・・・・・・でもな、手紙があったんだよ。セレナからの・・・・そこにはなんて書いてあったと思う？」

顔を傾けカイウスに問う。

「負けたヤクモなんて嫌いよって書いてあった？」

「そんな風を書いてあればオレはここにいないし、諦めも付いた。でも違った。ただ、オレが約束を守ってくれるって書いてあったんだよ。だからオレはどんなに惨めに負けたってセレナとの約束のために前に進む」

「——だからオレは……セイクリッドにいる」

「それが……セイクリッドに來た理由なんだね」

「ああ。でもまあ、それに気付いたのはつい最近なんだがな」

「それって、クリスマスパーティーのとき？」

「ああ」

「そっか……。うん、十分だよ。ヤクモの意思はしっかりと聞いた。それじゃ、次は僕の話しだ」

あつ、オレの話をしていた所為で本来の話から逸れちゃったな

「そうだが、なんで候補者が過去形なんだ？」

「あれ？そっちなの？僕が候補者になった理由とかは……」

「どうせ、シュドさんが推薦したんだろ？オレの親父もそうだったからな」

「おっしゃる通りで。それじゃ、なぜ過去形になったか、だね。うーん、どれを言えばいいのやら」

本気で考え込むカイウスを見て、そんなに理由があるのか、と心の中で苦笑いをした。

「そうだね、強いて言えば僕には心に決めた人がいるから、かな」

「・・・・・・・・」

あんだけ悩んだ末に出した答えがそれか！？しかもさっさと恥ずかしい事を

「言っておくけど、さっきのヤクモよりはマシだと思うよ」

「うっ！」

確かにオレのさっきの意思は言葉にすると恥ずかしいなんてもんじゃないな。うん

「深くは言えないけどコレが理由だね」

「そっか、まあしょうがないな。ちなみにその心に決めた人とは？」

「ひ・み・つ」

いたずらっ子みたいな顔で言ってくるカイウスから聞くのは無理だと分かったオレはため息を吐いてから立ち上がりカイウスに手を差し伸べた。

「そろそろセレナのところに行こうぜ」

「セレナ先輩のところにね」

「そうでした」

オレたちがホテルに戻る間に日は沈み、無数の星が見える程よい暗さへと変わって行った。

だが、その時のオレはカイウスによって太陽のように真っ赤に燃えていた。

その為、まともにセレナと会話ができなかったとき。

なぜ？

「初めてセレナ先輩のことを好きって言ったね」

帰り道、カイウスがオレにニッコリ笑いながら言った言葉である。

修学旅行ってフリーダムだな（後書き）

今回の反省

暇ねん「よーし！カイウスの秘密終了」

八雲「以外だったわ、カイウスが候補とか」

暇ねん「いやゝ実は最初っから予定していた事なんだが、出すタイミングがなかったんよ」

カイウス「そうだったんですか？」

暇ねん&八雲「カイウス！？」

カイウス「おひさしぶりです」

暇ねん「よう！」

八雲「どーしたよ？」

カイウス「小説が終わって帰ろうとしたら『こちらです』って矢印に書いてあって」

暇ねん&八雲（こちらですってなんですか！？）

カイウス「驚いたのはこっちですよ！いきなり候補だなんて」

八雲「だよな！いきなりだもんな」

カイウス「今回驚くのはヤクモの恥ずかしい告白だけにしてください！」

八雲「うおおい！？」

暇ねん「そうだな。八雲にはもっと頑張ってもらわないと」

八雲「マジでか？」

暇ねん&カイウス「マジだ（です）」

次回『最終日！？早くね？（前編）』です。

暇ねん&八雲&カイウス「感想&評価おねがいします」

最終日!?! 早くね? (前編)

楽しい時間はあっという間に過ぎると言うけど・・・・・・・・あつという間過ぎない?

朝、ベッドから起きるとまだ寝ているカイウスとレグを邪魔し無いように音を立てずベランダに出る。

ベランダから見える景色は太陽が照らし輝く海。

「今日は最終日か、明日にはセイクリッドに帰るのか・・・・・・・・」

この四日間を思い出しながら海を眺める。

今更なんだが、この部屋は五十階にあるため相当な高さである。

「・・・・・・・・」

いいねーこーゆう雰囲気、一人でのんびりと景色を楽しむってのも

ベランダの淵に両腕を組んで乗せる。

のんびりと景色を楽しんでいるとベランダに入ってくる足音が聞こえ、振り返り挨拶をカイウスに送る。

「おはよう、はいねヤクモは。最終日だから落ち着かないの?」

「アホ、目が覚めちゃったんだからしょうがないだろ、寝てるお前らを起こすわけにも行かないしな」

実際問題、オレは寝てる相手を無理やり起こすのは気が引ける。相手にもよるがな。

「それはごねんね。それより、最終日くらいセレナ先輩と二人っきりで観光してくれば」

「な、なに言っただよ!？」

さらっと言うところがカイウスの怖いところだよなあ、今、よく分かった

カイウスは笑いながらオレの返事を待っているんだろう。

そういきなり言われてもあっちにも予定って物があるだろ。

なんて事を考えているとカイウスが笑っている。

「ヤクモって意外と分かりやすいよね。大丈夫だよ、昨日のうちにセレナ先輩に言っておいたから」

「・・・・・・・・」

その満面の笑みが恐ろしく見えるのはオレの目が可笑しいのだろうか？

カイウスは頑張っただね、と言いながら部屋の中に入っていった。

その後姿を目で追っていくとどうやらお腹が空いたらしく冷蔵庫から食べ物と飲み物を取り出していた。

「かーーーーー・・・・・・・・」

勝手に約束されたこっちの身にもなれよ、まったく

とか、内心では愚痴りながらも表情は嬉しそうであることをガラスに

映った自分を見て、愚痴から苦笑いに変わった。

「そんじゃ、俺たちはクラスの連中と観光してくるわ。先輩によるしくな」

レグの奴は言いたいだけ言うとかイウスと一緒に部屋を出て行った。残ったオレはため息を数回付くと、意を決して部屋からで一階のロビーに向かっていく。

『セレナ先輩とは十時にロビーで待ち合わせて事になってるから』

部屋にいる時にカイウスにこう言われた。

用意周到だな、あいつは・・・・・・・・

現在、十時五分钟前。

ロビーに着くとあたりを見渡す。

「誰を探してるのかな？」

「ああ、セレナ先輩を・・・・・・・・って、うわあっ!？」

不意に後ろからの声に顔を向けなくて答えたのだが、その声に聞き覚えがあった。

その声の主にもオレは後ろから抱きかかえられ、ついビククリして声を出してしまった。

「失礼ね、八雲ったら！いきなり声を出すなんて」

「いやいや、いきなり後ろから抱きかかえられたら誰だって驚いて声を出すわ！」

離れながらオレはセレナに反論する。

数秒して互いに可笑しくて小さく笑ってしまう。

「おはよう八雲」

「おはよう、セレナ」

ワンピース姿のセレナとロビーで少しおしゃべりをしてからオレたちはホテル前の無料バスに乗った。

バスと言ってもトロリーバスであり、運転席の前と後ろにしか窓がなく、両側面には窓が無い。

座席も横向きのベンチが2×2の外を見るような形で配置されている。

その為、風が全身で感じる事ができる。もちろん、落ちない様に鉄パイプのような物が数本ある。

「風が気持ちいいわね」

風によって乱れる髪を押さえながらも隣に座るセレナは楽しそうにオレと外の景色を交互に見る。

だがオレは、と言うとそれどころではなかった。

やべーって！なにこのシチュエーション？もろ恋人設定じゃね！？

日本にいた頃は慣れていたのだが、一旦会わなくなったからなのか

セレナの言動や表情に焦る、と言うより嬉しくもあり恥ずかしくなってしまう。

その為なのかオレの頭の中には混乱状態。
某ゲームの状態を使うと

——八雲は混乱している——

や

——八雲は錯乱している——

など・・・・・・・・錯乱って状態見たことねーけどな

テンパっている所為でセレナとの会話はうまくできたが、内容は頭の中には残らなかった。

残らなかったがセレナもご機嫌だったので深く考えない事にした。
そうしている間にもトロリーバスは目的地に着いた。
着いた場所はアミューズメントパーク。

最終日!?! 早くね? (前編) (後書き)

今回の反省

八雲「・・・・・・・・・・」

暇ねん「うわぁゝまだ錯乱してるよ」

八雲「してねえよ! だいたい錯乱ってなんだよ?」

暇ねん「いや、頭の中に浮かんだから」

八雲「おい!」

暇ねん「それはそうと、そろそろ終わりに近づいてきたぞ」

八雲「終わりって・・・・修学旅行?」

暇ねん「それもあるが、この小説の残り時間もな」

八雲「な、まじで!?!」

暇ねん「まじで。確定してないから分からないけどあと5ゝ15話の間でタイムアップだ」

八雲「そっか・・・・・・・・」

暇ねん「そうだ、だから残りの時間を有効活用しろよ! じゃあな」

次回『最終日!?! 早くね? (後編)』です。

最終日!?!早くね? (後編) (前書き)

暇ねん「今回の小説内でお金が出てきますが日本円でやっています」

最終日!?! 早くね? (後編)

ハワイアン島のアミューズメントパーク

ここはハワイアン島で地元の人も観光する人も必ず一回は来ると言われるほどの大きなパークである。

面積二万六千平方メートルもあり、その中にはショッピングセンターや水族館・遊園地・動物園、プールなど他にもありえないものが多々存在する。料金は水族館・遊園地・動物園は一つの券を買えば入れる。プールは無料である。

休憩所など多くあり、そこは自然で疲れを忘れさせてくれるようになっている。

「さて、どこ行きます?」

「うーん……まずは近くから見て行きましょ」

パーク内の地図を見ながら悩んでいるセレナはどうやら一つずつ見て行きたいようだ。

まあ、オレも問題ないしな。問題があるとすれば時間だけだろう。

始めに寄ったのはぬいぐるみ屋である。

えっ? 一発目がぬいぐるみ屋? なんてこという奴は黙りんしゃい! 作者のセンスが無いんだから!

と、自問自答の自分を置いてセレナは一人ぬいぐるみの山から色々なぬいぐるみを手にとって比べあっている。

うーん、こうして見ると次期お姫様なんておもえないな

そんなことを考えているとオレを手招きするセレナ。

呼ばれているので近づくとバツと目の前に二つのぬいぐるみを見せ
てきた。

目の前にあるぬいぐるみの片方はライオンでもう片方はウサギと猫
がじゃれあっているぬいぐるみ。

ウサギと猫の方はくっ付いていて外す事ができないようだ。

「八雲！どっちが可愛いと思う？」

「・・・・・・」

交互に見比べてウサギと猫、と言いながら指差す。

選ばれたウサギと猫を胸に当て、ライオンを元の場所に戻すセレナ。

「買うの？」

「ええ！どっちにしようか悩んだのだけど八雲がこっちの方が可愛
いっていうから」

「~~~~っ！」

胸にぬいぐるみを当てながらその嬉しそうな笑顔は反則だろ！？

つい、視線を外してしまう。セレナの方はぬいぐるみに夢中で気付
いていないようだ。

レジに向かっていくセレナを見てハツとする。

「530円になります」

「えーっと・・・・・・」

財布をポーチから財布を取り出そうとしているセレナを横にオレは千円札をレジにだす。

その行為にたいして驚いているのかセレナはキョトンと目を丸くしてオレをみる。

「それぐらいオレが買うって。そんな高くないし」

「八雲！？ダメよ、買ってもらうなんて」

「なんで？」

「だって……八雲そんなにお金もって無いでしょ？」

「ハ……ハハ……」

予想外な言葉がオレの心臓を貫いた……。気がした。だが、そんなことで引き下がるオレではない！

「あのな、確かにセレナよりは持ってないかもしれないがぬいぐるみの一個ぐらい大丈夫だって」

「でも……」

それでも納得しないセレナがかわいらしく、つい口元が緩んでしまう。

「えーお客様、どういたします？」

オレたちの会話が終わりそうにないと感じ取ったのか店員が話しに入ってきて、セレナの視線と一緒に店員に向ける。

「あっ！すいません、千円札でいいです」

「八雲！」

セレナの声も今だけは無視することにしてぬいぐるみを買った、のは良いのだがセレナの機嫌をすこしばかり損ねた。だが、それも店員のある一言で一転した。

「ふふ、私もお客様のような彼氏が欲しいですわ」

ボンッと音が聞こえるかと思えるほどに真っ赤になって顔を足元に向けるセレナをみて笑うオレだった。

気を取り直してセレナと一緒に水族館や遊園地で数時間ほど遊んだらいつの間にか夕焼けが空を染めていた。

「五時か……早いなー」

「そうね。どうする？もうホテルに戻る？」

「うーん………」

時間から言ったらまだ大丈夫なのだが、セレナは結構歩いたので早めに休ませたいと思う。

時間の事だがホテルには七時までには戻らないといけないのだ。いまからここを出れば六時前にはホテルに着く。

「そーだな、戻りますか・・・・・・・・ん」

「どうかした？」

前を歩き始めたセレナはオレが何か見つけた声を聞き、振り向いてきた。

「悪いんだけどちょっと先に行つてくれるか」

「良いけど・・・・・・・・どうかしたの？」

「ちょっとトイレに」

その返事に呆れたといわんばかりの脱力感がセレナから感じ取れ苦笑いをする。

「わかったわ。バス停で待ってるわよ」

「ごめんね」

くると回れ右をしてトイレの方向に走っていく・・・・フリをしてアクセサリーショップに入る。

「これでいいかな？・・・・大丈夫・・・・だよな？」

不安になりながらも“ある物”を買い、ポケットに丁寧に入れるとすぐにバス停に向かって走り出す。

ここからバス停までは三分もしないで着く。

案の定すぐにバス停に着き、セレナの元に駆け寄った。

「おまたせ」

息を吸って吐いてを繰り返しながらセレナの横で座る。

「遅かったわね、混んだの？」

「いや、ちょっとね」

「？」

当然、そんな言い方じゃセレナには理解できない。

数分後、トロリーバスが到着し、乗り込む。

行く時とは見方が変わって見える。赤みがかった世界が矢のように過ぎ去って行く。

「今日はありがとうね。楽しかったわ」

「それはオレの台詞だって。それに良かったのか？」

「良かったって、なにが？」

「サバナ先輩とかユウナ先輩に誘われたたんじゃないんですか？」

最終日とあって、いろんな人がセレナと一緒に行きかけたはず。それを八雲は独り占めしたようなものである。

たがセレナは首を横に振り否定した。

「私は誰からも誘われて無いよ」

「えっ!？」

「サバナとは二日目にユウナと一緒に観光したから誘ってこなかったし、ユウナはユウナであんなこというし――」

「あんなこと？」

「な、なんでもない！」

顔を真っ赤にして全力で両手を横に振る。

そんな姿が愛しくもあり可笑しくも思える。

トロリーバスがホテルに着くまでまだ二十分ほどある。

隣りが気になり横目でチラッと見てみると、どうも眠たそうに目を擦るセレナ。

「寝てて良いぞ」

「ふえ？」

「はは、ねむいんだろ？肩貸すから寝て良いよ」

あと二十分あるし、と良いながら微笑むと、うん、と頷きトン、と右肩にセレナの頭が乗る。

結構疲れているらしくすぐに規則正しい寝息が聞こえてくる。

うーん……あと二十分で起こすのが勿体ないような

残念な気持ち湧き上がるがしょうがない、と割り切りできるだけ眠りを邪魔し無いように配慮する自分だった。

「それじゃまた明日ね、八雲」

「ああ——　　つと、セレナまった！」

ホテルのエレベーターは四五階で止まり、出ようとしたとき、オレはセレナを引き止める為にエレベーターから降りてしまう。呼び止められたセレナはなに？　と言いたげな表情で見返してくる。

「これ、プレゼント」

そう言いながら小さい紙袋をポケットから取り出しセレナの手に置く。

「ありがと………何が入ってるの？」

中身が気になって紙袋を開けようとするセレナを慌ててとめる。

「ちょっと待った！！　開けるのはオレがいなくなってからにしてくださいか」

紙袋に入った“ある物”は目の前で開けられると気恥ずかしくてオレが困るのである。

「わかったわ。ありがと、八雲」

「ん……お礼は気に入ったらでいいよ。それじゃ、また明日」

丁度良くエレベーターが開き、中から三年の女子が数人降り、入れ替わりで中に入る。

エレベーターが閉まると上に向かって動き出した。

・・・・・・・・渡しちゃった

急に恥ずかしさがこみ上げてくる。

ちよつとばかり渡さなければ良かったかな、と思うほどであった。

最終日!?! 早くね? (後編) (後書き)

今回の反省

暇ねん「毎度の事でしつこいが、このままで行くと今月中で終わるかもしれん」

八雲「このままでいけばな」

暇ねん「まあな。それより、セレナに何渡したんだ?」

八雲「——っ!」

暇ねん「あらゝ顔が真っ赤っか。よほどのものを渡したと見える。例えばゆ……」

八雲「わーわーわーわーわーわーわーわー」

暇ねん「うぜえ! お前はそーゆうキャラじゃないだろ!」

八雲「誰のせいだよ!」

暇ねん「まあいい、それより反省だが……」

八雲「珍しい! いつもならしないのに」

暇ねん「終わりが近いからな。思ったんだよな、内容が薄い。それにネタが出てこない」

八雲「あー分かる。ネタなんて出てきてもガン●ムだしね」

暇ねん「うむ。ってわけで、次回から頑張ってみる……か
も」

八雲「だろーねー」

次回『修学旅行の帰りって疲れて寝てるよね』です。

修学旅行の帰りって疲れて寝てるよね

六日目の朝。またも早くに目が覚めてしまった。

むくつとベッドから体を持ち上げ、横に顔を向けると満足そうな顔して寝ているカイウスとレグ。

「ふっ……」

何が可笑しかったのか自分でも分からないが何故か小さく笑ってしまった。

ベッドから降りると冷蔵庫からペットボトルを取り出し、昨日と同じようにベランダにでる。

「帰るのか……めんどくさ」

ペットボトルの蓋を外して口に持っていく。

中身は当然ファ●タでグレープ味！

……朝から炭酸ってどーよ？

気分が重くなったのは一瞬。すぐに気を取り直しオレは最後のこのベランダから見る外の景色を目に焼き付ける勢いで見る。

「もうこねーかもしれないしな」

「そうだぜ、よく目に焼き付けとけよ、婿候補お」

「おっ！？珍しく早起きだなレグ、もしかして今日の飛行機、途中で落ちるかもな」

髪を掻きながらレグは壁に寄りかかって手を振っている。

どーも、早くに目が覚めたらいい。のは良いのだが……………

「てーか、なんで婿候補の事してんだよ？」

「あれだけセレナ先輩と仲がよければ予想はつくさ。それにカイウスにも聞いたしな」

片目で見ってくるその顔がしつくりくるなく、とまあ思いながらオレは苦笑して、一口分のファ●タを喉に通す。

「そうか……………悪いな、今まで黙っていて」

「別に。秘密なんて誰にでもあるだろ」

「確かにな」

「……………」

「……………」

「「ハハハッ」」

可笑しくて笑ってしまったのだが、どうやらレグのほうも可笑しいと思ったのだろう。

オレたちの声は合わさった。その声は寝ていたカイウスを起こしてしまったようだ。

「朝から仲良く笑って……………うーん、どうかしたの？」

眠たそうに目を擦るカイウスに悪いことをしたなあ、と思い軽く謝るオレ。

そんなこんなで朝飯を食べ帰る準備を終わらせてオレたちはロビーに向う。

「なんだあ？」

ロビーに着くといち早くレグがロビーの雰囲気がいつもと違っていいの気付き、あたりをキョロキョロと見回す。

「確かに・・・帰りだから名残惜しいんじゃない？」

「その割には皆、一箇所に集まって話し合ってるよ。それもちょっと危機感を感じるほどに」

「あっ、やっぱり？オレもなーんかあの場には危ない感じが漂ってるよーな気が・・・」

オレたちの言うあの場とはロビーの端に人ばかり・・・というもうちの学生。しかもその大半が三年生である。

エレベーターの前では何も分からないので近づいてみると、人ごみから途切れ途切れに話し声が聞こえてくる。どうやら誰かに話が集中しているらしい。

「あはは、予想ができるな」

「人ごみの中心が誰かって奴か？」

「ああ、どうせレグとカイウスも分かってるんだろ？」

「まあ・・・・・・・・」

「予想は簡単につくね。僕らの学園でこれほどの注目を受ける人物と言えば・・・・・・・・」

「セレナ・・・・・・・・だよなあ、何やってんだか」

少し呆れると言うかなんと言うか・・・・・・・・ん？何か聞こえるかなになに

「セレナさん！そ、そ、そ、その指の“物”はど、ど、ど、ど、ど、ど、どうしたのですかぁ！？」

「そうですわ、セレナさん！教えてくださいますか！」

聞くからに相当なことが起きているようだな。

質問する方なんて只ならぬ気配をだして・・・・・・・・なぜだろ、オレ、関係ないのに背筋が寒くなるような感じが・・・・・・・・

見えない恐怖(?)に警戒していると肩に手が置かれる。

「おはよう八雲。こうして話すのは久しぶりだな」

「サバナ先輩、おはようございます。しかし、この騒ぎは何ですか？」

誰かと思えばサバナである。

そーいや、サバナ先輩が出てくるのって久しぶりのような・・・・・・・・

「ああ、誰かさんがセレナ姫にとんでもない物をあげた為にこうな
ってしまっただが・・・・それは八雲の所為だとボクは思うね」

「オレ？ 特にコレって物をあげたつもりは・・・・・・・・・・つま、
まさか・・・・・・・・」

次第に自分でも分かるほどに顔色が悪くなっていく。

それを見たサバナはやっぱり、と小さくこぼし哀れみに似た表情を
向けてくる。

「ちよっ、ちよっとスイマセン！！」

慌てて人ごみを掻き分け、中心に向かう。

中心に入ると質問攻めのセレナが視界に入り、向こうもオレに気付
きオレの腕を引っ張る。

「うおっ」

「遅かったわね八雲」

「あはは・・・・・・・・」

笑うしかない状況。今の状況を分かりやすく、尚且つ簡単に説明し
よう。

数十人の人ごみの中心にオレとセレナはいる。しかも、セレナはオ
レの腕を掴んだまま。

周りの目から見れば“誰だよ？”や“何で一年がそんなに仲が良い
んだよ！”と訴えるような鋭く痛い視線がオレに突き刺さる。

そして、多分、コレが一番の問題だろう。

セレナの左薬指にはまっている少し控えめなデザインの指輪。これ

はオレが昨日買った“ある物”である。見間違えるわけが無い！と言える状況じゃない。

以上、分かり易く且つ簡単な説明でした。

「セ、セレナさん……その一年生は一体？」

一人の男子生徒がオレを指差しながら聞いたそうで聞きたくなさそうな声でセレナに聞いてくる。

周りの連中もじーっと視線を向けながらも、しっかりと耳にも意識を向ける。

そんな状況でオレは不安しか感じられない。

「八雲の事？そーね……分かり易く言えばこの指輪を私に贈ってくれた人よ」

「……………」

その場が凍りつく音が聞こえた……気がした。

しかもなんですか！そのちよつと頬を赤くしながら恥ずかしいって言う様な表情は！？

気のせいかもしれないが指輪をやけに強調して言っていたような気もする。

それよりどうして左薬指にはめてるわけ！？確かにいつかはそうだったら……コホン、コホン……！！

最初はセレナを、次に恐る恐る周りの人たちを右から左に視線を滑らしていく。

「……………今のうちに逃げ……………」

「・・・・・・・・がさねえよ」

「ははは」

乾いた笑い声しか口から出てこなかった。

周りの連中（特に男子生徒）からの殺気のこもった声と鬼の形相がオレを取り囲む。

ここは鬼ヶ島か・・・・・・・・・・・・・・・・！！？？

「追え・・・・・・・・・・・・・・・・！！！！」

「ふっざけるな・・・・・・・・・・・・・・・・！！！！」

鬼の様な生徒から逃げるようにオレは到着したバスにいち早く乗り込んだ。

しかし、それは他学年から逃げられただけでうちのクラスにいる鬼たちに食われかけた、もとい、質問攻め、軽い嫌がらせがセイクリッドに着くまで続いた。

修学旅行の帰りって疲れて寝てるよね（後書き）

今回の反省

暇ねん「修学旅行終わったー！ー！ー」

八雲「あ、ああ。そうだな」

暇ねん「・・・・・・お疲れだな」

八雲「お、おう？そんなこと・・・・・・あるな」

暇ねん「あはは、だが安心しろ！次回からはもっと凄い展開になるぜ」

八雲「凄い展開い？」

暇ねん「おうよ！終幕に突入だ」

八雲「しゅう・・・まく・・・！！」

暇ねん「ああ、頑張れよ主人公」

次回『最終章 動き出す計画』です。

第四部 最終章 動き出す計画（前書き）

セレナ「最初は別視点です」
暇ねん「さあ、最終章の始まりだ」

第四部 最終章 動き出す計画

普通の部屋にしては豪華と思える一室で二つの人影が、ろうそくの火によって揺らめいている。

「では……………始めるとしようか」

「はい……………」

最初の声は中年男性の声。それに返事をしたのが若い女性のものがある。

中年男性が手を二度叩くとバンツと音を立てて扉から数人のサングラスを掛けた男性が入ってき、女性を取り囲むように立つ。

「連れて行け。ただし、失礼の無いようにな」

サングラスを掛けている男性達のリーダーと思われる男が指示を出し、女性は部屋から連れて行かれた。

「さて、カレは動いてくれますかな？」

「必ず動きますよ。必ずね」

リーダーの言葉に中年男性は嬉しそうに微笑んだ。

修学旅行が無事終わり、あっという間に三月となった。

この学園では一番大事な月、いや、どこの学校でも大事な月である

う。

なぜなら、今月の十五日にセレナたち三年生は卒業するのである。そーゆうわけで学校内ではモチベーションが日に日に増していく。

「しかし、今になって思うがお前がセレナ先輩の婿候補とは信じられねえぜ」

いつも通りの教室。いつも通りのメンツ。

「それに加えてカイウスまで候補の一人だったらしいし」

「それはオレもビックリしたぜ。修学旅行を満喫している時にサラッと言われたもんだしな」

「仕方ないよ、僕も父さんに秘密にするよう言われてたからね。それに、僕にはあの人がいるから」

「「リア充発言やめえ!!」」

さすがにオレとレグは軽く口を尖らせて言う。
言われた本人は笑って受け流す。

その態度がカチンときたのかレグはカイウスの首に腕を回してヘッドロックをかけている。もちろん遊びなため、見た目ほど威力も無い。

そんな楽しい生活をふとありがたく思うオレがここにいた。

「.....」

「おい、どうしたよ?」

「ヤクモ？」

「あっ、いや、一年が早く感じるなぁと思って、な」

さっきまでのリア充発言と打って変わって、しんみりとした発言に二人は大丈夫か？と心配そうにオレを眺める。

「いきなりどうしたよ」

「ん？いや、もうすぐでオレたちは二年生になるだろ？ついこの前までは一年だっていうのに……」

「今もだけどね」

「まあね、最初の頃なんてレグに木刀投げられたし」

余り思い出したいと思う記憶ではないが、思い出しながらレグをじーっとみる。

レグのほうは別段気にする事ではないのか笑ってそんなこともあったなぁ、なんて他人事のように楽しむ。

「ヤクモ、ほんとにそれだけかな？」

「どーゆう意味だよ、カイウス」

「確かに僕たちとの思い出も多いけど……今の会話にセレナ先輩に対しての思いが入ってないよ」

ニコッと、さも当然のように言い切るカイウス君。

おまえってやつは・・・・・・・・

「は・・・・・・・・まっ、確かにセレナの後を追って来たようなものだけどね」

「うーん・・・・・・・・理由を聞いてないで今のところだけを聞くとお前、ストーカーだな」

「うぐっ！」

今まで思わないようにしてきた事をサラッとしかもレグに言われたよ。

どーしてこう、オレの周りの奴はオレを傷つけるような事をサラッと言うかな。

数秒、自分の境遇を呪った瞬間だった。

「まあまあ、ストーカーは冗談でも、その本人が卒業するのは淋しいよね、ヤクモ」

「そうだな・・・・・・・・って、オレだけじゃないだろ!？」

「確かに学園全体では淋しくなるだろうけど先輩の・・・・・・・・先輩達の門出を祝いたい気持ちの方が大きいから淋しいとは思はないんじゃないかな」

「だろうな。じゃなかったら、こんなにモチベーション上がらないだろ」

「確かに」

二人は楽しそうにオレに向かって言ってくる。

何だかんだ言ってもこいつらも楽しみなんだな。

軽く笑みを浮かべ、教室の窓の向こうに視線を向ける。

外では三年生たちが写真を取り合っていたり、先生にばれないようにこっそりサイン色紙に一言を書いたりしている。

「あつ、三年生って今、思い出作りをしてるんだ」

カイウスはオレの視線を追って外に目を向ける。

「思い出作りって………何だ？」

「簡単に言えばアルバムに載せる写真を撮ったり、お世話になった先生たちにプレゼントを作ったり……まあ、なんでもありだよ。三年生の授業終了してるからな」

背伸びをしながらレグが口を挟む。

写真といっても今から撮って間に合うのか？と疑問の目を向けると次はカイウスが口を開けた。

「間に合うよ。詳しい事は分からないけど写真さえあれば一日で乗せる事ができるらしいからね」

「へー便利な事で………およっ」

「どうかしたん？」

外で一緒に写真をとっている先輩を見て声を出してしまい、二人が

反応する。

オレが見つけたのは写真を撮り終えたユウナである。

「ユウナ先輩!!」

窓から体を乗り出して声を掛けたのはレグだった。
声に気付いたユウナは体を向けて手を振ってくる。

「ああ！レグ、それにヤクモとカイウス。元気い？」

「元気っすよ！」

二人は修学旅行で仲良くなった為、カイウスやレグとも気軽に話しをしている。

「ユウナー次の写真撮るよー」

「今いくー！それじゃ、またね三人とも」

クラスの女子に呼ばれたユウナは手を振って走っていった。
その姿をレグはずーっと眺めているのだが……………

「ははっ」

オレの予想なんだが、レグはユウナ先輩の事……………

「まさかな」

思いはしたが口には出さないで他の三年生を眺める。
そこでオレは気付いた。あの人がいないことに。他のクラスもいる

のに彼女だけが見当たらない。

「気が付いた」

「まあ」

カイウスがさっきから黙っていたのは、ユウナが一人だった事に気付きカイウスはそれに気付いたらしい。

セレナがいないのだ。三年の中心となる人物がどこにも見当たらないのである。

だがいいことがありえない、と言うわけではない。熱をだした、風邪を引いた、などで休んでいるだけかもしれない。

そう思い、オレはカイウスの目を見た。

しかし、オレの予想は大きくハズレており、正解を知るのは数時間後の放課後であった。

第四部 最終章 動き出す計画（後書き）

今回の反省

暇ねん「さーて本日二回目の反省ですが・・・ひとりです。今回は八雲はいません。」

なぜかって？それはもちろん、大変な時ですからね。次は出てきますよ。

さーて、今回はマジな次回予告、いきます！」

「どーゆうことだよ、親父！？」

八雲の叫び

「いいか、これから話す事は極秘事項だ」

修二は小さく、しかしはつきりと聞き取れる

声だった

「安心しろ八雲、オレが手を貸してやる」

その言葉をあんたから聞けるとはね

八雲は仲間達と今、この瞬間、何が起きているかを知る事になる

次回『これは——現実だ』です

これは——現実だ（前書き）

暇ねん「始めに・・・前回の次回予告とは台詞が違うかもしれませ
ん」

これは——現実だ

放課後になり部活も難なく終わった帰り道、オレたちの前に現れたのは親父とカイウスの親父のシュドだった。

「どうしたの、父さん？」

「親父まで……珍しいじゃん」

「国王の護衛隊で隊長の修二に同じ隊のシュドナイまで……マジで？って、それより親父？父さん？お前らの親父かよ！？」

隣で感動しながらも驚愕の真実を知ったカイウスは興奮して暴走モードとなっているが、オレたちはそれを余所に何か言いたそうな親父たちの話を聞く体勢になる。

「八雲、セレナ姫を見なかったか？」

親父はの顔は強張っており声からも鬼気迫るものを感じる。

「カイウスも見なかったか？」

シュドの方も同じ状態でカイウスの両肩を掴み、聞いている。

「いや、オレたちは見てないけど……」

カイウスも横で頷く。

「それどころか、今日は学校を休んでるよ。こーゆうことは父さん

達の方が詳しいんじゃない？」

「・・・・・・・・」

オレたちの親は一回視線を合わせると、落胆し足元に視線を落とし口を閉じた。

「何があったん？」

「実は・・・・・・・・」

「シュド、無関係な息子たちに言わなくて良い」

只ならぬ雰囲気を感じとり聞いてみるとシュドが何か言おうとした。しかしそれを親父が遮る。

「おいコラ！セレナのことなんだろう？どこが無関係なんだよ！？」

「ヤクモの言うとおり。僕は婿候補から外れたけど、少なくとも無関係とは言えないと思うけど？」

「八雲・・・カイウス君・・・・・・・・」

「修二」

親父達は顔をあわせると何かを決心したように頷くについて来い、
と言いきオレたちの前を歩き出した。

その後を黙って付いて行くとある場所の前に到着した。

「ここは・・・・・・・・」

着いた場所はセレナや国王が住むお城であった。

門番の横を通り過ぎ、城内に入ると始めてみる景色に目を奪われてしまう。

城内は白を象徴とした造りで、召使いなどがあっちに行ったりこっちに行ったりと忙しそうに城内を走り回っている。

そんな中親父を先頭にオレたちをある一室に案内する。

「ここは………?」

「来客用の客間だ」

客間と言えるのか?これが?

と思えるほど広く、煌びやかな部屋で天井には大きなシャンデリア。その下には長方形のテーブルにイス。壁には誰かの作品と思える画が幾つも飾られている。

「皆、座ってくれ」

いつの間にかに移動していたシュドがイスに座るよう促してくる。言われたとおりオレたちはイスに座ると早速、話を聞く事にした。

「で、何があったん?」

だが、その質問は親父の手で制された。

「ちょっとまで、まだ揃ってないからな」

「揃って………ない?」

親父の言葉に首を傾げると客間の扉が開く音が聞こえる。

「連れてきたわよ！」

「——なんだ、貴様らもいたのか」

聞こえてくるは、上から目線の高飛車な発言。

その声にオレは耳を疑い、変わりにレグがその声に反応する。

「いちゃ悪いのかよ！」

レグの声にフツ、と鼻で笑うレーベルに、やあ、と小さく手を振るサバナ。

この二人が入ってきた。そして、この二人を連れてきたメイとルミナも部屋に入り、静かに扉が閉まる。

「さて、皆集まったな。いいか、これから話す事は極秘事項だ。当然、口外は禁止だ」

厳重に口止めする親父に黙って視線が集まる。

「——セレナ姫が……攫われた」

「………は？」

口から出された声が耳に届いた瞬間、オレの思考が止まったかと思えた。

それぐらいに今、親父の言った事が理解できない。

「気をしっかりもて！八雲」

「いや、だって・・・・・・・・攫われたって・・・・・・・・どーゆうことだよ親父っ!？」

オレは叫ぶ。叫ぶしかできない。親父に怒りを不安が混ざった叫びを上げながらイスから立ち上がると、親父の胸倉を掴む。

他の連中もそうだ。あのレーベルでさえ、顔を真っ青にしている。カイウスとレグ、サバナも声を出せず放心状態である。

「すまん・・・・・・・・俺の所為だ・・・・・・・・」

何かを思い出すような口ぶり。

その目には悔しさがにじみ出ている。

親父・・・・・・・・

「くそおおおおおっ!!!!!!」

親父の目を見て冷静になる。ここで、親父を攻めるのはお門違いだ。ってことを理解する。

だが、オレの頭はそんなできたもんじゃねえ。頭で分かってても納得できずただ叫ぶ。

「・・・・・・・・教えろよ!何が在ったかを」

憤りを抑えながらイスに座り、両手を組む。

その組まれた手は震えている。

「分かっている。だが、話す前に一つ確認しておく。姫を攫った相手は数人の集団だ。それも俺たちを欺けるほどのな・・・・・・・・そ

れを相手にすることは命にも係わってくる。降りたい奴はいないか？」

今日の前で確認をしている親父は今まで見た事がない。それ程に親父がこの仕事に誇りを持っているかを理解する。

・・・・・・あとで謝らねえとな

「誰も降りないと言うのだな？サバナ王子、レーベル王子、レッグ君、カイウス君、本当に言いのだな？」

君たちは一般人と他国の次期王でもある」

「・・・・・・オレは強制ですか」

オレにだけ聞かないとは・・・・親父はオレを戦場に出したいのか？まあ、聞かれなくなっただって・・・・

「なんだ？聞いて欲しかったのか？逃げる口実の為に」

「はっ！？バカいってんじゃねえ！高坂家に悪名轟く紅蓮団、男の魂イ背中に背負い、不撓不屈の鬼リーダァー！八雲様がぁ、そう簡単に逃げるかよぉ！！」

ドンッと胸を張って叫ぶオレ！・・・・・・乗せられた？まあいい、どーせやる気だったしなぁ！

そんなオレを見たからなのか隣で声を押し殺して笑っているレーベルがいた。

いや、笑うなら笑ってくれよ。皆無反応だからさ。

「良いだろう！その鬼リーダーの背中、オレが守ってやるよ！」

「レーベル……はっ、ありがとう」

「レーベル先輩だけじゃないよ。当然僕らも、ね」

「カイウス……皆……そーゆうことだ、親父イ！オレたちは誰一人降りないぜ！」

「よからう。ではまず、相手がいつセレナ姫を攫ったかだ」

こうしてオレたちはセレナを取り戻すための決意を固め、親父の話を一時も聞き漏らさないよう注意して聞き始めてた。

これは――現実だ（後書き）

今回の反省

暇ねん「やばい！最後近いのにネタがない」

八雲「ネタって、どっちの？」

暇ねん「どっちもだが、どちらかと言えばストーリーのネタがない」

八雲「おい、作者！大丈夫か？」

暇ねん「うーん……まあ、ネタを使って何とかする」

八雲「大丈夫かよ……それに、あのグレ●ラガンネタ」

暇ねん「ああ、グレ●ラガン？カ●ナだよ、カ●ナ。感動するロボ

ットアニメの一つだぞ！『俺たちを誰だと思っていやがるっ』」

八雲「確かに最後のニ●が消える場面は涙なくしては見れないな」

暇ねん「だよなっ！」

次回『攫われた姫君』です。

暇ねん「次回は第三者からの視点です」

攫われた姫君（前書き）

暇ねん 「途中まで第三者の視点です」

攫われた姫君

「セレナ姫も今月で学園を卒業ですね、そろそろ候補はお決まりになりましたか？」

それは昨日の出来事であった。

城内、それもセレナの自室でセレナと修二たち護衛隊、それに王妃様が集まり紅茶の入ったティーカップ片手に午後のお茶会をしていた。

紅茶を一口飲んでからメイはセレナに一番気になっている事をみんなの前で聞いてくるのであった。

「えっ、いや……その……」

その言葉に一瞬で顔をトマトのように真っ赤にし困ったような表情をするが、その表情には恥じらいを感じさせる。

「こらメイ！セレナちゃんを困らせないの」

「でも、お姉ちゃんも気になるでしょ？」

返ってきた返事にうつ、と押し黙りティーカップに口をつけて逃げる。

「私も気になるわね。で、誰なのセレナ？」

「お母様！？」

以外と言わんばかりのセレナの表情に王妃は心外だわ、と言いたそ

うな表情になる。

「たった一人の娘の結婚話なのよ、気になるのは当然だと思いますが？」

娘の恋愛に興味津々な王妃は面白そうにセレナの答えを待っている。それは王妃だけでなく修二たちも同じである。しかし、候補に入っている八雲の親である修二は口出しをしない。シュドの方も一時期、同じ立場だったのでこちらも何も言わず、事の成り行きを見守っている。

と、言ってもセレナの正確を考えると修二たちはセレナの答えを予測……いや、答えをすでに分かっている。

「えーっと……あはは」

笑って誤魔化すセレナ。

やはり、と言いたそうに修二たちは笑っている本人を温かい目で見つめる。

セレナのことだから笑って誤魔化すと踏んでいたのだ。言い性格をしている。

しかし、そう思っているのは男性である修二とシュドだけであった。女性陣は答えるまで帰らないと言わんばかりの雰囲気である。というか勢いだ。

「笑っても無駄よセレナちゃん。ちゃーんと話してくれるまで私たち、帰りませんよ！」

ルミナがセレナの横でガッチリと肩を掴む。当然、それにビックリしたセレナは逆側に逃げようとしたが、そちらからは妹のメイが肩を掴んでいた。

「そうですね、候補者は上からレーベル王子、サバナ王子、そして……」

「シュウジの息子のヤクモね。王妃様は誰が良いですか？」

姉妹があげる候補者の名前。面白そうだからとルミナは王妃にまで聞き始めた。

しかし、流石に王妃にそれを聞くか！？と言いたそうに修二とシュドは顔をこわばらせる。

王妃は、本人達とは会ったこと無いが写真やレポートで大体の事は知っている。挙句の果てにはセレナや修二たちから話を聞いていたのである。

「私ですか？そうですね……国の事を考えるとサバナ王子かレーベル王子ですが……」

「……」

八雲の名前が出なかった事に少し虚しさを感じたセレナを見て、王妃は朗らかに笑みを浮かべた。

「修二の息子と言うだけあって八雲君には剣の才能も頭の良さも少しはあるようですし、将来は期待できる人ですねえ」

「もったいないお言葉です」

横で頭を下げる修二。

セレナの方も満面の笑みを浮かべる。

「まあ、決めるのはセレナですから」

「ああ！逃げたあ」

「こらメイ！馬鹿のことを言うな」

慌てて口をふさぐシュドに微笑む修二たち。
時間は日も沈んでいる時間帯となっていた。
結局、この後の夕食でもセレナは笑って誤魔化したり、話を逸らしたりして逃げ切った。

「むうー、明日は絶対に教えてもらおうからね！」

最後にそういつてメイは食堂を後にする。

続いて修二たちと一緒に王妃と国王も部屋を後にする。

この城では召使いも全員と一緒に夕食をとる決まりとなっている。

一人、食堂で食後のティーを楽しんでいる。

程よい温かさのカップを両手で包むように持ち、口元に運んでいく。

（結婚相手、ねえ・・・・・・たしかにこの国の将来を考えるとレベルかサバナだって事は理解できるけど）

セレナは目を瞑ると脳裏に移るのはクリスマスの前に学園であった練習試合。

レベルに勝るとも劣らない剣の才能を開花させた一年の生徒。
練習試合を見に行ったセレナだったが結局どちらにも話しかけることはできなかった。

次に映るのはクリスマスパーティーでの事。

久しぶりに“彼”と話をしたこと。それもとっても嬉しそうに笑う彼。

最後に映るのは修学旅行。

最終日で嬉しくて泣いてしまうほどの贈り物を私に贈ってくれた。指輪は今も左薬指にはまっている。修学旅行から帰ってくると、分かっていた事だけドルミナやメイ、お母様に聞かれました。でも、一番驚いたのはお父様が興味津々で聞いてくることでした。

思い出を一通り思い起こしてセレナは目を開けた。

一番最初に映るのは両手で包んでいるカップ。次に指輪。

「八雲——」

その声は無意識だったのだろうか、小さく、言った本人でさえ聞こえているか分からない程の物だった。

ここで問題がおきた。

食堂を後にしたセレナ姫が消えた。

食堂を出るところは召使いが見ている。だが、それ以降誰一人としてセレナを見たものがいなかった。

夜は警護のため、修二たちが見回りを交代性でしている。

その時はメイだったのだが、セレナの自室を覗いた時、そこにはセレナの姿が見えず薄暗く寒い部屋だった。慌てたメイは急いで修二や国王の下に駆けていった。

「つまり、セレナ姫が攫われたのは昨日の夜八時から十時までの間。

さらに誰一人不審人物を見たものはいない」

親父が昨日の出来事をオレたちに話し終えたようで、一息つく。その間にオレたちは互いの顔を見合し、意見交換をし始める。

「どーおもう？」

「まあ、十中八九プロの攫い屋。それか、このセイクリッド王国を敵意している国、だな」

「ボクも同感だね、レーベル王子の言うとおり攫い屋か敵国の犯行。でもこの国に敵対する国なんて片手で数えられるほど。リスクが高すぎる」

流石は次期国王になられるお二方。

冷静に分析し、それを口に出す。と言っても結局は推論の域を出ない。

「……」

二人の話を黙って聞いているオレに心配そうに視線を向ける気配を感じる。

気配の方に顔を向けると親友の二人が何ともいえない顔をしている。

なんつー顔してんだあよこの二人は。そんな心配そうな顔するなよな

「大丈夫だって、カイウス、レグ。それより、その話しなんだが・・・」

「ん？」

「どうかしたか？八雲」

サバナとレーベルは二人だけの会議を中断して視線を向けてくる。

「その話だけどさぁ……本当にその攫い屋ってプロの犯行か？敵国の犯行か？オレは違うと考えるがな」

「ほぉ……どうしてそう思えるか聞かせてもらおう八雲」

「ボクも聞かせてもらいたいね」

二人の真剣なまなざしが痛いく感じる。

まあ、平和ボケの日本人が何を言う！と言われても文句言えねえしな

「だってさぁ、不審人物がいなかったんだろ？それって、最初っからいなかったって事じゃないの？」

「バカを言え！プロなら誰にも見つかることなく攫うことができる。それが攫い屋だ！」

「ふーん」

「ふーんって……ヤクモ？」

「親父、この城に召使いなど全員合わせたら何人いる？」

顎に手をあて何かを思い出すように親父は視線を下に向ける。

「……確か五百人はいるはずだ」

「「っ!？」」

その数に二人はハッと目を見開くのをオレは見た。

「その攫い屋ってのがもしいたとしてもこの数に見つからずにセレナを攫えると思える?それも声を出さずに。外から進入って線もあるが、見た限り中から外になら縄を使えば降りられるが、外から中に入るには無理だ。城の周りには何も無いからな。セレナの自室は二階だろ?親父」

「あ、ああ。だが、何故それをお前が知っている?」

「だって、この客間に来るまでの部屋にはプレートが張ってあった。つまり、プレートがはってある場所は召使や親父たちが寝る自室だろ?王族の者が一階で、しかもプレートをつけて部屋にいるかよ」

「ふっ、正解だ。二階は国王や王妃様、それにセレナ姫の自室と謁見の間。他にも部屋はあるが武器庫だったり図書室だったりだな」

感心したような顔でオレを見るなよ。

てーか、何だお前達!オレの顔に何かついてるのか?まじまじと見つめやがって

「たしかに……この城に入るためには二十四時間門番が立っている間を通ってこないといけない」

「しかも、夜の八時から十時までに入る奴も出て行く奴もいない」

「そーゆうこと。で、敵国って言うけどさあ、相手が分かっている

なら入れないでしょ？最低限身分保障がないと見学だってできないだろうし」

「だけどよお、身分保障なんていくらでも偽装できるぞ」

「言いとくに気が付いたなレグ。確かに偽装される可能性があるが忘れていないか、この城に見学に来る者は必ず召使いか親父達護衛隊の手の空いてる人を必ず二人つける。コレがこの城が安全の理由だろ？学園で習ったろ」

「あー・・・・・・・・」

忘れてるなこいつ

何故こんな事を学校で習ったかも良く分からないが役にたったぜ。学園に感謝感謝

と、学園に人生で最初で最後の感謝をして、オレは話を戻す。

「見張りも兼ねて二人もいるんだ。好き勝手できねえよ、悪さを考えてる奴ならな」

「おお・・・・・・・・」

「以外だね、ヤクモにこんな才能があったなんて」

「以外って言うか・・・・・・・・まあ、色々とな」

推理小説でこんなネタがあったような気がただけなんだが、とは言えずにカイウスに曖昧に答える。

「では、八雲はどう考えているんだ？」

「んーそれなんだが、この二つが消えると残りは消去法でこの城にいるだけか」

「——っ！！」

その場にいる全員が固まった。

予想はついていたがここまで場が固まるとは……………

「って、ことで城内を隈なく調べさせてもらおうよ」

「いや、それは俺たちもやったが……………」

親父の声にゆっくりと顔を向ける。
なんか微妙に汗を掻いてないか？

「それでももう一回だ」

「——わかった。だが、少し待て！その事を国王に……………」

「良からう。話しは理解した……………」

その声は突然聞こえてきた。

オレたちは反応的に声のほうに向いていた。

攫われた姫君（後書き）

今回の反省

暇ねん「やばい！ネタがない」

八雲「昨日も言ってた」

暇ねん「やばい！ストーリーがずれてきた」

八雲「は？何言ってるの？」

暇ねん「いや、最初に予定していた話とずれて進んでいるから困ってるのよ」

八雲「なんだそりゃ!？」

暇ねん「詳しいことはもう少し話が進んでから」

次回『ここは任せろ、いけっ!』です。

ここは任せろ、いけっ！ (前書き)

暇ねん 「サブタイを変えました。それと最後にアンケートがあります」

ここは任せろ、いけっ！

「あ・・・・・・・・あなたは・・・・・・・・」

「ロウ・ザ・セイクリッド・・・・・・・・この国の国王にして、この城の主だ」

扉から入って来たのは、いかにも王族です、と言える格好をし、四十後半と思える年齢だが、凜としていて隙がない。それどころか、普通の人とは違う雰囲気を感じ取れる。

この人が・・・・・・・・セレナの父親・・・・・・・・

「始めまして、と言えるな。高坂八雲君」

「どうも・・・・・・・・」

スッ、と差し出される手をまじまじと見る。
何故かだって？簡単さ。

「どうかしたのかい？八雲君」

「いやあ、一国の王ともなれば娘を攫われてもそんなに冷静に挨拶ができるんだなあ、と思ってね」

手を制服で一回拭いてから国王の手を握り返す。
それは良かったんだが次の瞬間、オレの頭部からはかつてない程の痛みが体を貫く。

「いっ………てえー………っ!!? 何しやがるバカ親父!？」

「おまっ! 国王になんて口の聞き方してるんだ!? バカ息子が!」

親父のヤロウ……マジで殴りやがった。レーベルの牙突なんて目じゃねえ程の威力だったぞ!

後頭部を押さえながら犬同士のにらみ合いのようにグルルル、と威嚇を出しながら睨み合っていると、国王が親父を止めた。

「いいさ修二、八雲君の言うとおりですよ。娘が攫われたって言うのに冷静に挨拶している私の方が可笑しいのですから……」

「国王様! そんな分けないでしょ、昨日からセレナ姫の事で一睡もしていないでしょ?」

本当だ、目の下に隈ができてる

親父の慌てたように国王に近づいて体を気遣っている。

だが、なぜかオレが見た限りでは何かが違う。そんな気がしてならない。

「まあいいや。王様の許しが出たんだからオレたちは城内を探してくるわ、オレの予想が正しければまだこの城のどこかにいる筈だからな」

「よし、ならここは二手に分かれよう。私はサバナと行く。八雲、貴様はカイウスとレッグを連れて探せ」

レーベルがメンバーを分けると立ち上がる。
それに同調するように残りの連中も立ち上がる。

「おう、それじゃあレーベルたちは二階を、オレたちは一階を探す。
王様、分かっていると思うけどこの城から誰も出さないように」

「ああ、わかっている。気をつけるんだぞ、もし八雲君の予想が合
つていれば敵は城の者だからの」

その注意に頷き、急いで客間を後にする。
廊下に出るとオレたちは二手に分かれて探し始めた。

「ここは・・・・・・どうやら召使いの部屋らしいね」

無用心にも程がある。鍵くらいかけろよな。まっ、今はありがたい
声に出さずに部屋を隈なく調べては次の部屋に向かう。

そして調べる。これが何十回も続いた。外は既に真っ暗になり、外
部からの音は何一つ聞こえない。

「いつの間にか十一時になっているね。どうする、ここらへんで一
回客間に戻って休む？」

「たしかにこう部屋の数が多くちゃ、疲れるぜ。俺たちは部活やつ
て疲れも残ってるし」

「・・・・・・そうだな」

セレナの事も心配だがこいつらの方が今は大事だ。
大体、セレナを攫ったのがこの城の者なら何をしたいのか検討がつ

かん

口元に左手をあて、考えながら客間に戻るとレーベルたちが戻っていた。

話を聞けばオレたちと同じ考えだったようだ。

こうしてオレたちは客間で夜を越す事となった。

「学校だっけ、今日？」

「当たり前だろ！どうするよヤクモ」

「聞くだけ無駄でしょ」

「よく分かってるカイウス。サボる」

朝、召使いが運んできてくれた朝食を手にしながら今日の事を話し合うオレたち。

レーベルとサバナはオレたちより早めに朝食を取り、調べに行っている。

三十分後にオレたちも客間を跡にする。

城には朝の八時だって言うのに観光客や色々な関係者が入出している。

流石にセレナ姫が攫われた。とは国民に言えない為、怪しまれないようにいつも通り城を開放にしている。だがその分、嚴重に警備兵ならぬ護衛隊が目星光らせている。

「あっ、どうだった？」

城の入り口に視線を向けていると階段から降りてくるレーベルたち。カイウスは二人に調査の結果を聞いてみたが黙って首を横に振る。

「って、ことは残るは一階、か」

レーベルたちを加えてオレを先頭に残りの一階部分を探し始めた。だが、無駄に時間が過ぎていくだけ。しだいに苛立ちがオレを侵蝕していく。

「オレの考えが間違っていたのか？ いや、そんな筈は……」

一人呟く。すると前方からレグの声が聞こえてくる。

しまった、考え事してたら立ち止まってた

声のほうに足を進めると、そこには一階にある最後の扉。

つまり、ここに手がかりもセレナもいなければ……ゲームオーバーと言う訳である。

「ここは？」

「分からん、しかし開けて見るしかないだろ」

そうだな、と呟きオレはノブに手を掛け、回してみる。しかし、予想外の結果が感触で返ってくる。

「鍵が……掛かってる……」

「」「はっ？」「」

何度回してもガチャガチャ、となるだけで開かない。

オレたちは互いに顔を見合わせると一旦、広場に戻り警護のため立っている護衛隊の人に扉のことを聞くと、腰に吊るしてある鍵を渡してくれた。

渡された鍵を使うと当然だが鍵が開く音が聞こえた。

「開いた」

またもここでオレは仲間達に顔を向ける。

鍵が掛かってたって事は何かあるってことだ。それくらいはすぐに理解できる。

だからと言うわけではないが、オレたちの手には木刀が握られている。

「いくぞ？」

「おう」

「いつでも」

「気をつけろよ」

「慎重にね」

上からレグ、カイウス、レーベル、サバナの順で返事が返ってきた。小さく頷き扉を開ける。扉は古いものだったのか軋む音が聞こえる。

「これは――」

言葉を失った。

そこにあるのは地下へと続くコンクリートの階段。しかも明かりがなく、下に行くほど暗い。

心の中で舌打ちするとオレはズボンのポケットから携帯を取り出し、カメラの光で足元を照らす。

「なるほど、なら俺たちも」

五個の携帯の光で少しはまともになり、オレたちは階段を下っていく。

結構歩いたはずだ、それなのにまだ階段は続いている。

真っ暗で狭い空間がオレのオレたちの気持ちを不安にさせる。

次の瞬間だった。かなり上の方で音が聞こえる、いや聞こえた。バツと振り返るが見えるのは真っ暗な視界。

「扉が閉まった・・・・・・？」

「ハメられた？」

「立ち止まっても仕方ない、行くぞ」

こうして歩く事五分。ついに広い部屋にでた。

広い部屋にはランプの変わりに何百のロウソクに火が灯っている。

「なんだ・・・・・・ここ？」

さっき言ったとおり部屋は広く、テニスコート三個分の広さはあるだろう。いや、それ以上かもしれない。奥にはまたも扉が。

なにもねえ……仕方ない。先にすす……

扉に近づこうとした時、後ろから足音が聞こえてくる。

振り返ると何十と言う数の人間。全て仮面を被って顔を隠している。どーやら、セレナを攫った奴の仲間のようなだな、と考えながらオレたちは木刀を構える。

「あん!？」

「可笑しいと思わないか、八雲？」

「可笑しいなあ……なんだそれ？」

レーベルだけでなく皆思っているだろう。

相手が手にしているのは真剣ではなく、木刀。オレが今、握っている物と同じものである。

「テロリストなのか誘拐犯なのか知らないが……舐められたものだ。八雲、ここは私とサバナで足止めする。先に行つてろ」

「はぁ？お前こそ何言ってるんだよ！いくらお前だからってこの数は無理だろ、それにサバナ先輩は初心者だし……」

「あれ？言わなかったっけ？ボクはこれでも十八歳未満の世界大会で五位だけど？」

「……」

なに？この展開？レーベルは世界最強でサバナは五位？可笑しくね

!?

「ほら、呆れてないで先に行った行った」

「うわっ」

サバナはカイウス、レグと一緒にオレの背中を押す。

「ここは……」

「私たちに任せろ。それとも、私がいないと恐ろしくて先に進めない、か？」

「……ハッ！誰が？行くぞ、カイウス、レグ」

「いいの？」

「あいつらが行けって言うんだ、行くさ」

「おっし、後からちゃんと追って来いよ！」

「貴様に言われることではないが……すぐに追いつくさ」

「いくぞっ!!」

扉を開け、オレとレグ、カイウスは先に進む。

「さーて……久しぶりに楽しませてもらうよ“剣聖”？」

木刀を構え、さぞ楽しそうにサバナはレーベルに聞いてみる。

「ふっ、好きにしろ“剣帝”」

レーベルはサバナに向かないで言うが、その表情からは安心感を感じる。

「「うおおおおおおおっ!!!!!!!!!!」」

二人の咆哮が背中から聞こえ、一瞬足をとめてしまいが振り向くことなくオレは階段を駆け下りた。

ここは任せろ、いけっ！（後書き）

今回の……アンケート
暇ねん

「いきなりですが読者の皆様にアンケートがございます。大した事ではないので気軽に答えてくださるとありがたいです。

まず、この『オレが姫の婿候補！？』がそろそろ終わりを迎えます。そのため次回作を考えているのですが次は……次も『学園』物でやろうと思っています。

そこで、普通の学園恋愛もの（戦闘なし）とファンタジー学園もの（戦闘あり）、どちらが読みたいでしょうか？

結局は両方書くのですが、もう一方の作品『ブリーチ』を書き終えてないため、先に片方を書くかと思っています。ですので、どちらが先に読みたいか教えてください。

皆様のご返答、お待ちしております。

以上、今回の……アンケートでした」

次回『誰だよ……あんた』です。

誰だよ……あんた

レーベルとサバナと分かれて結構歩いたはず。それなのに階段は下へ下へと向かっていく。

「おいおい、どこまで降りていけばいいんだよ」

「さーな」

なんて事を言っていると目の前に扉が現れた。

さっきの事もあるし、後ろを振り向くが誰も現れない、何も聞こえない。

二人に目で合図してオレは扉を開ける。

「うっ！」

扉を開けるとまぶしすぎるほどの光がオレたちの視界を閉ざした。光に慣れ、ゆっくりと目を開けると顔の上半分を仮面で隠した者が二人、それも木刀を持った者が待ち構えていた。二人が立っている場所はさっきの部屋に比べると広くない部屋の中央に立っている。

「次の相手はこの二人か……」

「はっ、上等だぜ。ここは俺とカイウスで足止めするぜ！」

「レグ？何を……」

「そうだね、一刻も早くセレナ先輩を確認したいし……ヤクモは先に行って」

「お前ら・・・・・・・・わかった、ここは頼むぜ！」

中央にいる謎の二人を迂回するように部屋の端を走り抜けようとすると片方がオレに向かって仕掛けてきた。

なんだよ！？こいつの速さ・・・・・・・・尋常じゃねえ！

中央から一気に近づいてきた人物は見える口元を動かさず、木刀を横に振りぬいてくる。

防御しようとオレは木刀を横に出そうとしたがそれよりも早く相手の木刀がオレの体を獲った。

「しまっ——」

目を瞑り、痛みに対する構えをしたが痛みはいつまで待っても来ない。

恐る恐る目を開けてみるとオレと相手の木刀の間に別の木刀が割って入っていた。

「レグ・・・・・・・・」

「油断してんじゃねえーよ。ったく、セレナ先輩を連れ戻したら俺たちに何か奢れよな！」

「おう、期待してろ」

レグが止めている間にオレは扉に向かって走る。

だが、それを許さない、と言わんばかりにさっきとは別の相手が切りかかって来る。

そお何度も……無様な姿は見せねえよ！

さっきの相手と比べて速度に爆発力がない。練習試合のレベルの方が数倍速い。

オレは体を捻って木刀を避け、お返しと言わんばかりの剣術を相手に叩き込む。しかし、これはバックステップによって避けられる。

「あなたの相手は僕ですよ」

オレの攻撃を避けた相手にすぐさま刃を振るう。

一瞬だけカイウスとレグを見てからオレは扉を開けて先に進む。

「さーて、さっさと倒してあいつの後を追うぜ、カイウス」

部屋の中心に移動し、背中合わせのカイウスに声を掛ける。

「そうだね。でも、油断はしないようにね、レグ」

「分かってるさ……いくぜっ！！」

「おおおおおおおおおおおおっ！！！！」

一人となったオレは階段を上がっていく。

何故かさっきの扉から階段は上に向かって作られている。

それにゴールが近いのか階段の壁には口ウソクが並べられており明

るい。

「まってるよ……セレナ……」

扉にはすぐたどり着いた。

乱れた呼吸を整え、オレはゆっくりと扉を開ける。

中に入るとこの部屋は今までとは違った造りとなっていた。壁には神秘的な絵が描かれており、床にも何かを真似たような絵が描かれている。

そして部屋の奥にはカーテンで向こう側が見えないようになってる。

「なんだぁ……変な場所に出たな。さっきみたいに誰か待っていると思ったが……」

「ああ、待っているさ。高坂 八雲」

「!？」

カーテンの奥から出てきた人物。

今まで同様、顔の上半分を仮面で隠し、手には木刀。

それ以外に分かるとしたら相手が大人で男だってことだ。声からも体格からそれはずぐ理解した。

こいつが……あの集団の隊長か？

「ああ、そうだ。俺はあいつらの部隊長だ」

「……」

「どうかしたか？」

「ご丁寧に心の中を呼んでくれてありがとうございますっ！それじゃ、ついでに答えてもらおうか、セレナを攫った理由と居場所を！」

男に向かって走り出す。

木刀があたる範囲まで接近して振り抜く。

「そうか……なら先の質問を答えるでしょう」

男はオレの木刀を簡単にいなすと鋭く木刀の先端を突き出す。

それも何回も。ステップを混ぜながら避け、距離を取ると勝負に出る。

「喰らいやがれ——五月雨」

正面から突っ込み、一瞬で横に移動して木刀を振り抜く。

それに反応する男は受け止めようと木刀を守りに使う。が、オレの木刀が男を襲う事は無い。

右手から左手に木刀を空中で持ち返ると全体重を乗せて振り抜く。

防御のタイミングがズレた所に渾身の一振り……コレで決まる、いや、決めてみせる！

「質問しておいて聞く気が無いとは……まったく、親の顔が見てみたいな」

「なっ——！？」

決まった、と思えるほどの一振りを男は左手で木刀を掴んで止めた。

それも素手である。

うそっ？ 防御のタイミングをズラして振りぬいたんだぞ！？ それを素手で意図も簡単に止めるだと？

「まあいい、俺がセレナ姫を攫った理由はある方からの依頼でな。その為にセレナ姫を攫った。どうだ？ コレで満足か？」

同時に男は左手を離した。

しかし、オレにとっては大変困った事になった。

得意の五月雨を止められた。それも初見で・・・・・・・・くっ！

「おいコラ！ まだもう一つの質問が残ってるだろ！」

叫びながらオレは男の周りを走り、背中から切りかかるが男はこちらを見ずに体をずらして避ける。

その姿はまるで子供が親に遊ばれているように・・・・・・・・

「そうだったな、確かセレナ姫がどこにいるか？ だったな悪いがそれは言えんな。だが、この城にもセイクリッドにも居ないという事は教えておいてやろう」

「ふざけ・・・・・・・・」

刹那、オレはアイツを見失った。それも目の前に居た筈の奴を。代わりにオレの横を風が通り抜けた。

「鈍いな・・・・・・・・倒れる事さえも」

「ぐはっ!?!?・・・・・・・・なん・・・・・・・・だ・・・・・・・・っ?」

風が通り抜けた時、肩・右腕・腰・左太腿が痛みによって悲鳴を上げ、床に片膝をつく。

男はオレの後ろで肩に木刀を預けてオレを見下している。いや、仮面によって素顔が見えないため何とも言えないが、そんな気がした。

「よわいな。これでよくセレナ姫の婿候補になったものだ。笑えるな」

「んだとお・・・・・・・・」

「吠えるだけなら犬でも猫でも赤子でもできる・・・・・・・・ふん、鯉は竜にならないか」

「意味・・・・・・・・解んねえこと・・・・・・・・言ってるじゃ、ねえっ!」

木刀を杖に立ち上がり木刀をビシッと男に向ける。
その姿に男は口元を歪ませる。

「大体、てめえは・・・・・・・・だれだっ!?!」

「ふ、ふふ・・・・・・・・ハハハハっ!!!」

「何笑ってやがる」

その笑い方は男に似合わない笑い方であった。口を大きく開け、声を高くして笑う。

それが似合わないとおレは感じた。

「まさか本当に分からないなんてな、俺は悲しいぞ・・・・・・・・八雲」

カチャリ、と音を立てながら男は仮面を取った。

「なっ・・・・・・・・ま、まさか・・・・・・・・」

耳を疑った。男の声に。

目を疑った。男の姿に。

「よう・・・・・・・・八雲」

「お・・・・・・・・親父・・・・・・・・？」

そこに立っていたのはオレの父親、高坂 修二だった。

誰だよ……あんた（後書き）

今回の反省

暇ねん「皆様、昨日のアンケートの返事ですが、感想でも暇な青年にメッセージとして送ってくれても構いません。皆さん、お願いします」

暇ねん「気を取り直して反省ですが、前回の剣聖と検帝は空●軌跡から、それと今回の修二の言葉はブリ●チからパクってきました」

次回『誰が敵でもオレは……テメエを……討つ！』です。

誰が敵でもオレは・・・・・・テメエを・・・・討つ！

「どうして・・・・・・なんで親父がつ！？」

「八雲よ、言っただろ。俺は依頼されただけだって」

またそれかよ・・・・・・クソ親父！

自然と拳に力が入る。

しかし、それをどうする事も今のオレにはできない。

「依頼って・・・・・・依頼されれば今まで守ってきた物を捨てるって言うのかよっ！？答えろっ！！」

痛みを奥歯で噛み砕き、オレは親父に襲い掛かる。それすらも親父は簡単に避け、何太刀かをオレに打ち込む。

見えねえ・・・・・・ジン先輩のラピディより、速いスイングなんてありかよ！？

「俺は俺の信じる人にしか付いていかん。そして、俺が信じる人はあの人だけだ」

「ぐっ・・・・・・いつまでも・・・・格好つけてんじゃ、ねえ！」

横に木刀を振り抜くが親父は五月雨を止めたときと同じく、左手で受け止めるとそのままオレを引き寄せ木刀を離し、胸倉を掴む。

「ぐはっ！クソ・・・・・・親父・・・・・・」

「格好つける、か。ふん、お前はいつから口だけ達者になった？」

「ぐ・・・・・・・・・・」

今まで見た事がない親父のまなざし。

動きたくても動けない。なぜか？親父の目がそれを許さないからだ。親父の目には忠誠心がくつきりと浮かび上がっている。

例え誰が相手でも俺は負けない、と物語っている。

「まださっきの方が刃に俺を倒す、という気迫があった。だが、今は何だ？俺が相手と知って怖気づいたか？」

「うる・・・・・・・・せ・・・・・・・・え・・・・・・・・」

「お前は俺が、いや、親が、友達が、世界の全てが敵に回ったら刃を手放すのか？」

「——っ！」

「守りたい人を手放すと言うのか！答えろ、高坂 八雲！」

「オ・・・・・・・・レは・・・・・・・・」

左手をゆっくり、ゆっくりと持ち上げ、胸倉を掴んでいる親父の手の首を握る。

今ある力を目一杯注ぎ込む。

「オレは・・・・・・・・そこまで堕ちるつもりは・・・・・・・・ねえっ！」

「むっ！」

木刀で親父の左腕を叩き、胸倉を手放した瞬間にオレは後ろに後退する。

数回咳き込み、ボーっとする頭を頬を叩いて目を無理やり覚ます。

「さっきから好き勝手言いやがって……オレは、敵が誰であろうと、世界がどうだろうと関係ねえ！

オレが刃を……誇りを手放す時はあいつが幸せになった時だけだ！」

「はや——チィィー！」

振りぬいた木刀が親父の木刀とぶつかり合う。

それは今までの避けたり、手で受け止めたりするのではなく、木刀で受け止めた。

「感謝するぜ親父い。そして、同情するぜ。オレはアンタを……
……討つ！」

「なっ!？」

受け止めていた親父がオレの力によって後ろに押し戻される。

それに唾然とている間にオレは懐に入り、一発、二発と木刀を振るう。

「お前……」

「いくぜ親父……これが、オレの総集技だ」

両手でしっかりと木刀を握り、真正面から親父に対して突っ込む。対して親父も直線勝負と睨み、木刀を頭の上で構える。親父の構えを見てもオレの考えは変わらない。

足に力を込め、床を力強く踏む抜く。

同時に親父の木刀が閃光のような速さで上から振り下ろされてきた。

「なっ——！！！！？」

振り下ろされた木刀を紙一重でかわし、オレは技の始動に入った。渾身の一撃が避けられ親父は信じられない、と言いたそうに口を開け呆然としている。だが、その表情の理由は別にある。

「消え………た………？」

オレは体を地面ギリギリまで低くして両手で持っていたのを右手一本に持ち替える。

そしてそのまま——

「——総集技“神隠し”」

体を“立ち上がらせる勢い”と“下から一気に持ち上げる速度と威力”を合わせた刃が親父の顎を切り裂いた。

大人の体が数センチ宙に浮き、親父の体は仰向けに崩れ落ちた。

「ヤクモっ！」

親父が崩れ落ちると同時とっていいほどのタイミングでバンツと扉の開く音が聞こえる。

満身創痍の体で扉に向くと傷だらけのカイウス達が笑顔でこちらを

見ている。

「よお・・・勝ったぜ」

「ヤークローモー・・・流石だな！」

「うおっ！」

走って寄ってくるレグはジャンプして体ごとオレに抱きついてくる。体を張ってキャッチしたは良いが、今の状態でレグの体を受け止めるには結構大変だった。

「さすが私のライバルだな」

「あら？いつからオレがレーベルのライバルになったんだ？」

「あの時からだ」

どのときだよ！と言いたいが今は差し出されている手を握る事にした。

カイウスに顔を向けると満面の笑みでオレの背中を何回も優しく叩く。

サバナなんて目に涙が溜まってるよ。

「そうそう、今回の件だけど・・・」

「そうだ！親父、何でこんな・・・事・・・を・・・あれ？シュドさんにメイさん、ルミナさんも」

倒れている親父に話を聞こうとして向いてみると何故かシュドたち

が親父の体を心配している。

いや、心配するのは当然っちゃあ当然なんだが……

「八雲、修二の変わりに私が話そう」

「レーベル？なんでアンタが？」

「いいから聞け。今回の一件がな、これはお前に対しての婿候補の最終試験だったんだ」

「……………は？」

何言ってるのレーベルさん？

何度も目をパチパチとさせる。

傍から見たら相当可笑しいだろうな。

「だから、これはお前がセレナ姫の夫に相応しいかの試験だって言っているんだ。理解できてるか？」

「な、な、な、な、なんですと——————！！？」

じゃあなに、セレナが攫われたってのは…………嘘ですか！？
それより…………

「なに？レーベル知ってたの？サバナ先輩も？」

「ああ、城に連れてこられる時に一通りの筋書きを聞いたからな」

「ごめんな八雲」

いや、めっちゃ悪いと思ってないだろ、サバナ先輩

「カイウスとレグも？」

「いや、僕たちはさっき教えてもらったよ。前の部屋に居た二人組みが実は父さんとメイさんだったんだよ」

「そーゆうこと、それでちよつとしてから今回の一件の全てを教えもらったってわけだ。良かったなヤクモ、コレでお前はこの国の次期国王って事だ！」

めっちゃ喜んでるレグには悪いんだが、まだ疑問点が残ってる。だって・・・ねえ。

「それってつまりオレがセレナと、ってわけだろ？レーベルはそれで良いのかよ？サバナ先輩も」

「僕は元から乗り気じゃなかったからね。レーベルの方は知らないけどさ」

「ふっ、愚問だな。セレナ姫が一番信頼しているのがお前なら、姫の幸せの為に私は身を引くさ」

「レーベル・・・ありがとうな」

「ふん！だが、姫は諦めるが世界一の称号が渡さんぞ」

「上等」

そんなふざけた会話をしている間に親父は起き上がりオレの頭にポン、と手を置く。

「強くなったな、八雲」

「あー・・・ごめん、マジで振りぬいたから・・・顎大丈夫？」

「ああ、なんとかな。それより、聞いていると思うがこれは最終試験だ」

「しってるよ。で、結局セレナはどこ？」

その質問に親父はニヤツといやな笑みを浮かべる。しかも親父のこの笑みはオレにとってめんどくさい事を意味している。

「それは秘密だ。姫を探し出すのが最終試験だからな」

「んなっ？」

客間に戻るとまずはメシ。その後に親父と国王の話が始まった。

「すまなかったね、八雲君。修二と本気の戦いをさせてしまった」

「いいですよ。セレナが攫われたわけじゃないって分かったただけでも、一体どこへ？」

「ほっほっほ、それは言えんの。ただ、八雲君が知っている場所だって事は教えておこうかの」

「オレの知っている場所・・・・・・・・・・？」

ちなみにセレナの事だが、聞くと昨日までに学園での作業を終わらせていたらしい。

作業というのは写真を撮る事や色紙などなど。
つまり学園全体でグルだったというわけだ。

「そうだな、ヒントぐらいやろう。ヒントはオレはお前にあるものを渡しただろ？それがヒントだ」

「ある物？」

言われて思い出すために目を瞑る。

親父から渡されたものなんて数少ない・・・・・・・・・・えーっと携帯にガチャのカプセル。それから・・・・・・・・・・っん？

「あーーーーー」

「思い出したのか？」

顔をグイッと近づけてくるレグを押し返すと思い出したことを口にする。

「前に城の裏口の鍵とか言って鍵を渡された・・・・・・・・・・ん？ってことは、あの鍵で開く場所・・・・・・・・・・どこだ？」

「裏口の鍵？この城に裏口なんて合ったか？」

「いや、無いはずだよ」

サバナとレーベルの会話からするに城内ではないな。調査の時、全部の部屋を探したし。

それじゃ、これはどこだあ？

「ああ、必ずしもセイクリッドにあるとは言えないからな」

「は？セイクリッドには居ないって、他にオレが知っているのは日本だけ……ああ！！」

一つだけある！この鍵が開く物が日本に。そうと決まったら日本に戻るぞ！

膳は急げだ、とか考えているとレーベルが自家用ジェット機を手配しやがった。

は、はは……

引きつった笑顔でオレはセイクリッドから日本に帰国する事になった。

誰が敵でもオレは・・・・・・・・テメエを・・・・討つ！（後書き）

今回の反省

暇ねん「来た！ついに・・・・・・・・」

八雲「次回最終回か？」

暇ねん「それは次の次」

八雲「それじゃ、何だよ？アンケートの回答か？」

暇ねん「それも一通もなし」

八雲「・・・悪い」

暇ねん「分からないのか八雲君？君だけのオリジナル技ですよ」

八雲「ああ！？そうだった。名を神隠し」

暇ねん「いやー、このままパクリのまま終わらせようと思ったがオリでやりました」

八雲「あざーっす！」

次回『みーつけた』です。

みーつけた

日本に着くとオレは寒さに体を縮こませながら空港を出ると、約半年ぶりの日本に懐かしみを感じながらタクシーである場所に向かう。ちなみに、レーベルの自家用ジェット機内で制服から私服に着替えました。着替えは親父が家から持ってきていたらしい。

タクシーに乗って二時間が過ぎると、タクシーの窓から外の景色はオレの良く知った光景を通り過ぎている。

「ここでもいいです」

料金を払い、オレはタクシーからでた。

寒いなり、と呟いてから着いた街の中をゆっくり、懐かしみながら歩き出す。

セレナが日本に来て、最初に来た場所だな。確か、あの時はドロボウと遭遇したんだよな

「あの時はマジでやばかったな」

ゆっくりゆっくりとしかし、確実に目指している場所に向かって足を進める。

数十分して着いた場所は懐かしい我が家。

「半年振りか………そーいえば母さんに電話一回もしなかったな。怒ってかな」

そんなアホらしいことを考えながらオレは玄関の扉を静かに開ける。中に入ると何一つ変わっていない家の中。

「なんか・・・あの時と似てるな」

去年の夏休み前日の学校から帰宅した時を思い出してしまう。

あの時は母さんが慌てて玄関に出てきたんだよな。

「まったく、半年振りに帰って来たと言うのに・・・ただいま、の一言もないの？」

「母さん・・・ただいま」

リビングから現れた母さんはオレを見るなりため息を一つ溢した。

「よし・・・おかえり、八雲」

当たり前のような挨拶を交わして、オレはリビングに向かった。

この場面もあの時とダブるな。向かい合わせに座り彼女の話し、まあ、今回は違うけどな。

「で？今日はどーして帰ってきたのかな？」

台所から温かいお茶が入ったコップを目の前に出してくれた。

「ん？まー・・・かくれんぼ？」

お茶の入ったコップを両手でさわり、手を温めながらオレは悩んだ末に子供っぽく言ってみた。

「ふふ、意味が分からないよ」

と、言い返してくるものの母さんの顔には上出来よ、と言いたそうに見えた。

それからセイクリッドでの生活をオレは母さんに話した。

友達的事

先輩的事

親父達の事

セイクリッド学園で過ごした半年の出来事を。

母さんはそれを自分のことのように笑って話を聞いてくれた。

さて、現在時刻は午後の五時三十分。家に帰ってきて早くも一時間が経っていた。

「さうて、時間も時間だし飯でも作るかあ」

立ち上がり台所に向かって歩くオレに母さんは、かくれんぼは？とニヤケ顔で聞いてくる。

「んー、メシ作ってからかな。早く見つけたらつまないだろ？」

「ふふ、鬼も大変ね。さーて、久しぶりに母子で夕食を作るとしましょう」

「母さん……手伝ってくれるの？」

「あら？心外ね、手伝っちゃいけないのかしら？」

「まさか」

母さんと一緒に料理作るのも懐かしいな。今までならどちらかが作って、どちらかが待つって形だったからな

「なに笑ってるのよ。そんなんじゃ指切るわよ？」

それはこっちの台詞だって。オレの方ばかり見て、火傷するなよ。とは言えず、笑って誤魔化す。

よし、後はご飯が炊けるのを待つだけ。あと二分。

「そろそろ、鬼さんは探しに行かないといけないんじゃない？」

味見なのかつまみ食いなのか漬物を摘みながら母さんがオレに視線を向ける。

「んじゃ、いってきまーす」

時間も時間なんでオレは二階に向かって歩き始めた。

階段を上りながらズボンのポケットに閉じ込められている鍵を掌に取り出す。

「・・・・・・・・」

オレの部屋の前。オレ自身も忘れていた。

そー言えばこの扉に鍵が付いてるんだよな。

これと思い出したのは当然の事ながら国王と親父の話聞いた時だ。

鍵を鍵穴に入れてみるとピッタリ。
鍵が開く音が聞こえ、ドアノブに手を掛ける。そこでピタッとオレは動きを止める。

「・・・・・・・・・・」

いくらオレの部屋だからってセレナがいるのだから、ノックの一つぐらいした方が良いよな？

瞬時に答えを導き出し、扉を三回ノックする。が、返ってきたのは静寂だけだった。

返事がない。あれ？オレの予想外れた？いや、母さんの表情から見てアタリだろ！んじゃ隣の部屋？

そう思い、ホームステイの時にセレナが使っていた部屋を覗くと誰もいない暗い部屋。

確認のため明かりをつけるが・・・・・・・・誰もない。

「やっぱ、オレの部屋だよな」

もう一度ノックするが返事がない。

あれ？セレナさん？

そーっと扉を開け中を見ると・・・・・・・・

「あ・・・・・・・・なにしてるんだか」

中では部屋の明かりを点けたままオレのベッドでぐっすりとお寝んね。

その姿がとても愛くるしくベッドに近づき、セレナの頬を触る。

「ん・・・・・・・・」

ピクッと瞼が揺れるが起きる気配はない。

どうしたものか、と考えている時ある本の内容を思い出した。

「ふっ」

小さく笑ってオレはセレナの耳元に口を近づける。それは今にも当たりそうな程の近さ。

「セレナ——好きだよ」

「う・んっ・・・・・・・・——っ!？」

自分で言うのもアレだが、今の声はマジです。

それに反応して答えてくれたのか、セレナは目を覚ますと耳まで真っ赤になってバツとオレから飛びのく。

可愛い・・・・・・・・ここに来てオレのキャラが崩壊してきた

「や、や、や、や、や、やくもっ!!!!!!??」

あら〜てんぱってるわ。まあ、そりゃあそうだろうな。誰だって寝てる時に耳元で愛の告白なんて。

「おはよう、夕飯の準備できたよ。早く降りて来てくれ。親父達にも電話しないといけないから」

「いやっ、それより……」

「ん？それより……なに？」

「~~~~~っ!!」

あえて知らん振りしてみると、セレナの表情が目まぐるしく変わっていく。

始めは恥ずかしさ、次に嬉しさ、最後に二つが混じったような表情。まっ、どれもオレがそう見えたっただけだが。

久しぶりに三人でとる夕食はオレと母さんの話だけでセレナは真っ赤な顔を持続しながらモジモジと食べて終わった。
その後に親父に電話をかけた。

「どうやら無事、セレナ姫を見つけられたようだな。流石は俺の息子だ。鼻が高いぞ」

「どーも、セレナの方は顔を真っ赤にして黙ってるけどな」

電話をしながらチラッと顔を向けると真っ赤っかのセレナ。

「……………何をしたんだ？」

「いや、オレが見つけたときに寝てたからちよつとした悪戯を……」

「八雲っ!!アレは悪戯だったんですか？」

今の言葉を聞いていたのか真っ赤な顔をしたままグイッと顔を近づけてくる。

目には涙が溜まっている。そんなセレナを見て、オレは困りながらもセレナに向けていった。

「耳元でやったのは悪戯だけど、内容は本当だ。もう一度言うか？」

「ふふっ……分かってるわよ。八雲の気持ちも私自身の気持ちも」

「そうか」

満面の笑みのセレナを見てさすがにオレも限界だって。

グイッと空いている左腕をセレナの腰に回し抱き寄せる。

「きゃっ——どうしたの八雲？」

「いやっ、ちょっと理性があれなもので……ちょっとぐらいいいかなあ……なんて。嫌だった？」

「そんな事ないでしょ。好きな人にされるのだから」

「それってセレ——ッ!!?」

「お——い、何してるんだあ？息子よ——」

受話器からきこえて聞こえてくる親父の退屈そうな声。

しかしオレはそれ以上に目の前で大変な事が起きている。

「ん．．．．んっん．．．．」

「んんっ．．．．」

オレの唇とセレナの唇が．．．．ってうおおい!?

なんで? えっ? 舌っ!?! 舌がつ!! どうしてこうなった? オレが抱き寄せた所為か!?! そうなのか!?!

「ん．．．．はあっ．．．．はあっ．．．．」

「はあ．．．．はあ．．．．」

目が離せねえ．．．．．じゃなくて!

「セ、セレナさん? オレ、今のファーストですよ?」

「ふふ、奇遇ね。私も」

「．．．．．」

会話が無くなった。そして気付いた。受話器から親父の声が聞こえなくなっている事に。

「ああっ! お、親父! 悪い! で、なんだっけ」

「息子よ、いくら試験に合格したと言っても、親の前でキスするのはどうかと．．．．」

電話でも、と付け足してくる親父に返す言葉がない。

しかも、横目で台所をみると花唄交じりで皿洗いの母さん。どうや

ら見ていたらしい。

「まあいい。セレナ姫に代わってくれ」

「お、おう………セレナ、電話」

「うん」

頷き受話器を受け取るセレナ。

気付けば今も腰に腕を回している。

さすがに腕を戻すか。電話しにくいだろうし………

腕を離し、真っ赤になっているであろう顔で台所に麦茶を取りに行く。

気を使っているのか母さんは何も言ってこない。ぶっちゃけ、何か言ってくれる方が何百倍もありがたい。

こうしてオレは最後の婿候補の最終試験を合格する事ができた。
この情報は一日、いや、半日でセイクリッド中を駆け巡りお祭騒ぎ
だったと言う事はセイクリッドに戻ってから知る事になった。

セレナと一緒にセイクリッドに戻り、いつもの学園生活を送っていたのだが、早いものだ。

それはもう、早いものなんのって。少年ジ●ンプやマ●ジンのページをめくる様に時間は経っていた。

「これより第七十三回 セイクリッド学園卒業式を始めます」

セレナたち三年生の卒業式が始まった。

校歌斉唱、卒業証書授与、来賓の言葉、在校生からの言葉が次々に終わり、残すは卒業生の言葉だけである。

「卒業生の言葉。代表三年A組、セレナⅡザⅡセイクリッド」

「はいっ！」

卒業生の列から出てきたセレナは前に進んで行き、こちらに向き直り一礼をする。

その姿は堂々としたもので屋内広場にいる生徒、保護者、先生方の視線が釘付けになる。

「私はこの三年間をととても楽しく、有意義に過ごすことができました」

堂々とし、三年間の思いをはっきりと口にしていくセレナを見て、オレも安心する。

卒業式が始まる前なんて落ち着かない感じだったしな。

しかも、緊張を無くすためにキスを強請るし………してしまいうオレもオレだが

セレナを見ながら思い出して、つい口元がにやけてしまう。手で隠しながら耳をセレナの声に傾ける。

「最後に………私は大学・専門部には上がらず、この国の王妃となるべく日々勉強の身になります。私が私はどんな事があっても挫けたりめげたりしません。なぜなら、私には多くの友人・家族・

市民の皆さん、なにより……私が愛する人の為に私はこの国を守っていきます。あの人と共に」

「三年間……本当にお世話になりました」

頭を下げながら感謝の言葉を放つセレナに盛大な拍手が贈られる。オレも例外ではない。ただ、できればオレのことを言わないで欲しい。なぜなら……周りの視線が痛いのだ。これはハードルが高くなってしまったな。

卒業式が終わり、大学・専門部に上がる者もそうでない者も、皆一時の別れを惜んでいる。

後輩のオレたちも先輩達の最後だと言うので外で話しをしている。

「まっ、たとえ校舎が近いといっても後輩にとっては部活以外では余り会うことも無いからな」

「そうだね。それにセレナ先輩なんて、ねえ」

「そうだな。あの人はこれから世界の事、国の事を考え、勉強していかないといけないし……お前がしっかりするんだぞ！」

ナイト部の先輩達にお祝いの言葉を贈り、オレとカイウス、レグは近くの桜の木の下で雑談している。

「そうだな、オレも頑張らねえとな」

後輩や同級生と写真を撮り合っているセレナを見て、つくづくそう思わせられる。

そんなときだった。セレナがこちらに気付き手招きしている。どう

やら何か言っているようだが、如何せん距離があって聞こえない。

「んじゃ、行ってくるわ」

「おう、俺たちは先に帰ってるわ」

「また明日」

オレは二人と別れて人ごみを掻き分けてセレナに近づく。
セレナは頬を膨らませて待っていた。

「ん？どうかした？」

「どうかした？じゃないわよ、お祝いの言葉もくれないなんて」

「いや、オレはいつでも言えるけど、後輩や先輩達は今しか言えないから、さ」

「むーそれでも私は言って欲しいんだけど……」

ぷくーと頬を膨らませる姿に周りも驚いている。まあ、当然だな。
あのセレナがこんな顔するなんて思ってもいなかっただろう。

「はいはい。セレナ先輩、ご卒業おめでとうございます」

「むっ、言い方が硬いけど……まあ、いいわ。ありがとう八雲」

お礼に、と言いながら彼女は顔を近づけ、頬に唇を当てた。
それを見た周りの空気が凍った……音が聞こえた。

みーつけた(後書き)

今回の反省

暇ねん「いやあ長くなった」

八雲「まったくだ。無駄になげえ」

暇ねん「まあ、セレナも無事卒業でき、思いも告げたし・・・万事OK?」

八雲「うーんでもオレ、まだセレナから好きって言われて無いんだけど」

暇ねん「・・・・・・あれ?」

八雲「うん。だって“好きな人”とは言われたけど“好き”とは言われてない」

暇ねん「・・・・・・キスがあつたから良いじゃん」

八雲「それ結果論」

暇ねん「世の中は全て結果論だ」

八雲「ええ〜!?!」

暇ねん「そうそう、感想に『続き』と書かれましたがスイマセン。オレ婿の続編は無いです。と言うより、完結させる気ですのでできません」

次回最終回『オレが次期姫の夫です!』です。

最終回　オレが次期姫の夫です！（前書き）

暇ねん「最後まであって断トツで長い文章です」

最終回 オレが次期姫の夫です！

セイクリッド学園は今日も賑やかである。と、いつても今回は賑やかな意味が少し違う。

「ほら、最後くらいビシッと決めなさい三年生！」

三年間過ごしてきた校舎、そして一年間お世話になったこの教室。どちらも今日で見納めである。そんなことを考えながら黒板の前でいつも通りに振舞っているシール先生を横目で眺める。

あらら、シール先生泣いてるよ。まっ、初めて卒業生を出すって言うってたしな、嬉しいのかも

泣いている先生を慰める（？）ように委員長や周りの連中が先生を取り囲む。

そんな光景を笑って見て、空に視線を移す。

空は高く、広く、そんなもって晴れやかでまさに卒業日和ってやつだ。

雲も薄く掛かってるが、空の真っ青なキャンパスに程よいマッチである。

「元生徒会長！」

「ん？なんだあ」

「写真取るのよ！あなただけよ、そんなところでボーっとしてるのは」

委員長がカメラ片手に睨んでくる。

よく見れば先生を真ん中に落書きだらけの黒板の前に並んでいる。

こーゆうことだけは動きが早えのな。まったく

椅子から立ち上がりゆつくりのっそりと並んでいる連中の中に入っていく。

カメラのシャッターはたまたま教室の前を通りがかったブラウン先生にやってもらった。

もう分かっているだろうけど確認のため簡単に説明を。

オレたちは現在三年生。しかも数十分後には卒業式が始まる。

sonでもって今のオレはこの学園の“元生徒会長”と呼ばれる人である。

なぜオレがそう呼ばれるかってのは話すと長くなるので要点をまとめる。

「あなたも次期国王になる人です、それなら今のうちに人の上に立つ事を覚えなさい！」

と、去年の生徒会選挙でマリナ先輩に言われ無理やりに近い形で生徒会長となったオレです。

もつとも、この辛さをオレ一人では嫌なのでカイウスとレグも無理やり生徒会に入れました。

以上、説明終わり！

「ヤクモ！写真取るぞ、俺たち三人で！っあ、委員長、シャッター押して！」

今度は教室の後ろでレグがカイウスの肩に腕を回しながら呼んでいる

る。

カイウスも早く、と口パクで訴えてくる。

「はあ、お前なあこれから卒業式なのにテンション高いなあ」

「当たり前だろ！卒業だから、だ。俺とカイウスは専門・大学部に上がるからいつでも会えるが、お前は城に直行だろ？今のうちに思いで作らねえと。ほらっ、さっさと来い！」

「へいへい」

そうなんだよな、レグの言うとおりオレもセレナと同じく次期国王として城で色々なことを学ばなければならない。元々庶民の出だからな。イチから学ばなければならない。だから時間が無いんだと

んな事といってもあの国王、四十八だろ？まだまだ現役じゃねえか！王位継承なんてまだ十年以上先だつての！・・・・・・なんて言える立場じゃねえか

のろのろとレグの元に行くと、腕を引っ張られカイウスとレグの間に入れられた。

「はい、チーズ」

カシヤツと音が響き、レグはお礼を言って委員長からカメラを受け取る。

そんなこんなで時間を潰していると式の始まりを告げる鐘が学園内に響く。

「ほらお前達、廊下に並びなさい！」

シール先生の声でざわつきながら廊下に出て行く。
当然、オレたちもな。

「卒業生入場」

屋内広場から聞こえてくる誘導声に反応して先生を先頭に中に堂々と入っていく。

中からは盛大な拍手が出迎えてくれた。

席に着くと毎度おなじみの校歌斉唱が終わり卒業証書授与となる。

この学園では一人一人、前に行き校長？学園長？と呼ばれる偉いおじさんから授与される。

「三年A組・・・・・・」

涙声で先生は生徒の名前を呼んでいく。

「十二番、ミレイⅡミール」

「はいっ！」

委員長が呼ばれ、前に行き卒業証書を手にする。
次に呼ばれるは・・・・・・

「十六番、カイウスⅡクロス」

「はい」

おお、落ち着いてるなあ。さすがシュドの息子。委員長は堂々としてたな。

「十七番、レッグウォーリー」

「は、はい！」

はは、柄にもなく緊張してやがるな、あいつ。右手右足が一緒に出てるって！笑わせるなよ！

「十八番・・・・・・・・コウサカ ヤクモ」

「はい」

なんすか？今の間は・・・・・・・・

一瞥を先生に向けるが泣いて下を向いている。おそらく声が詰まったのだろう・・・・・・・・あれ？使い方あってる？

大事な場だというのにそんなバカな事を考えて校長の前に立ち、卒業証書を受け取る。

「頑張ってくださいね、コウサカ君」

「はい、尽力します」

初めてとも言って良いほどの校長との短い会話をしてからクルッと百八十度回れ右をして席に戻る。

卒業証書授与が終わり来賓や在校生の言葉を聞き、ついに一番の間

題が来た。

「では最後に、卒業生の言葉。代表三年A組　コウサカ　ヤクモ」

きたあーーーーーー・・・・・・・・集中集中

「はいっ！」

音を立てず席から立ち上がり前に向かって歩く。
そして振り向くのだが・・・・・・・・

コレが一番嫌いだ！前からそうだが、人の前で話すのってちっと苦手なんだよな

しかたない、と言い聞かせ振り返る。が、全校生徒十来賓十先生方、おまけに保護者の方々。

おうおう、嬉しーねえ。母さんも親父も来てるしさあ。嬉しくて涙が出るわ！もちろん嬉しさより苦手による涙です。

「えー・・・・・・・・このたびは我々三年生の卒業式に来てくださって誠に感謝しております。

思い起こせば三年前、オレ・・・・・・・・私たちはこの高校部に上がってきました。自分は転校でしたが・・・・・・・・」

あれ？オレ、考えてた事と全然違う事を口にしてるんですが・・・・・・・・
・・・・・・・・ちよつと！？

勝手に口が動く、それと同時にオレの中では“姫”がホームステイしてきたあの日から今日までの事が鮮明に映し出される。

「この三年間、本当に楽しく・・・それでいて苦しい学園生活でした。もっとも、苦しかったのは一年の最後まででしたが。それ以降は毎日が楽しく、卒業するのが惜しいくらいです。私だけでなく、三年生全員がそう思っているでしょう。上に上がる人も、就職する人もいますが・・・どこにいても私た・・・」

「こらーヤクモーっ！いつまで取り繕ってるんだよ！」

「・・・あ？」

人が言い感じでスピーチしてるのになんだあのバカは？

＊バカⅡレグ＊

「いつも通りに言ってみろよ！お前の本当の姿でさあ」

「——えっ？」

「そうだよクモ。皆もそうおもってるよ、ね？」

カイウスの言葉に卒業生も在校生も騒ぎ出した。

「そうですよコウサカ先輩！」

「いつもの感じをお願いするぜ」

「ヤクモーっ、その口調はキモイぞー」

「ちよつとまで！最後の奴はだれだぁ！？」

ったく、好き勝手言ってくれやがって……いいぜ、オレのやり方でいくぜ！

オレの……タアアアアアアンツ！！

「黙って聞け、おのれら！さっきの続きと行くぜ！？オレたちは例えどこにいようと、この学園を卒業した仲間だ！覚えておけ！そして忘れるな！どんなに苦しい時も……必ず友が助けてくれる事を！」

さっきとは打って変わってシーンとなりオレの言葉を聞いてくれる。

「お前たちにはまだ道がある。在校生は残りの時間を楽しみな、一生に一度の高校生活だ、楽しまなければ損だぜ。それでもって卒業生！お前らも変わらず専門・大学部に上がる奴が多いがオレのようにここからいなくなる奴を忘れず……学園生活を楽しめ！これが“元”生徒会長としての最後の言葉だ！！」

数秒沈黙が流れる。

「……………ウ」

「ウ？」

そんな沈黙を一人の……いや、数人の声が破る。

「ウオオオオオオオオオ！！さすがは“元”生徒会長！言ってくるぜー」

「元会長、大スキッス」

「よく言った！オレたちもお前らの事忘れないぜー！」

「よし、大成功！……あっ！……ちょっと静かにしてくれ」

「!？」

オレのさっきまでとは違う声に熱狂していた雰囲気が消えた。

「ありがとう。あのさあ、ここである人に対してお礼の言葉を言っているか？」

「「いーーよーーー」」

どんなノリだよ！

「あー……コホン。カイウス」

わざとらしく咳をしてからカイウスを見る。

「えっ!？」

「三年間ありがとうな。最初に来たときは言葉分かんなくて大変だったし……マジで感謝してるよ。ありがとうカイウス。楽しかったぜ」

「僕のほうこそ楽しかったよ」

「次は……レグ」

隣に座っているレグに向く。

「なんだあ？」

「いやあー、お礼を言う事は無いんだが・・・」

「ねえのかよ！」

「お礼は言わないが感謝はしてるぜ。あの時お前がオレをナイト部に誘ってくれなければ今のオレはここにはいなかった。だからさ、感謝はしてるぜ。口には出さないけどな」

「それはこっちの台詞だって。三年間楽しかったぜ、親友！」

へへと笑いながら返してくれるレグに感謝をしながら後ろの保護者席に視線を向ける。

「最後に・・・てーか、今日は来ないって言ってなかった？ セレナ先輩？」

「えっ？」

「セレナ姫!？」

一斉に在校生も卒業生も後ろに振り返る。

そこにはオレが話しの引き合いに出したセレナが慌ててぺこりと頭を下げている。

それも、レーベル、サバナ、国王、王妃が後ろにいて国王と王妃の近くで親父に母さんが笑ってるし。

「レーベルにサバナ先輩もいるしさぁ……あんたらは国に帰ったんだろ？なんでいるのさ？」

「ひどいな八雲、親友の晴れの舞台を見に来て上げたのに」

頼んでねえーよ！と口の中で転がす。

「私もサバナと同じだ。我が剣の好敵手ライバルが演説すると聞いてな。来てやったのだが……情けない演説だな」

「うっせーよ！大きなお世話だドアホウ！」

レーベルのヤロウ……この前の世界大会でオレに負けた事を嫉んでるのかぁ？

「二人ともあまり八雲をいじめないの……ごめんね八雲、ちよっと驚かせたくて。迷惑だった？」

その離れた距離でも分かる不安な顔をしないでくれ。ほら、後ろ向いていた奴がさっきとは違う意味で殺気を放って睨んでるよ。さっきが殺気……ごめんなさい

「迷惑じゃないって、ただ……その、嬉しくてな」

「よかったぁ。帰りは一緒に帰れる？」

「少し待つ事になるけど？」

「それでも良いわ」

「わかった。ってわけですと終わらせるぞ！以上、卒業生代表
高坂 八雲でした」

言い意味と悪い意味のブーイングが室内を行ったり来たり。

卒業式も無事に終わり、もう一度写真だぁ、と写真を撮ったり、先生に感謝の気持ちを込めて寄せ書きを渡したり……いろいろと楽しむオレ……たち。

「さーて……さよなら、だな」

「言葉が違うでしょ……」

「そうだぜ。お前も言っただろ、困った時には友が助けてくれるって。いつでも頼って来い」

「おう、期待してるぜ！……んじゃ、“さよなら”じゃなくて“またな”だな」

校舎の前でまだ卒業生達が泣いたり笑ったり名残惜しんだりしている中のオレと親友のやり取り。

「んじゃ、またな！」

「うん、またね」

「まったなー」

手を上げながら二人に手を振り交わす別れの挨拶。

そのまま校門でまっているセレナたちの下に向かった。

そこでは、卒業生にも負けず劣らずの人ごみと泣き声と笑い声。

まあ、ほとんどはレーベル、サバナ、セレナの三大王族の所為なのだが。

「お待たせ。あつ、レーベルまだいたの？」

「ほほう、貴様、よほど死にたいらしいな……」

「冗談だって」

笑って誤魔化すがレーベルは冗談を真に受ける奴である。そんな奴を横に置いておいてセレナに話しかける。

「ごめん、またせたでしょ？」

「いいのよ。私が勝手に来たのだから」

「まあ、そう言ったらそれでお仕舞いなのですが………そうだった！セレナ！」

それではオレの気がすまないの………えいっ

「なに……—っ！」

周りの連中が凍りつく。レーベルなんて氷河期突入してるよ。

あつ、サバナは呆れてる。セレナは………驚きと恥ずかしさで顔が真っ赤。

かわいい。

「んっ………んは。これでよしッと！」

「な、な、な……」

「コレがオレからセレナに対する待たせた事に対する謝罪とオレの気持ち。大好きだぜ、セレナ！」

「——んも、そんなこと言われたら許すしかないじゃない……私も大好きよ、八雲」

もう一度……今度はセレナからの軽いキス。しかしそれが氷河期を溶かすスイッチだった。

パリンっとなんかゲームの音みたいのが聞こえたんだが……

そーっと振り向いてみるとレーベルが木刀ではなく真剣……それも日本が誇る刀、日本刀を鞘から抜き出していた。

「ちよっ！」

「死にさらせー！！」

「ギャー！ー！ー！！」

できればこの平和な時がずっと続いてくれますように。そうオレはあの時と同じ色の空に願っている。

「八雲、いる？」

「セレナ？どうかした？」

「王位継承が始まるのにどこに行るのかなぁ、と思って」

「ごめんごめん。今日の空は卒業式の空と似ていたからつい、ね」

「ふふっ、卒業式の日のを思い出したの？」

「まあね……セレナ」

「なに？」

「愛してる」

「私も……愛してるわ」

愛の言葉を交わしたオレとセレナはゆっくりと唇を重ねた。

自己紹介？いいぜ。名前はヤクモザセイクリッド
年齢？二十三だ。

職業？うーん、職業といえるか分からんが一国の国王だ。
ん？さいごか。なにに、あなたの愛する人は誰ですか？
んなもん決まってるだろ。

——セレナザセイクリッド

最終回 オレが次期姫の夫です！（後書き）

今回の……この小説の反省・感想

暇ねん「終わりました、終わってしまいました『オレが姫の婿候補！？』」

八雲「長かったなー」

暇ねん「ねー。それに国王の王位継承の次期を早めちゃったし」

セレナ「本当よね。それに暇ねんなんて一時期、私と八雲をくつけないで終わらせる事を考えてたんでしょ？」

暇ねん「うん。バッドもいいかななんて。でも、やっぱりバッドは嫌いだから」

八雲「良いことじゃないか」

暇ねん「ちなみにバッドエンドだとセレナとくつつくのはレーベル君です」

八雲「……まあ、妥当だな」

暇ねん「だろ？」

セレナ「なら八雲は？」

暇ねん「マリナ先輩」

八雲「ふーん……」

セレナ「なに？そのそれも良いなあ、って顔」

八雲「ちよっ！？」

暇ねん「はいはい、イチヤつくなら向こうでやってろ！俺は一人身なんだよ！」

八雲「わるいわるい。で、どうするのよ？」

暇ねん「なにが？」

セレナ「これからの新作よ。感想だと続編って来てるけど？」

暇ねん「だから、続編はできんって！ネタないし。君たち二十と二十五だよ？解ってる？」

八雲&セレナ「そうでした」

暇ねん「つつうことで、新作の内容はあるので今月中に出します。
できれば読んで下さい！」

暇ねん&八雲&セレナ

「『オレが姫の婿候補！？』を今まで読んでくれてありがとうございます！
いました！」

次回の新作をまた読んでくれる事を祈っております。では、また（
な）（ね）」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6452m/>

オレが姫の婿候補！？

2011年4月12日22時04分発行